

# 平安京左京九条三坊十町跡・烏丸町遺跡



2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所





# 平安京左京九条三坊十町跡・烏丸町遺跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所





2区 池80 (北から)



出土木簡

木1

木10

木4

木8

木6

木7

木3

# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、ホテル建設工事に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

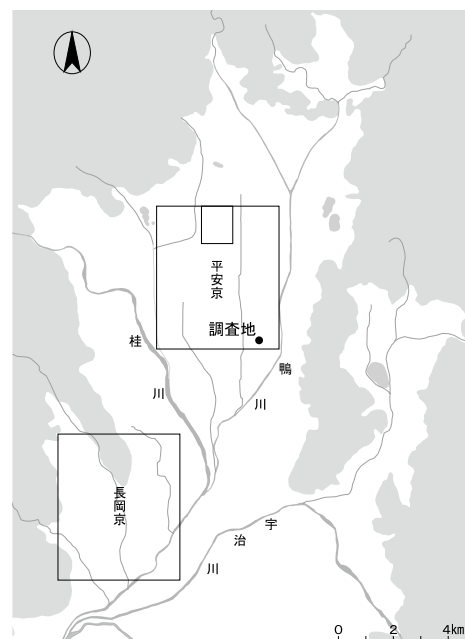
平成27年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡・烏丸町遺跡（文化財保護課番号 13 H 318）
- 2 調査所在地 京都市南区東九条上殿田町17・38・39番地
- 3 委 託 者 有限会社エム・ジークリエイト
- 4 調査期間 2014年1月10日～2014年3月31日
- 5 調査面積 1,359 m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 小檜山一良・近藤奈央・津々池惣一・布川豊治・東 洋一・上村和直
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「梅小路」・「京都駅」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。ただし、建物・柵は別に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 小檜山一良・辻 裕司・伊藤 潔・上村和直・近藤奈央
- 14 執筆分担 小檜山一良：第1章、第2章、第3章の1～4、第4章の1・4・6～8、  
第5章  
辻 裕司：第3章の3・4、第4章の5  
伊藤 潔：第4章の2  
上村和直：第4章の3  
付章1：北野信彦（東京文化財研究所）  
付章2：パリノサーヴェイ株式会社
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員および資料業務職員があたった。

（調査地点図）



# 目 次

第1章 調査経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の経過	2
第2章 調査地の位置と環境	4
1. 位置と環境	4
2. 周辺の調査	5
第3章 遺 構	11
1. 層序	11
2. 検出遺構の概要	14
3. 1区の検出遺構	15
(1) 第4面の検出遺構	15
(2) 第3面の検出遺構	16
(3) 第2面の検出遺構	18
(4) 第1-2面の検出遺構	28
(5) 第1-1面の検出遺構	44
4. 2区の検出遺構	45
(1) 第4面の検出遺構	45
(2) 第3面の検出遺構	46
(3) 第2面の検出遺構	47
(4) 第1-2面の検出遺構	53
(5) 第1-1面の検出遺構	53
第4章 遺 物	54
1. 遺物の概要	54
2. 土器類	55
(1) 1区出土土器類	55
(2) 2区出土土器類	66
3. 瓦類	71
4. 木簡	78
5. 木製品	83
6. 銭貨	93
7. 石製品	94
8. 骨製品	95

第5章 まとめ	96
1. 調査地の遺構の変遷	96
2. 井戸と池の水位について	104
3. 出土木簡について	106
4. 池80出土の種子類について	107
付章1 出土珠の材質調査	108
付章2 自然科学分析	111

## 図 版 目 次

巻頭図版1 遺構 2区 池80 (北から)

巻頭図版2 遺物 出土木簡

図版1	遺構 1区 第4面遺構平面図 (1:200)
図版2	遺構 1区 第3面遺構平面図 (1:200)
図版3	遺構 1区 第2面遺構平面図 (1:200)
図版4	遺構 1区 第1-2面遺構平面図 (1:200)
図版5	遺構 1区 第1-1面遺構平面図 (1:200)
図版6	遺構 2区 第4-2・4-1面遺構平面図 (1:200)
図版7	遺構 2区 第3・2面遺構平面図 (1:200)
図版8	遺構 2区 第1-2・1-1面遺構平面図 (1:200)
図版9	遺構 1区 北壁断面図 (1:80)
図版10	遺構 1区 南壁断面図 (1:80)
図版11	遺構 1区 西壁断面図 (1:80)
図版12	遺構 2区 北壁断面図 (1:80)
図版13	遺構 2区 南壁断面図 (1:80)
図版14	遺構 2区 西壁断面図 (1:80)
図版15	遺構 1区 流路1158、池1121・1160断面図 (1:50)
図版16	遺構 1区 流路1158、池1121断面図 (1:50)
図版17	遺構 2区 池77・80断面図 (1:50)
図版18	遺構 1 1区 第4面全景 (南東から)
	2 1区 池1160 (北西から)



- 図版19 遺構 1 1区 南壁（池1121・1160、北西から）  
2 1区 第3面全景（北西から）
- 図版20 遺構 1 1区 池1121南端（北西から）  
2 1区 池1121石組（北西から）
- 図版21 遺構 1 1区 建物14～16（西から）  
2 1区 建物17・18（西から）
- 図版22 遺構 1 1区 第1面全景（北から）  
2 1区 建物5・6（西から）
- 図版23 遺構 1 1区 建物7（東から）  
2 1区 建物8、柵6・7（西から）
- 図版24 遺構 1 1区 土坑999遺物出土状況（南から）  
2 1区 柱穴819礎板検出状況（北から）  
3 1区 建物8柱穴56根石検出状況（南から）  
4 1区 建物8柱穴64根石検出状況（南から）  
5 1区 建物9柱穴71礎板検出状況（南から）  
6 1区 柵7柱穴137礎板検出状況（南から）  
7 1区 土坑132遺物出土状況（北から）  
8 1区 土坑184遺物出土状況（西から）
- 図版25 遺構 1 1区 井戸7（南から）  
2 1区 井戸891（北から）  
3 1区 井戸462（南から）  
4 1区 井戸910（南から）  
5 1区 井戸950（南から）  
6 1区 井戸555（東から）  
7 1区 井戸1064（南から）  
8 1区 井戸27（東から）
- 図版26 遺構 1 2区 第4面全景東半（北から）  
2 2区 池80須恵器出土状況（北西から）  
3 2区 池80木簡出土状況（東から）  
4 2区 池80木簡出土状況（東から）  
5 2区 池80木製品出土状況（東から）
- 図版27 遺構 1 2区 第3面全景東半（北から）  
2 2区 第3面全景西半（北から）
- 図版28 遺構 1 2区 池77洲浜東半（北から）  
2 2区 池77洲浜西半（北東から）

- 図版29 遺構 1 2区 池77洲浜南東部（北東から）  
 2 2区 土留79（南西から）  
 3 2区 土留79（西から）  
 4 2区 泉75（北西から）  
 5 2区 泉75・溝74（北から）
- 図版30 遺構 1 2区 第2面全景西半（北から）  
 2 2区 建物20（東から）
- 図版31 遺構 1 2区 建物21（西から）  
 2 2区 建物20柱穴126根石・礎板検出状況（東から）  
 3 2区 建物20柱穴189礎板検出状況（北から）  
 4 2区 建物21柱穴152柱材検出状況（北から）  
 5 2区 建物21柱穴158根石検出状況（東から）
- 図版32 遺構 1 2区 建物22柱穴171礎板検出状況（北から）  
 2 2区 柱穴71・72根石検出状況（南から）  
 3 2区 柱穴139根石検出状況（北から）  
 4 2区 柱穴115礎板検出状況（北東から）  
 5 2区 柱穴116礎板検出状況（南西から）
- 図版33 遺構 1 2区 柱穴178礎板検出状況（北西から）  
 2 2区 井戸136（東から）  
 3 2区 井戸23（東から）  
 4 2区 土坑186銭貨出土状況（南から）  
 5 2区 土坑134遺物出土状況（北から）
- 図版34 遺構 1 2区 第1面全景東半（北東から）  
 2 2区 第1面全景西半（北東から）
- 図版35 遺物 1区流路1158、池1121、土坑999、井戸7・425出土土器類
- 図版36 遺物 1区整地層1、建物2・8、井戸27・555・950出土土器類
- 図版37 遺物 1区土坑576出土土器類
- 図版38 遺物 1区土坑460・515・652、溝333、2区池80出土土器類
- 図版39 遺物 2区池77、泉75、井戸78、土坑134、整地層1・2出土土器類
- 図版40 遺物 軒丸瓦
- 図版41 遺物 軒平瓦
- 図版42 遺物 木簡
- 図版43 遺物 木製品
- 図版44 遺物 石製品・骨製品

# 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：800）	2
図3	1区 調査前全景（南から）	3
図4	2区 調査前全景（南西から）	3
図5	1区 作業風景（南西から）	3
図6	2区 作業風景（北東から）	3
図7	調査区と十町四行八門（1：1,500）	4
図8	周辺の調査地点図（1：5,000）	6
図9	1区 断面図（1：40）	12
図10	2区 断面図（1：40）	13
図11	1区 池1160・泉1159実測図（1：80、1：50）	16
図12	1区 池1121・土坑999実測図（1：80、1：50）	17
図13	1区 建物10・11実測図（1：100）	18
図14	1区 建物12・13実測図（1：100）	20
図15	1区 建物14・15実測図（1：100）	21
図16	1区 建物16実測図（1：100）	22
図17	1区 建物17実測図（1：100）	23
図18	1区 建物18・19実測図（1：100）	24
図19	1区 井戸7・425・891・1062実測図（1：50）	26
図20	1区 井戸462・577・787・911実測図（1：50）	27
図21	1区 井戸908・910実測図（1：50）	28
図22	1区 建物1・2実測図（1：100）	29
図23	1区 建物3・4実測図（1：100）	30
図24	1区 建物5実測図（1：100）	31
図25	1区 建物6・7実測図（1：100）	32
図26	1区 建物8・9実測図（1：100）	33
図27	1区 柵1～3実測図（1：100）	35
図28	1区 柵4～6実測図（1：100）	36
図29	1区 柵7実測図（1：100）	37
図30	1区 溝282・土坑576実測図（1：80、1：50）	39
図31	1区 井戸450・555・950・1064実測図（1：50）	42
図32	1区 井戸27・1063実測図（1：50）	43

図33	1区 集石475・1061実測図（1：50）	44
図34	2区 池80、泉82、柱穴85～88・91～94実測図（1：50、1：80）	45
図35	2区 泉75・土留79実測図（1：50）	47
図36	2区 建物20・21実測図（1：100）	48
図37	2区 建物22～26・柵8実測図（1：100）	49
図38	2区 井戸23・44・78・136実測図（1：50）	51
図39	2区 土坑57・134実測図（1：50）	52
図40	古墳時代の土器実測図（1：4）	55
図41	1区 流路1158、池1121、建物11・19、柱穴287、土坑892・999 出土土器実測図（1：4）	56
図42	1区 井戸7・425出土土器実測図（1：4）	57
図43	1区 整地層1、建物1～3・5・8・9、柵6・7、柱穴575・708・737 出土土器実測図（1：4）	58
図44	1区 井戸27・450・555・950・1063・1064出土土器実測図（1：4）	61
図45	1区 土坑576出土土器実測図（1：4）	62
図46	1区 土坑33・62・229・460・470・515・652・665出土土器実測図（1：4）	64
図47	1区 溝247・260・333出土土器実測図（1：4）	65
図48	2区 池80出土土器実測図（1：4）	67
図49	2区 池77・泉75出土土器実測図（1：4）	68
図50	2区 整地層1・2、建物20・21、井戸44・78・136、土坑134 出土土器実測図（1：4）	69
図51	1・2区 出土墨書土器実測図（1：4）	70
図52	1・2区 出土輸入陶磁器実測図（1：4）	71
図53	軒丸瓦拓影及び実測図（1：4）	72
図54	軒平瓦拓影及び実測図（1：4）	75
図55	塼拓影（1：4）	78
図56	木簡実測図（1：2）	79
図57	木製品実測図1（1：4）	83
図58	木製品実測図2（1：4）	84
図59	木製品実測図3（1：4）	86
図60	木製品実測図4（1：4）	87
図61	木製品実測図5（1：4）	88
図62	木製品実測図6（1：4）	88
図63	木製品実測図7（1：4）	89
図64	木製品実測図8（1：6）	91

図65	木製品実測図9（1：6）	92
図66	銭貨拓影（1：2）	93
図67	石製品実測図（石1・2は1：2、石3～15は1：4）	94
図68	骨製品実測図（1：2）	95
図69	平安時代前期から中期（第4面）の遺構概要図（1：400）	97
図70	平安時代中期から後期（第3面）の遺構概要図（1：400）	99
図71	平安時代末期から鎌倉時代初期（第2面）の遺構概要図（1：400）	100
図72	鎌倉時代前期（第1－2面）の遺構概要図（1：400）	102
図73	室町時代以降（第1－1面）の遺構概要図（1：400）	103
図74	井戸底と池底の標高模式図（1：50）	105
図75	本資料の表面状態の拡大1	108
図76	本資料の表面状態の拡大2	108
図77	本資料の蛍光X線分析結果1（穿孔周辺部分）	109
図78	本資料の蛍光X線分析結果2（側面部分）	109
図79	調査地点および試料採取位置	112
図80	各地点の花粉化石群集層位分布	114
図81	花粉化石	115
図82	各地点の植物遺体群集層位分布	118
図83	種実遺体（1）	119
図84	種実遺体（2）	120
図85	種実遺体（3）	121

## 表 目 次

表1	周辺発掘調査一覧表	7
表2	周辺試掘・立会調査一覧表	8
表3	遺構概要表	14
表4	遺物概要表	54
表5	花粉分析結果	113
表6－1	種実同定結果（1）	116
表6－2	種実同定結果（2）	117

## 觀 察 表 目 次

觀察表 1	出土土器類一覽表	125
觀察表 2	出土瓦類一覽表	135
觀察表 3	出土木簡一覽表	136
觀察表 4	出土木製品一覽表	136
觀察表 5	出土錢貨一覽表	139
觀察表 6	出土石製品・骨製品一覽表	140

## 積 文 目 次

木簡積文 1	80
木簡積文 2	81

# 平安京左京九条三坊十町跡・烏丸町遺跡

## 第1章 調査経過

### 1. 調査に至る経緯（図1）

調査対象地は京都市南区東九条上殿田町17・38・39番地に所在し、この地にホテルが建設されることになった。当地は平安京左京九条三坊十町跡・烏丸町遺跡の範囲にあっており、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を実施した。

試掘調査は、東西道路を挟んで北と南の2箇所にトレンチを設定して行われた。その結果、地表下約1.0mで中世の遺物包含層を、さらに下層から平安時代の池状遺構を検出したため、対象地内に平安時代以降の遺構が良好に残存していると判断された。この結果から、文化財保護課は原因者

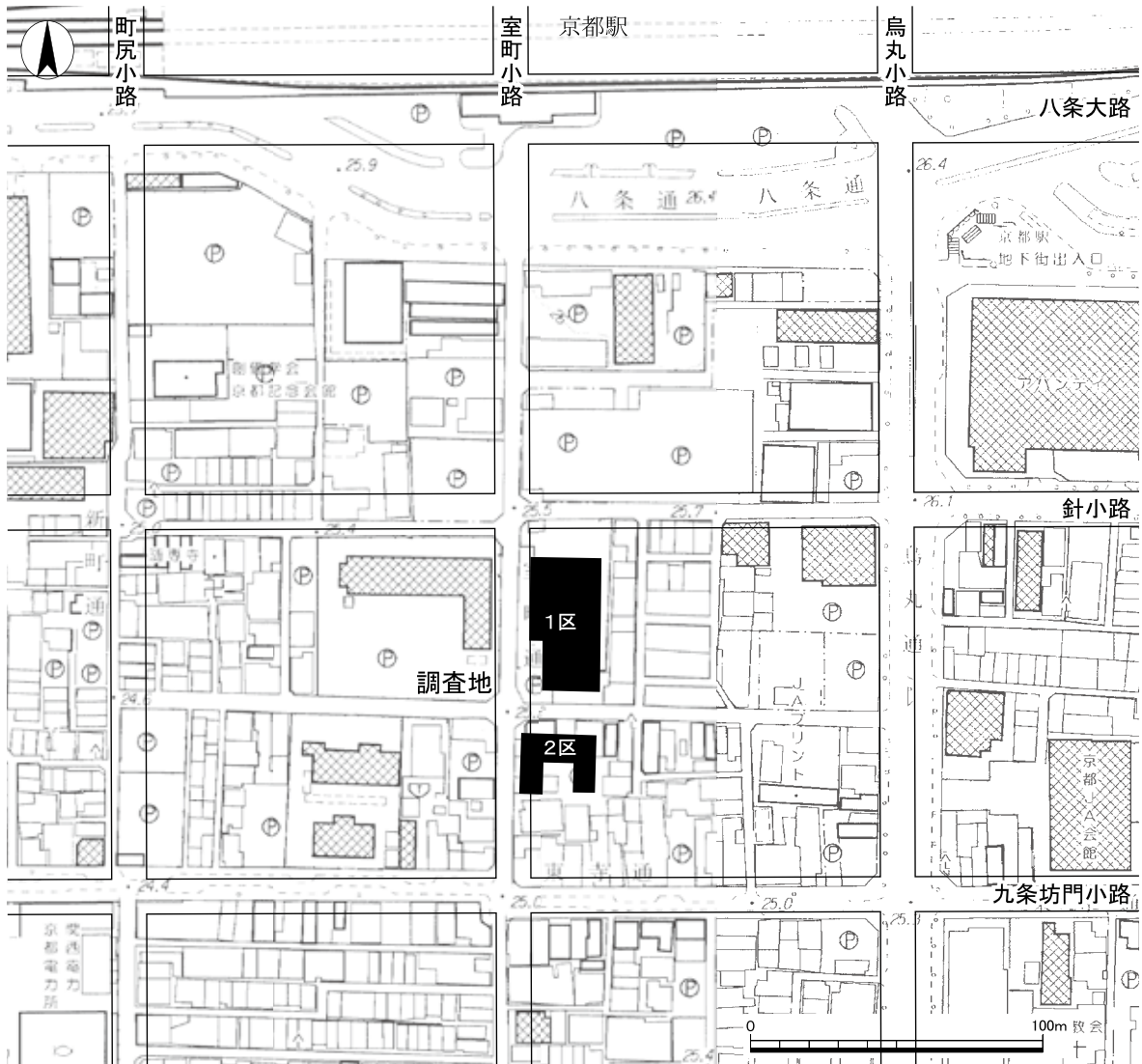


図1 調査位置図（1：2,500）

に対し発掘調査の指導を行った。調査は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託され、文化財保護課の指導の下に発掘調査を実施することとなった。

今回調査の対象となった三坊十町は、北を針小路、南を九条坊門小路、西を室町小路、東を烏丸小路に囲まれる。調査地は、北側が針小路に近接し、西側は室町小路に面している。十町の西一行の北一門から六門にあたり、6つの戸主にまたがっている。また、南側の2区とした調査区は、西側が室町小路にかかる設定となっている。今回の調査では、これまでの周辺地域の発掘調査・立会調査などの調査成果に基づき、平安時代の園池や建物、条坊関連遺構などを検出するとともに、当地域の土地利用の変遷を明らかにすることを目的とした。

## 2. 発掘調査の経過（図2～6）

調査区は、文化財保護課の指導により、試掘調査の結果から東西方向の道路を挟んで2箇所の調査区を設定した。北側を1区、南側を2区と設定した。調査面積は1区約982㎡、2区約377㎡の計1,359㎡である。



図2 調査区配置図（1：800）

2014年1月14日から調査に先立って、外周フェンスの設置、アスファルト切断などの準備工事を行った。最初に1区の機械掘削を開始し、地表下0.9～1.1mまでの近現代層や室町時代以降の耕作土層を除去した。なお、掘削土の大半を場外に搬出したため、機械掘削には12日間を要した。2区は反転調査とし、21・22日にまず東半分の重機掘削を行った。掘削土は場内西半部に仮置きした。東半部の調査終了後、西半部に仮置きしていた掘削土で埋め戻しを実施し、直ちに西半部の重機掘削を行い、調査を進めた。

重機掘削の後、両調査区は個別に作業を進め、人力により第1面の鎌倉時代以降、第2面の平安時代後期、第3面の平安時代中期から後期、第4面の平安時代前期から中期の遺構面を順次調査した。

それぞれの面で全景写真・個別





図3 1区 調査前全景（南から）



図4 2区 調査前全景（南西から）



図5 1区 作業風景（南西から）



図6 2区 作業風景（北東から）

写真などを撮影し、平面図・断面図などの図面を作成した。また、遺構の状況に応じてオルソ測量も併用した。その後、下層の砂礫層の断割りなど補足的な調査を行い、調査を終了した。3月31日にはすべての機材を撤収し、調査地を引き渡した。

調査中は適宜、文化財保護課の臨検を受けた。3月22日には、地元住民を対象とした説明会を開催し、成果の公表に努めた。

調査終了後の7月2日には、池80から出土した施薬院関連木簡の広報発表を行った。翌日の3日から21日まで、京都市考古資料館で出土木簡6点の速報展を行った。

調査および報告書作成にあたり以下の方々からご教示を得た。記して謝意を表する次第である。

尼崎博正（京都造形芸術大学）、網 伸也（近畿大学）、國下多美樹（龍谷大学）、佐古和枝（関西外国語大学）、菅沼孝一（京都産業大学）、鈴木久男（京都産業大学）、仲 隆裕（京都造形芸術大学）、西山良平（京都大学）、橋本義則（山口大学）、増渕 徹（京都橘大学）、山田邦和（同志社女子大学）、吉野秋二（京都産業大学）〔五十音順・敬称略〕

とくに、出土した木簡の积読及び内容の分析は、西山良平・吉野秋二の両氏にお願いした。あらためて感謝する次第である。

## 第2章 調査地の位置と環境

### 1. 位置と環境 (図7)

調査地は平安京の南辺部東側に位置している。鴨川によって形成された扇状地の中でも南端の南西方向の舌状に延びる最も新しい塩小路層と呼称されている礫層の扇状地(10,000～6,000年前)が遺構の基盤層を形成している<sup>1)</sup>。調査地周辺の標高は約25.5mで、鴨川から約900m西側に位置する。

当地の平安京遷都以前の遺跡としては、弥生時代から古墳時代の集落跡とされている烏丸町遺跡があり、そのほぼ中央部北寄りに位置する。

平安京が遷都されると当該地は、北を八条大路、南を九条大路、西を西洞院大路、東を東洞院大路に囲まれた平安京左京九条三坊域となる。

周辺の調査では、平安時代前期には池を伴う邸宅が数箇所で見出されているが、南西方向に延長する自然流路や湿地状の堆積が多く確認されており、全体的には開発はあまり進んでいなかった可能性が高い。しかし平安時代後期から鎌倉時代初頭にかけての遺構が多く見出されることから、このころ急激に活況を呈するようになったとみられる。

以下、左京九条三坊の各町について文献史料から、ここに存在した施設や居住者をあげてみる<sup>2)</sup>。

**平安時代前期** 文献史料が少なく、居住者が不明な部分が多いが、以下の2件について記載がある。三町は、国の予算で設けられた貧しい人々や病人のための生活医療保護施設であり、薬草を栽培する薬園も併設されていた「施薬院」の所在地としている(九条家本『延喜式』付図)。六町は、

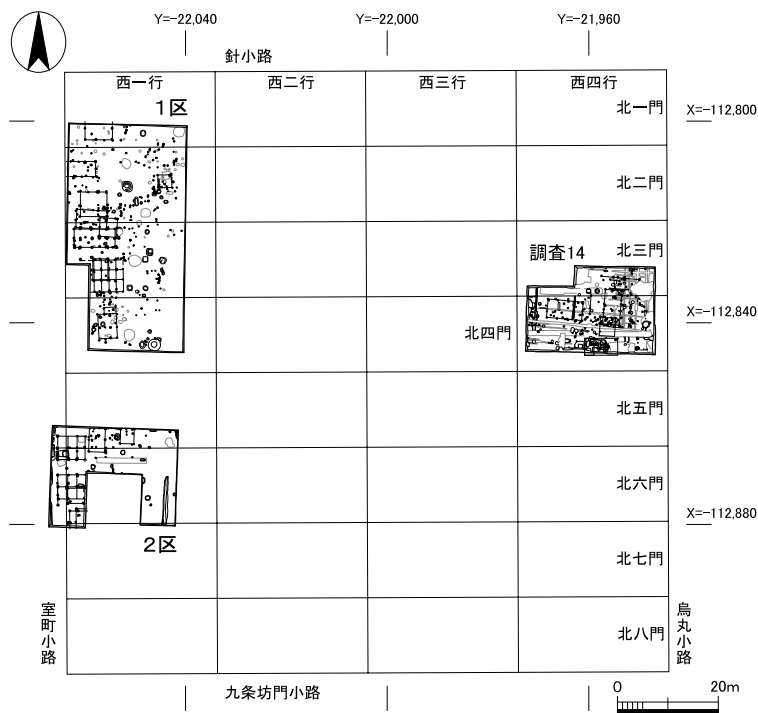


図7 調査区と十町四行八門 (1:1,500)

『伊勢物語』に「昔、堀川のおほいまうち君と申すいまそがりけり。四十の賀、九条の家にてせられける日」とあり、関白藤原基経の「九条殿」が存在したとされる。

**平安時代中期** 前期より記載が少ない。六町は、右大臣藤原師輔の「九条殿」が存在したとされる(『拾芥抄』東京図)。藤原基経の「九条殿」が伝領された可能性が指摘されている。

**平安時代後期** この時期になると史料が多くなる。二町には、複数の記載がある。「九条殿」

(『拾芥抄』東京図)とするものと、東半町を「九条院御所」(九条家本『延喜式』付図)とするものである。近衛天皇中宮藤原呈子の女院号や仲恭天皇(九条廢帝)の讓位後の御所などの候補があげられるが、比定は難しいとされている。四町は、「九条院 廢帝御所」(『中古京師内外地図』)と記載され、仲恭天皇の御所とされているが、明らかではない。建長二年(1250)、この町にあった比丘尼蓮阿弥陀仏の田が、源末光に売却されている<sup>4)</sup>。六町は、『中右記』によれば、「九条殿」は11世紀後半には藤原能長の所有となっており、その娘道子(白河天皇女御)は「建立一堂於九條地、安置丈六阿弥陀佛」とあるように、ここに御堂を建立し、丈六の阿弥陀仏を安置している<sup>5)</sup>。七町は、「朴殿」(刊本『拾芥抄』東京図)としているが、実態は不明である。九町は、『鎌倉遺文』によれば、平安時代末期から鎌倉時代にかけて、西北隅の一戸主が「八条院」となっており、正和二年(1313)に東寺に寄進されている<sup>6)</sup>。本調査地が含まれる十町は、鎌倉時代には九条家の領地となるが、それ以前は「施薬院御倉」が置かれていたとされる。承久二年(1220)にはすでに町内は分割され、中央部には辻子が開かれていた事がわかっている<sup>7)</sup>。十二町には、複数の記載がある。「太政大臣室」(陽明文庫本『拾芥抄』東京図)とするものと、「城興寺」(刊本『拾芥抄』)とするものである。これらからは、11世紀後半にこの地は太政大臣藤原信長の邸宅で、夫人名義となっていたと考えられている<sup>9)</sup>。十三・十四町には、11世紀後半に太政大臣藤原信長の「九条邸」が存在した(『拾芥抄』東京図および九条家本『延喜式』付図)。十五・十六町は、九・十町とともに「九条家領」としている(『中古京師内外地図』)。

以上、文献史料からは平安時代前期には三町に施薬院、六町は関白藤原基経の「九条殿」が存在したとされ、中期には六町に右大臣藤原師輔の九条殿が所在したとされる。後期には、六町の「九条殿」は藤原能長の所有となり、十二・十三・十四の3町にまたがって太政大臣藤原信長の邸宅、十町には「施薬院御倉」が置かれていたとされる。その後、八条院領や九条家の領地となる部分が多くなっていくようである。中世以降は、耕作地としての利用が主となり、近世には当地域は東九条村と呼ばれ、蔬菜などの栽培が盛んとなり、『雍州府史』によれば特に藍玉の主要生産地として有名であった。

## 2. 周辺の調査(図8、表1・2)

周辺ではこれまでに多くの調査が行われており、それらの成果は今回の調査成果と関連し重要である。以下、左京九条三坊内で実施された調査を、時代順に概説する。また、必要に応じて四坊や九条大路での調査も紹介する。

平安京以前 北東部で、縄文時代晩期の土器・石鏃などの遺物が出土している(調査17・18)。また、南端部にあたる京都市立陶化中学校跡地では、流路から中期・晩期の土器が出土した(調査23)。弥生時代では、縄文時代と同様に北東部と南端部で流路・落込みから弥生土器が出土した。また、北東部では、畿内第V様式の土器・石器が出土している(調査18)。古墳時代には、流路が検出され、当該期の土器が出土している(調査11・17)。これら縄文時代から古墳時代の遺物は、いずれも流路や落込みからの出土であり、建物跡・土坑などの主要な遺構は検出されていない。し

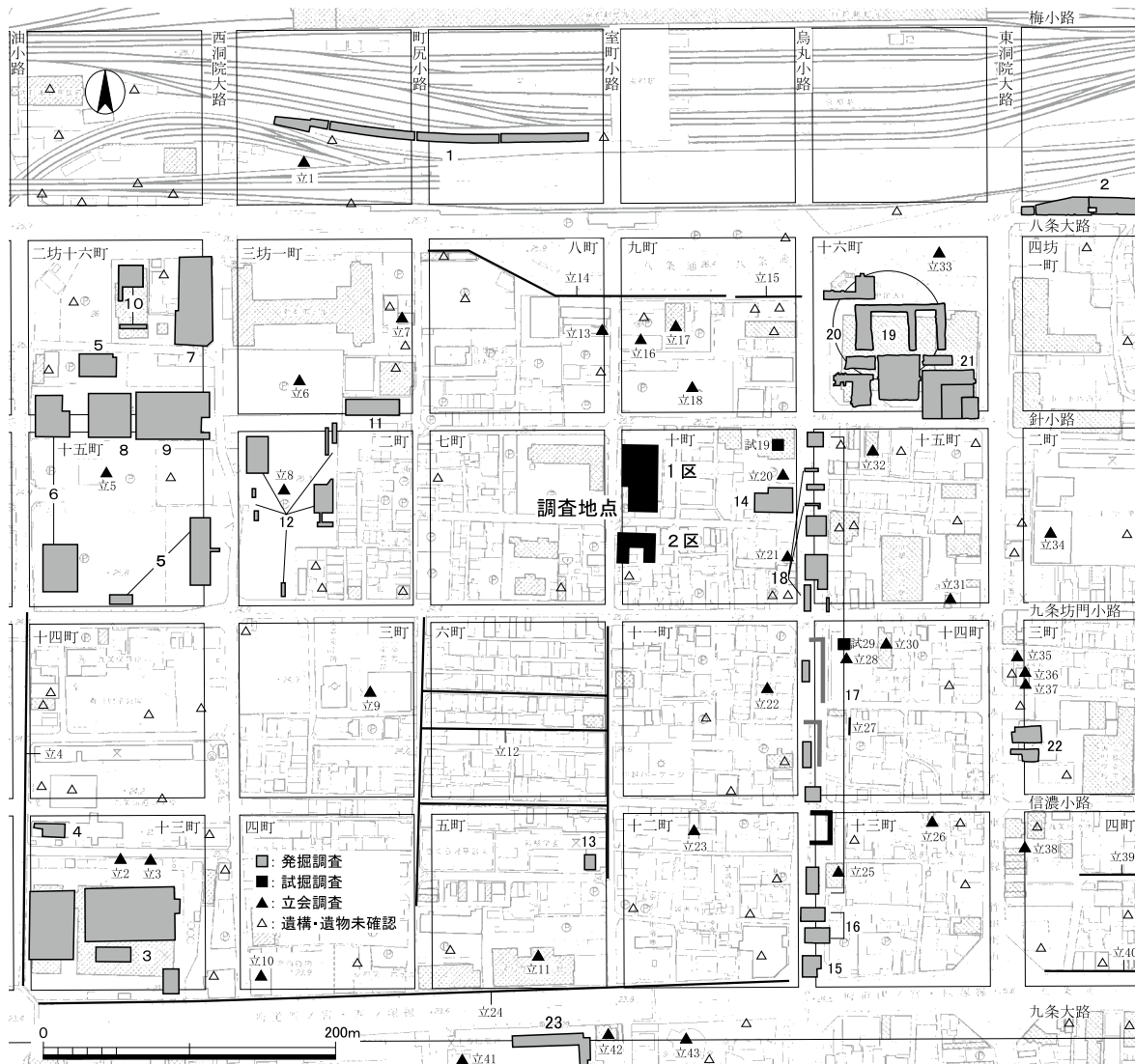


図8 周辺の調査地点図 (1:5,000)

かし、飛鳥時代に入ると、生活に関連する遺構がみられる。北東部では井戸が検出されている (調査19)。南端部では、南北方向の流路を確認した (調査23)。

**平安時代前期** 平安時代に入ると以前に比べて遺構が増加するが、密度はまだ低い。十町東部では、建物跡・池・溝・土坑などを検出し、池からは輪の羽口が出土している。報告者は施薬院御倉に付随する建物の可能性を示唆している (調査14)。十五町では、宅地関係遺構として井戸・土坑・溝などを検出している (調査18)。十三町南西隅では、小規模な窪地を確認した (調査15)。

**平安時代中期** この時期の遺構は少ない。十町東部では、前期から継続して建物跡・池・溝・土坑などが営まれており (調査14)、遺物包含層も検出されている (調査立20)。東部では、土坑を検出し (調査17)、五町北東部では遺物包含層の検出にとどまっている (調査13)。

**平安時代後期** この時期になると遺構数は急激に増加する。条坊街路遺構には、針小路・烏丸小路・九条坊門小路・東洞院大路の関連遺構が検出されている。針小路に関連する遺構は、路面・南側溝がある (調査12)。烏丸小路に関連する遺構は、路面・東側溝などが検出されている (調査15・16・17・18)。烏丸小路関連遺構の検出は地下鉄烏丸線工事に伴う調査によっている。九条坊門小

表1 周辺発掘調査一覧表

番号	条坊地点	条坊・区画関連	宅地・整地関連	流路・湿地・耕作・遺物包含層関連・他	鑄造関連	文 献
1	八条三坊四・五町	平安後～室町の町尻小路路面・東側溝	平安後の池・建物・泉・溝・土坑・鎌倉の泉・井戸・柱列・土坑・室町の井戸	平安後の湿地、室町以降の耕作		『平安京左京八条三坊四・五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-7 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
2	八条四坊四・五町	平安末～室町の東洞院大路・東側溝・築地内溝、八条大路北側溝	A区：平安末～鎌倉の井戸・土坑、室町の井戸・土坑	平安前～中の流路、桃山以降の耕作地、縄文土器出土	炉壁・ルツボ・取瓶・砥石・スラッグ	『平安京左京八条四坊四・五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-20 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
3	九条二坊十三町	平安前～中の油小路東側溝、御土居堀	平安前～中の池状遺構、鎌倉の建物・井戸・土坑・溝	平安前～中の流路、弥生・古墳の土器出土		「平安京左京九条二坊」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
4	九条二坊十三町			砂礫層から古墳の土師器・須恵器出土		「平安京左京九条二坊十三町」『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
5	九条二坊十五・十六町	平安後の十五町北五・六門、十六町北四・五門区画溝	平安後の溝・柵・柱穴・土坑・堀、鎌倉の井戸、鎌倉～室町の井戸・柱穴	砂礫層から弥生・古墳の遺物出土		「平安京左京九条二坊」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
6	九条二坊十五・十六町	御土居堀		砂礫層から弥生～古墳の土器出土		「平安京左京九条二坊」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
7	九条二坊十五・十六町		平安前の掘立柱建物、鎌倉～室町の井戸・柱穴、池	地山砂礫上の緑灰色微砂層から9世紀後半から10世紀初頭の遺物少量出土		「平安京左京九条二坊1」『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
8	九条二坊十六町		平安後～鎌倉・室町の柱穴・土坑・井戸・池状遺構(洲浜・景石)	砂礫層から弥生土器古墳の土師器・須恵器出土		「平安京左京九条二坊2」『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
9	九条二坊十五・十六町		室町の井戸・溝	砂礫層から磨滅した古墳の須恵器・埴輪片出土	鑄型片や埴輪片出土	「平安京左京九条二坊」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
10	九条二坊十六町		平安前の落込み・池状窪地・土坑、平安末～鎌倉の柱穴・井戸・土坑・溝・溝状遺構・池	砂礫上層から弥生・古墳の遺物出土	鎌倉の取瓶や鞆羽口など出土	「平安京左京九条二坊」『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年
11	九条三坊一町		平安後の地業、平安末～鎌倉の甕倉・井戸・土坑・柱穴	古墳の流路		「平安京左京九条三坊一町跡」『平安京跡研究調査報告 第22輯』財団法人古代学協会 2006年
12	九条三坊二町	平安後の針小路路面・南側溝	平安後の園池・掘込、鎌倉前～後半の井戸			「平安京左京九条三坊」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
13	九条三坊五町			弥生の流路、平安中の遺物包含層		「平安京左京九条三坊五町」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2012年
14	九条三坊十町		平安前～中の建物・池・溝・土坑、鎌倉～室町の建物・堀・井戸・土坑		平安前の鞆羽口出土	『平安京左京九条三坊十町』古代文化調査会 2006年
15	九条三坊十三町	平安後の烏丸小路路面・東側溝	鎌倉の井戸、室町後～桃山前半の濠・柱穴、平安後の整地層	平安前の窪地		「九条三坊(1)」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年
16	九条三坊十三町	平安後の烏丸小路路面・側溝	室町後の濠			「九条三坊(2)」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年
17	九条三坊十三町～十五町	平安後～鎌倉前の九条坊門小路北側溝、烏丸小路東側溝	平安中の土坑、平安後～鎌倉前の土坑・柱穴・落込み			「平安京左京九条三坊」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
18	九条三坊十五町	烏丸小路東側溝、室町後の濠	平安前の井戸・土坑・溝	縄文晩の土器・石鏃出土、弥生の溝から土器出土		「平安京左京九条三坊」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
19	九条三坊十六町		鎌倉の井戸・柱穴・土坑、平安後～室町の井戸、室町初の建物・柱穴・溝・柵・土坑	飛鳥後の土器出土		『平安京左京九条三坊跡 京都駅南口第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財調査概報 昭和54年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980年
20	九条三坊十六町		平安後～室町前の井戸・土坑・柱穴・柵		鑄型出土	「左京九条三坊」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982年
21	九条三坊十六町		平安後～室町の井戸・土坑・溝・柱穴			「平安京左京九条三坊十六町」『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年

番号	条坊地点	条坊・区画関連	宅地・整地関連	流路・湿地・耕作・遺物包含層関連・他	鋳造関連	文 献
22	九条四坊三町	平安後の東洞院大路東側溝・築地・内側溝	平安後の井戸(東洞院大路路面上)、平安後～鎌倉初の井戸、室町の井戸			「平安京左京九条四坊跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1979年
23	九条大路			縄文・弥生前～飛鳥の落込み・流路、中世の耕作溝		『平安京左京九条大路跡・烏丸町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-19 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年

表2 周辺試掘・立会調査一覧表

番号	調査記号	条坊地点	検出遺構・出土遺物	文 献
立1	08-HL47	八条三坊四町	中世の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
立2	97-HL434	九条二坊十三町	平安末～鎌倉の土坑、鎌倉前の遺物包含層、中世の落込み	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 1999年
立3	00-HL37	九条二坊十三町	鎌倉の落込み、室町中～後の遺物包含層・南北溝	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
立4	02-HL208	九条二坊十一町、油小路	平安末～鎌倉の遺物包含層、油小路西側溝か	『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年
立5	07-HL14	九条二坊十五町	中世の遺物包含層、御土居堀	『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
立6	03-HL389	九条三坊一町	鎌倉中の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
立7	05-HL331	九条三条一町	鎌倉後の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
立8	07-HL14	九条三坊二町	中世の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
立9	84-HL316	九条三坊三町	古墳の流れ堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
立10	86-HL207	九条三坊四町	室町の遺物包含層、時期不明の流れ堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
立11	88-HL168	九条三坊五町	室町の東西溝	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
立12	16-19	九条三坊五・六町	平安末～室町の耕作溝	「左京九条三坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(試掘・立会調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
立13	94-HL208	九条三坊八町	鎌倉・室町の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
立14	93-HL332	九条三坊八・九町	鎌倉・江戸の遺物包含層・落込み・路面	『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
立15	93-HL380	九条三坊九町	平安後～末の落込み、鎌倉～江戸の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
立16	90-HL17	九条三坊九町	平安中の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
立17	02-HL278	九条三坊九町	鎌倉末・室町初の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年
立18	00-HL213	九条三坊九町	鎌倉前、室町前・中・後の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
試19	保試99-32	九条三坊十町	室町前の土坑墓・土坑・南北溝・柱穴	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
立20	04-HL62	九条三坊十町	平安中の遺物包含層、鎌倉前～後の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成16年度』京都市文化市民局 2005年
立21	85-HL8	九条三坊十町	鎌倉の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
立22	85-HL120	九条三坊十一町	鎌倉の遺物包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
立23	97-HL247	九条三坊十二町	平安後の落込み・遺物包含層、室町・江戸の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年

番号	調査記号	条坊地点	検出遺構・出土遺物	文 献
立24	S60-51	九条四坊十二町、 九条大路	弥生の遺物包含層、室町の井戸・土坑・堀、近世の九条大路側溝	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
立25	96-HL262	九条三坊十三町	平安後～鎌倉の落込み・遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』 京都市文化市民局 1997年
立26	82-HL25	九条三坊十三町	平安～室町の遺物包含層・土坑、弥生土器出土	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』 京都市文化観光局 1983年
立27	87-HL225	九条三坊十四町	室町の遺物包含層、時期不明の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』 京都市文化観光局 1988年
立28	09-HL211	九条三坊十四町	平安後の湿地堆積	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成22年度』 京都市文化市民局 2011年
試29	84-HL161	九条三坊十四町	鎌倉の湿地状堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』 京都市文化観光局 1985年
立30	95-HL303	九条三坊十四町	鎌倉・室町の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』 京都市文化市民局 1996年
立31	81-HL106	九条三坊十五町、 東洞院大路	平安末の遺物包含層	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』 京都市文化観光局 1982年
立32	99-HL420	九条三坊十五町	平安後～鎌倉の土坑、鎌倉の落込み、時期不明の柱穴	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』 京都市文化市民局 2001年
立33	80-HL	九条三坊十六町	平安～室町の遺物包含層	『平安京左京八条大路跡 八条通地下横断 歩道建設に伴う立会調査概報 昭和55年度』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
立34	86-HL87	九条四坊二町	室町の遺物包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』 京都市文化観光局 1987年
立35	05-HL22	九条四坊三町、 東洞院大路	中世の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』 京都市文化市民局 2006年
立36	07-HL373	九条四坊三町、 東洞院大路	中世の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』 京都市文化市民局 2009年
立37	97-HL44	九条四坊三町、 東洞院大路	平安後の土坑、室町前の遺物包含層、下層は湿地堆積	『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』 京都市文化市民局 1998年
立38	01-HL26	九条四坊四町、 東洞院大路	鎌倉の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』 京都市文化市民局 2002年
立39	11-HL25	九条四坊四町	平安後の落込み	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成23年度』 京都市文化市民局 2012年
立40	97-HL381	九条四坊四町、 九条大路	弥生～古墳・平安後の遺物包含層、鎌倉後～室町の遺物包含層・落込み	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』 京都市文化市民局 1999年
立41	86-HL206	九条大路	弥生土器含む流れ堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』 京都市文化観光局 1987年
立42	86-HL223	九条大路	室町の遺物包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』 京都市文化観光局 1987年
立43	88-HL77	九条大路	鎌倉～室町の土坑、下層に流れ堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』 京都市文化観光局 1989年

路に関連する遺構は、北側溝がある（調査17）。また、四坊三町では、東洞院大路東側溝・築地・内溝などが検出されている（調査22）。この時期になり、条坊街路が施工されたと見られる。

宅地関係遺構では、建物跡・園池・井戸・土坑・柱穴・柵・溝・落込み・整地層など多くの遺構がある。一町南部で建物地業・井戸などが検出されている（調査11）。二町西部では園池・掘込みなどがあり、園池を持つ宅地の存在が明らかとなった（調査12）。十六町中央部では、建物跡・井戸・土坑・柱穴・柵・溝などが検出され（調査19・20・21）、遺構からは鋳型も出土していることから、手工業生産が行われていることも明らかとなった。東部では、土坑・柱穴・落込み・整地層などがある（調査17）。東洞院大路路上の位置では、井戸が検出されている（調査22）。十三町南西部では、整地層が確認されている（調査15）。

**鎌倉時代** 平安時代後期から継続する遺構が多くある。街路・区画に関する遺構としては、九条

坊門小路北側溝・烏丸小路東側溝などが検出されている（調査17・18）。

宅地関係遺構では、建物跡・井戸・土坑・柱穴・塀・柵・溝・濠など多くの遺構がある。

北西部で井戸（調査12）、甕倉・柱穴など（調査11）が検出され、北東部では建物・井戸・土坑・柱穴・塀・柵・溝・遺物包含層など（調査14・19・20・21・立20・21）、東部で土坑・柱穴など（調査17）、南東部で井戸（調査15）を検出しており、前代からの土地利用が継続していることがわかる。また、南東部で南北方向の濠を連続して検出しており（調査16）、新たな土地区画が施工されたとみられる。

**室町時代** この時期の遺構には、建物跡・井戸・土坑・柱穴・塀・柵・濠・土坑墓・耕作溝など遺構の種類は多くがあるが、遺構の量は減少していく傾向にある。

北西部で甕倉・柱穴など（調査11）、南東部では、濠・柱穴など（調査15）が検出されている。北東部では、建物跡・井戸・土坑・柱穴・塀・柵・溝・濠（調査14・18・19・20・21）など、前代からの遺構が継続している。また、土坑墓が検出され（調査試19）、宅地としての土地利用が変わっていく様子も見られる。南部では耕作溝が検出され（調査23）、一帯が耕地化していく状況も窺える。

以上の調査成果を概括しておく。平安時代の条坊に関する遺構は、東西通として針小路路面・南側溝、九条坊門小路北側溝、南北通として烏丸小路路面・東側溝、東洞院大路東側溝・築地・内溝を検出している。平安時代前期から中期の遺構は少なく、平安時代末期から鎌倉時代初期になって街路関連遺構の検出とともに、建物・柱穴・井戸・溝・土坑など宅地が増加する様子が見える。東洞院通を踏襲する形で南側に延びる竹田街道沿いは、室町時代以降も宅地利用が継続する部分も見られるが、それ以外のほとんどの場所は耕作地化していくことが指摘されている。これらは、今回の調査結果とも共通しており、遺構の拡がりを理解する上でも重要な知見である。

#### 註

- 1) 横山卓夫「京都盆地の自然環境」『平安京提要』角川書店 1994年
- 2) 山田邦和「左京九条」『平安京提要』角川書店 1994年
- 3) 片桐洋一編『鑑賞 日本古典文学 第5巻 伊勢物語 大和物語』角川書店 1975年 第九七段「桜花散りかひ雲れ」
- 4) 竹内理三編『鎌倉遺文』東京堂出版 1976年 七二四六号
- 5) 『増補 史料大成』第十一巻（中右記三）臨川書店 1965年 嘉承元年六月二二日条
- 6) 註4と同じ 三〇九五・二五〇五九・二五〇六〇号
- 7) 『九条家文書』承久二年六月十八日付「はりのこうち（針小路）より南すし（辻子）をとるすし（辻子）のおくなか（奥中）にて候」「みくら（御倉）のあと（跡）」



## 第3章 遺 構

### 1. 層序 (図9・10)

調査区の地表面の標高は北側が約25.6m、南側が約25.4mで、ほぼ平坦である。現代盛土層が約1mあったため、遺構面に及ぶ攪乱がほとんどなく、遺構の残存状況は極めて良好であった。

**断面1** (1区北壁Y = -22,054地点) 地表から約0.9mが現代盛土である。第2層は近世の耕作土層、第3層は室町時代の耕作土層である。第4層は鎌倉時代前期の整地層1で、この層を基盤として掘立柱建物・井戸・溝などの遺構群が成立する(第1-1・1-2面)。第5層は平安時代後期の整地層2で、この層を基盤として掘立柱建物や井戸などが成立する(第2面)。第6層は平安時代中期から後期の池1121の堆積層である(第3面)。第7層は平安時代前期から中期の流路1158の堆積層である(第4面)。さらに下は褐色粗砂の地山層である。この地点では、平安時代の池堆積土の上に平安時代後期の整地層2や鎌倉時代前期の整地層1が覆っている。

**断面2** (1区東壁X = -112,803地点) 地表から約0.8mが現代盛土である。第2・3層は近世の耕作土層、第4・5層は室町時代の耕作土層である。第6層はオリーブ黒色砂礫の地山層で、この層を基盤として耕作溝や掘立柱建物や井戸などが成立する(第1-1・1-2面)。この地点は平安時代前期から陸部にあたるため、他の地点で見られる平安時代後期の整地層2や鎌倉時代前期の整地層1はない。

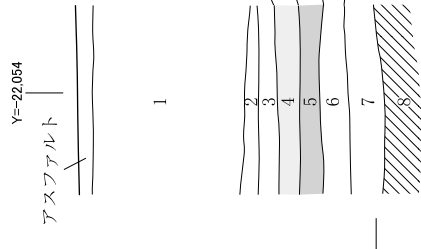
**断面3** (1区南壁Y = -22,046地点) 地表から0.7~0.8mが現代盛土である。第2・4層は近世の耕作土層、第3層は近世の暗渠溝である。第5・6層は室町時代の耕作土層である。第7層は鎌倉時代前期の整地層1で、この層を基盤として耕作溝や掘立柱建物や井戸などが成立する(第1-1・1-2面)。第8・9層は平安時代中期から後期の池1121の堆積層である。第10層は黄灰色泥砂の地山層である。ここでは平安時代後期の整地層2は確認できない。

**断面4** (1区西壁X = -112,832地点) 地表から約0.7mが現代盛土である。第2層は近世の耕作土層、第3・4層は室町時代の耕作土層である。第5層は鎌倉時代前期の整地層1で、この層を基盤として耕作溝が成立する(第1-1・1-2面)。第6層は平安時代中期から後期の池1121の堆積層である。第7層以下は黄褐色系の砂礫層(11世紀の自然流路)である。この地点でも断面3と同様に平安時代後期の整地層2は確認できない。

**断面5** (2区東壁X = -112,877地点) 地表から約0.7mが現代盛土である。第2・3層は近世の耕作土層、第4・5層は室町時代の耕作土層である。第6・7層は平安時代後期の整地層2で、陸地となる(第1-1・1-2面)。下の第8層は暗灰黄色粗砂の地山層である。ここでは鎌倉時代前期の整地層1はない。

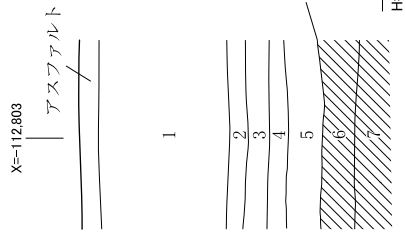
**断面6** (2区南壁Y = -22,049地点) 地表から約0.8mが現代盛土である。第2層は近世の耕作土層、第3層は室町時代の耕作土層である。第4層は鎌倉時代前期の整地層1で、この層を基盤として耕作溝が成立する(第1-1・1-2面)。第5層は平安時代後期の整地層2で、この層を基

断面1 (1区北壁)



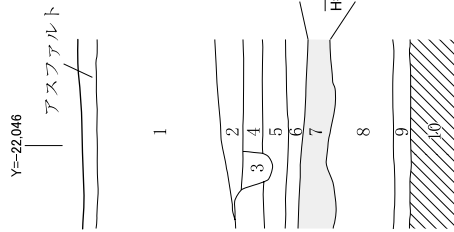
- 1 現代盛土
- 2 5Y3/1オリーブ黒色砂泥  
炭、土器片少量含む [近世耕作土]
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 [中世耕作土]
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥  
φ0.5~4cmの礫を少量含む [整地層1]
- 5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 [整地層2]
- 6 2.5Y3/1黒褐色粘質土  
φ1~5cmの礫を少量含む [池1121]
- 7 2.5Y3/2黒褐色粘質土 [流路1158]
- 8 10YR4/4褐色粗砂 φ1~10cmの礫を多量含む [地山]

断面2 (1区東壁)



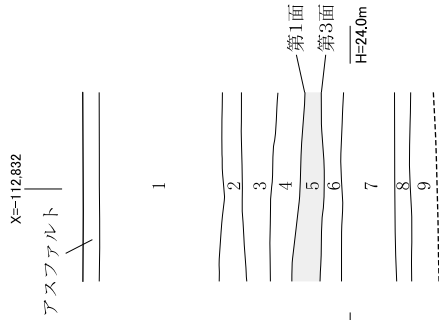
- 1 現代盛土
  - 2 5Y3/1オリーブ黒色砂泥  
炭、土器片少量含む
  - 3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥  
10YR3/4暗褐色砂泥混
  - 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥  
φ0.5~4cmの礫少量、炭少量
  - 5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥  
φ1~8cmの礫少量、炭少量
  - 6 5Y3/1オリーブ黒色砂泥 φ0.5~5cmの礫中量
  - 7 2.5Y4/1黄灰色砂礫
- 近世耕作土  
室町耕作土  
地山

断面3 (1区南壁)



- 1 現代盛土
  - 2 2.5Y3/2黒褐色砂泥 やや粘質 [近世耕作土]
  - 3 2.5Y3/2黒褐色泥砂 φ1~8cm礫多量 [近世暗渠]
  - 4 2.5Y4/1黄灰色砂泥 [近世耕作土]
  - 5 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 粗砂混  
φ0.5~4cmの礫少量
  - 6 2.5Y5/2暗灰黄色細砂  
φ2~12cmの礫少量
  - 7 5Y4/1灰色砂泥~細砂 [整地層1]
  - 8 2.5Y3/2黒褐色泥砂 [池1121]
  - 9 7.5Y4/1灰色粘質土 [池1160]
  - 10 2.5Y4/1黄灰色泥砂 やや粘質 [地山]
- 室町耕作土

断面4 (1区西壁)



- 1 現代盛土
  - 2 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土  
炭少量 [近世耕作土]
  - 3 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 やや粘質  
土器片、炭少量
  - 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 粗砂混  
φ0.5~4cmの礫少量
  - 5 5Y4/2灰オリーブ色泥砂 やや粘質  
土器片、炭少量 [整地層1]
  - 6 5Y3/2オリーブ黒色粘質土  
φ0.5~5cmの礫混 土器片、炭少量 [池1121]
  - 7 2.5Y5/6黄褐色砂礫 φ0.5~10cmの礫多量
  - 8 5Y5/2灰オリーブ色砂礫 φ0.2~8cmの礫多量
  - 9 2.5Y5/6黄砂礫
- 室町耕作土

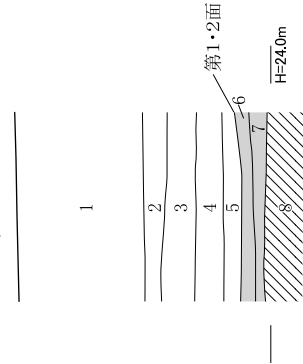
図9 1区断面図 (1:40)

■ 整地層1 (鎌倉前期)  
■ 整地層2 (平安後期)



断面5 (2区東壁)

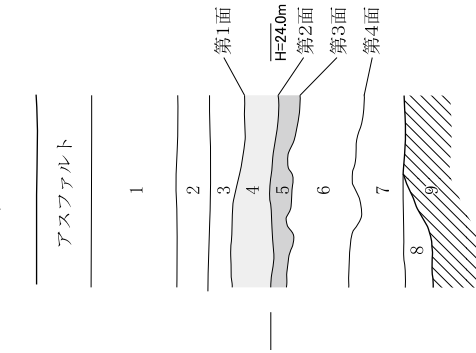
X=112.877



- 1 現代盛土
- 2 10YR3/2黒褐色粘質土 炭中量
- 3 10YR4/2灰黄褐色砂泥 土器片、炭微量
- 4 10YR3/1黒褐色砂泥 土器片、炭微量
- 5 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 6 10YR4/1褐色粘質土 土器片多量
- 7 2.5Y4/1黄灰色粘質土
- 8 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂 [地山]

断面6 (2区南壁北側)

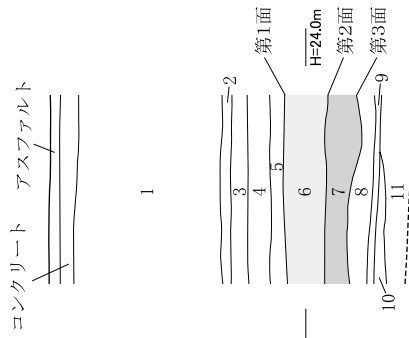
Y=22.049



- 1 現代盛土
- 2 5Y3/2オリーブ黒色粘質土
- 3 10Y2/1黒色粘質土 [近世耕作土]
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 [整地層1]
- 5 2.5Y4/1黄灰色砂泥
- 6 細砂～中砂少量 [整地層2]
- 7 2.5Y3/2黒褐色砂泥 有機物多量 [池77]
- 8 2.5Y3/1黒褐色砂泥 [池80上層]
- 9 2.5Y3/1黒褐色砂泥 [池80下層]
- 10 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂

断面7 (2区南壁)

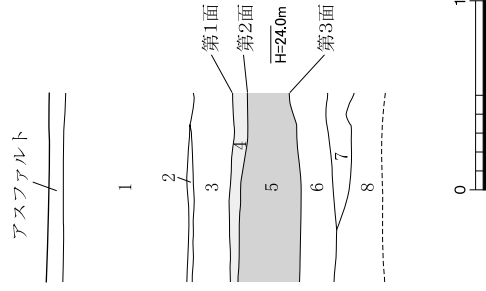
Y=22.064



- 1 現代盛り土
- 2 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土 炭少量
- 3 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 土器片、炭少量
- 4 10Y3/2オリーブ黒色粘質土
- 5 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 土器片少量
- 6 2.5Y3/1黒褐色砂泥 粘質 [整地層1]
- 7 2.5Y3/2黒褐色砂泥 粗砂～中砂少量 [整地層2]
- 8 5Y4/1灰色泥砂 φ～3cmの礫混 [池77]
- 9 10YR5/3にふい黄褐色泥砂 φ1～15cmの礫少量 [池77洲浜]
- 10 10YR4/4褐色砂礫
- 11 10YR5/6黄褐色砂礫

断面8 (2区西壁)

X=112.870



- 1 現代盛土
- 2 10YR3/1黒褐色泥砂 やや粘質 [近世耕作土]
- 3 2.5Y3/2黒褐色砂泥 [室町耕作土]
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 [整地層1]
- 5 2.5Y4/1黄灰色砂泥 土器片多量 [整地層2]
- 6 10YR3/2黒褐色細砂 腐植土
- 7 2.5Y2/1黒色砂泥 やや粘質 φ2～10cmの礫少量
- 8 10YR6/2灰黄褐色砂礫

図10 2区断面図 (1:40)

盤として掘立柱建物や井戸などが成立する（第2面）。第6層は平安時代中期から後期の池77の堆積層である。第7層は平安時代前期から中期の池80の堆積層である。さらに下の9層は暗灰黄色泥砂の地山層である。

**断面7**（2区南壁Y = - 22,064地点） 地表から約0.9mが現代盛土である。第2～4層は近世の耕作土層である。第5層は室町時代の耕作土層である。第6層は鎌倉時代前期の整地層1で、この層を基盤として耕作溝が成立する（第1-1・1-2面）。第7層は平安時代後期の整地層2で、この層を基盤として掘立柱建物や井戸などが成立する（第2面）。第8・9層は平安時代中期から後期の池77の堆積層である。下の10・11層は褐色～黄褐色の砂礫層（11世紀の自然流路）である。

**断面8**（2区西壁X = - 112,870地点） 地表から0.7～0.8mが現代盛土である。第2層は近世の耕作土層、第3層は室町時代の耕作土層である。第4層は鎌倉時代前期の整地層1で、この層を基盤として耕作溝が成立する（第1-1・1-2面）。第5層は平安時代後期の整地層2で、この層を基盤として掘立柱建物や井戸などが成立する（第2面）。第6・7層は平安時代中期から後期の池77の堆積層である。さらに下の第8層は灰黄褐色の砂礫層（11世紀の自然流路）である。

## 2. 検出遺構の概要

今回の調査で検出した遺構の時期は、平安時代・鎌倉時代・室町時代以降に分けられる。鎌倉時代の遺構が大半を占め、平安時代は前期から末期までの遺構を検出した。

調査区は、現在の東西道路の北側を1区、南側を2区とした。遺構は調査区内の全体に分布し、

表3 遺構概要表

時 代	遺 構	
	1 区	2 区
平安時代前期 (第4面)	流路1158*、池1160、泉1159、集石1161*	池80*、泉82、柱穴85～88・91～94
平安時代中期～ 後期(第3面)	池1121*、土坑999*、土坑1162、柱穴1168	池77*、土留79、泉75*、溝74
平安時代末期～ 鎌倉時代初期 (第2面)	整地層2、掘立柱建物10・11*・12・13・ 14・15・16・17・18・19*、柱穴群*、 井戸7*・425*・462・577・787・891・ 908・910・911・1062*、土坑821・892*	整地層2*、掘立柱建物20*・21*・22・ 23・24・25・26、柵、柱穴群*、 井戸23・44*・78*・136*、土坑57・ 134*・186*
鎌倉時代前期～ 中期 (第1-2面)	整地層1*、掘立柱建物1*・2*・3*・ 4・5*・6・7・8*・9*、柵1・2・ 3・4・5・6*・7*、柱穴群*、 井戸27*・450*・555*・950*・1063*・ 1064*、土坑33*・62*・73・132・184*・ 229*・320・405*・460*・470*・515*・ 576*・652*・662*・665*・764、 溝2・51・146・190・191・209・223*・ 229*・245・247*・260*・282・333*・ 380・390・400・430・510・570、 集石475・1061	整地層1*
室町時代以降 (第1-1面)	井戸4、鋤溝群	鋤溝群、溝1*・36*・58*、土坑

(\*印は遺物掲載遺構)

近現代の攪乱がほとんどなく、中世以降は耕作地として利用されていたため、遺構の残存状況は極めて良好であった。

第4面は、平安時代前期から中期、池80・1160や流路1158を検出した。池80は急傾斜の東汀と底部にやや大きめの化粧石を貼り付けている。埋土下層からは、9世紀の土器類と共に木簡が出土した。

第3面は平安時代中期から後期、池77・1121を検出した。池77の東汀は緩やかな勾配で、小石を敷き詰めた洲浜が広がる。

第2面は平安時代末期から鎌倉時代初期、掘立柱建物・柵・木枠組み井戸・溝などを検出した。

第1面は鎌倉時代から室町時代、鎌倉時代の掘立柱建物・柵・木枠組み井戸などや室町時代以降の耕作に伴う溝群を検出した。本報告では、土器など出土遺物の検討により、第1面の室町時代以降の遺構と鎌倉時代の遺構とに分離したため、前者を第1-1面、後者を第1-2面として遺構平面図を作成した。

以下に、1区、2区ごとに検出した遺構の概要を古い順に述べる。今回の調査では、平安時代末から鎌倉時代の道路に面した掘立柱建物を多く検出した。建物は、道路に面して密集して建ち並び、建物の長軸方向と棟筋が一致しない例があるが、本報告では、建物の長軸方向をもって棟と表記することとした。なお、出土遺物の時期は平安京・京都I期～XIV期の編年案を準用する<sup>1)</sup>。

### 3. 1区の検出遺構

#### (1) 第4面の検出遺構 (図版1・18)

**流路1158** (図版15・16) 調査区の北西部から南東方向に流下する自然流路である。北壁の中央西寄りから幅約2.4mの流路が流下する。流路南部では東西幅約6.5mとやや幅広くなり、深さ0.3～0.6mある。検出した南北長は39mである。流路は西岸側がなだらかな傾斜で、東岸側が比較的急な傾斜となっている。両岸や底部には人工的に手を加えたような痕跡は見当たらない。この流路南端はX=-112,833付近で池1160に接続していることから、遣り水の性格も併せ持っていると考えられる。流路の堆積土は、北側では黒褐色細砂に小礫を中量含み、南側ではオリブ黒色泥砂に小礫を中量含む層である。平安京II期に属する土器類が出土した。

**池1160** (図11、図版15・18・19) 調査区の南部で検出した池で、流路1158の南にあたる。東西幅約3.6m、南北12.5m、南は調査区外にのびる。深さ約0.2mある。底部はX=-112,833付近から深くなり、東岸斜面と底部の一部に拳大の礫を貼り付けて洲浜としている。さらに南端付近では東岸にチャートなどの石材を南北方向に約10石据え付けて護岸をしている。これらの石材上部は、推定される水面より高い位置にあたることから景石と考えることもできる。東岸斜面は急であるが、西岸は緩やかな傾斜となっている。池の中央北寄りには泉とみられる施設がある。埋土は暗灰黄色砂で礫を中量含む。南側に位置する2区の池80と連続するとみられる。平安京I期古段階からII期新段階に属する土器類が出土した。

**泉1159** (図11) 池1160の中央北寄りで検出した円形を呈する泉である。調査区南壁から北に

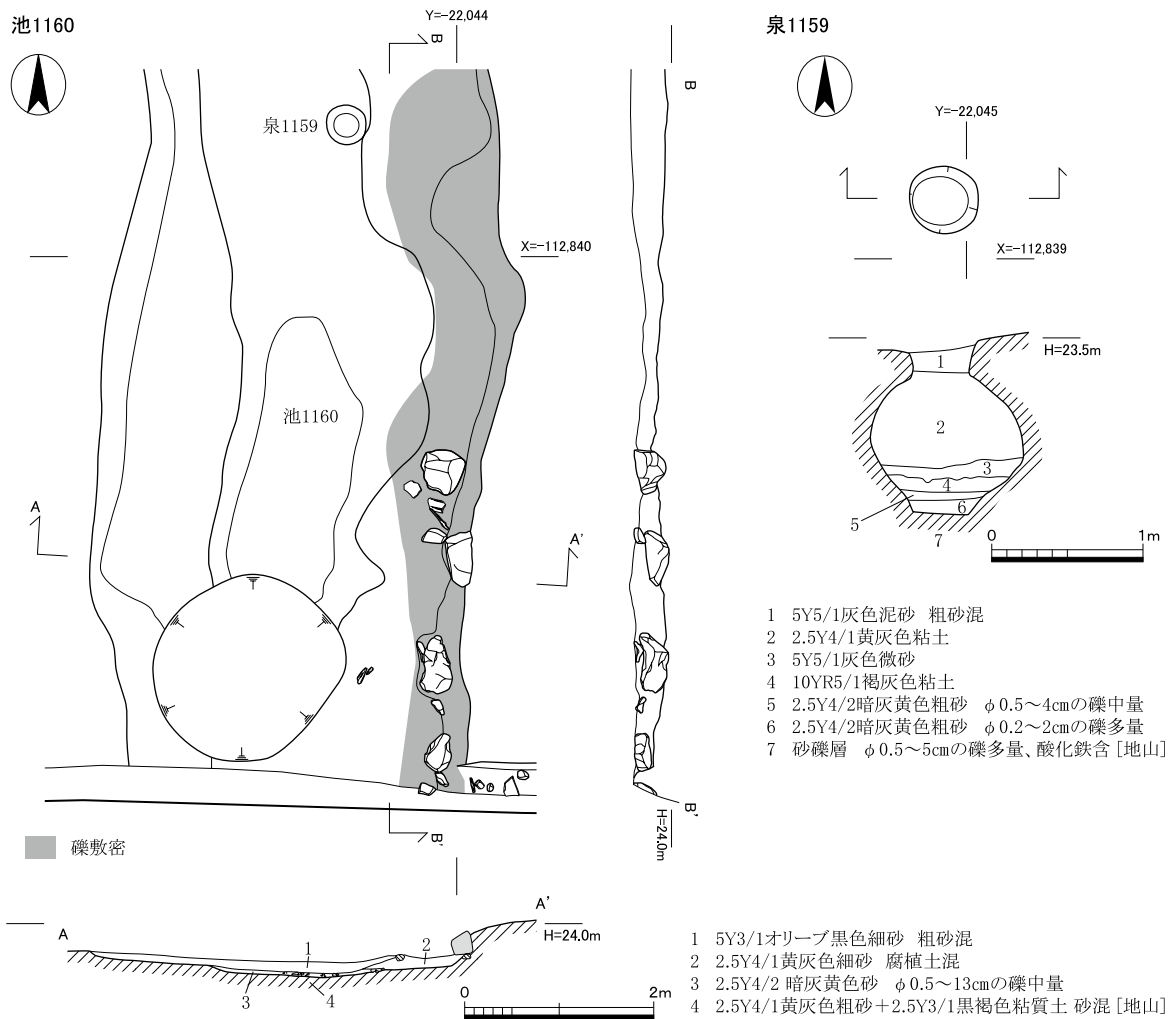


図11 1区 池1160・泉1159実測図 (1:80、1:50)

約7mの地点に位置する。断面形は壺状を呈し、上面では直径約0.4m、中位では直径約1.0m、深さ約1.2mとなる。礫層を掘り込んで湧水を得ていることから、中位では壁面の礫が崩れて内部が広がっている。埋土は上層が灰色泥砂粗砂混、下層は暗灰黄色粗砂小礫を中量含む層などからなり、堆積状態から底部から水が湧き出たとみられる。底部の標高は22.30m。

**集石1161** 調査区の中央東寄りで検出した。流路1158の東肩部に位置する。掘形は東西幅約1.5m、南北1.0m以上、深さ約0.4mある。埋土は黄灰色泥砂で、0.1~0.4m大の礫が多量に詰められている。奈良時代の軒平瓦が出土した。

## (2) 第3面の検出遺構 (図版2・19)

**池1121** (図12、図版15・16・20) 調査区の東端以外の広い範囲で検出した。南北45m以上、東西20m以上、深さ0.2~0.4mの浅く大規模な池である。東岸は緩やかな曲線を呈し、X=-112,820付近で東側に広がりを見せ、直線的に南へ延びる。X=-112,825付近より北側ではなだらかな傾斜を持ち、礫を貼り付けるなどの意匠は持たない。これに対してX=-112,825付近より南側では、比較的急な傾斜を持ち、やや小振りの礫を貼り付けた洲浜を形成している。南端部では大型

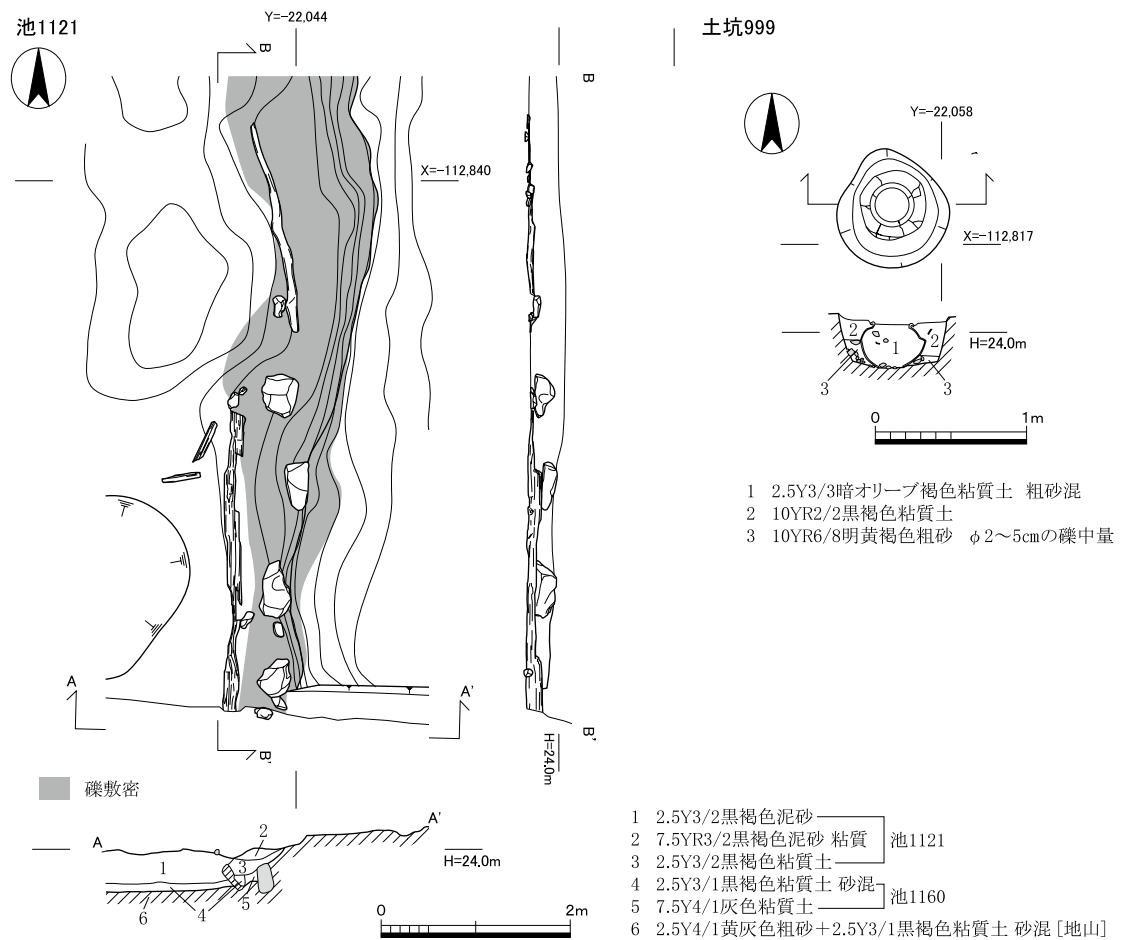


図12 1区 池1121・土坑999実測図（1：80、1：50）

の板材を用いて東岸の土留めを行っている。古い池1160の石材頭部が露出しており、景石として  
 いる可能性がある。底部の東側にも礫を貼り付けているが、西側ではかなりまばらである。池の埋  
 土は黒褐色砂泥・腐植土層で、部分的に砂や小礫を含む。前期の流路1158や池1160を利用し、新  
 しく造り替えた池と見られる。池はさらに南と北方向に広がると見られ、西側も室町小路東築地心  
 想定線を越えてさらに広がるとみられる。平安京IV期前後に属する土器類が出土した。

**土坑999**（図12、図版24） 調査区の中中部西寄り、池1121の中で検出した。直径約0.8m、深さ  
 約0.4mの掘形内に胴部径45cm、高さ30cmの須恵器甕（図41-24）を据え付ける。甕内の堆積土  
 は暗オリーブ褐色粘質土で、土壌分析によりタガラシ・ドクダミ・イボクサ・コナギなどの種実  
 を検出した。これらの植物は水田や沼などで育成することから、この甕は池の中に据え付けられ  
 ていたとみられる。底部の標高は23.75m。

**柱穴1168** 調査区の南部東端で検出した柱穴である。東半部は調査区外となるが、径約0.9m、  
 深さ約0.2mある。掘形の底部には根石が据え付けられている。池1160の東肩部に建物が存在する  
 可能性がある。

**土坑1162** 池1160の東肩部に位置する円形を呈する小土坑である。径0.3m、深さ0.1mある。  
 土坑内には、イネ藁灰のみが堆積していた。何らかの儀式に関連する埋納遺構の可能性があり

(3) 第2面の検出遺構 (図版3)

**整地層2** 調査区の中央部分から西側の池1121の上部で検出した。厚さは0.05~0.20mあり、中央部ではやや厚いが、それ以外の場所では薄い。黄灰色砂泥を主体とし、暗赤褐色土と小礫が中量混じる整地層である。池1121が廃絶した後に行われた整地で、この上面で掘立柱建物10棟や井戸11基、土坑など多くの遺構が成立する。しかし、室町小路東築地に関連する南北方向の溝などの遺構は検出していない。平安京V期から京都VI期に属する土器類が出土した。この整地層に成立する遺構からは、京都VI期中段階に属する土器類が出土しており、この時期を池1121の廃絶時期ととらえる。

**建物10** (図13) 調査区の北西部、北一門西側で検出した掘立柱建物である。調査区内では東西3間×南北1間分を検出し、現状では棟筋方向は不明である。北は調査区外へ延長すると考えている。西柱筋は室町小路東築地心想定線から宅地側に約4m、南柱筋は北一・二門界想定線から約

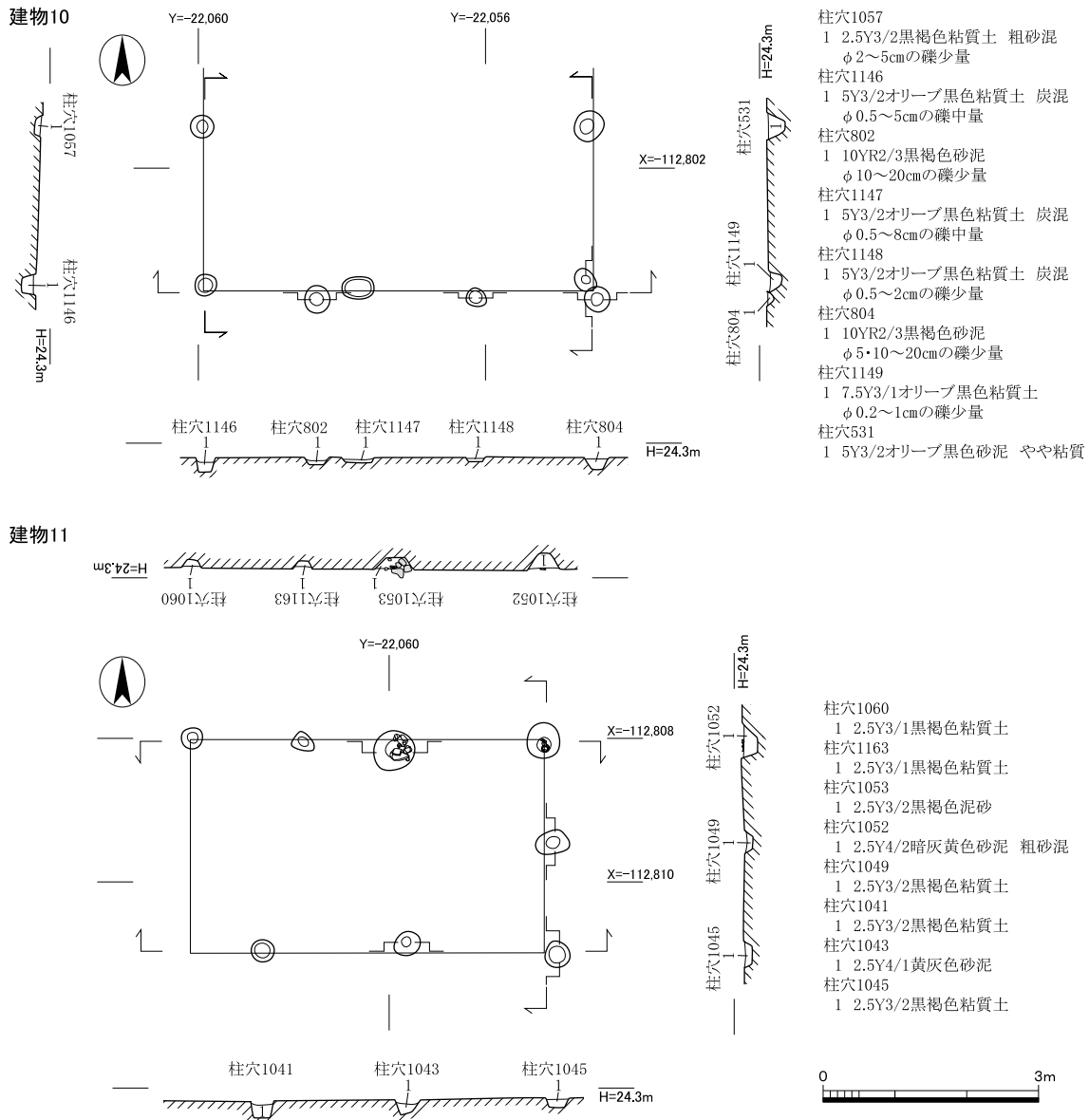


図13 1区 建物10・11実測図 (1:100)



1.5m北に位置する。柱間は、東西がほぼ1.8m等間、南北が2.2mである。柱穴の平面形は、概して円形を呈し、検出面での規模は、径0.3～0.4m、深さ0.1～0.3mある。京都Ⅵ期に属する土器類が出土した。

**建物11**(図13) 調査区の北西部、北二門北西側で検出した3間×2間と想定した東西棟掘立柱建物である。西柱筋は室町小路東築地心想事成線から宅地側に約1.2m、北柱筋は北一・二門界想定線から南へ約2.8mに位置する。柱間は、東西は1.4～1.9mとばらつきがあり、南北が1.5m等間である。柱穴の平面形は、円形を呈し、検出面での規模は、径0.3～0.6m、深さ0.1～0.2mある。柱穴1053には根石を据える。柱穴1052からは、京都Ⅵ期中段階に属する土器類が出土した。

**建物12**(図14) 調査区の北西部、北二門南西側で検出した3間×2間の東西棟総柱掘立柱建物である。西柱筋は室町小路東築地心想事成線から宅地側に約3.0m、南柱筋は北二・三門界想定線から北へ約1.2mに位置する。柱間は、東西が1.7m等間、南北が2.4m等間である。柱穴の平面形は、円形を呈し、検出面での規模は、径0.3～0.6m、深さ0.1～0.4mある。柱穴395・1020底部には根石を据える。京都Ⅵ期に属する土器類が出土した。

**建物13**(図14) 調査区の北東部、北二門東側で検出した1間×2間の小規模なほぼ方形の掘立柱建物である。西柱筋は建物12から東側に約10.2m、北柱筋は北一・二門界想定線から南へ約5.5mに位置する。主軸方向は、座標北に対し約1°西に振れる。柱間は、東西が2.7m、南北が1.3m等間である。柱穴の平面形は、円形を呈し、検出面での規模は、径0.3～0.6m、深さ0.1～0.2mある。京都Ⅵ期に属する土器類が出土した。

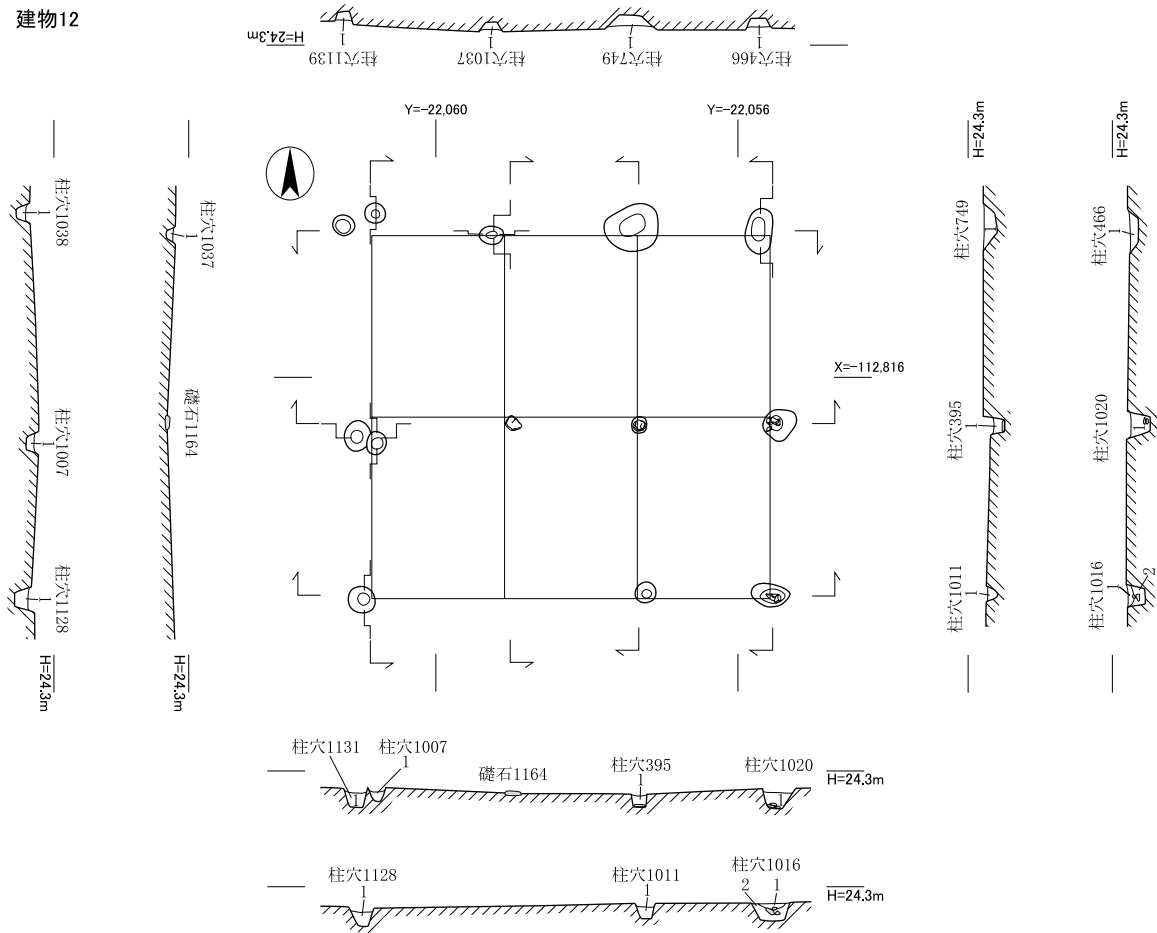
なお、建物13周辺には多数の柱穴が分布する。建物としてはまとまらないが、幾つかの柱穴は柱穴列として一定方向に並ぶと考えられるものもあり、柵などの可能性がある。

**建物14**(図15、図版21) 調査区の西部、北三門北西側で検出した5間×2間の東西棟総柱掘立柱建物である。西柱筋は室町小路東築地心想事成線から宅地側に約1.8m、北柱筋は北二・三門界想定線から南へ約1.2mに位置する。柱間は、東西が西から1.2m・2.4m・1.5m・1.5m・1.5m、南北が1.8m等間である。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.3～0.6m、深さ0.1～0.4mある。柱穴914底部には根石を据える。京都Ⅵ期に属する土器類が出土した。

**建物15**(図15、図版21) 調査区の西部、北二・三門界想定線をまたぐ位置で検出した2間×1間のほぼ方形の掘立柱建物である。北西隅柱の位置は、室町小路東築地心想事成線から宅地側に約6.9m、北二・三門界想定線から北へ約1.0mに位置する。主軸方向は、座標北に対し約3.4°東に振れる。柱間は、東西が3.5m、南北が1.8m等間である。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.2～0.5m、深さ0.1～0.4mある。京都Ⅵ期に属する土器類が出土した。

**建物16**(図16、図版21) 調査区の西部、北二・三門界想定線をまたぐ位置で検出した3間×2間の東西棟掘立柱建物である。北西隅柱の位置は、室町小路東築地心想事成線から宅地側に約2.4m、北二・三門界想定線から北へ約2.7mに位置する。主軸方向は、座標東に対し約3.5°南に振れる。柱間は、東西が西から1.1m・2.1m・2.9m、南北が北から2.0m・1.7mである。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mある。柱穴995・

建物12

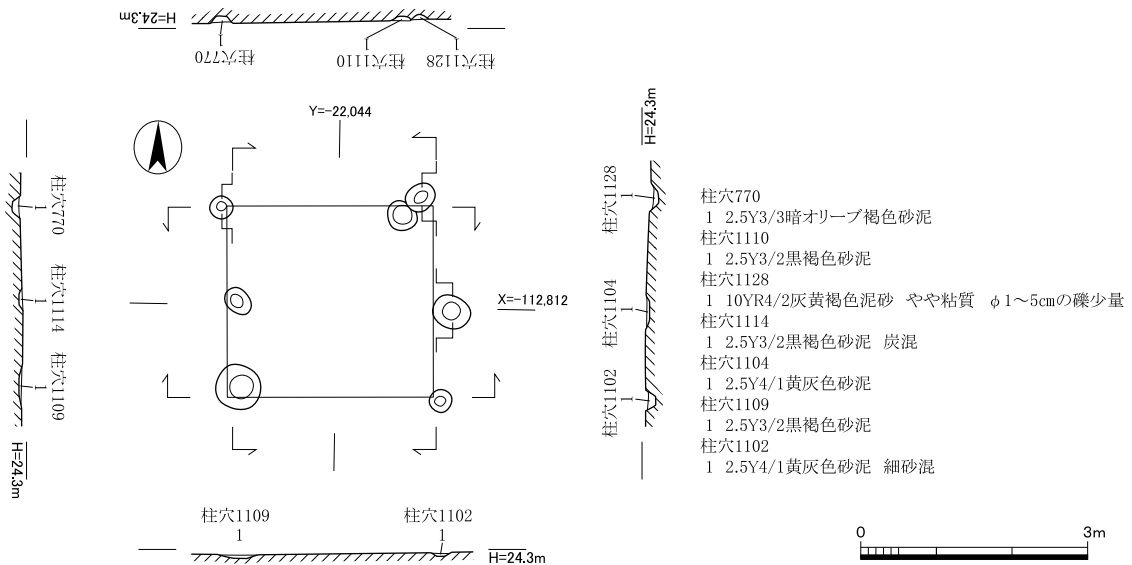


- 柱穴1139  
1 5Y3/1オリブ黒色粘質土 炭少量
- 柱穴1038  
1 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 柱穴1037  
1 2.5Y3/2黒褐色粘質土
- 柱穴749  
1 2.5Y3/3暗オリブ褐色砂泥  
φ30cmの礫少量

- 柱穴466  
1 7.5Y3/1オリブ黒色粘質土
- 柱穴1131  
1 2.5Y4/3オリブ褐色粗砂  
φ1~2cmの礫中量
- 柱穴1007  
1 10YR3/2黒褐色粘質土  
φ1~2cmの礫少量
- 柱穴395  
1 5Y2/2オリブ黒色粘質土

- 柱穴1020  
1 10YR4/1褐灰色粘質土
- 柱穴1128  
1 10YR4/2灰黄褐色泥砂 やや粘質  
φ1~5cmの礫少量
- 柱穴1011  
1 2.5Y3/1黒褐色泥砂 やや粘質
- 柱穴1016  
1 5Y3/1オリブ黒色砂泥  
2 10YR2/2黒褐色砂泥 φ0.5~2cmの礫微量

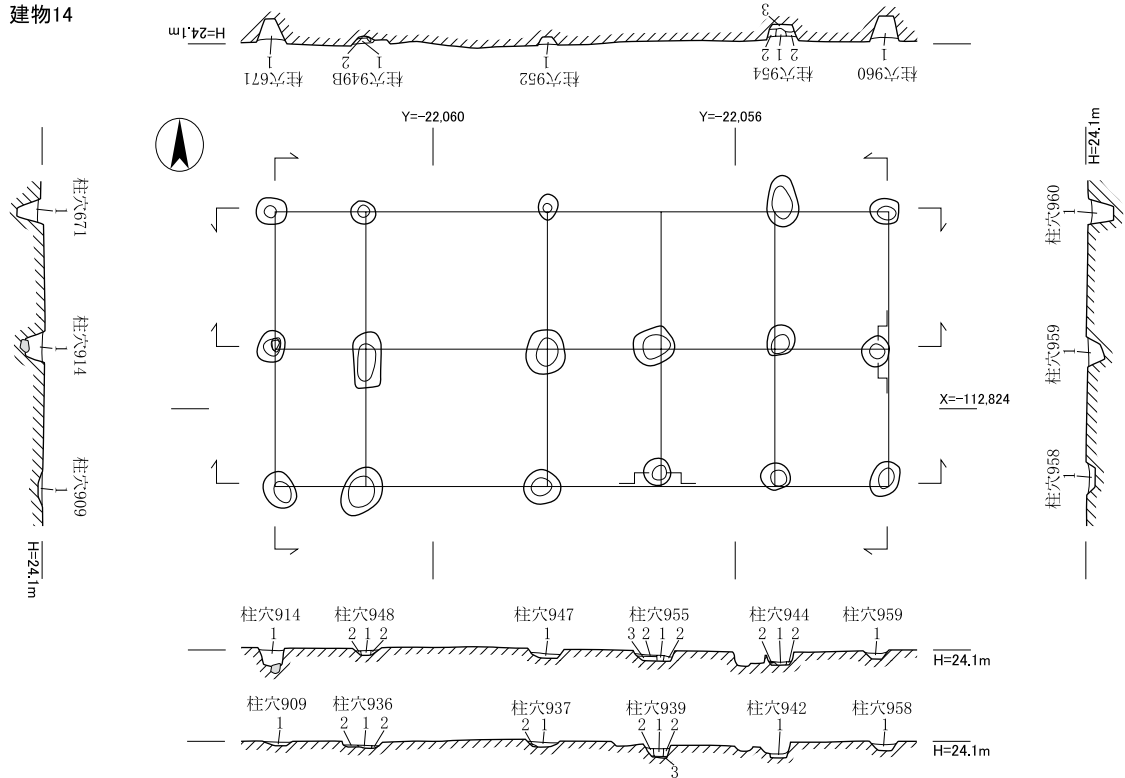
建物13



- 柱穴770  
1 2.5Y3/3暗オリブ褐色砂泥
- 柱穴1110  
1 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 柱穴1128  
1 10YR4/2灰黄褐色泥砂 やや粘質 φ1~5cmの礫少量
- 柱穴1114  
1 2.5Y3/2黒褐色砂泥 炭混
- 柱穴1104  
1 2.5Y4/1黄灰色砂泥
- 柱穴1109  
1 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 柱穴1102  
1 2.5Y4/1黄灰色砂泥 細砂混

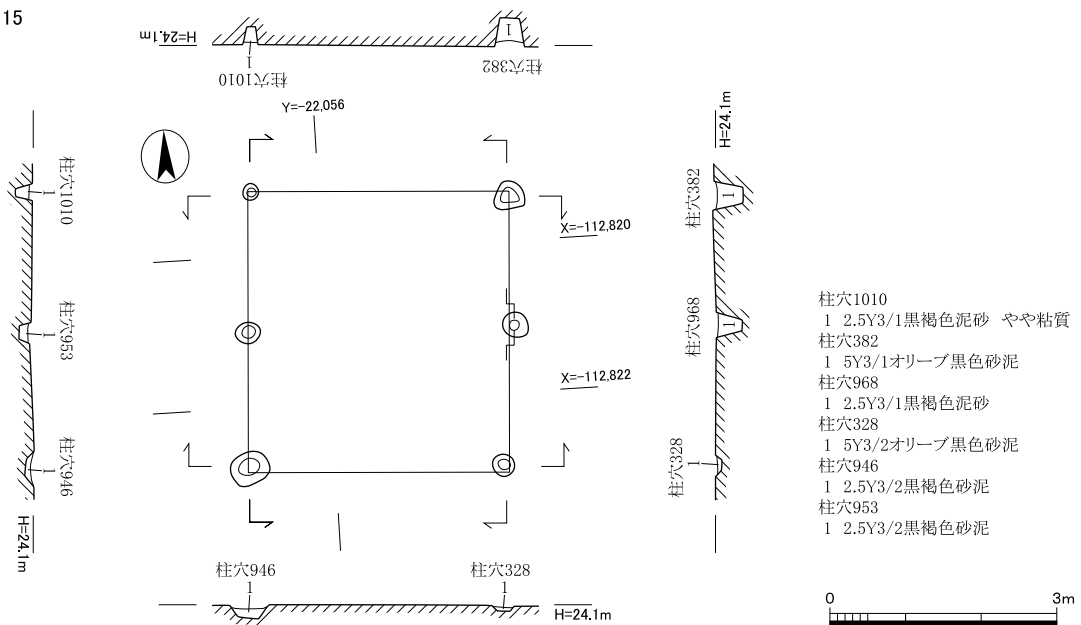
図14 1区 建物12・13実測図 (1:100)

建物14



- |   |  |   |
|---|--|---|
| <p>柱穴671</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥</li> </ul> <p>柱穴949B</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 2.5Y4/1黄灰色粘質土</li> <li>2 10YR4/1褐灰色泥砂</li> </ul> <p>柱穴952</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂</li> </ul> <p>柱穴954</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 2.5Y3/2黑褐色砂泥</li> <li>2 2.5Y3/2黑褐色砂泥 φ 0.5~10cmの礫多量</li> <li>3 2.5Y3/2黑褐色泥砂 φ 0.5~3cmの礫多量</li> </ul> <p>柱穴960</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 2.5Y4/1黄灰色粘質土</li> </ul> <p>柱穴914</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 10YR3/3暗褐色砂+2.5Y4/1黄灰色粘土 φ 0.5~5cmの礫微量</li> </ul> | <p>柱穴948</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 10YR4/1褐灰色砂泥</li> <li>2 10YR4/1褐灰色泥砂+10YR4/2灰黄褐色泥砂</li> </ul> <p>柱穴947</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 10YR4/2灰黄褐色粗砂</li> </ul> <p>柱穴955</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 10YR4/1褐灰色砂泥</li> <li>2 10YR4/2灰黄褐色砂泥</li> <li>3 10YR4/3こぶい黄褐色粗砂</li> <li>4 2.5Y3/2黑褐色砂泥</li> </ul> <p>柱穴944</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 10YR3/2黑褐色砂泥</li> </ul> <p>柱穴959</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 2.5Y3/1黑褐色泥砂</li> </ul> | <p>柱穴909</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 10YR2/3黑褐色粘質土 φ 0.5~5cmの礫多量</li> </ul> <p>柱穴936</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ 0.5~4cmの礫少量</li> <li>2 10YR4/4褐色粗砂 φ 0.5~2cmの礫少量</li> </ul> <p>柱穴937</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 2.5Y5/1黄灰色砂泥</li> <li>2 10YR4/4褐色粗砂</li> </ul> <p>柱穴939</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 10YR4/1褐灰色泥砂 粗砂混、φ 0.5~4cmの礫多量</li> <li>2 10YR4/4褐色粗砂 φ 0.5~3cmの礫多量</li> <li>3 5Y4/1灰色細砂~粗砂</li> </ul> <p>柱穴942</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 10YR4/4褐色粗砂</li> </ul> <p>柱穴958</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 10YR3/1黑褐色砂泥</li> </ul> |
|---|--|---|

建物15



- |   |
|---|
| <p>柱穴1010</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 2.5Y3/1黑褐色泥砂 やや粘質</li> </ul> <p>柱穴382</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 5Y3/1オリーブ黒色砂泥</li> </ul> <p>柱穴968</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 2.5Y3/1黑褐色泥砂</li> </ul> <p>柱穴328</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 5Y3/2オリーブ黒色砂泥</li> </ul> <p>柱穴946</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 2.5Y3/2黑褐色砂泥</li> </ul> <p>柱穴953</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 2.5Y3/2黑褐色砂泥</li> </ul> |
|---|

図15 1区 建物14・15実測図 (1 : 100)

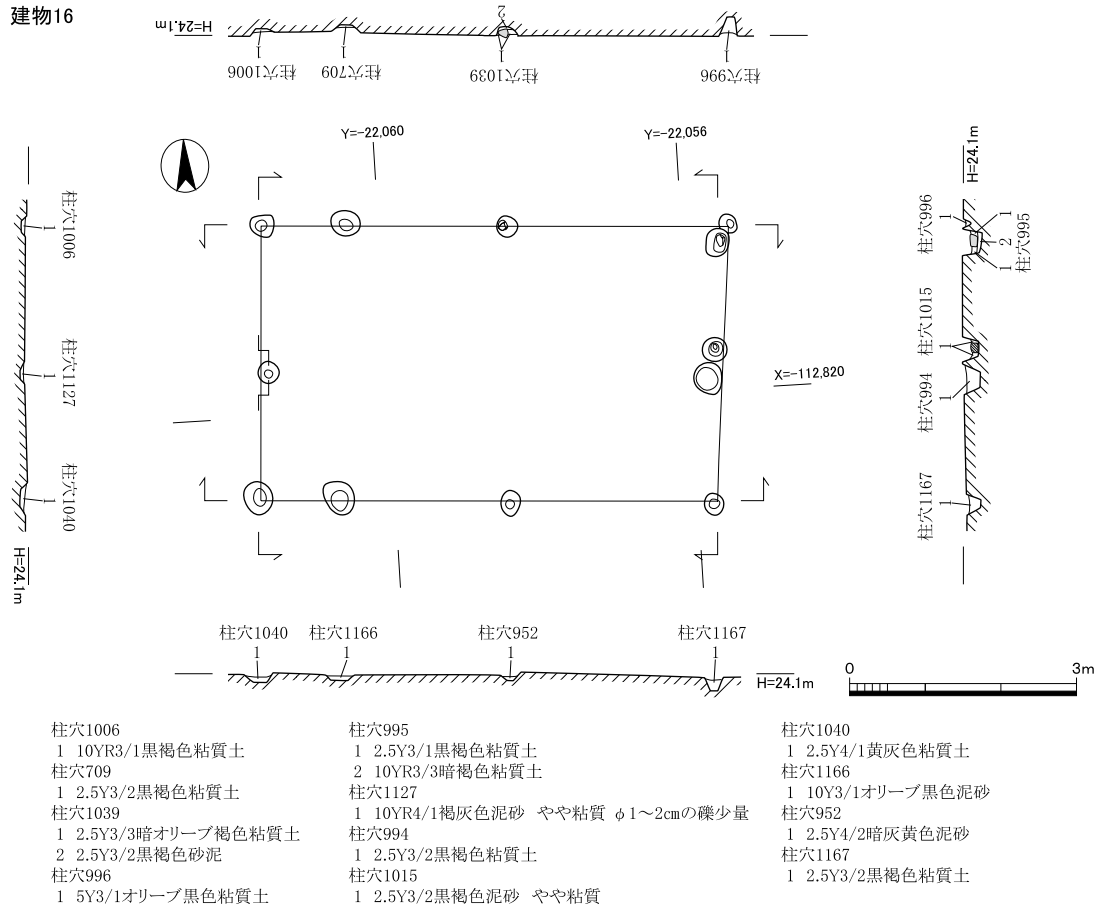


図16 1区 建物16実測図(1:100)

1015・1039底部には根石を据える。京都VI期に属する土器類が出土した。

建物17(図17、図版21) 調査区の南西部、北三門南西側で4間×3間分を検出した東西棟総柱掘立柱建物である。西側へさらに2間分広がり、6間×3間に復元できる可能性もある。6間×3間の復元案の場合、西柱筋は室町小路東築地心想定線から宅地側に約2.8m、南柱筋は北三・四門界想定線から北へ約1.2mに位置する。主軸方向は、座標北に対し約1°西に振れる。柱間は、東西が1.45m等間、南北が2.1m等間である。柱穴の平面形は、円形ないし歪な楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.2mある。柱穴858・915には根石を据える。京都VI期に属する土器類が出土した。

なお、建物17の南北柱筋は、建物14の南北柱筋と柱筋が通ることから、建物17と建物14は密接な配置関係があると想定できる。

建物18(図18、図版21) 建物17中央北側の柱穴に重複する南北棟総柱掘立柱建物で2間×2間に想定できるが、建物17の修築に伴う柱穴の可能性もある。主軸方向は、座標北に対し約1°西に振れる。柱間は、東西が1.5m等間、南北が北から2.0m・2.3mである。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.2mある。京都VI期に属する土器類が出土した。

建物19(図18) 調査区の南西部、北四門北西側で検出した3間×2間の南北棟総柱掘立柱建物

建物17

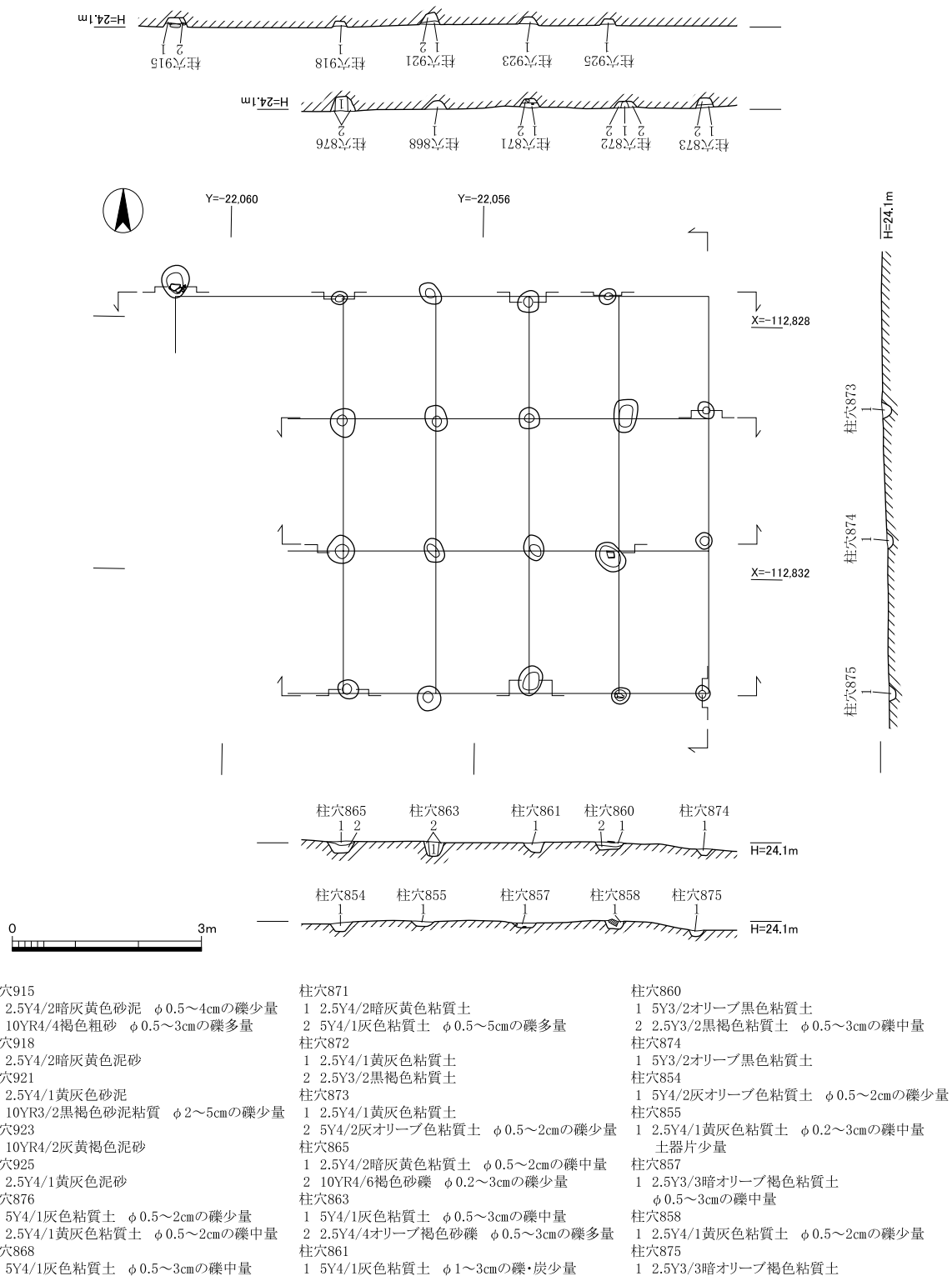
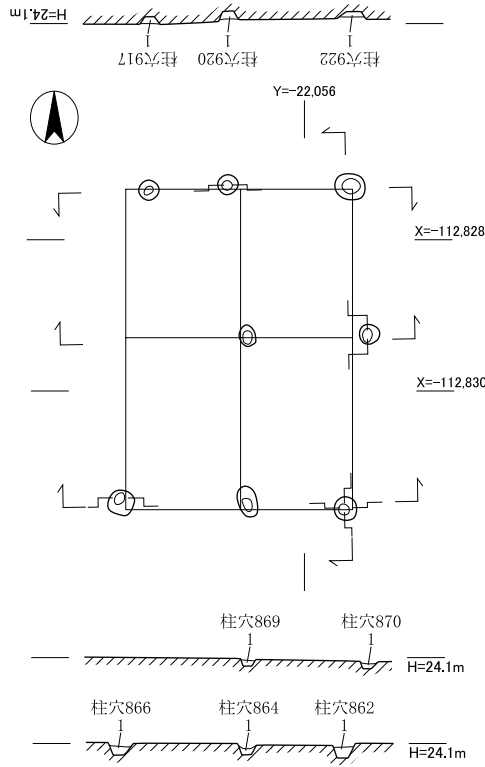


図17 1区 建物17実測図 (1:100)

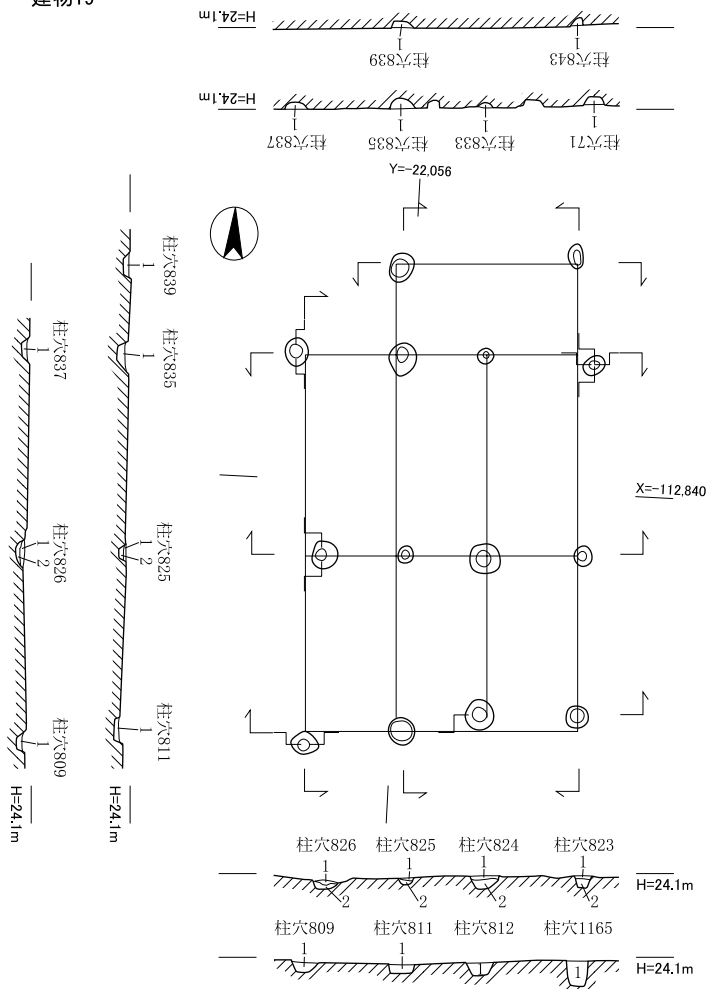
であるが、北側柱列の北東側2間分の柱間はさらに北側に1間張り出す。南西隅柱穴は室町小路東築地心想定線から宅地側に約6.6m、北柱筋は北三・四門界想定線から南へ約3.3mに位置する。主軸方向は、座標北に対し約3°西に振れる。柱間は、東西が1.2m等間、南北が北から2.7m・2.4m、張り出し部の柱間は1.2mである。柱穴の平面形は、円形ないし歪な楕円形を呈し、検出面で

建物18



- 柱穴917  
1 2.5Y3/1黒褐色粘質土
- 柱穴920  
1 2.5Y3/2黒褐色粘質土
- 柱穴922  
1 10YR4/1褐色泥砂
- 柱穴869  
1 2.5Y3/2黒褐色粘質土 砂混
- 柱穴870  
1 10YR4/1褐色粘質土 砂混
- 柱穴866  
1 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 柱穴864  
1 2.5Y3/2黒褐色粘質土 砂混
- 柱穴862  
1 2.5Y3/2黒褐色粘質土 砂混

建物19



- 柱穴839  
1 10YR4/1褐色粘質土 粗砂混  
+2.5Y3/1黒褐色砂泥
- 柱穴843  
1 2.5Y3/2黒褐色砂泥+10YR3/1黒褐色砂泥
- 柱穴837  
1 2.5Y3/1黒褐色砂泥 φ1~3cmの礫少量
- 柱穴835  
1 5Y4/1灰色砂泥 φ1~3cmの礫少量、炭微量
- 柱穴833  
1 2.5Y3/1黒褐色砂泥  
+10YR3/1黒褐色粘質土 砂混
- 柱穴71  
1 10YR3/2黒褐色砂泥
- 柱穴826  
1 2.5Y3/2黒褐色砂泥 やや粘質  
φ0.5~3cmの礫中量  
2 2.5Y4/4オリーブ褐色砂礫 粗砂混  
φ0.5~2cmの礫多量
- 柱穴825  
1 5Y3/2オリーブ黒色砂泥 やや粘質  
土器片少量  
2 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土  
φ0.2~3cmの礫多量
- 柱穴824  
1 5Y4/1灰色粘質土 土器片少量  
2 2.5Y4/1黄灰色黄灰色粘質土
- 柱穴823  
1 5Y4/1灰色粘質土 土器片少量  
2 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土  
φ0.5~2cmの礫少量
- 柱穴809  
1 10Y3/1黒褐色泥砂
- 柱穴811  
1 10YR3/1黒褐色砂泥
- 柱穴812  
1 10YR4/1褐色粘質土 粗砂混
- 柱穴1165  
1 2.5Y3/1黒褐色粘質土  
+10YR3/2黒褐色粘質土



図18 1区 建物18・19実測図 (1:100)

の規模は、径0.2～0.4m、深さ0.1～0.4mある。柱穴811からは京都VI期中段階に属する土器類が出土した。

**柱穴群** 調査区の全体に分布している。建物として復元できた柱穴以外にも多くの柱穴がある。調査区の西半部に多く集中しており、西半部に建物が建ち並ぶことがわかる。一方、東半には比較的少ないことがわかる。ここでは、掲載した主な遺物が出土した柱穴を記載する。柱穴287は京都VI期中段階に属する土器類が出土した。柱穴819は調査区の南端中央で検出した（図版24-2）。直径0.4m、深さ0.3mある。埋土は黒褐色粘質土である。礎板が出土した。

**井戸7**（図19、図版25） 調査区の南端東寄りで検出した。掘形は南北約2.2m、東西約2.5mの東西にやや長い円形を呈する。掘形上層の埋土は黒色や黒褐色の砂泥層で礫を多量に含む。下部では掘形の径が約1.0mと狭くなり、底部には径0.4mの曲物が据え付けられている。深さは約1.1mあり、底部の標高は22.95m。京都VI期中段階に属する土器類が出土した。

**井戸425**（図19） 調査区の北部中央で検出した。掘形は南北約2.0m、東西約2.1mの歪な円形を呈する。掘形上層の埋土は黒褐色泥砂層で炭を含む。下部では掘形の径が約1.6mと狭くなる。井筒は腐食が激しく遺存しないが、方形木枠組とみられる。木枠内には多量の礫が混入している。底部には曲物が据え付けられた痕跡はない。深さは約0.9mあり、底部の標高は23.30m。京都VI期古段階から中段階に属する土器類が出土した。

**井戸891**（図19、図版25） 調査区の中央南寄りで検出した小型の井戸である。掘形は南北約0.6m、東西約0.8mの東西にやや長い円形を呈する。掘形上層の埋土は、灰色粘質土で礫が少量混じる。底部には径0.38m、高さ0.24mの曲物が据え付けられる。曲物は縦方向に3層の構造で、多量の礫が混入している。深さは約0.4mあり、底部の標高は23.45m。

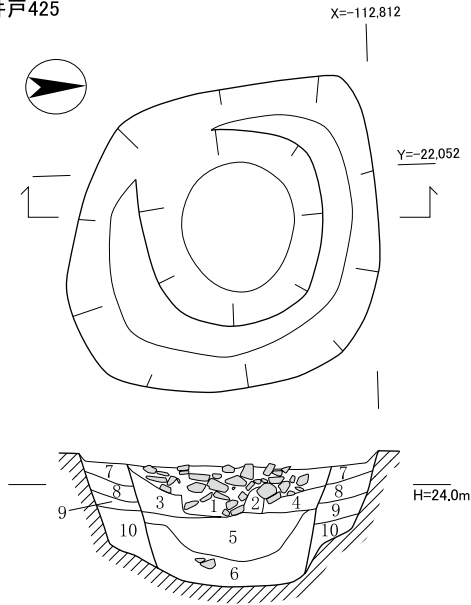
**井戸1062**（図19） 調査区の北部東寄りで検出した。掘形は長径約1.2m、短径約0.9mの楕円形を呈する。上層の埋土は暗灰黄色砂泥や灰色粘質土である。上部では壊されているが底部径0.38m、高さ0.14mの曲物が据え付けられる。深さは約0.35mあり、底部の標高は23.90m。

**井戸462**（図20、図版25） 調査区の中央北寄りで検出した。掘形は南北約0.7m、東西約0.8mの東西にやや長い円形を呈する。掘形上層の埋土は褐灰色粘質土で礫を多量含む。下部では掘形の径が約0.5mと狭くなる。底部には径0.38m、高さ0.40mの曲物が据え付けられる。曲物内には多量の礫が混入している。深さは約0.45mあり、底部の標高は23.70m。

**井戸577**（図20） 調査区の北端西寄りで検出した。掘形は南北約1.3m、東西約1.1mの南北にやや長い円形を呈する。掘形上層の埋土は黒褐色細砂で礫を多量含む。下部では掘形の径が約0.8mと狭くなる。井筒は一辺約0.7mの方形木枠組である。木枠内には多量の礫が混入している。底部には径0.45m、高さ0.26mの曲物が据え付けられている。深さは約0.75mあり、底部の標高は23.60m。

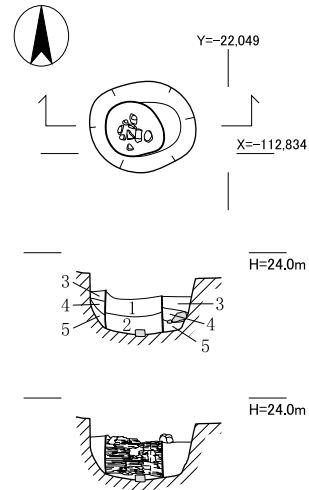
**井戸787**（図20） 調査区の中央東寄りで検出した。掘形は南北約1.3m、東西約1.5mの歪な円形を呈する。掘形の埋土は暗灰黄色粗砂で礫を中量含む。下部では掘形の径が約0.8mと狭くなる。井筒は方形木枠組とみられるが遺存状態が悪いため規模は不明である。底部には径0.40m、高さ

井戸425



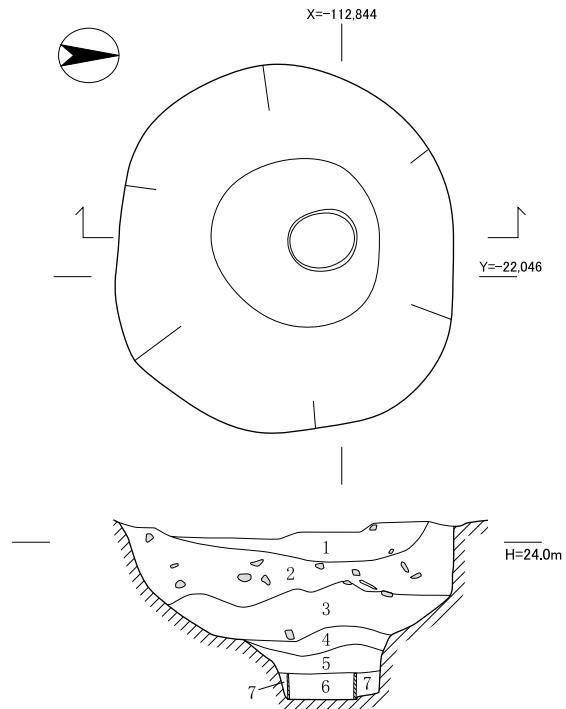
- 1 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 φ10~20cmの礫多量
- 2 5Y4/1灰色粘質土 微砂少量、木質少量
- 3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色
- 5 2.5Y4/1黄灰色粘質土 炭混
- 6 5Y4/1灰色泥砂+2.5Y6/8明黄褐色砂 φ1~3cmの礫中量
- 7 2.5Y3/1黒褐色泥砂 炭混
- 8 2.5Y4/1黄灰色泥砂+10YR5/6黄褐色砂 φ1~2cmの礫少量
- 9 2.5Y4/1黄灰色泥砂 細砂混
- 10 2.5Y5/4黄褐色砂

井戸891

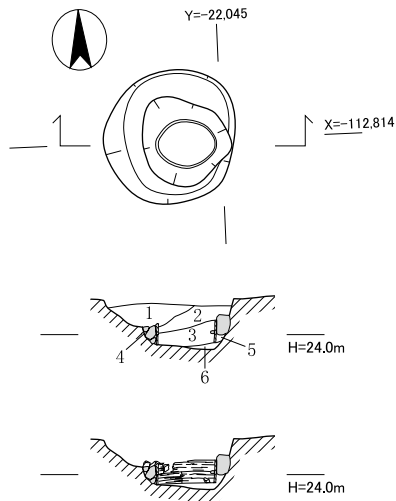


- 1 2.5Y3/1黒褐色粘質土 粗砂混
- 2 2.5Y4/1黄灰色粘質土 粗砂混
- 3 5Y4/1灰色粘質土 φ0.5~7cmの礫少量
- 4 2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫+5Y4/1灰色粘質土 φ0.2~2cmの礫多量
- 5 2.5Y4/6オリーブ褐色粗砂 φ0.2~1cmの礫中量

井戸7



井戸1062



- 1 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 やや粘質
- 2 5Y4/1灰色粘質土 土器片少量
- 3 7.5Y4/1灰色粘質土 粗砂混
- 4 10YR5/2灰黄褐色粘質土 φ0.5~10cmの礫多量
- 5 10YR5/2灰黄褐色粗砂 やや粘質 φ0.5~10cmの礫少量
- 6 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂 φ0.5~1cmの礫少量

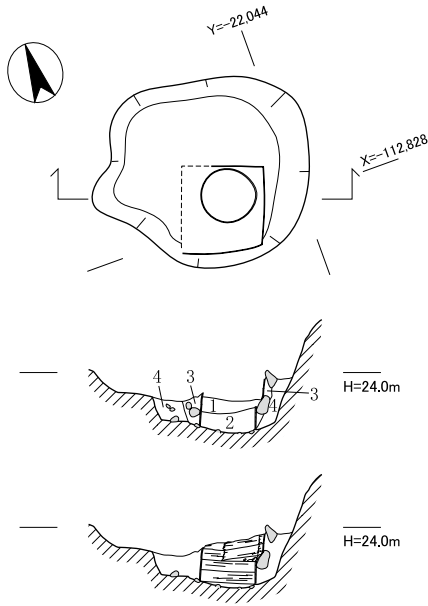


- 1 2.5Y4/1黄灰色砂+2.5Y3/1黒褐色砂泥 φ1~5cmの礫多量
- 2 7.5Y2/1黒色砂泥 φ1~5cmの礫多量
- 3 10YR4/6褐色砂+2.5Y3/1黒褐色砂泥 木片少量
- 4 2.5Y3/1黒褐色砂泥
- 5 10YR5/8黄褐色砂 φ1~5cmの礫多量
- 6 10YR4/1褐色砂
- 7 10YR5/6黄褐色砂

図19 1区 井戸7・425・891・1062実測図(1:50)

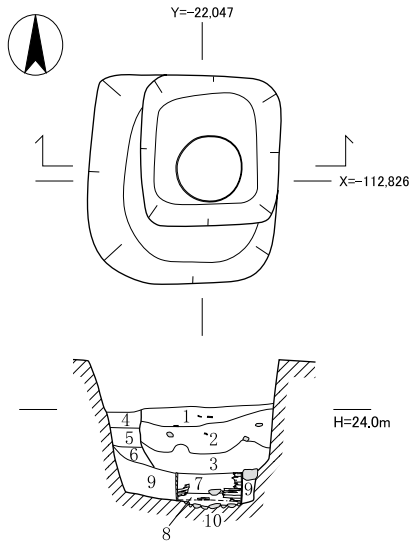


井戸787



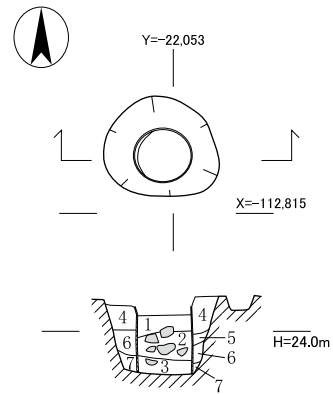
- 1 10YR4/1褐灰色細砂+2.5Y5/2灰黄褐色粗砂
- 2 10YR4/3こぶい黄褐色粗砂+2.5Y3/2黒褐色粘質土
- 3 10YR4/1褐灰色粘質土 粗砂混
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂 φ~10cmの礫中量

井戸911



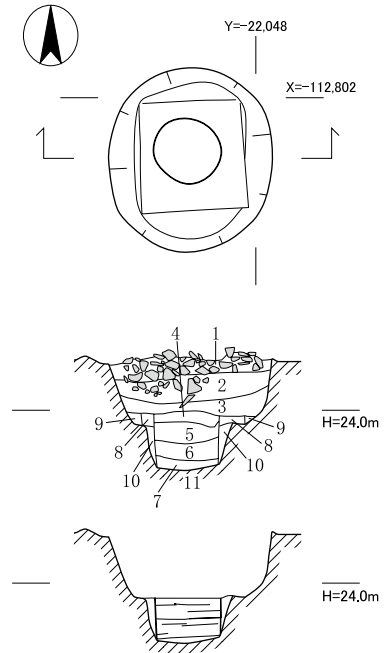
- 1 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂泥 φ0.5~1cmの礫・土器片・木片少量
- 2 2.5GY3/1暗オリーブ灰色砂泥粘質 φ0.5~5cmの礫・土器片・炭少量
- 3 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥粘質
- 4 7.5Y3/1オリーブ黒色砂泥 木片少量
- 5 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土
- 6 10GY4/1暗緑灰色粘質土 φ0.5~2cmの礫多量、固く締まる
- 7 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粗砂 φ0.5~5cmの礫中量
- 8 10YR4/6褐色砂礫 φ2~5cmの礫多量
- 9 10YR5/8黄褐色砂礫 φ2~5cmの礫多量
- 10 2.5T5/2暗灰黄色砂質土礫 φ0.2~5cmの礫多量 [地山]

井戸462



- 1 10YR3/1黒褐色シルト 粗砂混、φ~5cmの礫多量
- 2 10YR3/2黒褐色シルト 粗砂少量混
- 3 10YR2/2黒褐色シルト
- 4 10YR4/1褐灰色粘質土 粗砂混、φ~2cmの礫多量、炭少量
- 5 10YR4/2灰黄褐色粗砂 シルト混
- 6 2.5Y3/2黒褐色粘質土 粗砂混、φ~2cmの礫多量
- 7 10YR5/6黄褐色粗砂 φ~6cmの礫多量

井戸577

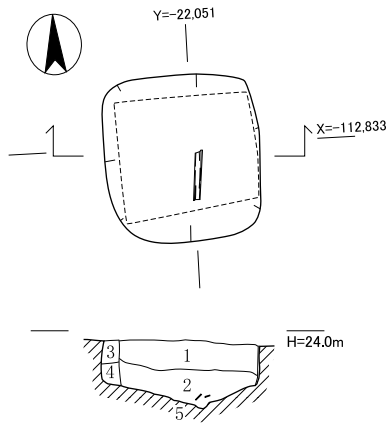


- 1 10YR3/1黒褐色細砂 粗砂混、φ4~25cmの礫多量
- 2 2.5Y3/1黒褐色泥砂
- 3 2.5Y3/1黒褐色泥砂 粘質
- 4 25Y4/1灰黄色砂泥 φ1~2cmの礫少量
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂
- 6 2.5Y3/2黒褐色細砂
- 7 5Y3/1オリーブ黒色シルト
- 8 10YR3/1黒褐色砂泥
- 9 2.5Y3/1黒褐色シルト
- 10 10YR4/3こぶい黄褐色粗砂 φ1~5cmの礫多量
- 11 7.5YR4/4褐色粗砂 φ2~5cmの礫多量



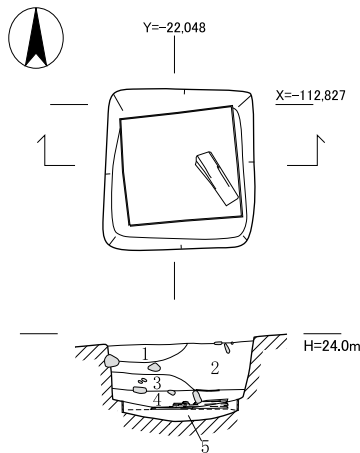
図20 1区 井戸462・577・787・911実測図 (1:50)

井戸908



- 1 5GY4/0暗オリーブ灰色粘質土
- 2 7.5GY4/1暗緑灰色粘質土
- 3 5Y2/2オリーブ黒色粘質土 粗砂混
- 4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 粗砂混
- 5 10YR4/6褐色砂礫 粗砂混、φ1~15cmの礫中量

井戸910



- 1 10G3/1暗緑灰色粘質土 φ1~10cmの礫中量
- 2 2.5GY3/1暗オリーブ灰色砂泥粘質 φ1~10cmの礫中量、炭少量
- 3 2.5GY3/1暗オリーブ灰色砂泥 φ1~10cmの礫少量
- 4 5GY3/1暗オリーブ灰色粘質土 φ1~10cmの礫少量
- 5 10YR4/6褐色粗砂 φ0.2~5cmの礫中量



図21 1区 井戸908・910実測図 (1:50)

0.34 mの曲物が据え付けられている。深さは約0.8 mあり、底部の標高は23.60 m。

井戸911 (図20) 調査区の中央で検出した。掘形は南北約1.4 m、東西約1.3 mの隅丸方形を呈する。上層の埋土はオリーブ黒色砂泥で木片が少量混じる。上部では遺存状態が悪いが、一辺0.8 mの方形木枠の痕跡がみられる。底部には径0.42 m、高さ0.20 mの曲物が据え付けられる。深さは約0.8 mあり、底部の標高は23.40 m。

井戸908 (図21) 調査区の中央南寄りで検出した。掘形は南北・東西約1.1 mの隅丸方形を呈する。掘形上層の埋土はオリーブ黒色粘質土で粗砂が混じる。内部には一辺0.38 m、高さ0.24 mの方形木枠の痕跡が遺存する。深さは約0.45 mあり、底部の標高は23.50 m。他の井戸とは内部の構造が異なるが、底部が湧水層に達しているため、ここでは井戸としておく。

井戸910 (図21、図版25) 調査区の中央で検出した。掘形は南北約1.0 m、東西約1.1 mの隅丸方形を呈する。上層の埋土はオリーブ黒色粘質土で礫が混じる。上部では壊されているが、底部には一辺0.75 mの方形木枠が遺存する。深さは約0.6 mあり、底部の標高は23.40 m。他の井戸とは内部の構造が異なるが、底部が湧水層に達しているため、ここでは井戸としておく。

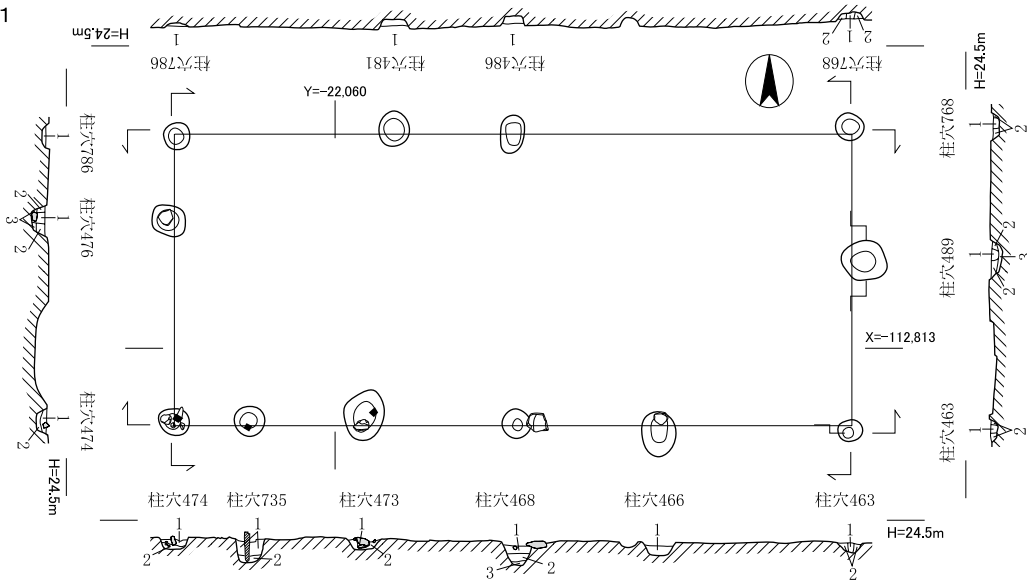
土坑821 調査区南端東寄りで検出した。掘形は直径0.8 mの歪な円形で、深さ0.3 mある。埋土はオリーブ黒色泥砂である。漆器椀が出土した。

土坑892 調査区の南部中央で検出した。南北約0.7 m、東西約0.9 mの楕円形を呈する。深さ約0.3 mある。埋土は暗緑灰色粘質土である。京都VI期中段階に属する土器類が出土した。

(4) 第1 - 2面の検出遺構 (図版4・22)

整地層1 調査区の中央部分から西側の整地層2の上位で検出した。厚さは0.1~0.3 mある。灰色砂泥から細砂を主体とする整地層である。第2面とした平安時代後期の整地層2の上にさらに行われた整地であり、この上面で掘立柱建物9棟、柵7条、建物の東側には木枠組み井戸5基が配され、土坑など多くの遺構が成立する。しかし、室町小路東築地に関連する南北方向の溝などの遺

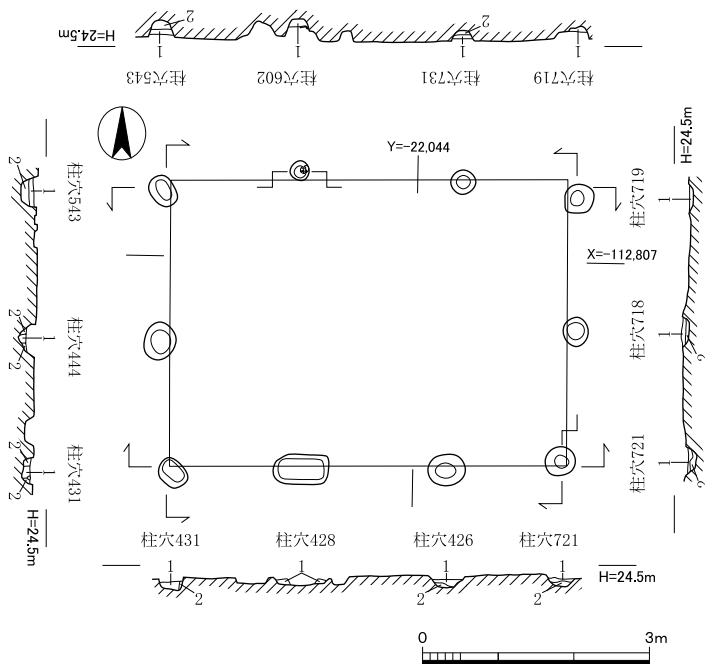
建物 1



- 柱穴786  
1 2.5YR4/2暗灰黄色砂混 土器片・炭微量
- 柱穴481  
1 10YR4/2黒褐色粘質土 砂混 φ1~3cmの礫少量、炭微量
- 柱穴486  
1 10YR4/2黒褐色粘質土 φ1~2cmの礫・土器片微量
- 柱穴768  
1 5YR3/2オリーブ黒色泥砂 やや粘質 φ0.5~1cmの礫少量  
2 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 粗砂混 φ1~2cmの礫・土器片少量
- 柱穴476  
1 2.5Y3/1黒褐色シルト 炭少量  
2 2.5Y3/2黒褐色シルト~細砂  
3 2.5Y3/2黒褐色シルト
- 柱穴489  
1 5Y4/1灰色粘質土 φ1~2cmの礫中量  
2 7.5Y4/1灰色粘質土 粗砂混 土器片少量

- 柱穴474  
1 2.5YR3/1黒褐色粘質土 土器片微量、炭多量  
2 10YR3/1黒褐色粘質土 土器片少量
- 柱穴735  
1 5Y3/1オリーブ黒色粘質土  
2 5Y3/2オリーブ黒褐色粘質土 粗砂混 φ0.2~1cmの礫中量
- 柱穴473  
1 10YR3/1黒褐色粘質土  
2 10YR3/1黒褐色粘質土 粗砂混
- 柱穴468  
1 10YR4/1褐灰色粘質土 粗砂混  
2 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 φ0.5~5cmの礫少量  
3 2.5Y3/2黒褐色粘質土
- 柱穴466  
1 10YR4/1褐灰色粘質土 粗砂混
- 柱穴463  
1 2.5Y3/2黒褐色粘質土  
2 2.5Y4/1黄灰色粘質土 粗砂混 φ1~3cmの礫多量

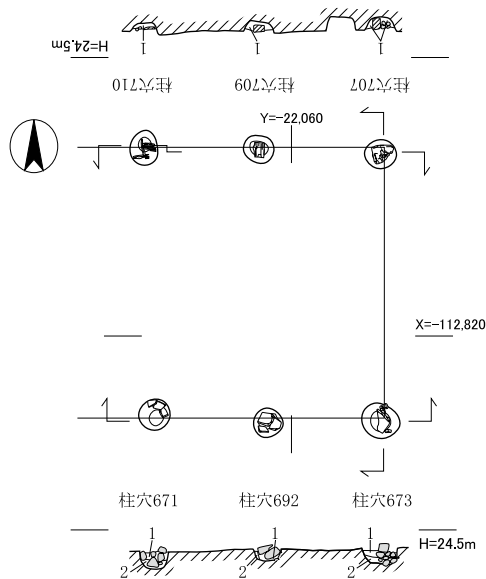
建物 2



- 柱穴543  
1 10YR4/2灰黄褐色泥砂 炭化物微量  
2 10YR7/6明黄褐色砂礫 φ1~3cmの礫多量
- 柱穴602  
1 5Y3/2オリーブ黒色粘質土
- 柱穴731  
1 10YR4/1褐灰色泥砂 土器片・炭化物少量  
2 10YR4/2灰黄褐色シルト+10YR4/3こぶい黄橙色細砂
- 柱穴719  
1 10YR4/1褐灰色シルト+10YR6/4こぶい黄橙色細砂
- 柱穴444  
1 10YR4/2灰黄褐色泥砂 φ1~3cmの礫少量  
炭化物微量  
2 10YR4/1褐灰色粘質土+10YR5/8黄褐色細砂 φ1~4cmの礫混
- 柱穴718  
1 10YR3/1黒褐色泥砂 φ2~3cmの礫微量  
2 10YR4/2灰黄褐色泥砂
- 柱穴431  
1 10YR4/1黄褐色泥砂 土器片・炭微量  
2 10YR5/2灰黄褐色砂泥+10YR4/1褐灰色泥砂
- 柱穴428  
1 10YR4/1褐灰色粘質土+7.5YR3/4暗褐色細砂 φ1~3cmの礫少量
- 柱穴426  
1 10YR3/2黒褐色泥砂+7.5YR4/2褐色細砂 φ1~3cmの礫・土器片・炭微量  
2 10YR4/1褐灰色泥砂
- 柱穴721  
1 10YR5/6黄褐色細砂  
2 10YR5/2灰黄褐色細砂

図22 1区 建物1・2実測図 (1:100)

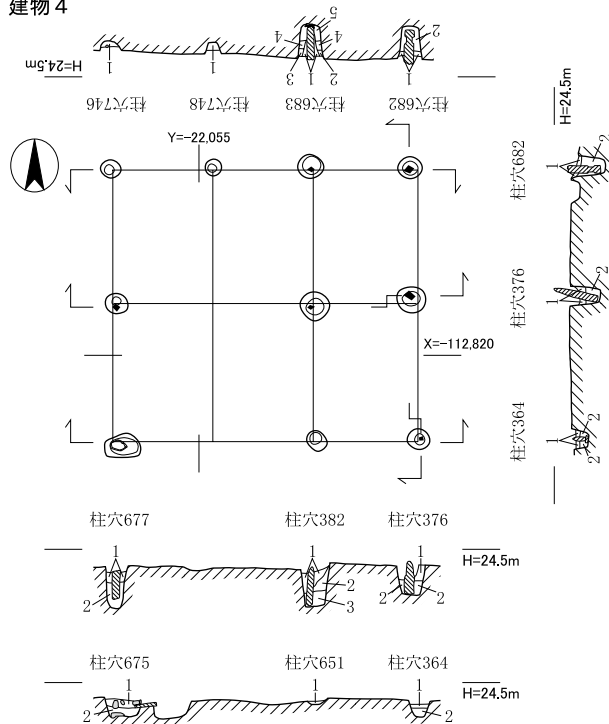
建物3



- 柱穴710  
1 2.5Y3/1黒褐色粘質土 φ1~5cmの礫少量
- 柱穴709  
1 2.5Y3/1黒褐色粘質土
- 柱穴707  
1 2.5Y3/2黒褐色粘質土 φ1~5cm礫中量
- 柱穴671  
1 2.5Y4/1黄褐色砂泥 φ1~25cmの礫多量  
2 2.5Y3/1黒褐色砂泥 φ1~25cmの礫中量、土器片少量
- 柱穴692  
1 2.5Y3/1黒褐色砂泥 φ1~25cmの礫多量、土器片少量  
2 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
- 柱穴673  
1 2.5Y3/1黒褐色粘質土 φ1~10cmの礫多量、土器片中量  
2 2.5Y3/2黒褐色砂泥 φ1~10cmの礫多量、土器片中量



建物4



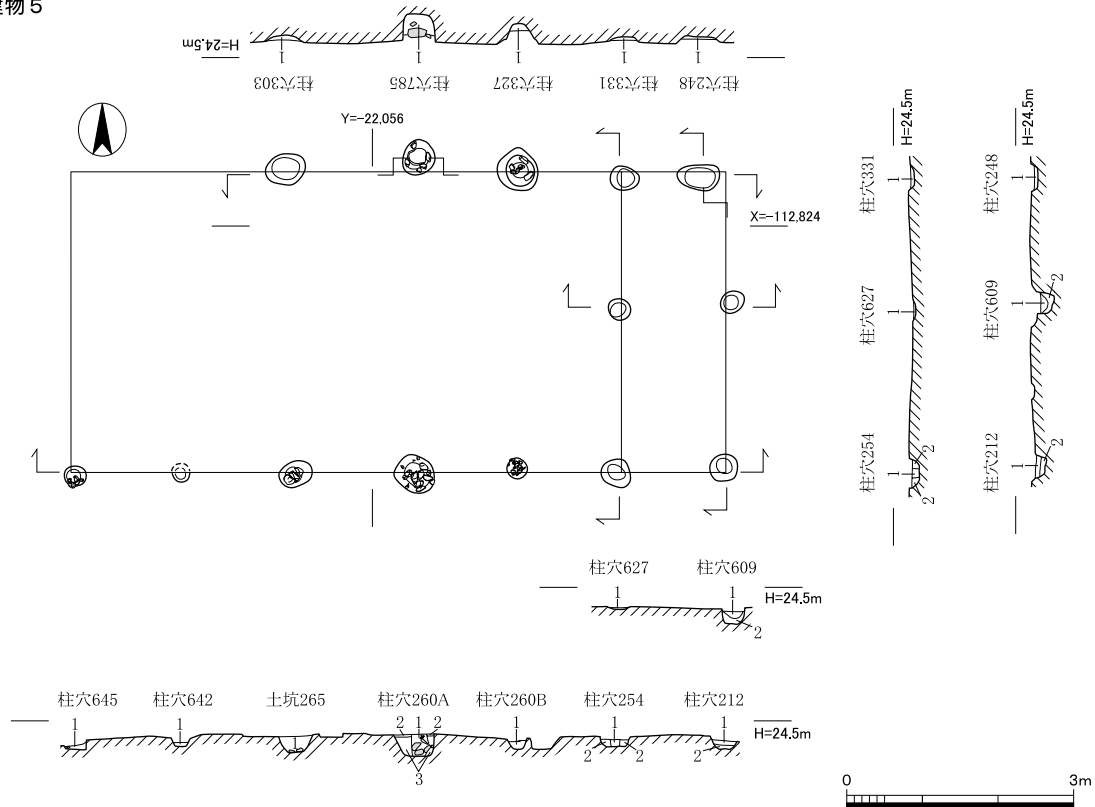
- 柱穴746  
1 2.5Y3/2黒褐色砂泥 粘質 φ1~3cm礫少量
- 柱穴748  
1 2.5Y3/2黒褐色粘質土
- 柱穴683  
1 2.5Y3/1黒褐色砂泥  
2 2.5Y4/1黄灰色シルト  
3 2.5Y3/1黒褐色砂泥 φ0.5~1cmの礫、土器片少量  
4 2.5Y3/1黒褐色粘質土  
5 2.5Y3/2黒褐色砂泥 φ1~2cmの礫少量
- 柱穴682  
1 2.5Y4/1黄灰色砂泥 土器片少量  
2 2.5Y3/1黒褐色粘質土 φ1~2cmの礫少量
- 柱穴677  
1 2.5Y4/1黄灰色シルト粘質  
2 2.5Y3/2黒褐色粘質土
- 柱穴382  
1 2.5Y3/1黒褐色砂泥 土器片少量  
2 2.5Y3/2黒褐色粘質土 木片少量  
3 2.5Y4/1黄灰色砂泥 粘質
- 柱穴376  
1 2.5Y3/2黒褐色粘質土  
2 5Y3/3暗オリブ砂泥 粘質
- 柱穴675  
1 2.5Y3/1黒褐色砂泥 φ1~10cmの礫中量、土器片・木片少量  
2 2.5Y2/1黒色粘質土 φ1~25cmの礫多量、木片少量
- 柱穴651  
1 5Y3/2オリブ黒色砂泥
- 柱穴364  
1 2.5Y3/1黒褐色砂泥  
2 2.5Y3/2黒褐色粘質土

図23 1区 建物3・4実測図(1:100)

構は検出していない。京都VI期新段階からVII期古段階に属する土器類が出土した。

建物1(図22) 調査区の北西部、北一門中央北寄りで検出した東西棟掘立柱建物である。建物1の北側には溝430が東西方向に延長する。西柱筋は、室町小路東築地心想定線から宅地側へ約1.8m、北柱筋は、北一・二門界から南へ約5.0mに位置する。柱間は不揃いで、全体規模は、東西約9.0m、南北約3.8mある。柱穴の平面形は、円形ないし歪な楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.3~0.6m、深さ0.1~0.3mある。柱穴473・476底部には根石を据える。南側柱の柱穴735に柱根(図64-木99)が遺存していた。柱穴468・474・476からは、京都VI期新段階からVII期古段階に属する土器類が出土した。

建物 5



- |  |   |   |
|--|---|---|
| <p>柱穴303<br/>1 5Y3/1オリーブ黒色砂泥 やや粘質</p> <p>柱穴785<br/>1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥</p> <p>柱穴327<br/>1 5Y3/2オリーブ黒色砂泥 やや粘質</p> <p>柱穴331<br/>1 5Y3/2オリーブ黒色砂泥</p> <p>柱穴248<br/>1 10YR4/2灰黄褐色砂泥</p> <p>柱穴627<br/>1 5Y4/2灰オリーブ色砂泥 やや粘質<br/>φ1~5cmの礫少量</p> | <p>柱穴609<br/>1 2.5Y4/1黄灰色砂泥<br/>2 10YR3/1黒褐色粘質土</p> <p>柱穴645<br/>1 2.5Y3/1黒褐色泥砂 φ1~5cm礫中量</p> <p>柱穴642<br/>1 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 φ2~5cm礫少量</p> <p>柱穴265<br/>1 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥</p> | <p>柱穴260A<br/>1 2.5Y3/2黒褐色砂泥 φ5~15cmの礫多量<br/>土器片・炭少量</p> <p>柱穴260B<br/>1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 炭少量<br/>2 2.5Y4/1黄褐色砂泥 炭少量</p> <p>柱穴254<br/>1 2.5Y3/2黒褐色泥砂 土器片少量</p> <p>柱穴212<br/>1 2.5Y4/1黄褐色砂泥<br/>2 2.5Y4/1黄褐色砂泥+2.5Y4/2暗灰黄色砂泥</p> |
|--|---|---|

図24 1区 建物5実測図 (1:100)

この他、建物1に近接して複数の柱穴が分布するが、建物としてはまとまらない。

**建物2** (図22) 北二門の北端、建物1の東約5.8mに位置する3間×2間の東西棟掘立柱建物に復元した建物である。南柱筋は溝430南肩口に沿う。柱穴の中には根石を据えるものがある。柱筋は座標東に対し北へ約1°振れる。柱間は、東西が西から1.8m・2.1m・1.5m、南北が1.8m等間である。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.3~0.7m、深さ0.1~0.3mある。柱穴431・602からは、京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する土器類が出土した。

**建物3** (図23) 調査区の西側、北二・三門界にまたがる位置で検出した掘立柱建物で、1間×2間以上の東西棟掘立柱建物とみられる。西は調査区外に延長すると考えている。北柱筋は北二・三門界から北へ約2.6mに位置する。北柱筋は溝380・390と、南柱筋は溝245・333と重複し、柱穴は各溝の底面で検出した。また、南柱筋にはほぼ接する位置で柵3が東西方向に延長する。柱穴の中には根石を据えるものもある。柱間は、東西が1.6m等間、南北が3.6mである。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.4~0.5m、深さ0.2~0.3mある。柱穴671・673

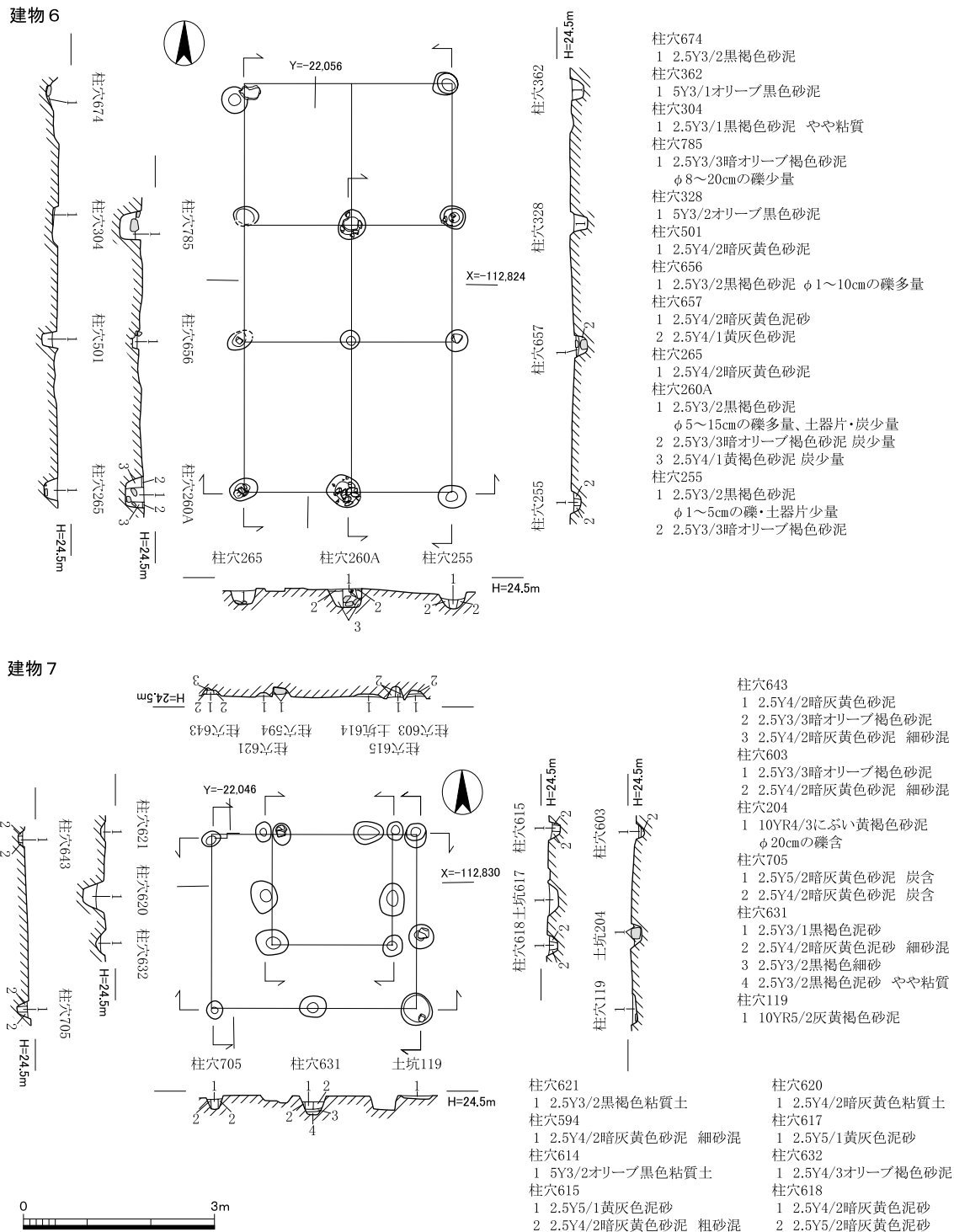
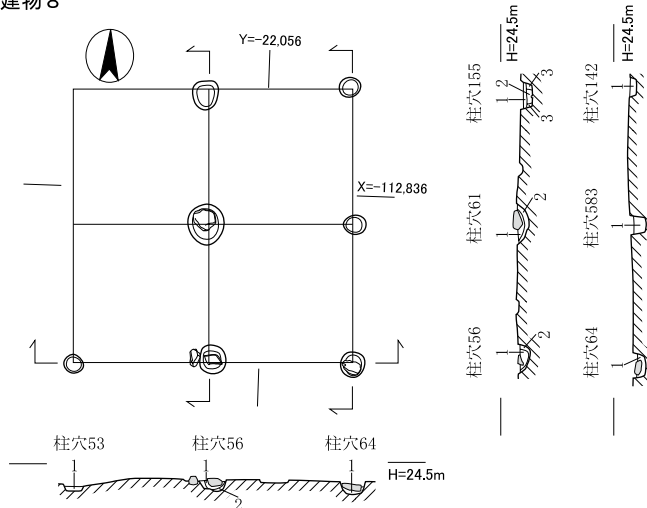


図25 1区 建物6・7実測図(1:100)

からは、京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する土器類が出土した。

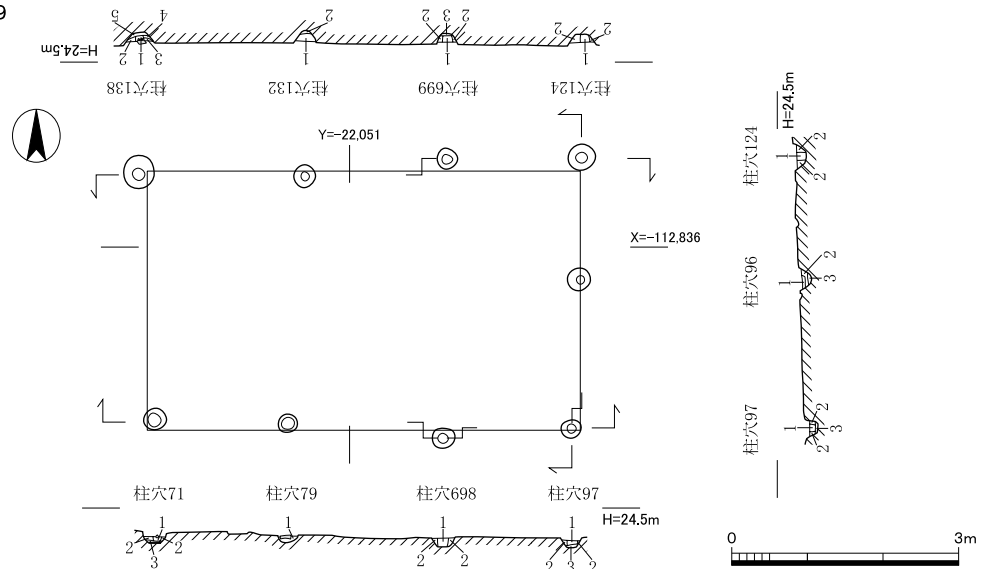
建物4(図23) 建物3の東で検出した3間×2間の東西棟総柱掘立柱建物で、建物3・4間は約2.7mある。建物3と東西方向の柱筋が一致することから、建物3・4は、同時期併存建物と想定できる。柱穴の中には柱根(図64-木96~98)が残るものが6基ある。柱間は、東西が1.35m等間、南北が1.75m等間である。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.2~0.5m、深さ0.2~0.6mある。

建物 8



- 柱穴155  
 1 10YR3/3暗褐色砂泥 土器片少量  
 2 10YR3/2黒褐色砂泥 やや粘質 土器片含  
 3 10YR4/1褐色砂泥 やや粘質 φ3cmの礫少量
- 柱穴142  
 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 柱穴61  
 1 5Y3/2オリーブ黒色砂泥 やや粘質  
 2 2.5Y3/2黒褐色砂泥 やや粘質
- 柱穴583  
 1 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土
- 柱穴56  
 1 5Y3/2オリーブ黒色砂泥粘質  
 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 柱穴64  
 1 2.5Y3/1黒褐色粘質土

建物 9



- 柱穴138  
 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや粘質  
 φ1~3cmの礫少量  
 2 10YR4/4褐色砂泥 やや粘質 炭少量  
 3 10YR4/2灰黄褐色砂泥 炭少量  
 4 10YR4/1褐色砂泥 炭少量  
 5 7.5YR3/3暗褐色粘質土
- 柱穴132  
 1 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 やや粘質 土器片少量  
 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土
- 柱穴699  
 1 5Y3/2オリーブ黒色砂泥 やや粘質 φ3cmの礫少量  
 2 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 やや粘質 φ1cmの礫少量  
 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや粘質

- 柱穴124  
 1 2.5Y3/2黒褐色砂泥やや粘質 土器片少量  
 炭微量  
 2 5Y3/2オリーブ黒色砂泥やや粘質 炭少量
- 柱穴96  
 1 5Y2/2オリーブ黒色砂泥 やや粘質  
 φ3cmの礫少量  
 2 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 やや粘質 炭少量  
 3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土
- 柱穴71  
 1 5Y2/2オリーブ黒色砂泥 やや粘質  
 2 5Y4/1灰色砂泥 やや粘質  
 3 2.5Y2/1黒色砂泥 やや粘質

- 柱穴79  
 1 5Y3/2オリーブ黒色砂泥 やや粘質
- 柱穴698  
 1 5Y2/2オリーブ黒色粘質土  
 2 5Y3/1オリーブ黒色粘質
- 柱穴97  
 1 7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土  
 2 5Y2/2オリーブ黒色粘質土  
 3 7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土

図26 1区 建物8・9実測図 (1:100)

建物5 (図24、図版22) 調査区の西側、北三門北半で検出した6間×2間と推定する東西棟掘立柱建物である。西柱筋は、室町小路東築地心想定線から東側に約3.6m、北側柱筋は、北二・三門界から南へ約3.0mに位置する。また、北側には溝245および柵3が、南側には溝209および柵4~6が近接し、西側には溝282が、東側には溝247が位置する。溝282と建物5との距離は1.5mある。また、建物5・柵3の間は約1.9m、建物5・柵5の間は約1.5mある。柱間は、東西が1.5m等間、南北が北から1.8m・2.1mである。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での



規模は、径0.1～0.4m、深さ0.1～0.4mある。柱穴の中には根固めの礫を詰めるものもある。柱穴254・265からは、京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する土器類が出土した。

**建物6**（図25、図版22） 建物5に重複した位置で検出した3間×2間の南北棟総柱掘立柱建物である。北柱筋は北二・三門界から南に0.8m前後、西柱筋は室町小路東築地心想定線から東側約6.7mに位置する。棟筋方向は座標北に対し東へ約1°振れる。南柱筋の柱穴は、一部建物5の柱穴に重複する。柱間は、東西が1.6m等間、南北が北から2.2m・1.9m・2.4mである。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.3～0.6m、深さ0.1～0.3mある。柱穴の中には根固めの礫を詰めるものもある。

**建物7**（図25、図版23） 北三門の南東側で検出した東西棟掘立柱建物である。これらが、一つの建物か否かは不明であるが、ここでは一連の小規模な建物を想定した。北柱筋は内外建物とも揃い、さらに後述する柵6の東延長に相当する。主軸方向は座標北に対し東へ約1°振れる。外側の建物は、東西2間×南北2間で、柱間は東西が1.6m等間、南北が北から1.7m・1.2mである。内側の建物は、東西1間×南北2間、柱間は東西が2.0m、南北が北から1.0m・0.8mである。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.3～0.5m、深さ0.1～0.4mある。柱穴204・594の底部には根石を据え付ける。

**建物8**（図26、図版23・24） 調査区の南西側、北四門北半で2間×2間分を検出したほぼ方形の総柱掘立柱建物であるが、西側へさらに延びる可能性がある。柱穴の中には根石が残るものが幾つかある（図版24-3・4）。主軸方向は、座標東に対し約2°北に振れる。北側には溝146および柵6が近接し、南側は溝51が近接して東西方向へ延長する。柱間は、東西が1.85m等間、南北が1.8m等間である。柱穴の平面形は、円径ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.3～0.6m、深さ0.1～0.3mある。柱穴56・61・64の底部には根石を据え付ける。柱穴61・155からは、京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する土器類が出土した。

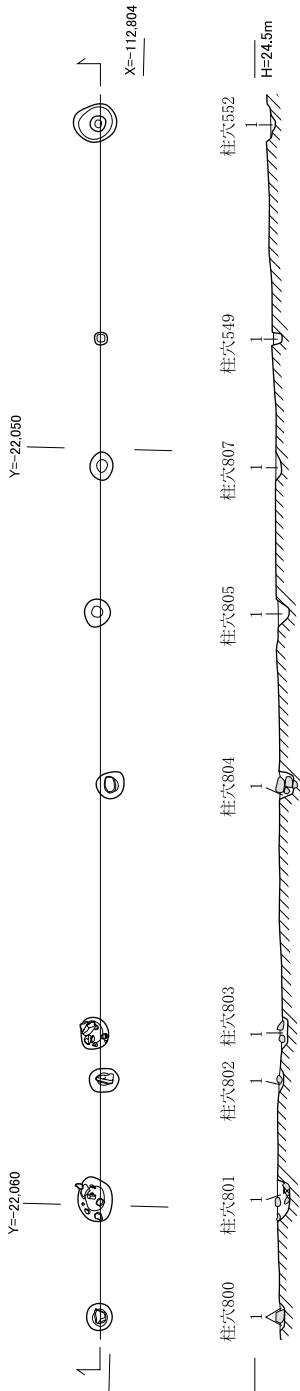
**建物9**（図26） 建物7の東側で検出した3間×2間の東西棟掘立柱建物である。北柱筋は北三・四門界上に位置する。柱間は、東西が約1.9m等間、南北が北から1.4m・1.9mである。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mある。柱穴71底部には礎板（図65-木103）が据え付けられている（図版24-5）。柱穴124・132からは、京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する土器類が出土した。

**柵1**（図27） 北一門内南西端、北一・二門界想定線から北へ約1.5mに位置する東西方向を示す柵で、溝510の底面で検出した。9基からなる柱列で、西端柱穴から東へ約16m延長する。柱間は、1.6～4.4mある。主軸方向は、座標東に対し北へ約15°振れる。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.2～0.6m、深さ0.1～0.2mある。柱穴の中には根固めの礫を詰めるものもある。北一・二門界を区画する施設であろう。

**柵2**（図27） 柵1の南側で検出した東西方向を示す柵で、北一・二門界から北へ0.6mに位置する。4基程度からなる柱列で、柱間は、1.4～2.3mある。西端柱穴から東へ約5.2m延長する。主軸方向は、座標東に対し北へ約2°振れる。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での

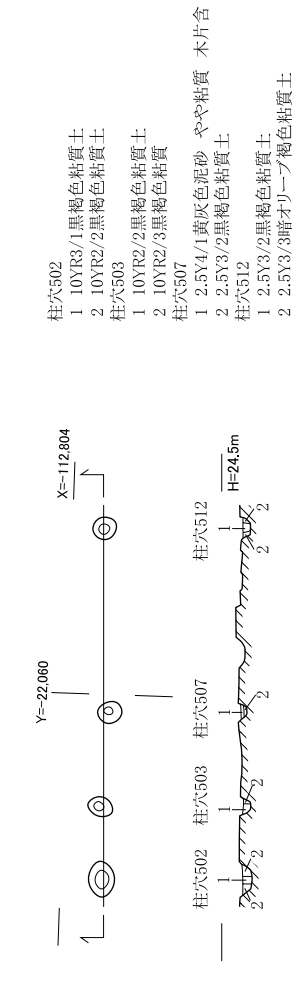


柵 1



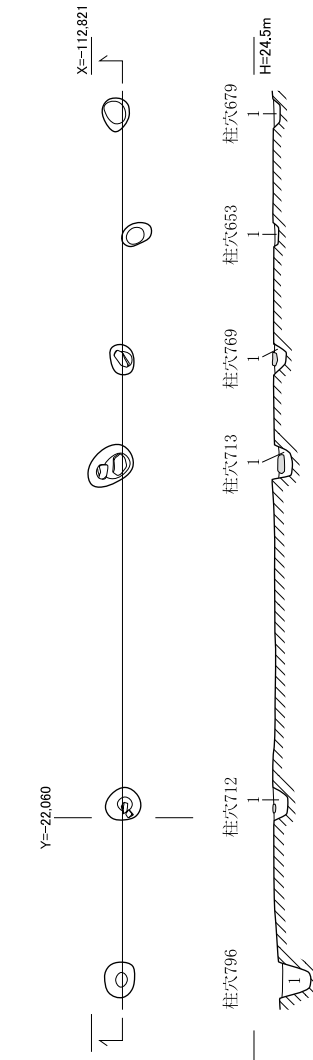
- 柱穴800 1 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 φ0.5~3cmの礫少量
- 柱穴801 1 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 φ1~10cmの礫中量、木片含
- 柱穴802 1 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 φ0.5~10cmの礫少量
- 柱穴803 1 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 粗砂混 φ0.5~5cmの礫多量
- 柱穴804 1 10YR3/2黒褐色粘質土
- 柱穴805 1 10YR3/3暗褐色砂泥
- 柱穴807 1 5Y3/1オリーブ黒色砂泥 1 2.5Y3/2オリーブ黒色砂泥
- 柱穴549 1 5Y3/1オリーブ黒色砂泥 やや粘質 粗砂混
- 柱穴552 1 5Y3/2オリーブ黒色砂泥 やや粘質

柵 2



- 柱穴502 1 10YR3/1黒褐色粘質土 2 10YR2/2黒褐色粘質土
- 柱穴503 1 10YR2/2黒褐色粘質土 2 10YR2/3黒褐色粘質土
- 柱穴507 1 2.5Y4/1黄灰色泥砂 やや粘質 木片含 2 2.5Y3/2黒褐色粘質土
- 柱穴512 1 2.5Y3/2黒褐色粘質土 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土

柵 3



- 柱穴796 1 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 柱穴712 1 7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土 φ1~10cmの礫少量
- 柱穴713 1 2.5Y2/1黒色粘質土 φ5~25cmの礫多量
- 柱穴769 1 2.5Y3/2黒褐色泥砂 やや粘質
- 柱穴653 1 5Y3/2オリーブ黒色砂泥
- 柱穴679 1 2.5Y3/2黒褐色砂泥



図27 1区柵1~3実測図 (1:100)

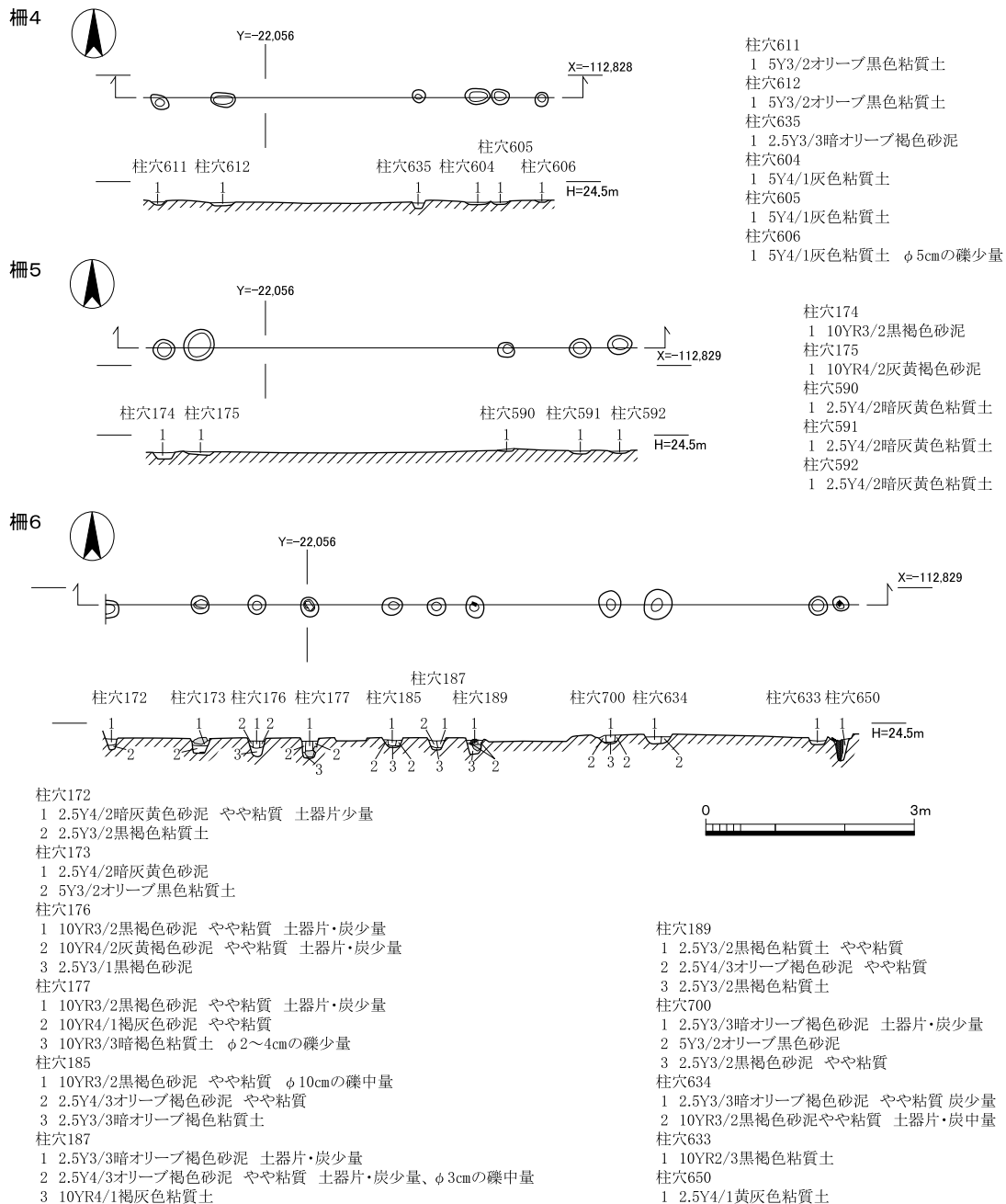


図28 1区 柵4～6実測図 (1:100)

規模は、径0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mある。柵1同様、北一・二門界を区画する施設であろう。

柵3 (図27) 北三門内北西端、北二・三門界想定線から南へ約1.2mに位置する東西方向を示す柵で、溝245・333の底面で検出した。6基からなる柱列で、西端柱穴から東へ約11.4m延長する。柱間は、1.3～2.6mある。柱穴内には根石を据えるものもある。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.3～0.6m、深さ0.1～0.4mある。北二・三門界ならびに建物5の宅地北境界を区画する施設であろう。

柵4 (図28) 北三門内中央南寄り、北二・三門界想定線から南へ約8.3mに位置する東西方向を示す柵で、溝209南肩口に近接した箇所検出した。6基からなる柱列で、西端柱穴から東へ約5.5m延長する。柱間は、1.3～2.6mある。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規

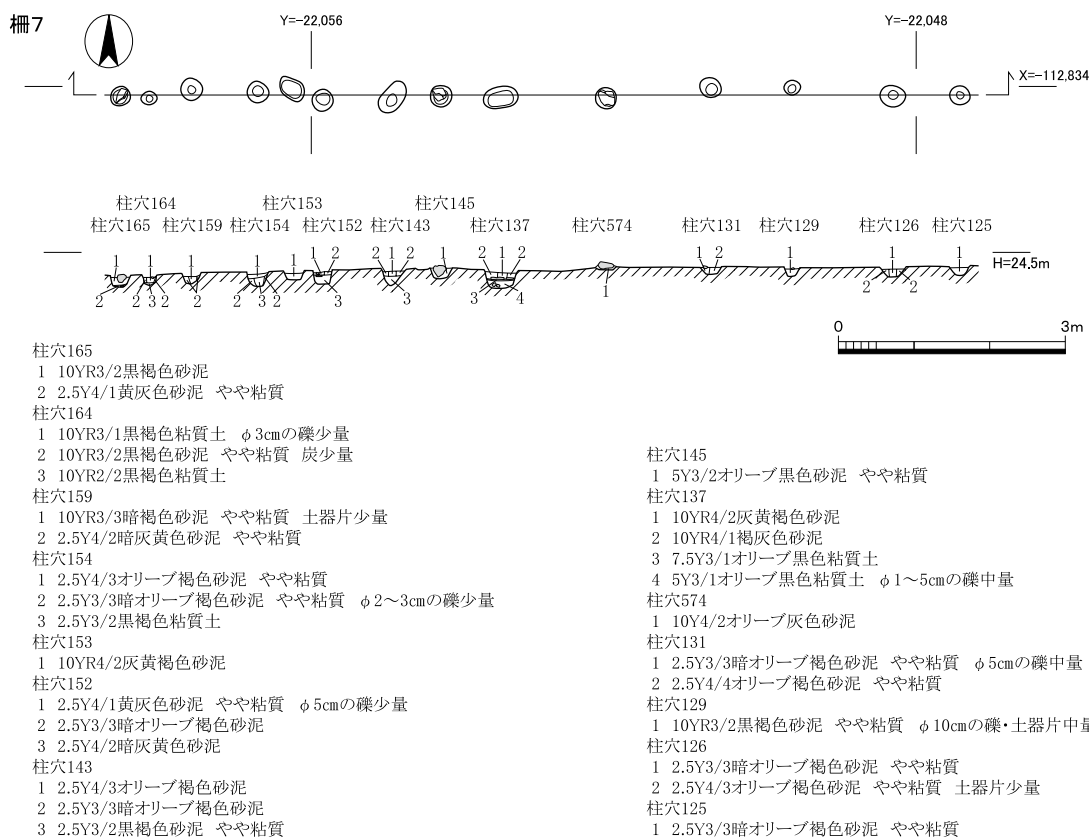


図29 1区 柵7実測図 (1 : 100)

柵は、径0.2~0.3m、深さ0.05~0.1mある。建物5の宅地南境界を区画する施設であろう。

柵5 (図28) 柵4の南約0.4mで検出した東西方向を示す柵である。5基からなる柱列で、西端柱穴から東へ約6m延長する。柱間は、0.3~4.5mある。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.2~0.5m、深さ0.05~0.1mある。

柵6 (図28、図版23) 柵5の南約0.5mで検出した東西方向を示す柵である。11基からなる柱列で、西端柱穴から東へ約10.5m延長する。東延長が建物7の北柱筋の西延長となる。柱間は、西端柱穴から東へ5間分は約0.8mの等間、さらに1.9m・0.8m・2.4m・0.3mある。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.2~0.5m、深さ0.15~0.4mある。柱穴177・189の底部には根石を据える。柱穴650には柱根が依存していた。柱穴176・189からは、京都Ⅶ期古段階に属する土器類が出土した。

柵7 (図29、図版23・24) 北三門内南端、北三・四門界想定線から北へ約0.9mに位置する東西方向を示す柵で、溝146南肩口に接した箇所を検出した。14基からなる柱列で、西端柱穴から東へ約11.1m延長し、柱間は約1.0m、5間分は約0.8mの等間、さらに1.9m・0.8m・1.2m・1.2m・1.0mある。柱穴の中には根石を据えるものが幾つかある。柱穴137には礎板が残る (図版24-6)。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.25mある。柱穴131・145・154からは、京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する土器類が出土した。北三・四門界ならびに建物8・9の宅地北境界を区画する施設であろう。

なお、柵6・7間は約4.9mある。柵6と柵7は、柱筋が南北方向に一致する箇所があり、柵6・

7の南北中心位置に近接して東西方向の柱列が位置し、柵6の西端柱穴から3間目の柱穴から南へ延長する3基程の柱列があることなどから、建物としてまとまる可能性もある。

**柱穴群** 調査区の全体に分布している。建物として復元できた柱穴以外にも多くの柱穴がある。調査区の西半部に多く集中しており、西半部に建物が建ち並ぶことがわかる。一方、東半には比較的少ないことがわかる。ここでは、掲載した主な遺物が出土した柱穴を記載する。柱穴575・708・737から京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する土器類が出土した。柱穴554から軒平瓦が出土した。柱穴784から柱根が出土した。

**溝510** 調査区の北側で検出した東西方向の区画溝である。東西21.8m以上、幅0.3～0.7m、深さ約0.1mある。底面で9基からなる柱列を検出した。北一・二門界想定線から北へ約1.5mに位置する。埋土はオリーブ黒色砂泥である。

**溝430** 調査区の北側で検出した東西方向の区画溝である。東西23.0m以上、幅0.3～0.7m、深さ約0.1mある。北一・二門界想定線から南へ約4.3mに位置し、溝510との間隔は約5.7mある。埋土はオリーブ黒色砂泥である。

**溝400** 調査区の北寄りで検出した東西方向の区画溝である。東西23.1m以上、幅0.2～0.6m、深さ約0.05mある。北二・三門界想定線から北へ約4.9mに位置し、溝430との間隔は約5.7mある。埋土はオリーブ黒色砂泥である。

**溝390** 調査区の中央で検出した東西方向の区画溝である。東西21.8m以上、幅0.5～0.8m、深さ約0.15mある。建物3と建物4の北側柱列と重複する。北二・三門界想定線から北へ約2.8mに位置する。埋土は黒褐色砂泥である。

**溝380** 調査区の中央で検出した東西方向の区画溝である。溝390と並行し、西側では溝390に北肩部を切られる。東西22.2m以上、幅0.3～0.5m、深さ約0.15mある。北二・三門界想定線から北へ約2.4mに位置する。埋土はオリーブ黒色砂泥である。

**溝333** 調査区の中央で検出した東西方向の区画溝である。溝245と並行し、西側では南肩部を溝245に切られる。東西10.8m以上、幅0.5～0.7m、深さ約0.1mある。建物3と建物4の南側柱列と柵3が重複する。北二・三門界想定線から南へ約0.9mに位置する。埋土はオリーブ黒色泥砂である。下駄が出土した。京都Ⅵ期新段階に属する土器類が出土した。

**溝245** 調査区の中央で検出した東西方向の区画溝である。東西22.5m以上、幅0.4～0.6m、深さ約0.1mある。柵3と重複する。北二・三門界想定線から南へ約1.4mに位置する。埋土は褐灰色砂泥である。滑石製の温石が出土した。

**溝209** 調査区の中央で検出した東西方向の区画溝である。東西17.2m以上、幅0.5～0.9m、深さ約0.05mある。底面で11基からなる柱列を検出した。北二・三門界想定線から南へ約7.6mに位置し、溝245との間隔は6.2mある。埋土は褐灰色砂泥である。

**溝191** 調査区の中央で検出した東西方向の区画溝である。東西18.5m以上、幅0.1～0.3m、深さ約0.1mある。底面で7基からなる柱列を検出した。北三・四門界想定線から北へ約6.6mに位置し、柵4と重複する。埋土は黒褐色砂泥である。

溝190 調査区の中央で検出した東西方向の区画溝である。東西15.9m以上、幅0.2～0.4m、深さ約0.05mある。底面で3基からなる柱列を検出した。北三・四門界想定線から北へ約6.3mに位置し、柵5と重複する。埋土は灰黄褐色砂泥である。

溝570 調査区の中央で検出した東西方向の区画溝である。東西8.4m以上、幅0.3～0.5m、深さ約0.05mある。底面で10基からなる柱列を検出した。北三・四門界想定線から北へ約5.8mに位置し、柵6と重複する。埋土は黄灰色砂泥である。

溝146 調査区の南側で検出した東西方向の区画溝である。東西5.8m以上、幅0.2～0.5m、深さ約0.05mある。底面で3基からなる柱列を検出した。北三・四門界想定線から北へ約1.3mに位置する。埋土は灰黄褐色砂泥である。

溝51 調査区の南側で検出した東西方向の区画溝である。東西4.8m以上、幅0.2～0.4m、深さ約0.05mある。底面で3基からなる柱列を検出した。北三・四門界想定線から南へ約3.5mに位置し、溝146との間隔は4.9mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。

溝2 調査区の中央で検出した東西方向の区画溝である。東西17.3m以上、幅0.3～0.4m、深さ約0.1mある。北三・四門界想定線から南へ約5.6mに位置し、溝146との間隔は6.9mある。埋土は

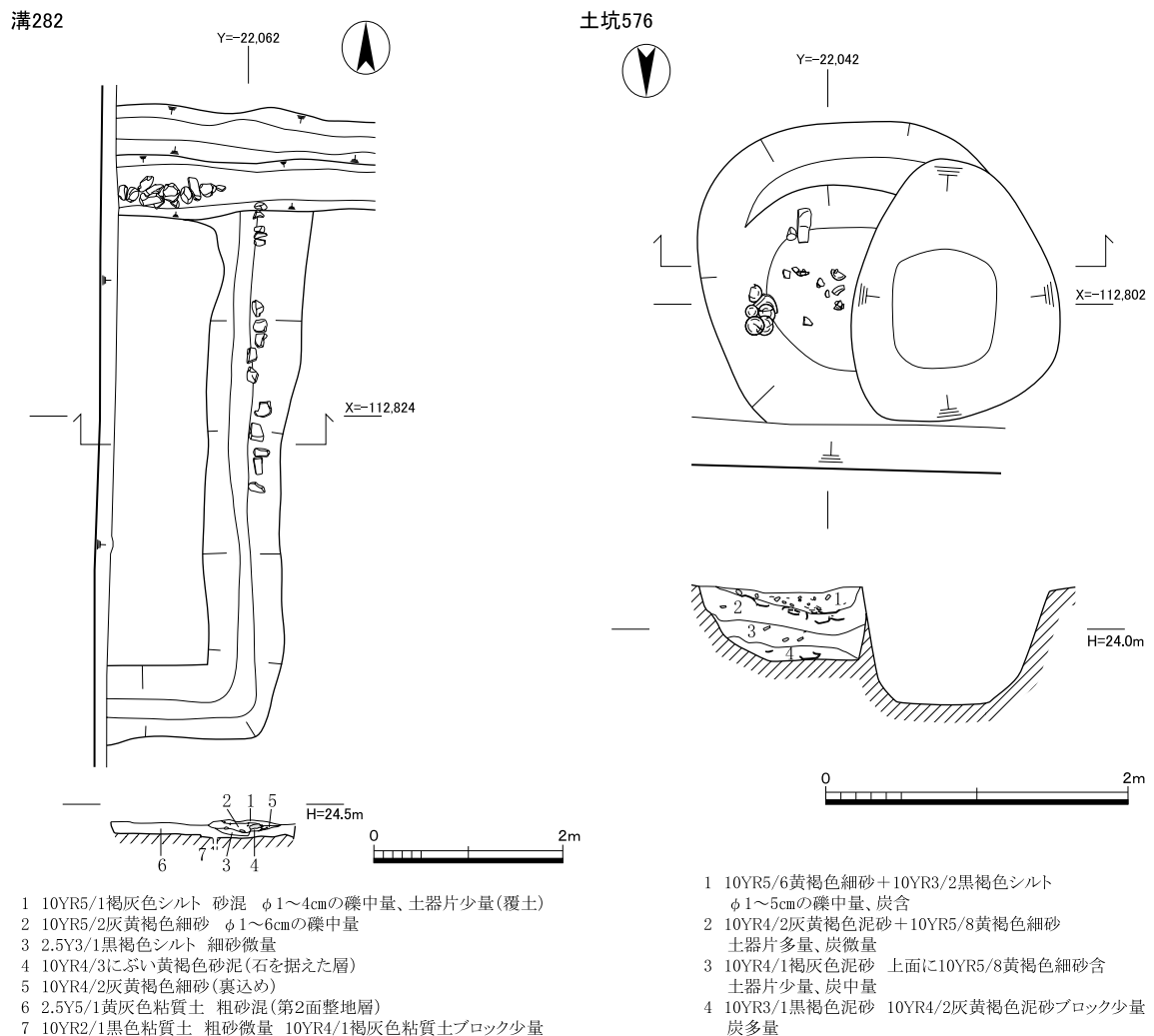


図30 1区溝282・土坑576実測図(1:80, 1:50)

褐灰色砂泥である。

**溝223** 調査区の中央で検出した東西方向の溝である。東西23m以上、幅0.3～0.5m、深さ約0.1mある。埋土は黒褐色砂泥である。輸入陶磁器が出土した。

**溝260** 調査区の中央西寄りで検出した東西方向の溝状遺構である。東西2.6m、幅0.2～0.5m、深さ約0.3mある。埋土は黒褐色砂泥で炭と小礫を含む。京都Ⅵ期新段階に属する土器類が出土した。

**溝247** 調査区の中央で検出した南北方向の溝である。南北5.3m以上、幅0.4～0.7m、深さ約0.2mある。埋土は褐灰色砂泥である。京都Ⅵ期新段階に属する土器類が出土した。

**溝282**(図30) 調査区の中央西端で検出した。平面形がコ字形の溝である。南北約6.4m、東西2.0m以上あり、幅約0.8m、深さ約0.1mある。溝内には石列が設けられている。埋土はオリーブ黒色砂泥である。西側が調査区外になるため全形は不明である。

**土坑576**(図30) 調査区の北東隅で検出した。井戸555により西半部を切られる。東西1.8m以上、深さ約0.5mある。上層は灰黄褐色泥砂などが堆積し、土師器片を多量に含む。中下層には炭を多量に含む。京都Ⅵ期中段階に属する土器類が出土した。

**土坑33** 調査区の南端部西寄りで検出した。南北約1.1m、東西約2.3mの不定形を呈する。深さ約0.1mある。埋土は黒褐色砂泥で、小礫が混入する。京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する土器類が出土した。

**土坑62** 調査区の南部西寄りで検出した。南北約0.9m、東西約0.7mの楕円形を呈する。深さ約0.3mある。埋土は黒色砂泥で、土器と炭を多量に含む。京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する土器類が出土した。

**土坑73** 調査区の南部西寄りで検出した。南北約0.9m、東西約1.0mの楕円形を呈する。深さ約0.65mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。滑石製の羽釜が出土した。

**土坑132**(図版24) 調査区の南部西寄りで検出した小土坑である。径約0.3mの円形を呈する。深さ約0.2mある。土坑内に土師器皿を上向きに据え付け、さらにもう1枚の土師器皿を下向きにして被せている。埋土は黒褐色砂泥である。埋納遺構と考えられる。京都Ⅵ期新段階前後に属する土器類が出土した。

**土坑184**(図版24) 調査区の中央西寄りで検出した小土坑である。南北約0.6m、東西約0.8mの楕円形を呈する。深さ約0.1mある。埋土は灰黄褐色砂泥層である。土坑内から土器類と伴に滑石製のミニチュア羽釜が出土した。

**土坑320** 調査区の中央で検出した。南北約1.8m、東西約1.4mの楕円形を呈する。深さ約0.2mある。埋土はオリーブ黒色砂泥で、小礫が多量に混入する。滑石製の羽釜が出土した。

**土坑405** 調査区の北部中央で検出した。南北約1.7m、東西約0.6mの溝状を呈する。北側を溝400に、南側を溝390に切られる。深さ約0.3mある。埋土はオリーブ黒色砂泥で、小礫が混入する。輸入陶磁器が出土した。

**土坑662** 調査区の中央西寄りで検出した小土坑である。径約0.3mの円形を呈する。深さ約0.2

mある。埋土は暗オリーブ褐色砂泥である。滑石製の紡錘車が出土した。

**土坑665** 調査区の中央西寄りで検出した。西部を溝282、北部を溝245に切られる。南北0.3m以上、東西1.8m以上の規模である。深さ約0.1mある。埋土は暗オリーブ褐色砂泥である。京都Ⅶ期古段階前後に属する土器類が出土した。

**土坑460** 調査区の北部西寄りで検出した不定形土坑である。南北0.7～0.8m、東西4.0m以上、深さ約0.05mある。埋土はオリーブ黒色粘質土である。京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する土器類が出土した。

**土坑470** 調査区の北部西寄りで検出した土坑である。南北約1.2m、東西約1.3m、深さ約0.2mある。埋土はオリーブ黒色砂泥である。土坑460を切っている。京都Ⅶ期古段階に属する土器類が出土した。

**土坑229** 調査区の東端で検出した南北方向の落込み状遺構である。東西21m以上、幅1.0m以上、深さ0.05～0.15mある。さらに東側に広がる可能性があることから土坑とした。埋土は灰褐色泥砂である。嘉祐通寶が出土した。京都Ⅶ期古段階から中段階に属する土器類が出土した。

**土坑515** 調査区の北部西寄りで検出した不定形土坑である。南北約4.2m、東西約7.8m、深さ約0.2mある。埋土はオリーブ黒色砂泥である。京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する土器類が出土した。

**土坑652** 調査区の中央西寄りで検出した土坑である。南北約0.5m、東西約0.7m、深さ約0.3mある。埋土は黒褐色粘質土である。京都Ⅵ期新段階に属する土器類が出土した。

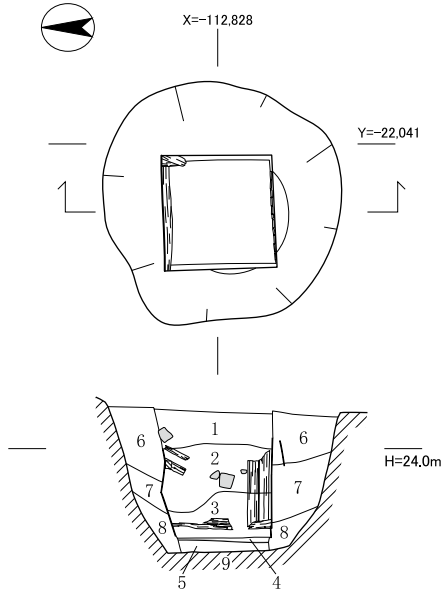
**土坑764** 調査区の北部西寄りで検出した不定形な土坑である。南北約1.2m、東西約2.0m、深さ約0.2mある。埋土は暗オリーブ褐色砂泥である。滑石製の羽釜が出土した。

**井戸950** (図31、図版25) 調査区の中央東寄りで検出した。掘形は南北約1.7m、東西約1.8mの隅丸方形を呈する。掘形上層の埋土は灰黄色細砂層である。下部では掘形の径が約0.9mと狭くなる。井筒は一辺0.7mの方形木枠組である。木枠内埋土には少量の礫と炭が混じる。底部には曲物が据え付けられた痕跡はない。縦板は幅0.1m強あり、一辺に7枚ほどある。横棧は上下に2段ある。深さは約0.7mあり、底部の標高は23.40m。京都Ⅵ期新段階から京都Ⅶ期古段階に属する土器類が出土した。

**井戸450** (図31) 調査区の北部中央で検出した。掘形は南北約1.7m、東西約1.6mの円形を呈する。掘形上層の埋土は褐色粗砂層で礫を含む。下部では掘形の径が約0.8mと狭くなる。井筒は南側で内側に倒れ込むが方形木枠組とみられる。深さは約0.6mあり、底部の標高は23.55m。京都Ⅶ期古段階に属する土器類が出土した。

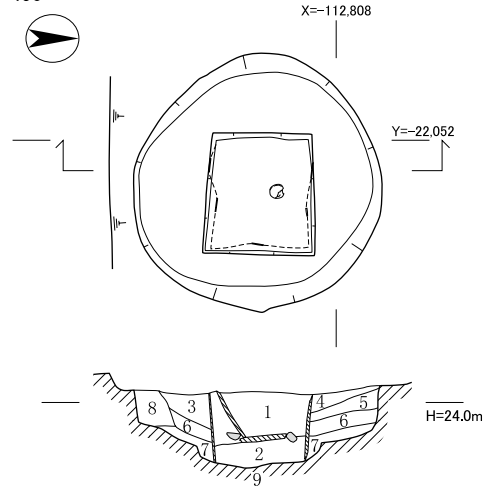
**井戸555** (図31、図版25) 調査区の北東隅で検出した。掘形は南北約1.7m、東西約1.4mの楕円形を呈する。掘形上層の埋土は黒褐色砂泥層である。下部では掘形の径が約0.9mと狭くなる。井筒は一辺0.7mの方形木枠組である。木枠内には多量の土師器が混入している。底部には曲物が据え付けられた痕跡はない。縦板は幅0.2m強あり、一辺に3枚ある。横棧は上下に2段ある。深さは約0.8mあり、底部の標高は23.50m。京都Ⅶ期中段階から新段階に属する土器類が出土した。

井戸1064



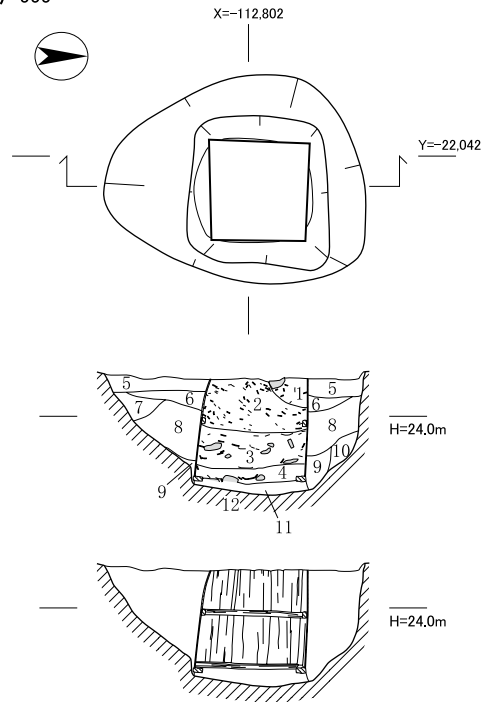
- 1 2.5Y3/2黒褐色泥砂 粗砂混
- 2 2.5Y4/1黄灰色粘質土 粗砂混、φ4~10cmの礫含
- 3 2.5Y3/1黒褐色粘質土
- 4 5Y3/2オリーブ褐色細砂 底面に酸化鉄が堆積
- 5 5Y4/1灰色細砂 粗砂混、φ2~3cmの礫含
- 6 5Y4/1灰色砂泥 細砂混
- 7 2.5Y4/1黄灰色細砂
- 8 5Y4/1灰色細砂 粗砂混、φ3~6cmの礫含
- 9 2.5Y5/3黄褐色細砂 粗砂混[地山]

井戸450



- 1 10YR3/1黒褐色シルト~細砂 φ2~5cmの礫・埧少量、土器片多量
- 2 10YR3/1黒褐色シルト~細砂 φ3~15cmの礫多量
- 3 2.5Y3/1黒褐色シルト+10YR4/4褐色粗砂 φ1~4cmの礫少量
- 4 7.5YR4/3褐色粗砂 φ1~12cmの礫中量
- 5 10YR3/1黒褐色シルト+7.5YR4/3褐色粗砂 φ2~5cmの礫中量
- 6 10YR3/3暗褐色粗砂 φ2~5cmの礫少量
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂
- 8 10YR3/3暗褐色粗砂+10YR3/1黒褐色シルト
- 9 10YR4/4褐色粗砂~中砂

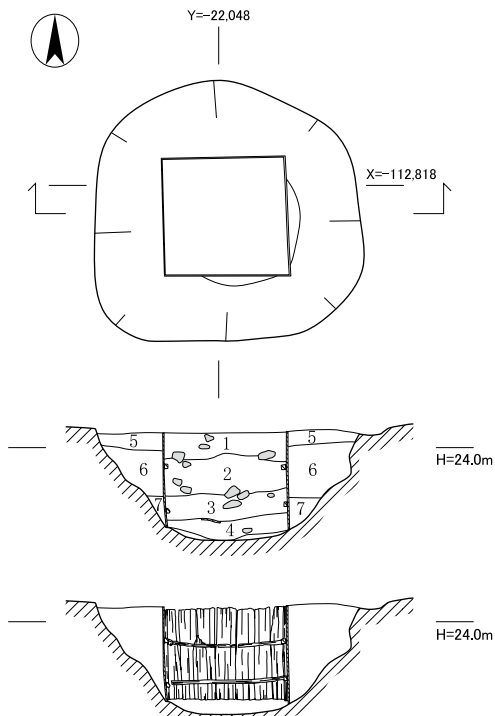
井戸555



- 1 10YR3/1黒褐色粘質土 炭微量、土器片少量
- 2 10YR4/1褐灰色砂泥 土器片多量
- 3 2.5Y3/2黒褐色泥砂 φ1~20cmの礫含む、土器片多量
- 4 10YR3/1黒褐色泥砂 φ1~20cmの礫含む、土器片少量
- 5 10YR3/1黒褐色砂泥+2.5Y4/6オリーブ褐色粗砂 粘質
- 6 2.5Y4/6オリーブ褐色粗砂+10YR3/1黒褐色砂泥
- 7 10YR3/1黒褐色砂泥 土器片中量
- 8 10YR4/1褐灰色砂泥+2.5Y4/6オリーブ褐色粗砂 粘質
- 9 10YR4/2褐灰色粘質土
- 10 10YR4/4褐色泥砂
- 11 2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂 土器片少量
- 12 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂



井戸950



- 1 7.5Y3/1オリーブ黒色砂泥 φ2~10cmの礫・炭少量
- 2 7.5Y3/2オリーブ黒色砂泥粘質 φ2~10cmの礫・炭少量
- 3 2.5GY3/1暗オリーブ灰色砂泥 φ2~10cmの礫少量
- 4 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト 細砂混、φ2~5cmの礫少量、土器片含
- 5 2.5Y4/1灰黄色細砂 φ2~5cmの礫少量
- 6 2.5Y3/2黒褐色粘質土 φ1~3cmの礫中量
- 7 2.5Y3/1黒褐色砂泥 φ1~2cmの礫少量

図31 1区 井戸450・555・950・1064実測図(1:50)



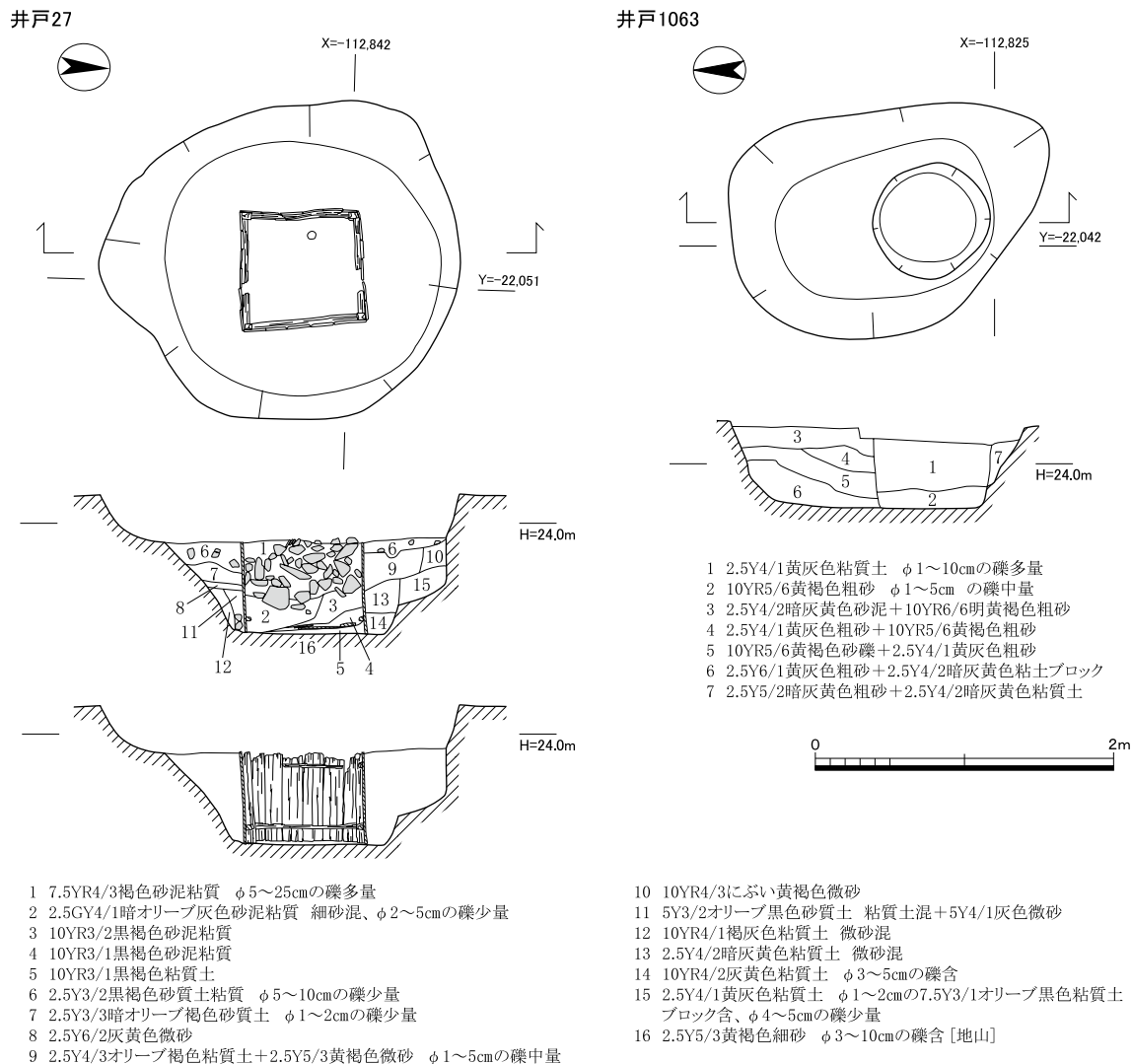


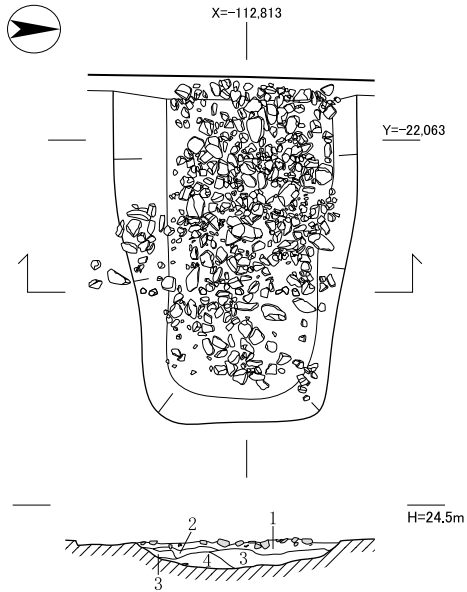
図32 1区 井戸27・1063実測図（1：50）

井戸1064（図31、図版25） 調査区の中央東端で検出した。掘形は東西・南北とも約1.6mの歪な円形を呈する。掘形上層の埋土は灰色砂泥層で細砂を含む。下部では掘形の径が約0.8mと狭くなる。井筒は腐食が激しく遺存しないが、方形木枠組とみられる。木枠内には礫が混入している。底部には曲物が据え付けられた痕跡はない。深さは約1.0mあり、底部の標高は23.30m。

井戸27（図32、図版25） 調査区の南端中央で検出した。掘形は南北約2.4m、東西約2.1mの南北にやや長い円形を呈する。掘形上層の埋土は黒褐色砂質土層で礫を少量含む。下部では掘形の径が約1.8mと狭くなる。井筒は一辺0.8mの方形木枠組である。木枠内には多量の礫が混入している。底部には曲物が据え付けられた痕跡はない。縦板は幅0.1m強あり、一辺に約7枚ある。横棧は上下に2段ある。深さは約1.0mあり、底部の標高は23.30m。京都Ⅶ期古段階に属する土器類が出土した。

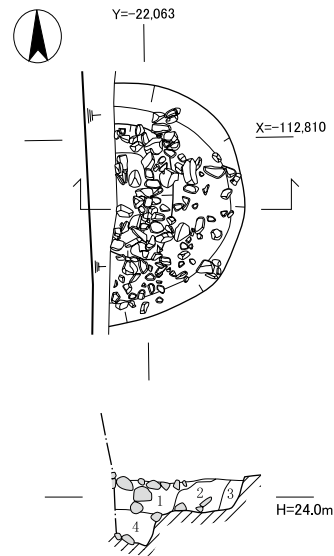
井戸1063（図32） 調査区の中央東端で検出した。掘形は南北約2.2m、東西約1.5mの楕円形を呈する。上層の埋土は暗灰黄色砂泥で明黄褐色粗砂が混じる。下層の埋土は黄褐色砂礫で暗灰黄色粘土ブロックを含む。掘形内の南側には、井筒が抜き取られた痕跡が残る。上層の埋土は黄灰色粘

集石475



- 1 10YR3/1黒褐色シルト+10YR7/3にぶい黄褐色細砂 φ1~10cmの礫多量
- 2 10YR7/6明黄褐色細砂 φ1~2cmの礫中量
- 3 2.5Y3/1黒褐色シルト 細砂微量混
- 4 10YR4/1黄灰色粘質土 φ1~2cmの礫微量、植物遺体少量

集石1061



- 1 2.5Y4/1黄灰色砂泥 φ0.5~20cmの礫多量、土器片微量
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂 φ0.5~10cmの礫少量
- 3 2.5Y3/2黒褐色砂泥 φ0.5~3cmの礫微量
- 4 2.5Y5/2+4/2暗灰黄色細砂 φ0.5~10cmの礫多量

図33 1区 集石475・1061実測図(1:50)

質土層で礫を多量に含む。下層の埋土は黄褐色粗砂である。深さは約0.5mあり、底部の標高は23.70m。京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する土器類が出土した。

**集石475**(図33) 調査区の北部西端で検出した。掘形は南北1.1~1.6m、深さ約0.2mある。西部は調査区外となる。上層は黒褐色シルトやにぶい黄褐色細砂が堆積し、礫が多量に混じる。下層は黄灰色粘質土層で植物遺体が少量混じる。

**集石1061**(図33) 調査区の北部西端で検出した。南北約1.6m、深さ約0.5mある。西半は調査区外となる。上層は黄灰色砂泥や暗灰黄色粗砂が堆積し、礫が多量に混じる。下層は暗灰黄色細砂で礫が多量に混じる。

#### (5) 第1-1面の検出遺構(図版5・22)

**井戸4** 調査区の中央で検出した井筒が漆喰造りの円形井戸である。南北約2.2m、東西約2.4mの円形を呈する。埋土は褐灰色砂泥層である。井筒内からは近代の薬瓶が多く出土した。

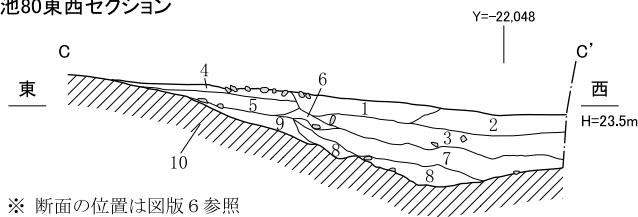
**鋤溝群** 調査区の全域で検出した東西・南北方向の耕作溝である。溝は幅0.2~0.5m、深さ0.1~0.2mと小規模である。溝底部には竹材を敷き、小礫を充填させる暗渠の構造をもつものも多い。埋土は黒褐色泥砂層である。これらの溝は、おおむね東西方向の溝が古く、南北方向の溝群が新しい。また、平面的な調査は行わなかったが壁断面の観察によれば、江戸時代や明治以降の暗渠も多くみられる。ここでは、掲載した主な遺物が出土した溝を記載する。南北方向の溝417からは、滑石製の羽釜が出土した。

## 4. 2区の検出遺構

### (1) 第4面の検出遺構 (図版6・26)

池80 (図34、巻頭図版1、図版17・26、) 調査区北部の東寄りで検出した。南北16m以上、東西約6.8m、深さ0.2~0.7mある。東岸は拳大の礫を貼り付けた急な傾斜をもつ洲浜で、西岸は緩やかな傾斜をもち、貼り付けられた礫も少量である。池底部には礫を貼り付けるが、西側ではやや少ない。東岸南部の洲浜は新旧2時期あり、古い時期の洲浜の斜面を後に急傾斜に変えている。新期の池の堆積土は第1~3層で黒褐色砂泥を主体としている。古期の池の堆積土は第7・8層で黄灰色砂泥を主体とし、部分的に小礫や砂を含んでいる。池の中央部には1区と同様に泉とみられる施設があり、池に水を供給している。同じく中央部には橋脚の可能性ある柱穴列を検出した。

池80東西セクション

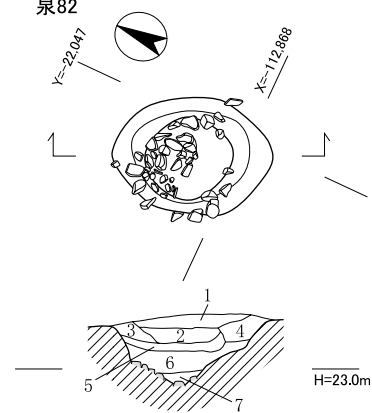


※ 断面の位置は図版6参照

- 1 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 2 2.5Y3/1黒褐色砂泥
- 3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 φ4~10cmの礫多量 [池80新洲浜]
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 砂礫多量
- 6 2.5Y3/2黒褐色砂泥 細砂多量
- 7 2.5Y4/1黄灰色砂泥 細砂多量
- 8 2.5Y4/1黄灰色砂泥 第7層より砂多量
- 9 2.5Y4/1黄灰色砂泥 第8層より砂多量 [池80旧洲浜]
- 10 2.5Y5/3黄褐色砂礫 [地山]



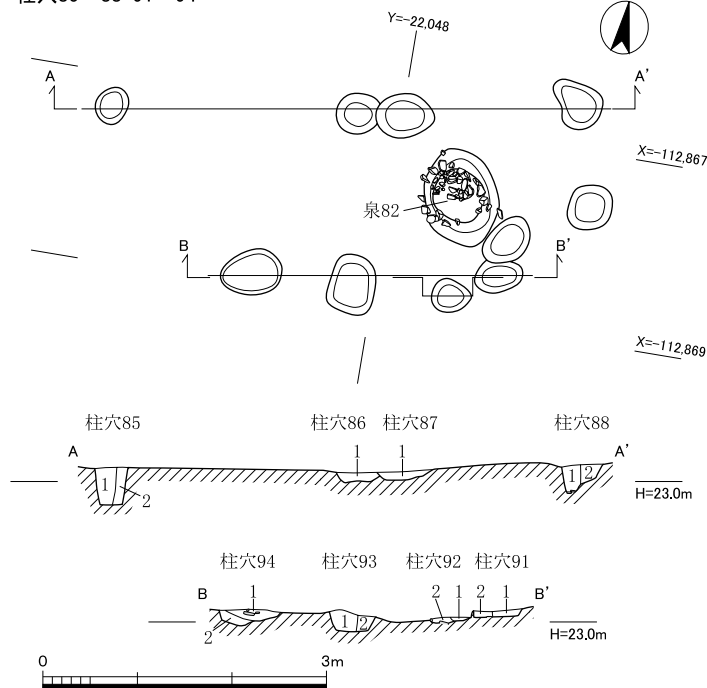
泉82



- 1 5Y4/1灰粘質土 φ0.2~3cmの礫少量
- 2 10G4/1暗緑灰色粘質土 細砂~シルト多量
- 3 2.5Y5/1黄灰色砂礫 φ0.5~6cmの礫多量
- 4 2.5Y5/3黄褐色砂礫 φ0.5~8cmの礫多量
- 5 N5/0灰色シルト
- 6 2.5Y5/2暗灰黄色砂礫 φ0.5~10cmの礫中量
- 7 2.5Y6/2灰黄色粗砂



柱穴85~88・91~94



A-A'

- 柱穴85
- 1 2.5Y3/2黒褐色粘質土
- 2 2.5Y4/1黄灰色粘質土
- 柱穴86
- 1 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土
- 柱穴87
- 1 2.5Y4/1黄灰色粘質土
- 柱穴88
- 1 2.5Y3/2黒褐色粘質土 φ1~6cmの礫・酸化鉄中量
- 2 7.5Y4/1灰色粘質土

B-B'

- 柱穴94
- 1 2.5Y3/2黒褐色粘質土
- 2 10YR4/1褐灰色粘質土
- 柱穴93
- 1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 酸化鉄少量
- 2 5Y4/1灰色粘質土
- 柱穴92
- 1 7.5Y2/1黒色粘質土
- 2 2.5Y5/1黄灰色粘質土
- 柱穴91
- 1 2.5Y3/2黒褐色粘質土
- 2 2.5Y4/1黄灰色粘質土

図34 2区 池80、泉82、柱穴85~88・91~94実測図 (1:50、1:80)

下層からは9～10世紀の土器類とともに16点の木簡が出土している。北側の1区の池1160と連続する可能性が高い。下層から平安京I期中段階を主体とする土器類が出土する。上層からは平安京II期古段階の土器類が出土した。

泉82(図34) 池80の中央部で検出した泉である。南北約1.2m、東西約1.1mの不定形を呈する。池底の砂礫層を掘り込み、深さは約0.25mある。底部には拳大の礫が多く見られる。堆積土は上層が粗砂混じりの灰色泥砂層、下層は小礫混じりの暗灰黄色粗砂層などからなる。堆積状態からは底部から水が湧き出ていたとみられ、この泉も池の水源となっていたとみられる。底部の標高は22.9m。

柱穴85～88・91～94(図34) 池80の中央部で検出した。径0.4～0.6mの柱穴が東西方向に2列に並んでいる。北列は柱穴85～88の4基、南列は91～94の4基である。深さは0.1～0.4mある。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。柱穴の間隔にばらつきがあるが、池の中で2列に並んでいることから橋脚の可能性が考えられる。

## (2) 第3面の検出遺構(図版7・27)

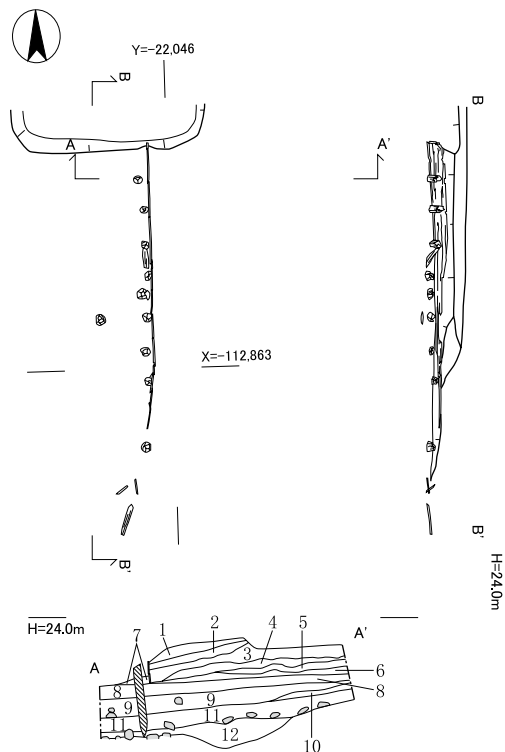
池77(図版17・28・29) 調査区の東端以外の全体に広がる南北20.5m以上、東西23.5m以上、深さ0.2～0.4mのやや浅い池である。東岸の北半部は緩やかな傾斜をもち、小礫を密に貼り付けた洲浜となり、南部は平坦で基盤層となる砂礫層上に粘土を貼り付け、さらに上面に小礫を貼り付けている。洲浜北部では土留め(土留79)を施し、白色系の砂を敷き詰め、場所によって景観を変えている。中央東側には泉75があり、池に水を供給している。溝74は泉からの導水路となっている。池の堆積土は、灰黄褐色砂泥と腐植土を主体とし、部分的に小礫や砂を含む。池はさらに南北に広がり、西は室町小路東築地心想定線を越えて西側に広がっている。埋土から石帯(図67-石1)が出土した。平安京II期古段階からV期古段階に属する土器類が出土した。

土留79(図35、図版29) 池77の東岸北部で検出した。洲浜の下端の位置に設置された南北方向の土留めである。長さ約1.9m、高さ約0.1mの土留め板に西側に径約0.05mの杭9本を池底に0.4mの深さまで打ち込んで留めている。土留め板の東側斜面に灰黄褐色の細～中粒砂を0.3mの厚さで敷き詰める。土留め板の材質はスギで、杭の樹種はシイノキ属、二葉マツが多い。

泉75(図35、図版29) 池77の東部で検出した泉である。南北約2.7m、東西約1.6mの楕円形を呈する。池底の砂礫層を掘り込み、深さは約0.2mあり、北側底部には径0.1～0.2m大の小礫を据え付けている。堆積土の上層は暗灰黄色粘質土でシルト混じりである。堆積状態からは底部から水が湧き出ていたとみられ、この泉が池の水源の一部となっていたとみられる。底部の標高は23.61m。平安京IV期新段階からV期古段階に属する土器類が出土した。

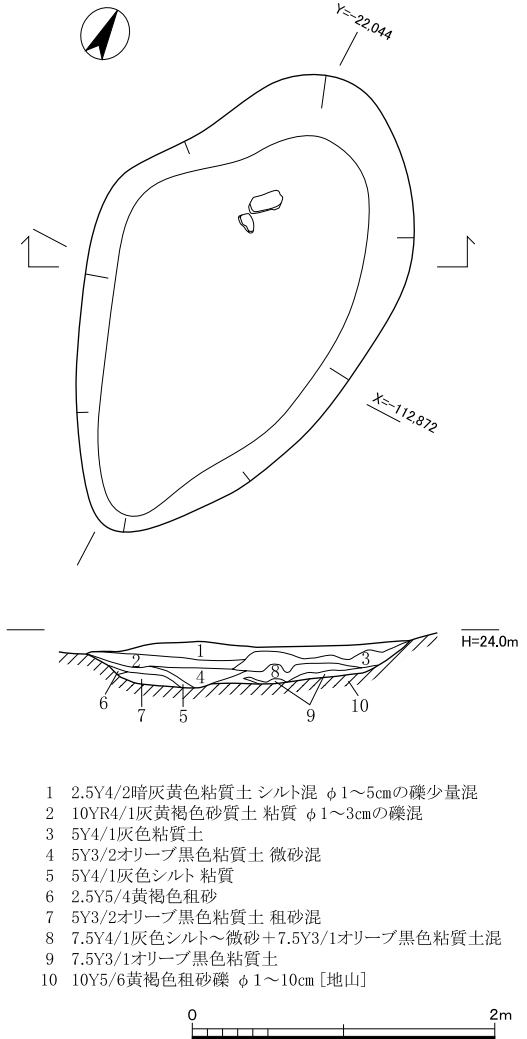
溝74 池77の東部に位置する溝である。泉75から発して西側の池77の深い部分に流れ込む溝と南側に流下する溝がある。幅約0.7m、深さ0.1～0.2mある。底部にも洲浜と同様の小礫が密に敷かれている。堆積土は灰黄褐色粘質土で灰色粘質土ブロックが少量混じる。泉から発した水を池に流し入れる役割を持つ。

土留79



- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 細砂・中砂混 φ1~6cmの礫多量
  - 2 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 細砂~中砂混 φ1~3cmの礫多量
  - 3 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 細砂~中砂混
  - 4 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂+2.5Y5/1黄灰色シルトブロック
  - 5 10YR3/1黒褐色砂泥粘質
  - 6 2.5Y3/1黒褐色砂泥 細砂混
  - 7 10YR6/2灰黄褐色砂泥 細砂~中砂混 φ1~2cmの礫多量 [池77埋土]
  - 8 10YR4/1褐灰色砂泥 細砂少量
  - 9 10YR3/2黒褐色砂泥 φ1~3cmの礫少量
  - 10 2.5Y4/1黄灰色砂泥 細砂・中砂中量
  - 11 2.5Y4/1黄灰色砂泥 細砂~中砂混 φ1~2cmの礫中量
  - 12 10YR6/2灰黄褐色砂泥+10YR4/2灰黄褐色砂泥ブロック
- 池77洲浜構築砂  
池77底構築土

泉75



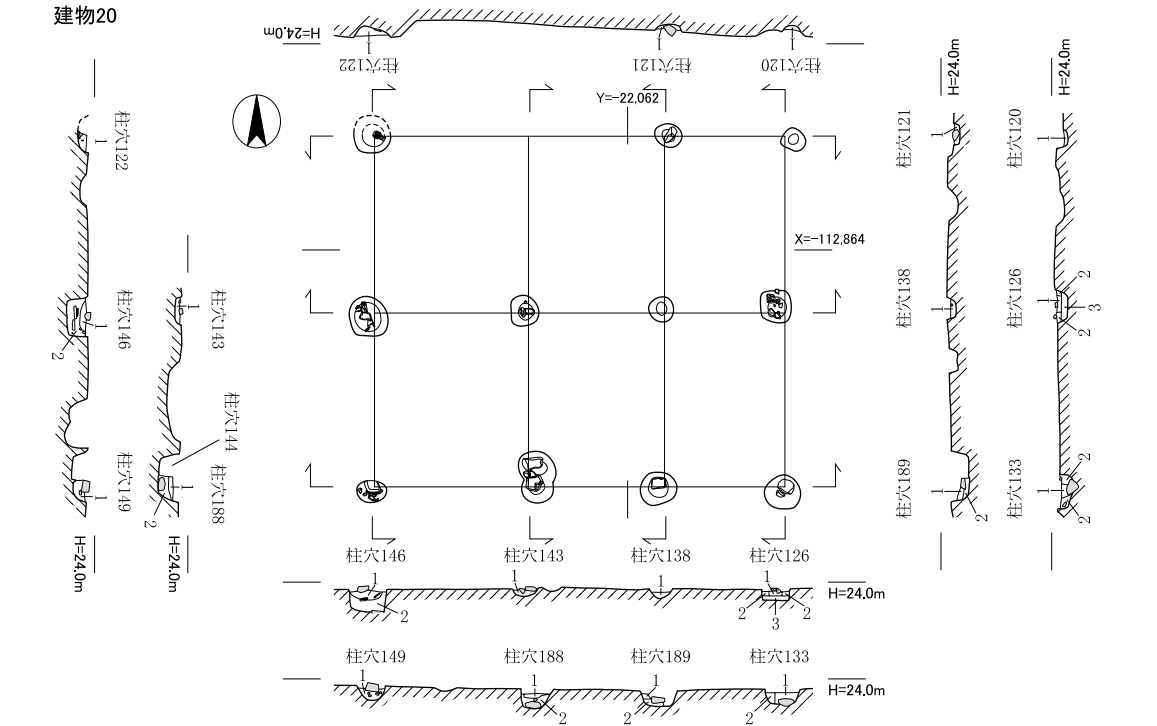
- 1 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土シルト混 φ1~5cmの礫少量混
- 2 10YR4/1灰黄褐色砂質土粘質 φ1~3cmの礫混
- 3 5Y4/1灰色粘質土
- 4 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 微砂混
- 5 5Y4/1灰色シルト粘質
- 6 2.5Y5/4黄褐色粗砂
- 7 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 粗砂混
- 8 7.5Y4/1灰色シルト~微砂+7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土混
- 9 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土
- 10 10Y5/6黄褐色粗砂礫 φ1~10cm [地山]

図35 2区泉75・土留79実測図(1:50)

### (3) 第2面の検出遺構(図版7・30)

**整地層2** 調査区の東端以外、池77の上部で検出した。厚さは約0.3mあり、中央部ではやや厚いが、それ以外の場所では薄い。池77が廃絶した後に行われた整地で、暗灰黄色砂泥を主体とし、オリーブ黒色褐色土と小礫が混じる整地層である。この上面で掘立柱建物7棟や井戸4基、土坑など多くの遺構が成立する。また、整地層の広がりには室町小路東築地心想事成線を越えているが、南北方向の溝など該当する施設の痕跡は見当たらない。平安京V期新段階から京都VI期古段階に属する土器類が出土した。

**建物20**(図36、図版30・31) 調査区北西部で検出した3間×2間の東西棟総柱掘立柱建物である。西柱筋は、室町小路東築地心想事成線から約1.7m路面側に張り出す。柱間は、東西が西から2.0m・1.8m・1.6m、南北が2.3m等間である。棟筋は、北五門・北六門界心想事成線と一致する。柱穴の平面形は、楕円形ないし方形を呈し、検出面での規模は、径0.3~0.5m、深さ0.1~0.3mある。柱穴内には径0.2mの自然石を据え根石とする。建物内南西側には、建物柱穴に接して複数の柱穴があり、建物20に付属する施設か、修復に伴う柱穴の可能性が有る。柱穴126・189には礎板や根



柱穴122  
1 10YR3/1黒褐色砂泥

柱穴121  
1 2.5Y3/2黒褐色砂泥+5Y4/1灰色砂泥微量混

柱穴120  
1 5Y4/1灰色砂泥+10YR3/1黒褐色砂泥

柱穴146  
1 5Y3/1オリーブ黒色砂泥 細砂混  
2 2.5Y2/2オリーブ黒色砂泥

柱穴143  
1 2.5Y3/2黒褐色砂泥+10YR4/1褐色砂泥微量混

柱穴138  
1 2.5Y3/2黒褐色砂泥+5Y4/1灰色砂泥微量混

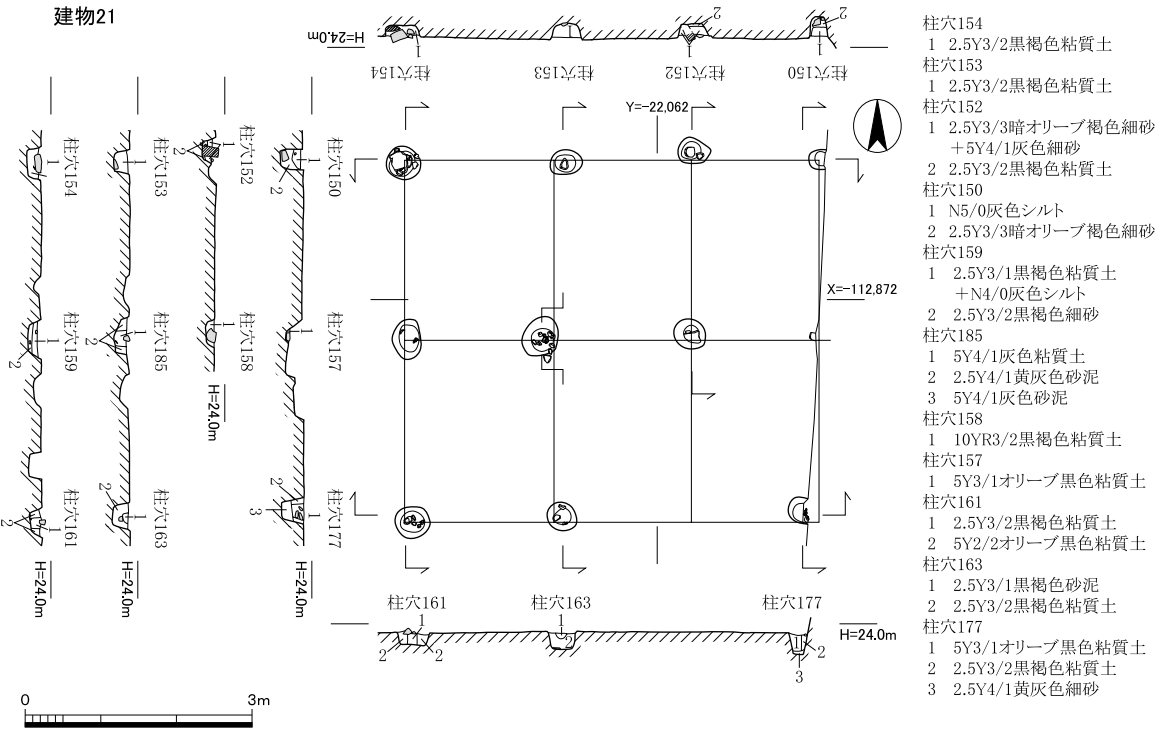
柱穴126  
1 10YR3/1黒褐色砂泥+5Y4/1灰色砂泥

柱穴149  
1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ2~6cmの礫中量

柱穴188  
1 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土  
2 10GY4/1暗緑灰色粘質土+7.5Y3/1オリーブ黒色粘質ブロック、炭・土器片少量

柱穴189  
1 2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘質土  
2 10GY4/1暗緑灰色粘質土  
+2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘質ブロック

柱穴133  
1 2.5Y3/2黒褐色粘質土  
2 10YR2/2黒褐色粘質土



柱穴154  
1 2.5Y3/2黒褐色粘質土

柱穴153  
1 2.5Y3/2黒褐色粘質土

柱穴152  
1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂  
+5Y4/1灰色細砂  
2 2.5Y3/2黒褐色粘質土

柱穴150  
1 N5/0灰色シルト  
2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂

柱穴159  
1 2.5Y3/1黒褐色粘質土  
+N4/0灰色シルト

柱穴185  
1 5Y4/1灰色粘質土

柱穴157  
1 5Y3/1オリーブ黒色粘質土

柱穴161  
1 2.5Y3/2黒褐色粘質土

柱穴163  
1 2.5Y3/1黒褐色砂泥

柱穴177  
1 5Y3/1オリーブ黒色粘質土

柱穴150  
1 5Y3/1オリーブ黒色粘質土

柱穴157  
1 5Y3/1オリーブ黒色粘質土

柱穴158  
1 10YR3/2黒褐色粘質土

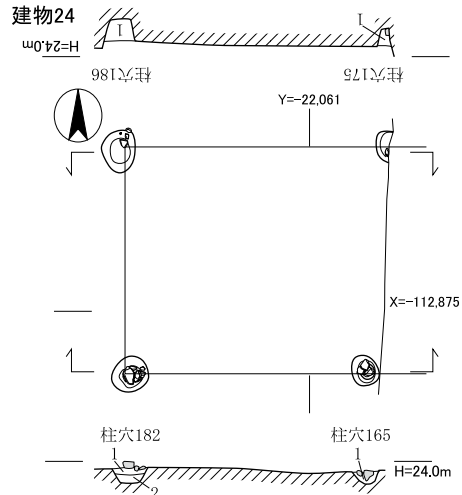
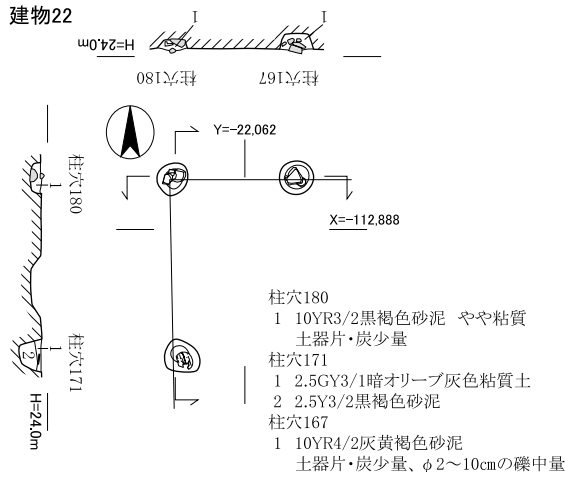
柱穴159  
1 2.5Y3/1黒褐色砂泥

柱穴161  
1 2.5Y3/1オリーブ黒色粘質土

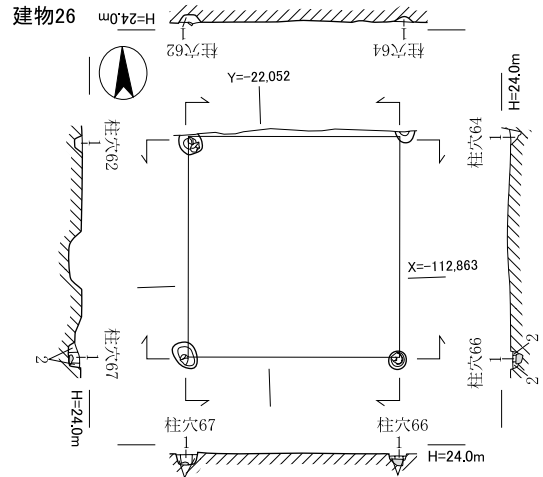
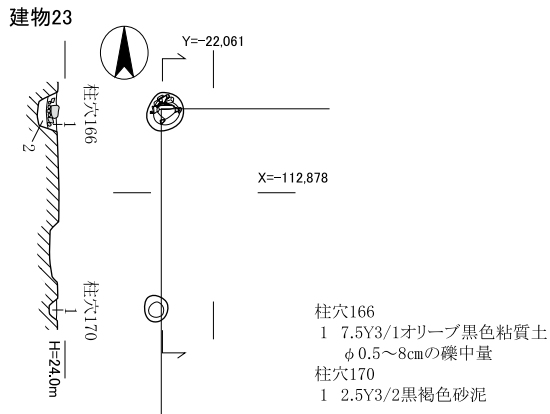
柱穴163  
1 2.5Y3/2黒褐色粘質土

柱穴177  
1 5Y3/1オリーブ黒色粘質土

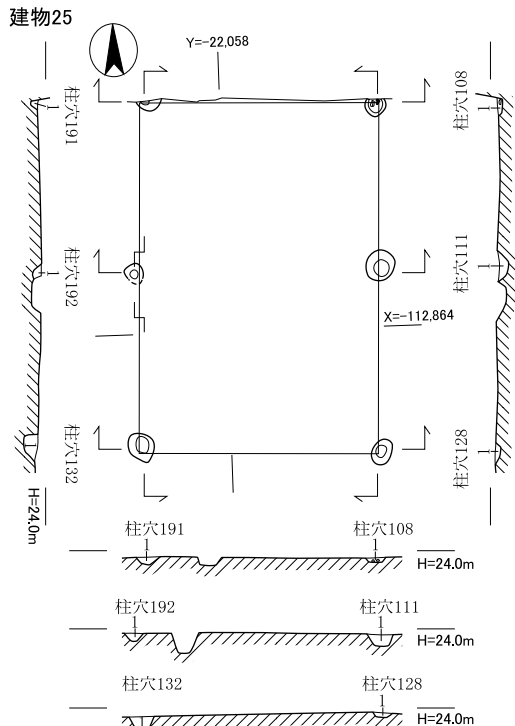
図36 2区建物20・21実測図 (1:100)



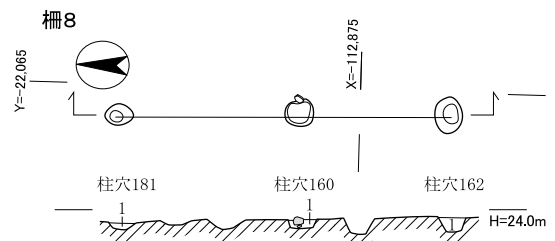
- 柱穴186  
1 2.5Y4/1黄灰色砂泥
- 柱穴175  
1 N4/0灰色細砂+  
5Y2/2オリーブ黒色細砂
- 柱穴182  
1 5Y4/1灰色粘質土  
2 2.5Y3/2黒褐色粘質土  
 $\phi$ 1~3cmの礫・炭少量
- 柱穴165  
1 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土



- 柱穴62  
1 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 細砂混
- 柱穴64  
1 2.5Y4/1黄灰色砂泥
- 柱穴67  
1 2.5Y3/1黒褐色粘質土  
2 5Y3/2オリーブ黒色粘質土+2.5GY3/1暗オリーブ灰色砂質土
- 柱穴66  
1 5Y2/1黒色粘質土  
2 5Y3/2オリーブ黒色粘質土+2.5GY3/1暗オリーブ灰色砂質土



- 柱穴191  
1 2.5Y4/1黄灰色砂泥
- 柱穴108  
1 2.5Y4/1黄灰色砂泥
- 柱穴192  
1 2.5Y4/1黄灰色砂泥
- 柱穴132  
1 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
- 柱穴111  
1 2.5Y4/1黄灰色砂泥
- 柱穴132  
1 2.5Y4/1黄灰色砂泥
- 柱穴128  
1 2.5Y4/1黄灰色砂泥



- 柱穴181  
1 2.5Y4/1黄灰色砂泥
- 柱穴160  
1 2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘質土
- 柱穴162  
1 2.5Y3/2黒褐色砂泥



図37 2区建物22~26・柵8実測図 (1:100)



石が据え付けられていた(図版31-2・3)。柱穴122・133・144・188からは、京都Ⅵ期中段階から新段階に属する土器類が出土した。

**建物21**(図36、図版31) 建物20の南側で検出した3間×2間の東西棟総柱掘立柱建物である。建物20とは南北方向に柱筋が通り、平面形・規模ともに建物20と同一の建物である。建物20・21間は約3.0mある。柱間は、東西が西から2.0m・1.8m・1.7m、南北が2.4m等間である。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.3～0.5m、深さ0.2～0.4mある。建物20・21間東側には土坑134が位置する。柱穴158には根石が据え付けられ、柱穴152からは柱材が出土した(図版31-4・5)。柱穴153・154・161・163からは、京都Ⅵ期中段階から新段階に属する土器類が出土した。

なお、建物柱穴に接して複数の柱穴があり、建物21の修復に伴う柱穴の可能性はある。

**建物22**(図37、図版32) 調査区の南西隅で検出した掘立柱建物である。3基の柱穴から復元したが、東および南は調査区外へ延長すると考えている。西柱筋は、室町小路東築地心想事成線から約0.7m宅地側にある。柱間は、東西が1.7m、南北が2.4mである。棟筋は、北六門・北七門界心想事成線に一致する。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.4～0.5m、深さ0.2～0.4mある。柱穴内には径0.3mの自然石を据え根石とする。総柱建物ではないが、柱間や柱筋などから建物20・21に近似した建物が想定できる。建物21・22間は約2.3mある。柱穴171底部には礎板が据え付けられていた(図版32-1)。柱穴180からは軒平瓦が出土した。

**建物23**(図37) 建物22に重複した位置で検出した2基の柱穴から復元した掘立柱建物である。東および南は調査区外へ延長すると考えている。柱筋は座標方向を示す。西柱筋は、室町小路東築地心想事成線から約2.0m宅地側に位置する。柱間は南北が2.6mである。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.3m・0.5m、深さ0.1m・0.3mある。柱穴166内には径0.2mの自然石を据え根石とする。建物20～22に近似した柱間を有する。

**建物24**(図37) 建物21に重複した位置で検出した4基の柱穴から復元した東西棟建物である。東は調査区外へ延長すると考えているが、検出範囲では、1間×1間以上の掘立柱建物を想定した。柱筋は座標方向を示す。西柱筋は、ほぼ室町小路東築地心想事成線上に位置する。柱間は、東西が3.3m、南北が3.0mである。

**建物25**(図37) 建物20の東側で検出した6基の柱穴から復元し、2間×1間の南北棟掘立柱建物に想定したが、北は調査区外へさらに延長する可能性がある。西柱筋は、室町小路東築地心想事成線から約4.5m東に位置する。柱間は、東西が3.1m、南北が2.3m等間である。柱筋は、座標北から東へ約2°振れる。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mあり、西側の建物に比べ、柱穴の形状は小規模で根石も伴わない。建物20・25間は、0.6mと近接しており時期差があると考えられる。建物25の範囲には複数の柱穴があるが、建物としてはまとまらない。

**建物26**(図37) 建物26に想定した柱穴は、4基ある。1間×1間のほぼ方形の掘立柱建物に想定したが、北は調査区外へさらに延長する可能性がある。建物25・26間は3mの間隔がある。柱



筋は、座標北から東へ約2°振れる。柱間は、東西が2.8m、南北が2.9mである。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.2~0.3m、深さ0.1~0.2mある。建物26の範囲には複数の柱穴があるが、建物としてはまとまらない。また、建物26の東側には柱穴は展開しない。

柵8 (図37) 建物24の西柱筋から1.9m西側で南北方向に柱穴が3基並び、柵状を呈する。柱

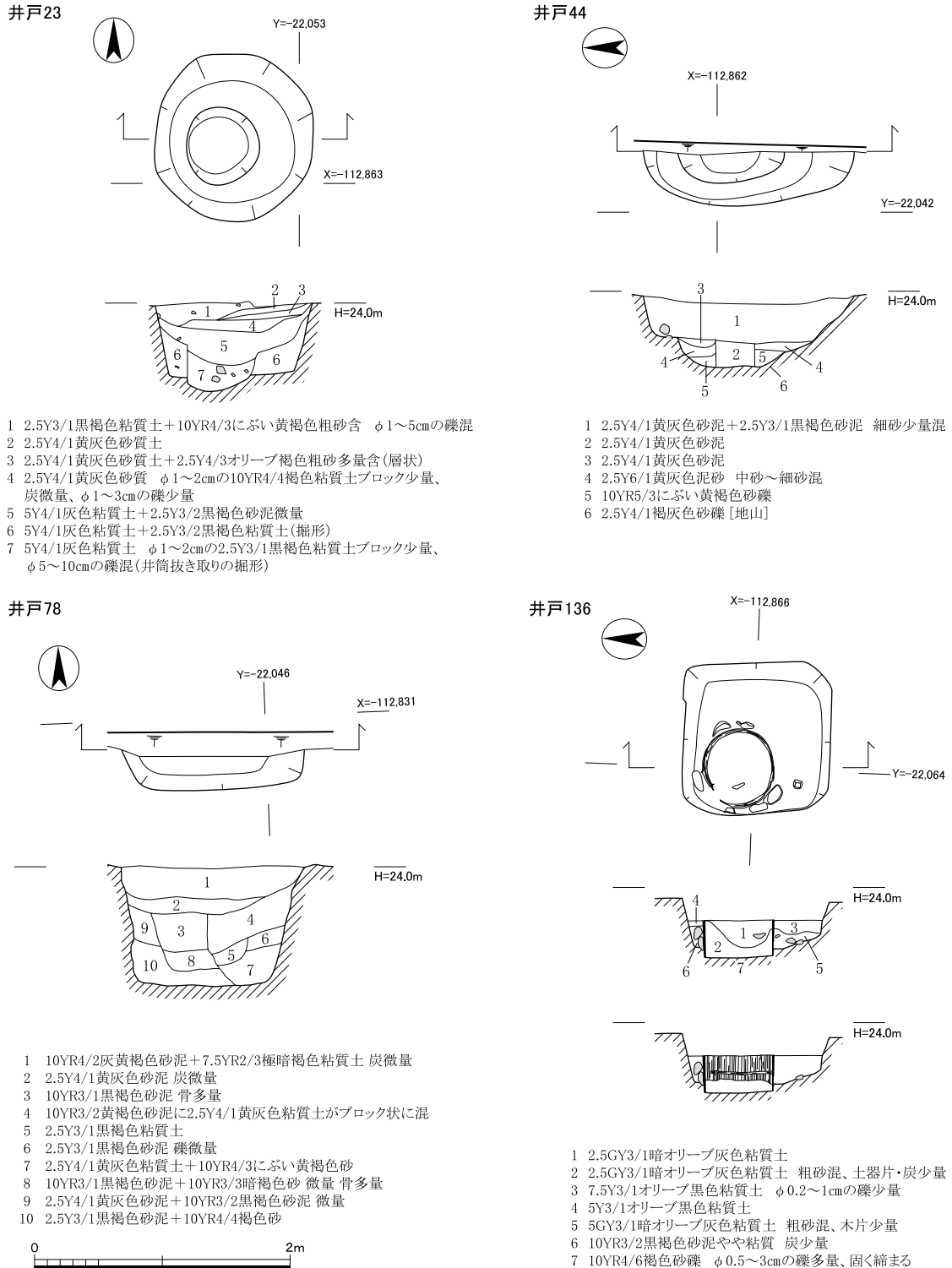


図38 2区井戸23・44・78・136実測図(1:50)

間は、南から2.0m・2.3m。室町小路東築地心想定線から道路側へ1.7mに位置する。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mある。建物24の西側に位置することから、同建物に伴う柵（目隠し塀）であろう。

**柱穴群**（図版32・33） 調査区の全体に分布している。建物として復元できた柱穴以外にも多くの柱穴がある。調査区の西半部に多く集中しており、西半部に建物が建ち並ぶことがわかる。一方、東半には比較的少ないことがわかる。ここは地盤が非常に軟弱なため、柱穴の底には根石や礎板などの柱沈下防止の工夫が盛んに施されている。柱穴71・72・139などには根石を据え付け（図版32-2・3）、柱穴115・116・178などには建築部材や曲物底部を転用した礎板を据え付けている（図版32-4・5、33-1）。ここでは、掲載した主な遺物が出土した柱穴を記載する。柱穴61・115・116・129・147から礎板が出土した。柱穴81から乾元大寶が出土した。

**井戸23**（図38、図版33） 調査区の北端中央で検出した。南北約1.3m、東西約1.2m円形を呈する。埋土は灰色粘質土層などで礫を少量含む。底部には曲物が抜き取られた痕跡がみられる。深さは約0.7mあり、底部の標高は23.30m。

**井戸44**（図38） 調査区の北東隅で検出した。南北約1.2m、井戸の東半は調査区外となる。埋土は黄灰色砂泥などで礫を少量含む。底部には径約0.3m、高さ約0.2mの小型曲物が据え付けられている。深さは約0.6mあり、底部の標高は23.40m。京都VI期新段階に属する土器類が出土した。

**井戸78**（図38） 調査区の北端東寄りで検出した。東西約1.4mあり、井戸の北半は調査区外となる。埋土は黒褐色砂泥などで礫を少量含む。木枠の痕跡が残る。深さは約0.9mあり、底部の標高は23.10m。ニホンジカの骨が多量に出土し、骨の加工製品も出土した。京都VI期新段階に属する土器類が出土した。

**井戸136**（図38、図版33） 調査区の北部西端で検出した。南北約1.2m、東西約1.2mの隅丸方形を呈する。掘形埋土はオリーブ黒色粘質土層などで礫を少量含む。底部には径約0.6m、高さ約0.3mの曲物が据え付けられている。深さは約0.5mあり、底部の標高は23.45m。京都VI期新段階に

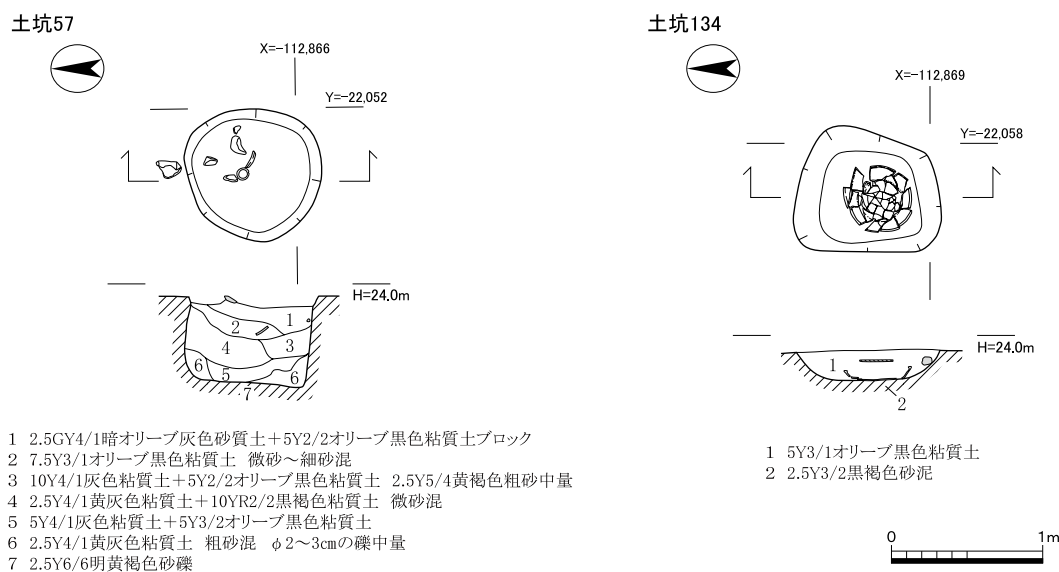


図39 2区土坑57・134実測図（1：50）

属する土器類が出土した。

土坑57(図39) 調査区の北部中央で検出した。径約1.4mの円形を呈する。深さは約0.6mある。埋土上層はオリーブ黒色粘質土層などで細砂が混じる。下層は灰色や黄灰色の粘質土層となる。埋土内からは土器類と共に常滑焼甕の破片が多く出土した。

土坑134(図39、図版33) 調査区の北部西寄りで検出した。南北約1.0m、東西約0.8mの歪な隅丸方形を呈する。深さは約0.2mある。掘形埋土はオリーブ黒色粘質土層で礫を少量含む。底部には口径36.6cm、高さ10.3cmの瓦器盤が正位で据え付けられている。深さは約0.2mある。

土坑186(図版33) 調査区の南部西寄りで検出した埋納小土坑である。南北約0.6m、東西約0.25mの楕円形を呈する。深さは約0.3mある。埋土はオリーブ黄灰色砂泥である。五銖銭や宋銭が8枚重なって納められていた。

(4) 第1-2面の検出遺構(図版8・34)

整地層1 調査区の中央部分から西側の整地層2の上位で検出した。厚さは0.1~0.3mある。黄灰色砂泥から細砂を主体とする整地層で、第2面とした平安時代後期の整地層2の上にさらに行われた整地である。下層の池77上面の整地層2が軟弱であるため、再度整地を行ったがこの整地面で建物などを建てた痕跡は見られない。また、室町小路東築地に関連する南北方向の溝などの遺構は検出していない。出土遺物は京都VI期古段階から新段階に属する。

(5) 第1-1面の検出遺構(図版8・34)

鋤溝群 室町時代から江戸時代の東西・南北方向の耕作溝(幅0.2~0.5m、深さ0.2~0.3m)が調査区全面に展開する。溝底部には竹材を敷き、小礫を充填させる暗渠の構造をもつものも多い。埋土は黒褐色砂泥である。これらの溝は、おおむね東西方向の溝が古く、南北方向の溝群が新しい。また、壁断面観察によれば、明治以降の暗渠も多くみられる。ここでは、掲載した主な遺物が出土した溝を記載する。溝1からは、永楽通寶が出土した。溝36からは、景祐元寶・皇宗通寶が出土した。溝58からは、江戸時代の土器類と共にラピスラズリの珠(図67-石2)が出土した。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃										
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV										
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

## 第4章 遺物

### 1. 遺物の概要

調査では1区・2区合わせて整理用コンテナに179箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器類・瓦類・木製品・骨製品・石製品・金属製品などの種類がある。出土遺物の大半は土器類が占め、次いで瓦類と木製品が続き、他の種類の遺物は少ない。

古墳時代以前の遺物には、弥生土器や古墳時代の須恵器などがあるが、小片が多く、量も少ない。烏丸町遺跡に関わる遺物とみられる。

平安時代の遺物には、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器・輸入陶磁器などの土器類がある。他には、瓦類・銭貨・木簡・木製品・石製品などがある。主に1区の池1121・1160、2区の池77・80などから出土した。

鎌倉時代の遺物には、土師器・瓦器・輸入陶磁器などの土器類がある。他には、銭貨・木製品・石製品などがある。主に1区の井戸27・425・555・950、土坑470・665、整地層1、2区の整地層1などから出土した。

室町時代の遺物には、土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器などの土器類がある。他には、銭貨・木製品・石製品などがある。主に耕作溝から出土した。

以下では、時代の古いものから順に、遺物の概要を述べる。個々の遺物の詳細については、巻末の遺物観察表（観察表1～7）に掲載した。

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代～古墳時代	弥生土器、土師器、須恵器		土師器1点、須恵器4点		
奈良時代	瓦類		軒丸瓦2点、軒平瓦3点		
平安時代前期～中期	土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、銭貨、金属製品、石製品		土師器25点、須恵器18点、黒色土器3点、白色土器1点、灰釉陶器7点、緑釉陶器5点、輸入陶磁器1点、軒丸瓦5点、軒平瓦6点、木製品48点、銭貨2点、石製品2点		
平安時代後期～鎌倉時代	土師器、須恵器、白色土器、山茶椀、瓦器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、銭貨、金属製品、石製品		土師器341点、須恵器5点、白色土器4点、山茶椀4点、瓦器26点、輸入陶磁器19点、軒丸瓦5点、軒平瓦10点、埴1点、木製品64点、銭貨21点、石製品13点、骨製品1点		
室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、金属製品、石製品				
江戸時代以降	土師器、施釉陶器				
合計		179箱	650点 (27箱)	1箱	151箱

## 2. 土器類 (図40～52、図版35～39、観察表1)

古墳時代以前の土器 (図40-1～5) 1は須恵器杯蓋。天井部と口縁部の境界に稜をもつ。口縁部は欠損している。天井部は全面ヘラケズリ。5世紀。2区池80下層から出土した。2は須恵器杯蓋。小片のため、口径は不明。天井部と口縁部の境界に<sup>1)</sup>にぶい稜をもつ。TK10型式併行か。

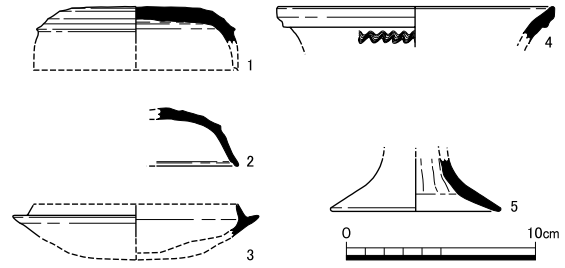


図40 古墳時代の土器実測図 (1:4)

1区池1121から出土した。3は須恵器杯身。立ち上がりは低く、内傾する。受け部は凹線がめぐる。TK209型式併行か。2区池80から出土した。4は須恵器壺の口縁部か。小片のため、詳細は不明。口縁部下に7条の櫛描波状文がめぐる。2区断割り砂礫層から出土した。5は土師器高杯の脚部。内外面の磨滅が激しい。1区池1121から出土した。

### (1) 1区出土土器類

**流路1158** (図41-6・7、図版35) 土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。ほとんどが小片であり、図示できるものは少ない。6は緑釉陶器段皿。口縁端部は欠損。須恵質の素地に緑黄色の釉を全面に施す。7は灰釉陶器耳皿。内面から外面の折り曲げ部に施釉されている。出土遺物は平安京Ⅱ期に属する。

**池1121** (図41-8～23、図52-450・452・462、図版35) 土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器などがある。出土遺物は、平安京Ⅳ期が中心であるが、前後の時期の土器が混じる。11～19は土師器皿N。11～13は、二段ナデ痕跡が明瞭に残り、口縁端部は外反する。平安京Ⅳ期に属する。14は口縁部から体部外面のナデによる二段の浅い窪みを持ち、立ち上がった口縁端部が断面三角形を呈する。平安京Ⅴ期に属する。15～19は京都Ⅵ期に属する。口径8.6cm、器高1.5cm前後の土師器皿N小 (15・16)、口径12cm台、器高2cm台の皿N大 (17・18) である。19は口径11.4cmで、口径に対して器高が高い (3.0cm)。8は灰釉陶器皿。浅い体部を持つ。口縁部下に鈍い稜線が付く。内面全面施釉。9・10は須恵器。9は皿。口縁部は平らな底部から外上方へ直線的にのびる。10は円面硯。縁と側面の突帯は欠損している。擦面は平滑でよく使用されている。脚部は縦方向の透かし孔とヘラによる縦線を刻んだものが配置されている。20は黒色土器蓋。口径6.2cmに1.0cmの摘みが付く。外面は丁寧なヨコ方向のヘラミガキを施す。21～23は瓦器碗。口縁端部は内面に1条の凹線をめぐらす。21は外面粗いミガキ、内面丁寧なミガキで、底部に暗文を施す。22・23は内面ヨコ方向のミガキ。23は炭化物が付着している。450・452は平底無高台の青磁皿。内面に櫛描文を施す。462は青磁碗底部。

**土坑999** (図41-24、図版35) 24は須恵器甕である。口径27.6cm、現高35.8cmを測る。焼成は軟質で、底部は欠損する。外面タタキ成形。体部上半は器面の剥離が著しい。粘土紐の痕が認めら

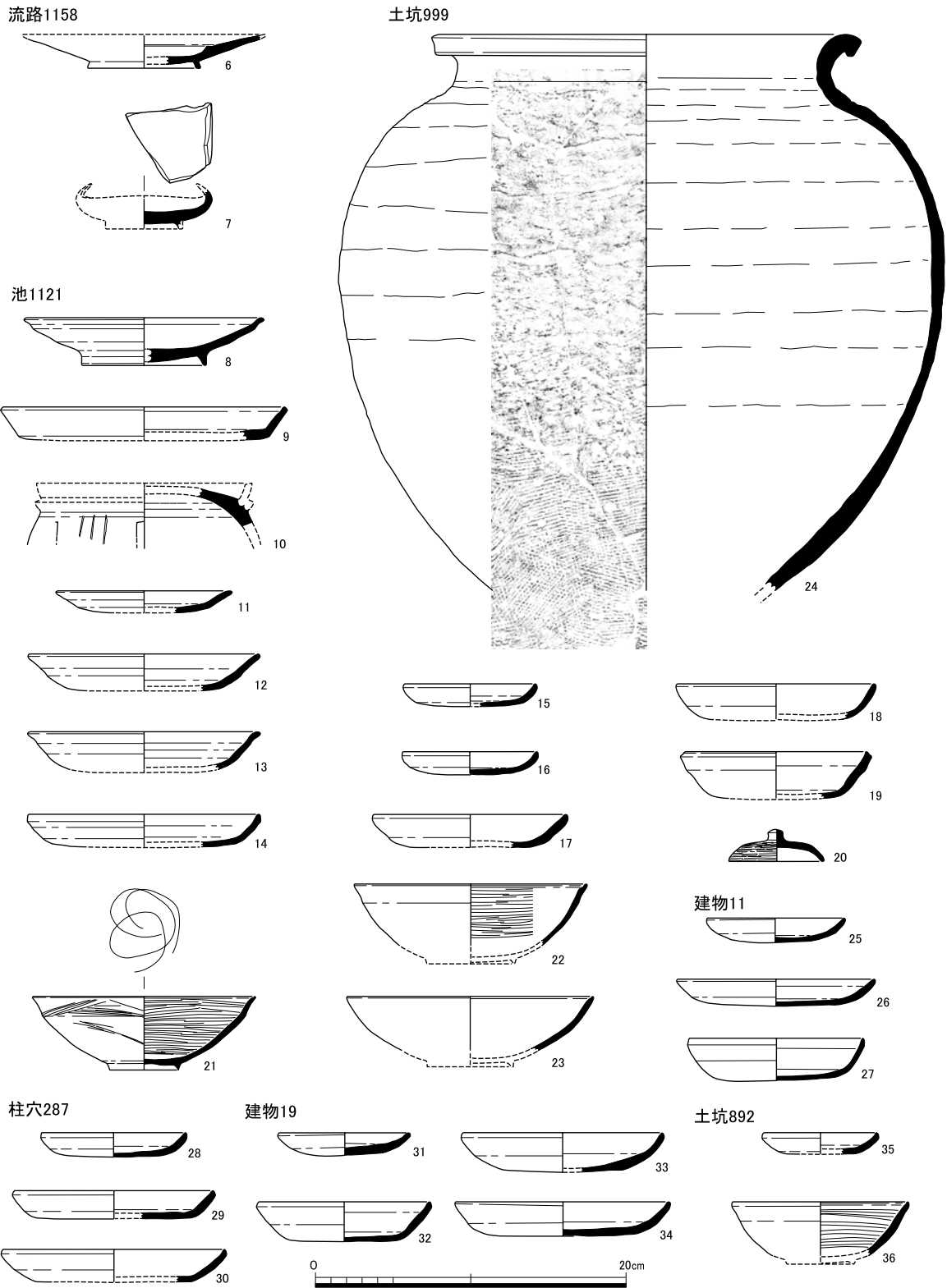


図41 1区 流路1158、池1121、建物11・19、柱穴287、土坑892・999出土土器実測図（1：4）

れる。

建物11（図41-25～27） 土師器皿Nと皿Sがある。25は皿N小、26は皿N大である。27は口径11.2cmの皿S中である。出土遺物は京都VI期中段階に属する。

柱穴287（図41-28～30） 28～30は土師器皿N。口径9cm台の皿N小（28）と、口径13cm前

後の皿N大(29・30)がある。  
出土遺物は京都VI期中段階に  
属する。

**建物19**(図41-31~34)

31~34は土師器皿N。口径8.6  
cmの皿N小(31)と、口径12  
~13cm台の皿N大(33・34)  
があるほか、口径11.0cmで口  
径に対して器高が高いもの  
(32)がある。出土遺物は京都  
VI期中段階に属する。

**土坑892**(図41-35・36)

土師器、須恵器、瓦器があ  
る。土師器皿N小(35)は、口  
径7.2cm、器高1.4cm。瓦器椀  
(36)は口径11.4cmとやや小振  
りである。口縁部ヨコナデ。  
内面は丁寧なミガキを施す。  
口縁端部内面に1条の凹線を  
めぐらす。出土遺物は京都VI  
期中段階に属する。

**井戸425**(図42-37~42、

図版36) 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などがある。土師器皿Nは口径8~9cmの皿N小(37・38)と、口径13cm台の皿N大(39)がある。40は土師器皿S大。須恵器には、東播系の鉢(41)がある。底部から直線的に開き、口縁部は外反して端部は立ち上がる。瓦器羽釜(42)は口径26.2cmで、やや内傾する高い口縁部、幅広い鏝を持つ。出土遺物は京都VI期古段階から中段階に属する。

**井戸7**(図42-43~51、図版36) 土師器、白色土器、須恵器、瓦器などがある。42~50は土師器皿Nで、口径により大小がある。43~46は8~9cm台の皿N小である。底部から口縁部が短く開き、端部は丸く収める。平らな底部から口縁部に直線的に外傾するもの(46)もある。45は口縁端部全面に煤が付着する。47~50は口径13~14cm台の皿N大である。底部と体部の境界が明瞭になる。51は白色土器高杯の脚部である。杯部の中央部は窪む。タテ方向の幅の狭いヘラケズリを施す。出土遺物は京都VI期中段階に属する。

**整地層1**(図43-52~75、図51-431~433、図版40) 土師器、須恵器、瓦器、山茶椀、輸入陶磁器、焼締陶器などがある。52・53は土師器皿Acである。口径8.0cm前後、器高1.2cmである。

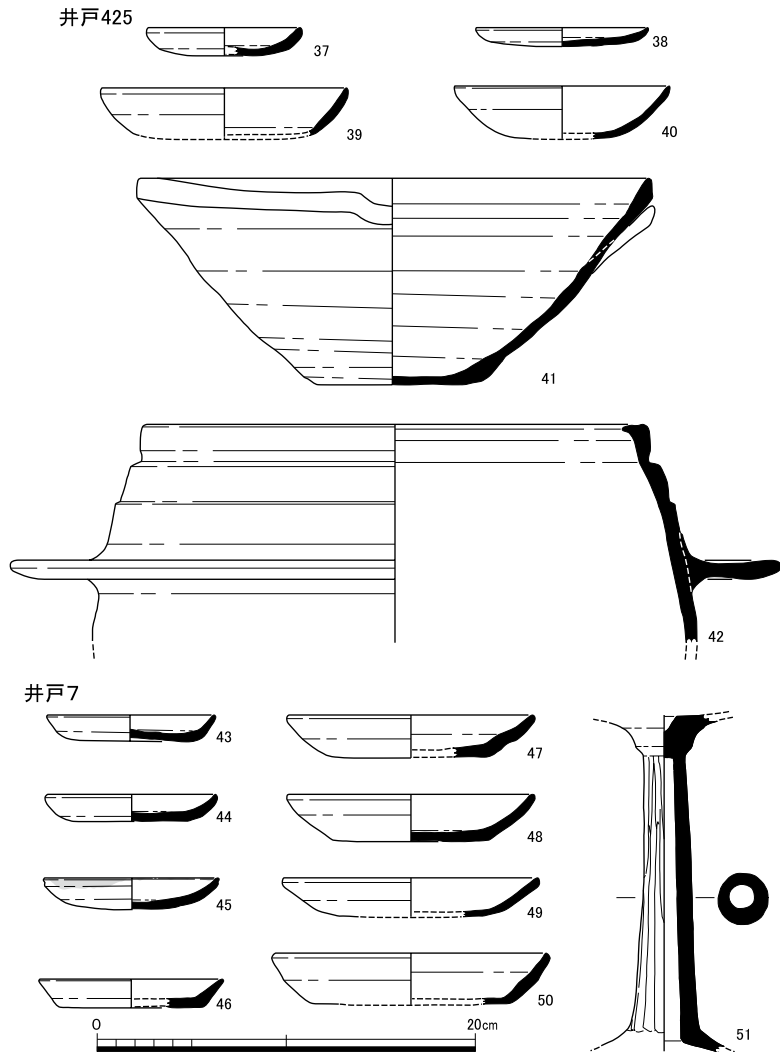
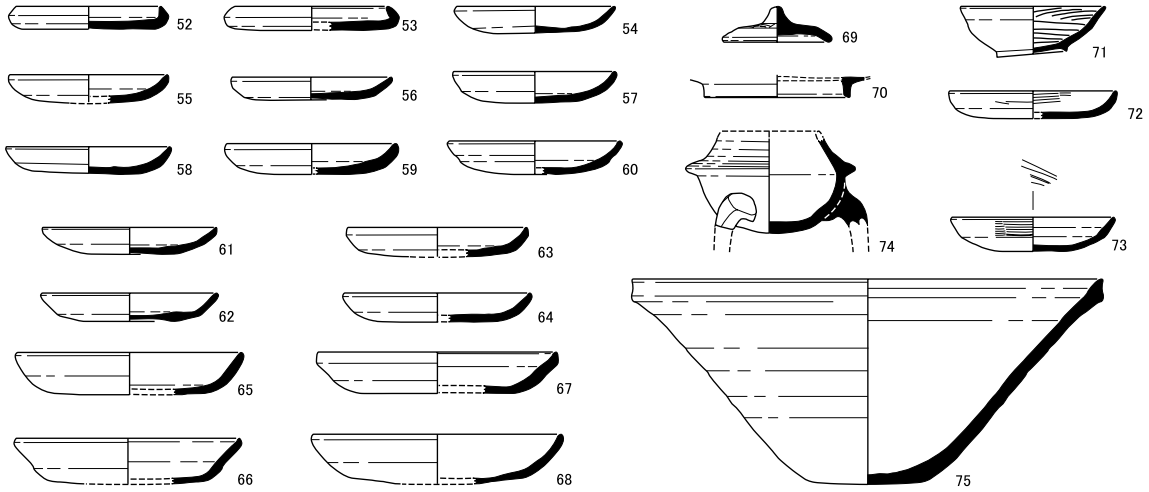
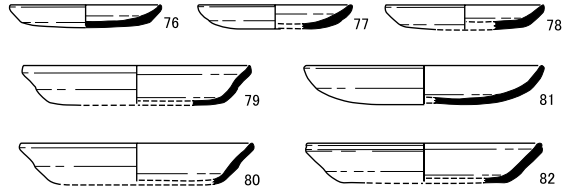


図42 1区 井戸7・425出土土器実測図(1:4)

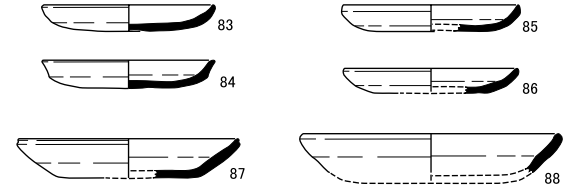
整地層1



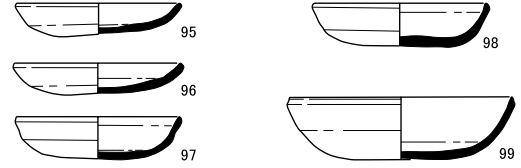
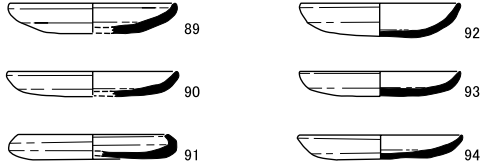
建物1



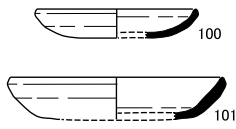
建物5



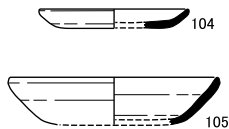
建物2



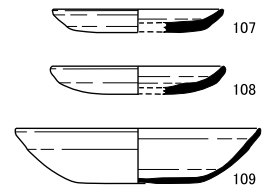
建物3



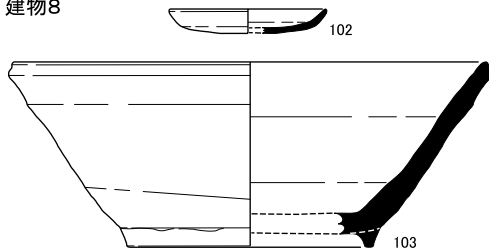
柵6



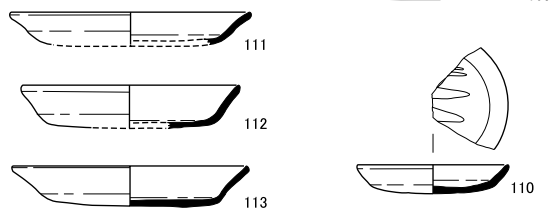
柵7



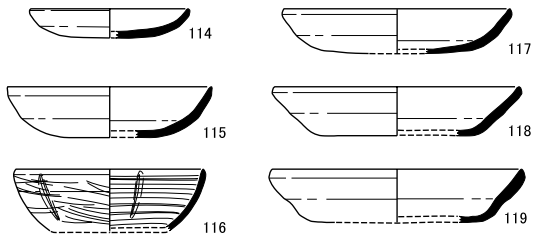
建物8



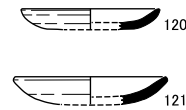
建物9



柱穴575



柱穴708



柱穴737

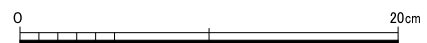
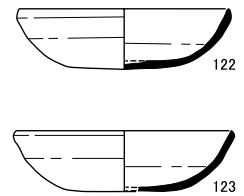


图43 1区 整地層1、建物1~3·5·8·9、柵6·7、柱穴575·708·737出土土器実測図(1:4)



54～64は土師器皿N小。口径8～9cm台、器高1.5cm前後である。65～68は土師器皿N大。口径が11cm台のもの(65・66)と、13.0cm前後のもの(67・68)がある。口縁端部は三角形状を呈するものと丸く収めるものがある。69は土師器蓋。乳頭状の摘みが付く。外面天井部は不定方向の粗いミガキを施す。70は土師器の高台部。磨滅著しく、詳細は不明である。71～74は瓦器である。椀(71)は小型で口縁部ヨコナデ。内面は口縁部が細いミガキ、体部が太いミガキを施す。72・73は皿である。72は口縁部内外面ミガキ、73は外面を丁寧なミガキ、内面ヨコナデ。いずれも底部に暗文が施されている。74はミニチュアの羽釜。体部に三足が付く。口縁外部一筆描きのヘラ描き沈線。75は須恵器鉢。内面体部下半から底部は、磨り減り痕が顕著に認められる。その他、墨書土器(431～433)がある。432は緑釉陶器椀で「政□」と判読できたが、山茶椀皿(431)、土師器皿(433)は判読できない。出土遺物は京都VI期新段階からVII期古段階に属する。

**建物1** (図43-76～82) 76～82は土師器皿。76～78は皿N小で、口径8cm台、器高1.2cm前後である。79～82は皿N大で、口径12cm台、器高2.1cm前後である。76は柱穴468、77は柱穴476、78～82は柱穴474出土。出土遺物は京都VI期新段階からVII期古段階に属する。

**建物5** (図43-83～88) 83～88は土師器皿。83～86は皿N小で、口径は9cm台、器高1.3～1.5cm。87・88は皿N大。83・84・86は柱穴265、85・87・88は柱穴254出土。出土遺物は京都VI期新段階からVII期古段階に属する。

**建物2** (図43-89～99、図版36) 89～99は土師器皿。89・90・92～96は皿N小で、口径8cm台、器高1.2～1.7cm。91は皿Ac。97・98は皿S小で、口径9.0cm前後、器高2.3cm。99は皿S大。89・90は柱穴431、91～99は柱穴602出土。出土遺物は京都VI期新段階からVII期古段階に属する。

**建物3** (図43-100・101) 100は土師器皿N小で、口径8.4cm、器高1.5cm。101は土師器皿N大で、口径11.2cm。100は柱穴673、101は柱穴671出土。出土遺物は京都VI期新段階からVII期古段階に属する。

**建物8** (図43-102・103、図版36) 102は土師器皿N小。103は山茶椀鉢。貼り付け高台で、体部は直線的に開き、口縁端部は体部の厚みのまま単純に収める。内面体部下半から底部に磨り減り痕が認められる。102は柱穴155、103は柱穴61出土。出土遺物は京都VI期新段階からVII期古段階に属する。

**柵6** (図43-104～106) 104は土師器皿N小。105・106は土師器皿N大で、口径11.0～12.0cm。104・106は柱穴176、105は柱穴189出土。京都VII期古段階に属する。

**柵7** (図43-107～110) 107～109は土師器皿。107・108は口径9.0cmの皿N小。109は皿S大。瓦器皿(110)は口縁部内外面ヨコナデで、底部内面に暗文を施す。107は柱穴154、108は柱穴145、109は柱穴131、110は柱穴159出土。出土遺物は京都VI期新段階からVII期古段階に属する。

**建物9** (図43-111～113) 111～113は土師器皿N大で、口径11.6～12.8cm。体部の立ち上りは、直線的に外上方へのびる。111は柱穴124、112・113は柱穴132出土。出土遺物は京都VI期新段階からVII期古段階に属する。

**柱穴575**(図43-114～119) 土師器、瓦器、輸入陶磁器がある。土師器には皿N小(114)、皿

N大（117～119）、皿S中（115）がある。皿N小は口径8.4cm、器高1.6cm。皿N大は口径12.0～13.0cm前後、器高2.6cm。口縁端部は断面三角形を呈するものと、丸く収めるものがある。皿S中はやや丸みのある底部から体部がわずかに内弯気味に立ち上がる。瓦器椀（116）は平底の底部から口縁部が屈曲して内弯気味に開く。内外面に粗いミガキを施す。体部外面に輪花のヘラ痕が認められる。出土遺物は京都VI期新段階からVII期古段階に属する。

**柱穴708**（図43-120・121） 土師器、輸入陶磁器がある。120・121は土師器皿N小で、口径7.2・8.0cmである。他に、青白磁合子蓋の小片が出土している。出土遺物は京都VI期新段階からVII期古段階に属する。

**柱穴737**（図43-122・123） 122・123は土師器皿S大で、口径11cm台。やや丸みのある底部から体部は、内弯しつつ立ち上がる。口縁端部は上方にわずかに摘み上げ、丸く収める。出土遺物は京都VI期新段階からVII期古段階に属する。

**井戸1063**（図44-124～128、図52-449） 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などがある。土師器皿N小（124～127）は口径7.8～9.2cm、器高1.4cm前後。皿N大（128）は口縁端部が断面三角形で、体部はやや外反する。青磁皿（449）は平底無高台で、内面には櫛描文が施される。外面体部から底部は露胎である。出土遺物は京都VI期新段階からVII期古段階に属する。

**井戸450**（図44-129～134） 土師器、白色土器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などがある。土師器皿N小は底部から口縁部が短く開き、端部を丸く収めるもの（130）と、口縁部が直線的に外傾するもの（129・131）がある。皿N大（132）は底部から体部がわずかに屈曲して開き、口縁端部は断面三角形を呈する。133は白色土器高杯の脚部。ケズリは12面。瓦器椀（134）は口縁部ヨコナデ、内面ヘラミガキ。出土遺物は京都VII期古段階に属する。

**井戸1064**（図44-135、図52-451・458） 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などがある。瓦器鍋（135）は蓋の受けが付くもので、内面にハケメ調整を施す。輸入陶磁器は青磁皿（451）・椀（458）がある。皿は平底無高台で、体部下半は露胎である。椀は見込みに凹線がめぐる。削り出しの輪高台で、高台部は露胎である。出土遺物は京都VII期に属する。

**井戸27**（図44-136、図版36） 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器などがある。136は瓦器小壺。口径2.4cm、器高4.0cm。外面ナデ調整で、胴部上半に暗文を施す。出土遺物は京都VII期古段階に属する。

**井戸950**（図44-137～140、図版36） 土師器、須恵器、瓦器がある。137は土師器皿Sc。口径6.5cm、器高1.2cm。土師器皿N小（138～140）は、口径7cm台のもの（138）と口径9cm台（139・140）のものがある。出土遺物は京都VI期新段階からVII期古段階に属する。

**井戸555**（図44-141～193、図版36） 井戸555出土土器は整理箱に16箱ある。大半が土師器であり、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器なども出土しているが、いずれも小片および少量であり、図示できるものはない。141～193は土師器皿。141～158は皿N小である。底部から口縁部が短く開くものと、底部から口縁部が外反するもの（154～158）がある。口径7.3～8.8cm、器高1.8cmである。160～167は皿N大である。体部上半から口縁部にかけ外反し、底部周縁から体部下部の壁厚

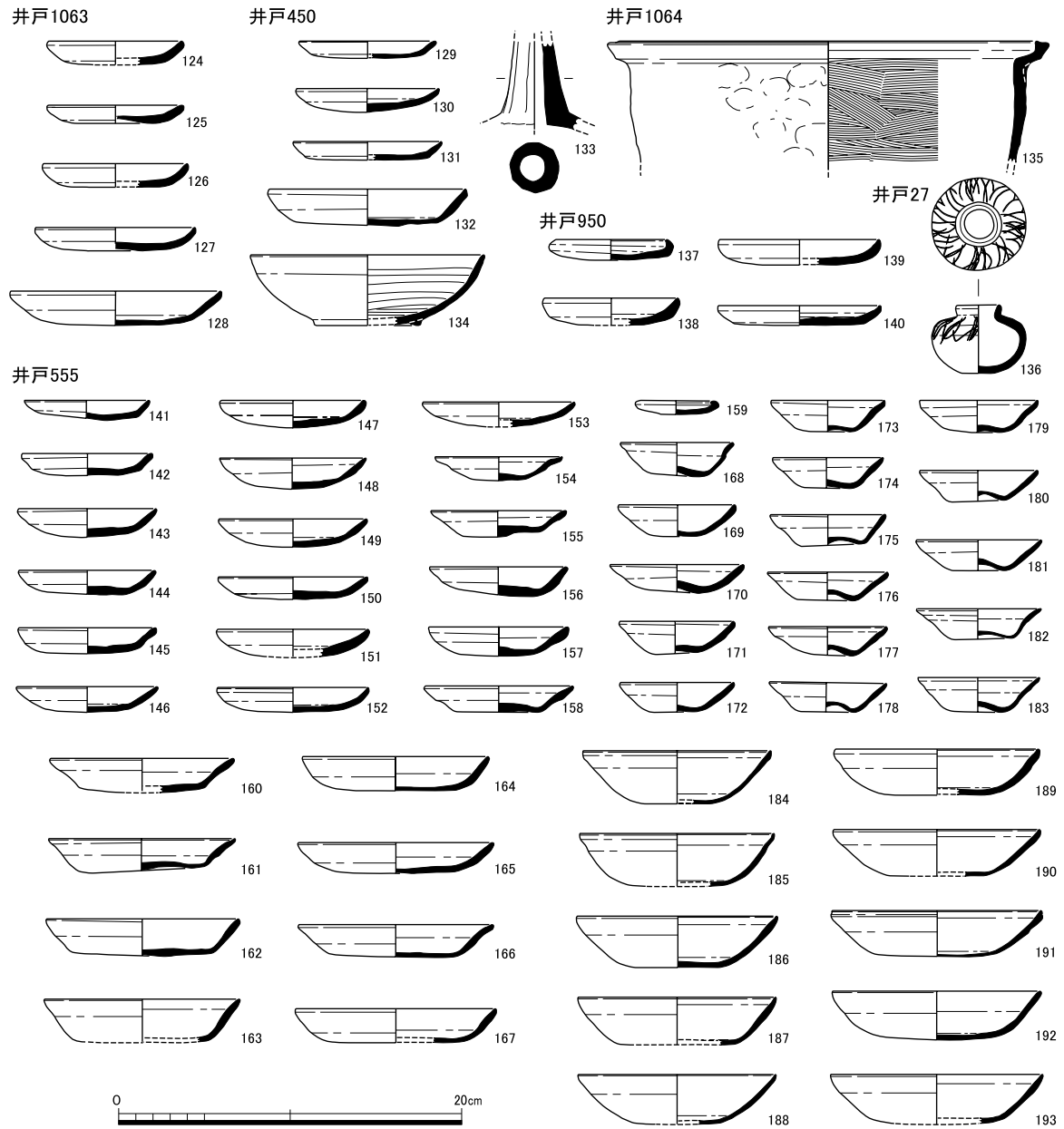


図44 1区 井戸27・450・555・950・1063・1064出土土器実測図（1：4）

が薄くなる。口径10～11cm台、器高2cm前後である。159は皿Acである。小型化しているため、口縁部の立ち上がりが小さい。口径4.1cm、器高0.8cmである。168～183は皿Shである。底部中央がわずかに上げられたものから、底部中央を明瞭に押し上げたものまでである。口径6～7cm前後、器高1.7～2.0cmである。なお、器高の低く浅いタイプのもの（170）もある。184～193は皿S大である。底部が広めの杯形に近いものと、椀形に近いものがある。口径は11～12cm台で、器高は3.0cm前後である。出土遺物は京都Ⅶ期中段階から新段階に属する。

土坑576（図45 - 194～224、図52 - 454、図版37）土師器、瓦器、輸入陶磁器がある。土師器には、皿Ac（194・195）、皿N小（196～205）、皿N大（206～216）、皿S大（217・218）、羽釜（219）がある。皿Acは底部から口縁端部が内側に屈曲する。口径6.7～7.0cm。皿N小は底部から口縁部が短く開き、端部は丸く収める。口径は8.3～9.1cmで、器高は1.6cm前後である。皿N大は

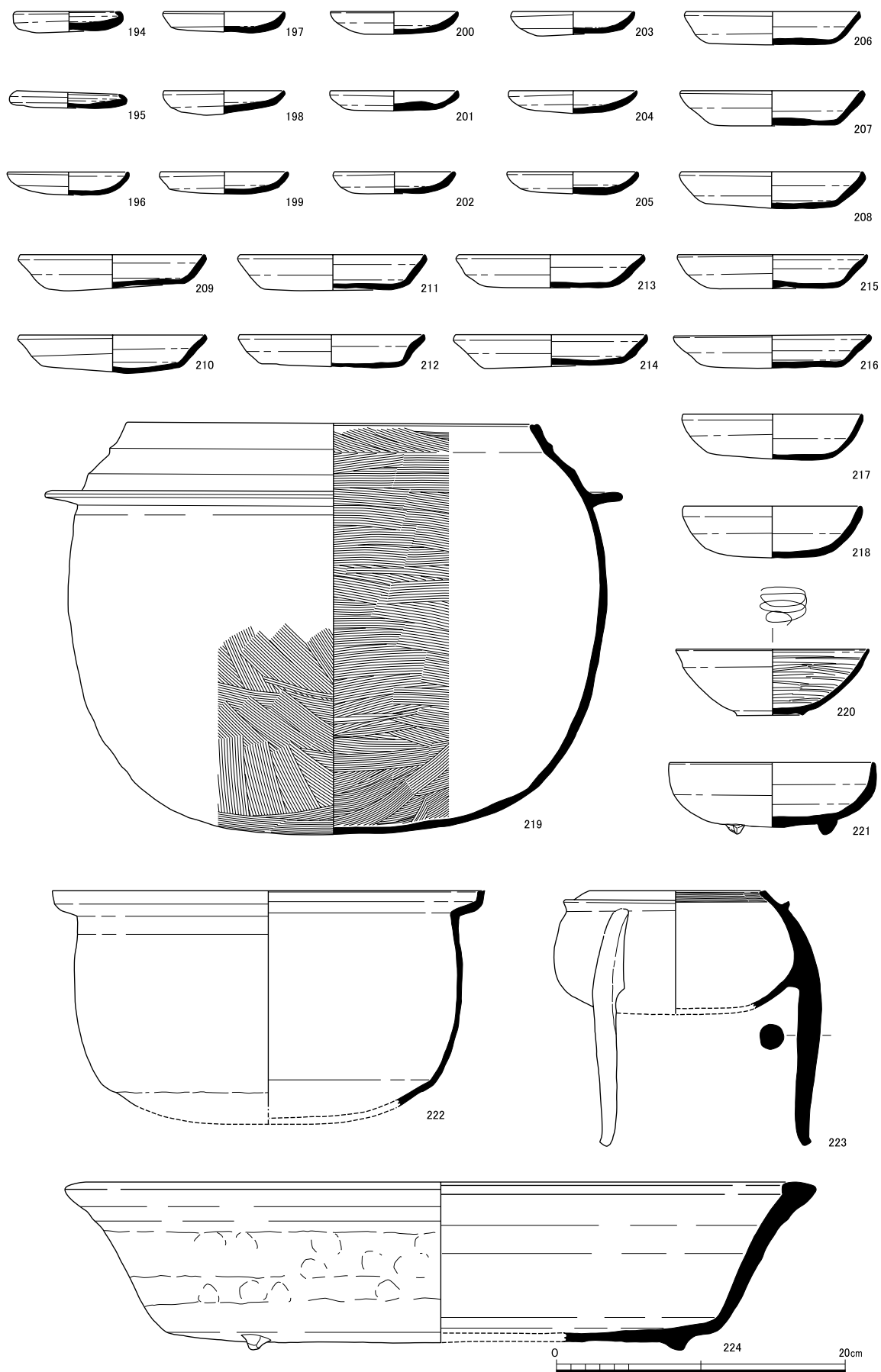


图45 1区 土坑576出土土器实测图 (1 : 4)

口径12～13cm台、器高は2.3cm前後である。三角形状を呈する口縁端部が丸みを増したもの(207・209・215・216)や、体部が外反状を呈するもの(212)がある。皿S大は器高が高く、底部から体部の立ち上がり部分に丸味を持つ。口径12.3cm前後、器高3.2～3.5cm。羽釜(219)は口径28.6cm、器高28.6cmの大型品である。口縁部は内傾し、体部は強く膨らむ。瓦器には椀(220)、鉢(221)、羽釜(223)、鍋(222)、火鉢(224)がある。椀は体部が内弯気味に開き、口縁部はやや外反する。口縁部ヨコナデ。内面粗いミガキ。底部に暗文を施す。鉢は底部に円錐状の足が付く。羽釜は口径12.2cm、高さ17.7cm。内傾する口縁部下部に短い鏝を付ける。体部外面に三足が付く。鍋は蓋の受けが付くもので、内面の調整は丁寧で、ハケメをほとんど残さない。火鉢は口径49.0cmの大型品である。平底で低い足が付く。体部は底部から屈曲して、外上方へ開き、口縁部は厚く水平に近い上端部を持つ。輸入陶磁器は青磁皿(454)がある。平底無高台で、内面に櫛描文を施す。口縁端部には、煤が厚く付着している。出土遺物は京都Ⅵ期中段階に属する。

土坑460(図46-225～232、図版38) 225～227は土師器皿N小。225は口縁端部に煤付着。230は口径に対して深みが強く、白色系の土師器(皿S)に類似している。231・232は土師器皿S。228・229はロクロ成形の白色土器皿で、底部外面に糸切り痕を残す。228は口縁端部を両側から内に押えた耳皿。出土遺物は京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する。

土坑62(図46-233～240) 土師器、瓦器がある。233～235は土師器皿N小。口径7.8～8.5cmで、底部から口縁部が短く開き、端部は丸く収める。237・238は体部の立ち上がりが直線的な皿N大。236は口径10.0cmで平らな底部から口縁端部が上方に立ち上がる。瓦器小椀(239)は内面やや密なミガキで、口縁端部内面に1条の凹線をめぐらす。瓦器椀(240)は内面に太く粗いミガキを施す。口縁部は丸く収めず、わずかに肥厚する。出土遺物は京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する。

土坑652(図46-241～246、図版38) 土師器皿には口径8.6cm、器高1.4cmの皿N小(241・242)と口径12.4～13cm台の皿N大(243～246)がある。皿N大は体部がやや外反状を呈し、三角形状の口縁端部が丸味を帯びる。出土遺物は京都Ⅵ期新段階に属する。

土坑515(図46-247～257、図版38) 土師器、白色土器、須恵器、瓦器、焼締陶器がある。247は土師器皿Ac。口縁6.6cm、器高1.7cm。土師器皿Nは口径8cm台の皿N小(248～251)と口径12～13cm台の皿N大(254～256)がある。皿N小は体部がナデにより、外反気味になる。皿N大は体部が外反状を呈し、三角形状の口縁端部が丸みを帯びる。252・253は皿S小。口径9.0cm前後、器高2.2～2.4cm。257は須恵器壺の底部。内外面にロクロ成形痕が顕著に残る。出土遺物は京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する。

土坑33(図46-258～265、図52-450) 土師器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器がある。土師器には皿N小・N大がある。皿N小(258～262)は口径8.4cm前後、器高1.5cm前後。皿N大(263～265)は口径12～13cm台。体部の立ち上がりが直線的なもの(264・265)と、口縁部が上方へ立ち上がるもの(263)がある。455は青磁皿。底部外面ヘラケズリで露胎である。内面に櫛描文を施す。出土遺物は京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する。

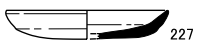
土坑460



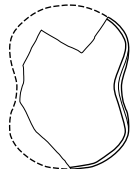
225



226



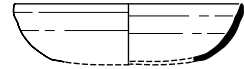
227



228



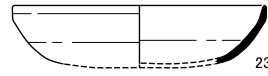
229



231

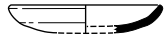


230



232

土坑62



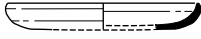
233



234



235



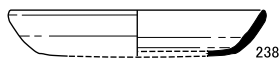
236



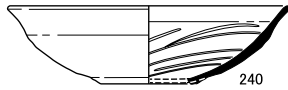
239



237



238



240

土坑652



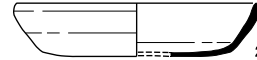
241



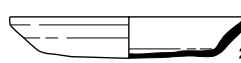
242



243



245



244



246

土坑515



247



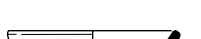
251



254



248



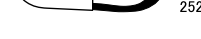
252



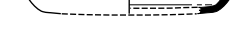
255



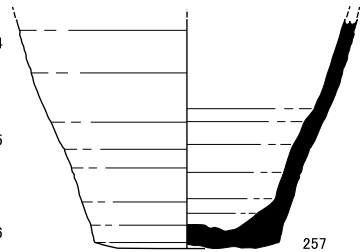
249



253



256



257

土坑33



258



261



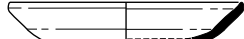
259



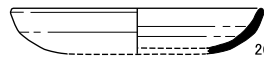
262



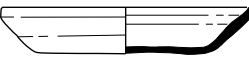
260



264



263



265

土坑229



278



279



280



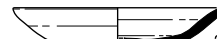
281



282



283



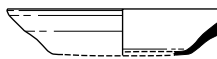
284



285



291

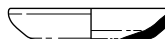


286

土坑470



266



269



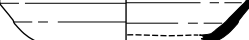
267



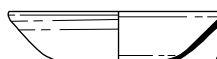
270



268



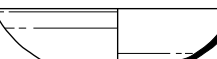
271



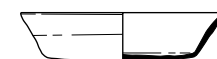
292



287

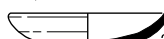


293

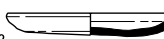


288

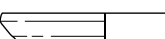
土坑665



272



274



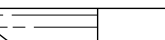
276



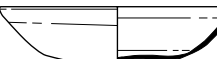
273



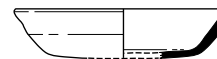
275



277



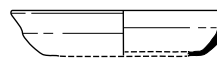
294



289



295



290



图46 1区土坑33·62·229·460·470·515·652·665出土土器实测图(1:4)

土坑470 (図46 - 266～271) 土師器、瓦器、焼締陶器がある。266～270は土師器皿N小。口径8cm台、器高1.6cm前後であるが、口径のやや大きいもの(270)や深いもの(269)もある。271は皿N大。平らな底部から口縁部が直線的に外傾し、端部は断面三角形を呈する。小片のため図示していないが、土師器皿Ac、皿Sが出土している。出土遺物は京都Ⅶ期古段階に属する。

土坑665 (図46 - 272～277、図51 - 434) 土師器、輸入陶磁器がある。土師器皿には皿N小(272～275)、皿N大(276・277)、皿Sがある。皿N小は口径8cm台で器高が1.2cm前後のもの、1.8cm前後のものがある。皿N大は口径11.0cm前後である。青磁皿(434)は削り出し高台で、灰白色の透明感のない釉を外面上部以外に施す。底部外面に墨書があるが、判読できない。出土遺物は京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する。

土坑229 (図46 - 278～295) 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などがある。土師器皿N小(278～282)は、体部上半から口縁にかけて外反気味になる。口径8.0cm前後、器高1.4cm前後である。279は口縁端部に煤が付着している。土師器皿N大(285～290)は器壁が薄くなり、体部から口縁部が外反する。口径は10.8～12.2cmで、器高は2.4cm前後のものが多い。土師器皿S大(291～295)は、底部が広めの杯形のもの(294・295)と、椀形に近いもの(291～293)があり、器壁は薄手が多い。口径に比してやや浅いもの(295)がある。出土遺物は京都Ⅶ期古段階から中段階に属する。

土坑405 (図52 - 448・457) 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器がある。448は越州窯青磁椀底部。削り出しの蛇の目高台。457は同安窯系の青磁椀で、台形状の厚い高台を有し、体部は内弯気味に立ち上がる。内面見込みと体部の境に段を有し、内面上部には沈線をめぐらす。外面に細かい櫛描文を施す。体部外面下半は露胎である。出土遺物は京都Ⅵ期新段階に属する。

溝247 (図47 - 296～307) 土師器、須恵器、瓦器がある。土師器には皿N小(296～301)、皿N大(302～305)がある。皿N小は口径8.6～9.0cm、皿N大は11.8～13.0cm。瓦器椀(306)の口

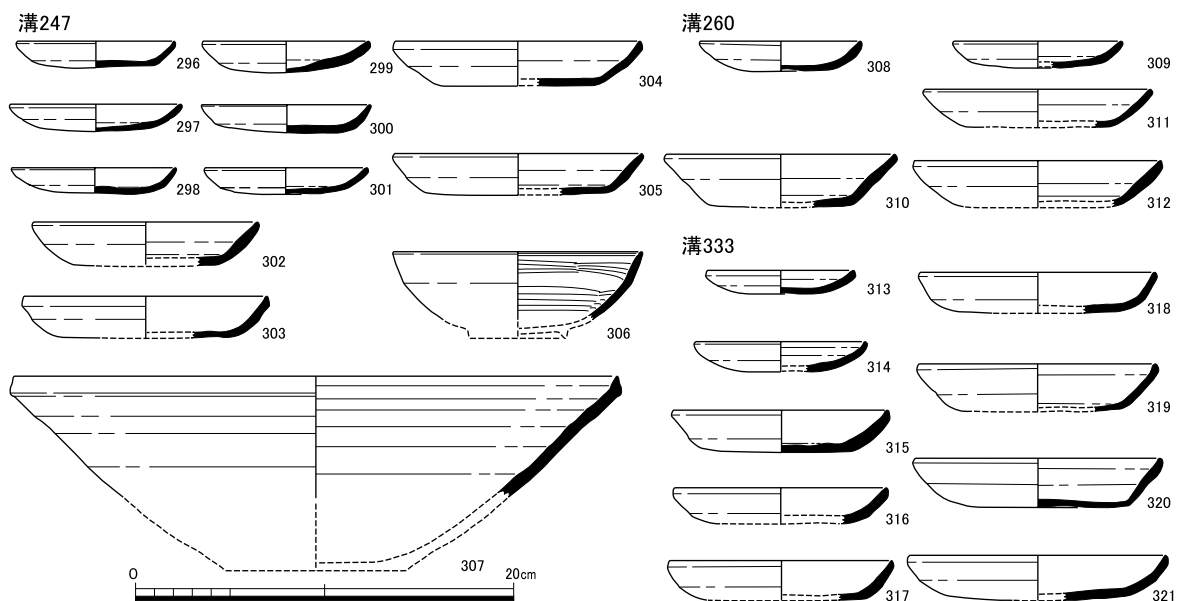


図47 1区 溝247・260・333出土土器実測図(1:4)

縁部はヨコナデで内面に粗いミガキを施す。口縁端部内面に1条の沈線をめぐらす。須恵器鉢(307)は口径32.0cmで、直線的に開き、口縁端部は器壁の厚さと等しい端面をもつ。出土遺物は京都VI期新段階に属する。

溝260(図47-308~312) 土師器、瓦器がある。308・309は土師器皿N小である。口径8.8cm前後、器高1.6cmである。310~312は土師器皿N大である。口径12.0~13.0cm、器高2.0~2.4cmであるが、口径に比して器高が高く深みのあるもの(310)もある。出土遺物は京都VI期新段階に属する。

溝333(図47-313~321、図51-435、図版38) 土師器、山茶椀、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などがある。313・314は土師器皿N小である。口径7.8~9.0cm、器高1.3~1.6cmである。315~321は土師器N大である。口径11cm台で器高2.0cm前後のもの(315~317)と、口径12~13cm台で器高2.5cm前後のもの(318~321)がある。山茶椀(435)は口径7.7cmの小型品で、底部は糸切りで未調整。内面は使用痕(磨り減り痕)が顕著である。底部外面に「五大力」の墨書。出土遺物は京都VI期新段階に属する。

溝223(図52-463) 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器などがある。463は青磁水注。球形の体部に直立する口縁で、板状の把手が付く。体部外面ヘラケズリ。全面に施釉。出土遺物は京都VI期に属する。

## (2) 2区出土土器類

池80(図48-322~338、図51-436~439、図版38) 池77と重複する遺構である。土師器、須恵器、緑釉陶器などがある。土師器には椀A(322・323・327)、皿(324・326・328・329・331)、杯A(325・330)がある。322は体部の立ち上がり角度が強く、体部外面のナデ幅が広く、丁寧な作りである。323・327は平らな底部から体部が直線的に外上方へのびる。323は外面ヘラケズリのc手法。327は外面調整ナデ・オサエのe手法の椀である。皿(324・326・328)は口縁端部にかえりをもつ。324はヘラケズリ調整。326は、口縁部はヨコナデ調整で底部外面に墨書「六」がある。331は丁寧なヨコナデ調整。329は口縁部ヨコナデ、体部はオサエ。328は体部の立ち上がり角度が強く、ヨコナデ調整で底部はヘラケズリ調整。325・330の杯も口縁端部にかえりをもつ。325はヘラケズリ調整。330の体部外面は丁寧な幅の広いナデ調整。須恵器には杯A(332)、杯B(334)、杯蓋(333)、皿(336)、壺(335)がある。杯A(332)は体部から口縁部が直線的に外上方へのびる。底部は未調整。底部内面に墨書があるが、判読できない。杯B(334)は体部と底部の境界は丸味をもち、高台を付す。蓋(333)は天井部と口縁部の境界は段をなし、端部は下方へ短く屈曲する。皿(336)は外傾する短い体部をもつ。端部は断面方形に作り、端面はやや外傾する。壺(335)は外反する口縁端部を折り曲げ、上下端を突出させる。内外面とも自然釉が付着する。337は緑釉陶器皿。削り出しの平高台で、体部は浅く、口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。内面ミガキ。灰白色の軟質の素地に、濃緑色の釉を全面に施す。338は削り出しの平高台の底部。内外面ミガキ。灰白色の軟質の素地に緑黄色の釉を全面に施す。他に、墨書土器(436~439)がある。



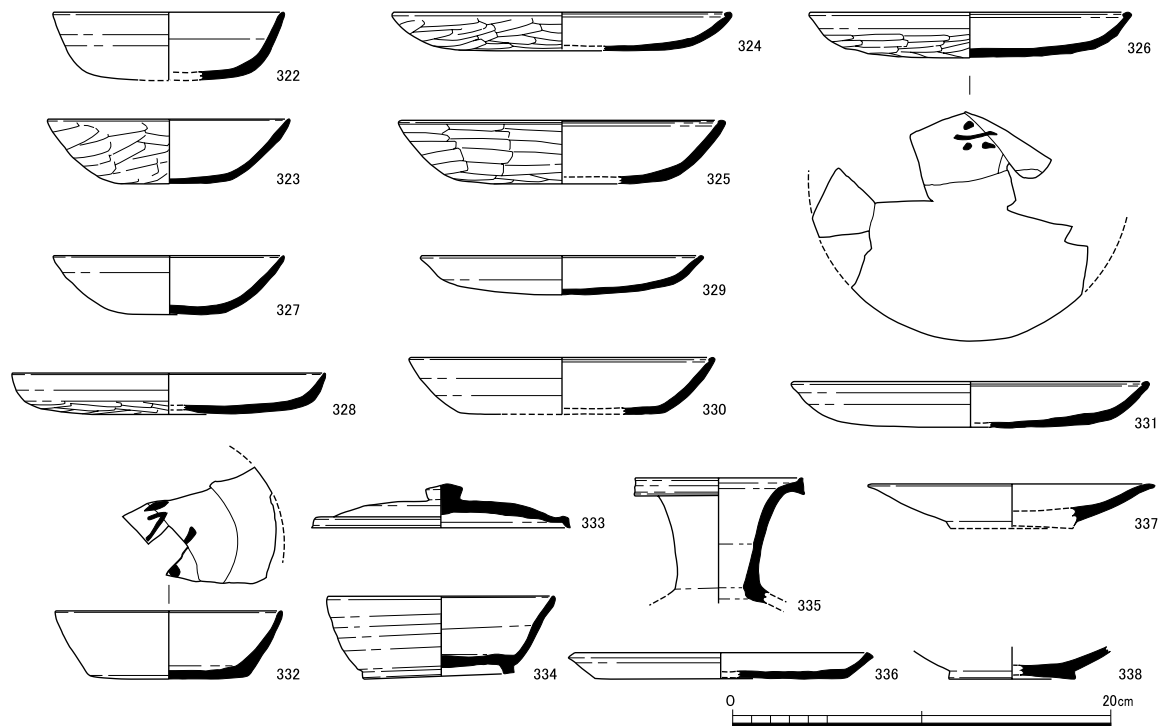


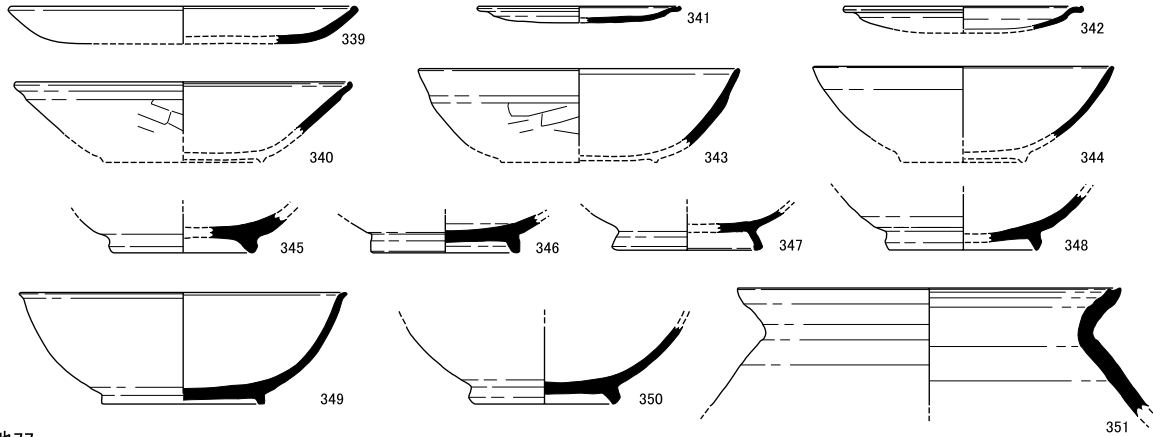
図48 2区 池80出土土器実測図(1:4)

436は土師器碗底部で外面に「厨」と判読できる。437～439は須恵器杯の底部であるが、墨痕が認められるにすぎない。322～326・328～333は最下層出土。出土遺物は平安京Ⅰ期中段階からⅡ期古段階に属するが、平安京Ⅰ期中段階が中心である。327・329・337・338は平安京Ⅰ期新段階からⅡ期古段階に属する。

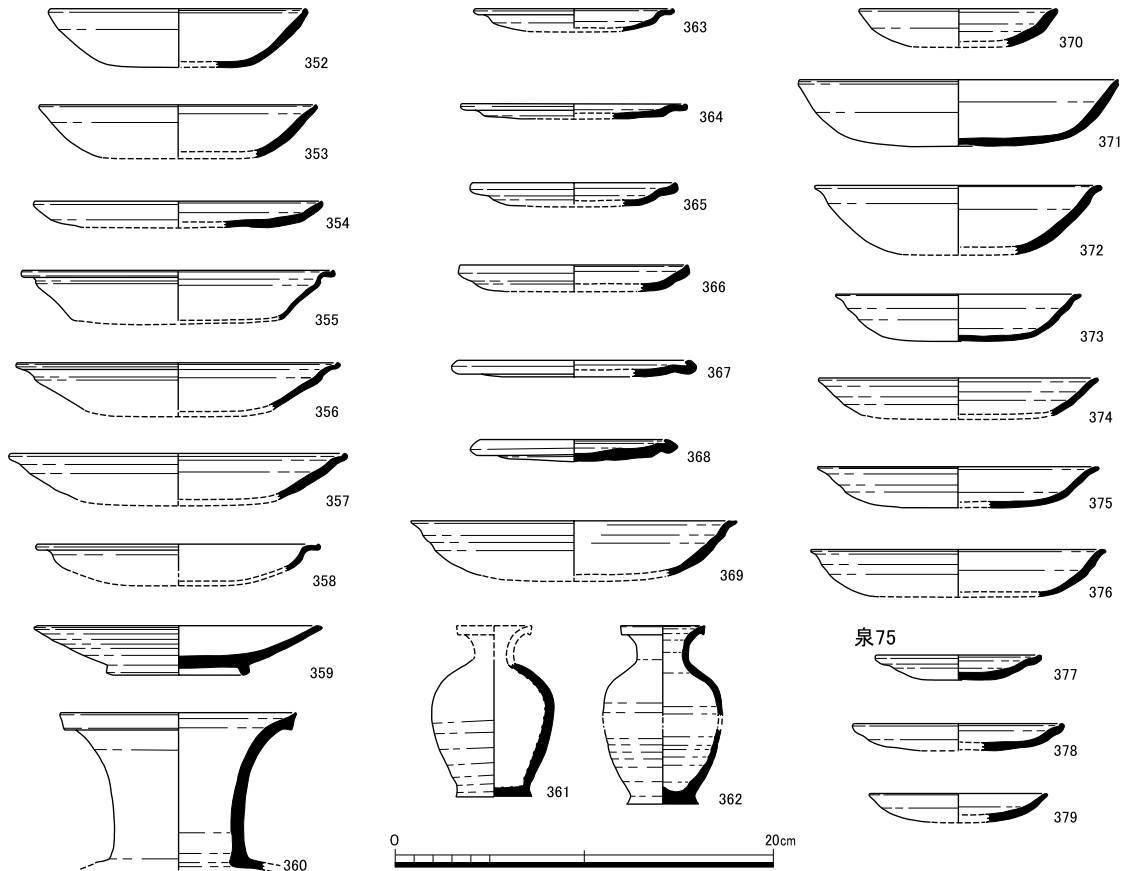
池77最下層(図49-339～351、図版39) 土師器、黒色土器、白色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などがある。砂礫層から出土していることから、調整が不鮮明なものが多い。339～342は土師器。皿A(339)は口縁端部にかえりをもつ。外面ヘラケズリ調整するも不鮮明である。皿A(341・342)は非常に薄く作られ、口縁の屈曲は強く端部は小さく摘みあげている。杯B(340)は体部が直線的に開き、外面はヘラケズリを施す。343・344は黒色土器。343は内面と外面の口縁部が黒色化したA類碗。外面体部ヘラケズリ、内面ヨコ方向のミガキを施す。344はB類碗。内面ハケ調整の後、ヨコ方向のヘラミガキを施す。345は削り出し高台の白色土器碗の底部。346は緑釉陶器碗。削り出しの輪高台で、内面ミガキ。須恵質の素地に淡緑色の釉を全面に施す。347～350は灰釉陶器碗。高台は貼り付けの輪高台である。底部に糸切り痕を残すもの(350)もある。349は底部付近まで淡い釉がかかる。高台内は無釉で、ヘラケズリ痕が残る。内面は釉が厚くかけられている。351は須恵器甕。体部外面平行タタキで、内面に当て具痕が残る。出土遺物は平安京Ⅱ期古段階からⅢ期新段階に属する。

池77(図49-352～376、図51-440～445、図版39) 土師器、須恵器、白色土器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器などがある。352～358・363～376は土師器。352～354は外面をナデ・オサエで調整されたe手法の碗A(352)、杯A(353)、皿A(354)である。口縁端部を小さく丸く調整し、上方へ少し突起させながら収めている。平安京Ⅱ期古段階から中段階に

池77最下層



池77



泉75

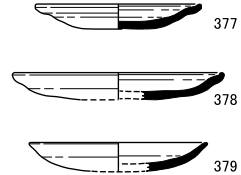


図49 2区 池77・泉75出土土器実測図(1:4)

属する。355～358・363・364は口縁形態が口縁部のヨコ方向のナデと、摘み上げたように収める小突起状の口縁端部のいわゆる「ての字状口縁」を呈する。器壁は薄い。355～357は杯L、358・363・364は皿Aである。平安京Ⅲ期中段階から同新段階に属する。365・366は皿A、367・368は皿A c、369～376は皿Nである。器壁はやや厚いものが多い。平安京Ⅳ期からⅤ期古段階に属する。359は灰釉陶器皿。底部貼り付けの輪高台で、体部下半以下はヘラケズリ。内面に施釉。360は須恵器壺口縁部。361・362は須恵器瓶子。平坦な底部に、卵形の体部をもつ。底部は未調整の糸切り。体部外面はヨコナデ。362は内面にロクロ痕が強く残る。墨書土器は土師器(445)、須恵器(440～443)、山茶椀(444)の底部に墨痕が認められるが、判読できない。出土遺物は平安京Ⅱ期

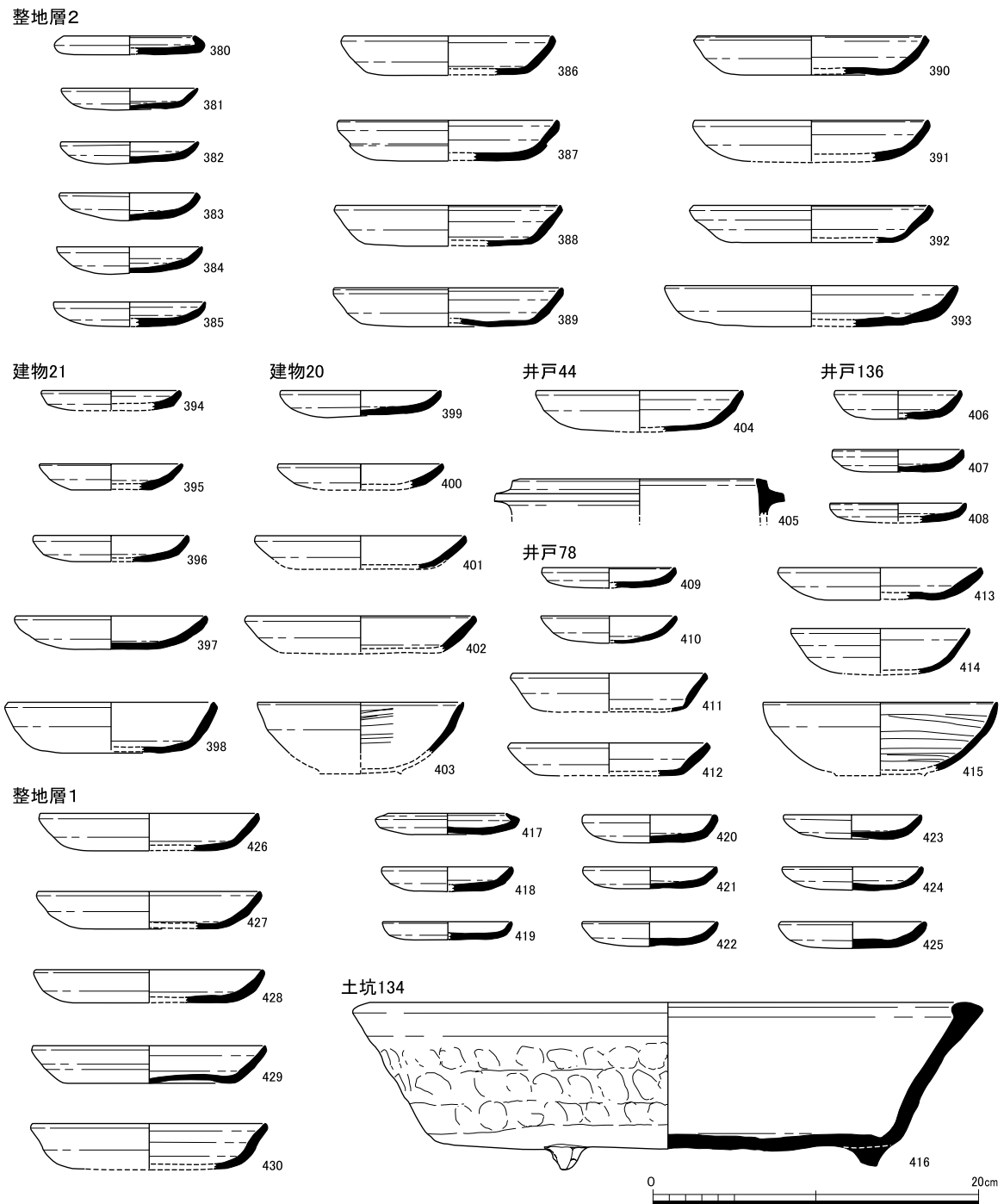


図50 2区 整地層1・2、建物20・21、井戸44・78・136、土坑134出土土器実測図（1：4）

古段階からV期古段階に属する。

泉75(図49-377~379、図版39) 377・378は土師器皿A。口径8.8~11.0cm。器高1.3cm前後。379は土師器皿N小。出土遺物は平安京IV期新段階からV期古段階に属する。

整地層2(図50-380~393、図52-456、図版39) 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などがある。380は土師器皿Ac。口径8.0cm、器高1.1cm。381・382は土師器皿N小。口径8.0cm後半~9.0cm台で、器高は1.5cm前後。386~393は土師器皿N大。外側に外傾する端面をもち、口縁端部が三角形を呈する。口径は13~14cm台で、器高は2.5cm前後である。口径が17cmをこえる

もの(393)もある。456は青磁椀。内面にヘラによる花文様を施す。出土遺物は平安京V期新段階から京都VI期古段階に属する。

**建物21**(図50-394~398) 394~396は土師器皿N小。口径8~9cm台で、器高1.6cm前後。397・398は土師器皿N大。口径11~12cm台。土師器皿Sは出土していない。394は柱穴153、392は柱穴161、393は柱穴163、397・398は柱穴154出土。出土遺物は京都VI期中段階から新段階に属する。

**建物20**(図50-399~403) 399・340は土師器皿N小。口径10.0cm前後、器高1.6cm前後。401・402は土師器皿N大。口径13.0~14.0cm。土師器皿Sは出土していない。403は瓦器椀。口縁部ナデ調整で、内面粗いミガキ。399は柱穴144、400・402は柱穴122、401は柱穴188、403は柱穴133出土。出土遺物は京都VI期中段階から新段階に属する。

**井戸44**(図50-404・405) 土師器、須恵器、瓦器がある。404は土師器皿N大。405は瓦器羽釜。直立する短い口縁部に鏝が付く。出土遺物は京都VI期新段階に属する。

**井戸136**(図50-406~408) 土師器、須恵器がある。406~408は土師器皿N小。口径7.6~8.4cm。口径に比して深いもの(406)がある。出土遺物は京都VI期新段階に属する。

**井戸78**(図50-409~415、図版39) 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器などがある。409・410は土師器皿N小で、口径8.0cm台。411~413は土師器皿N大で、口径12.0cm前後。体部はやや外反状を呈し、三角形状の口縁端部は丸味をもつ。414は口径10cm台の土師器皿S中。底部から体部下半の立ち上がり部分は、やや丸味をもつ。瓦器には椀(415)、羽釜がある。椀は口縁部ナデで、内面は粗いミガキを施す。出土遺物は京都VI期新段階に属する。

**土坑134**(図50-416、図版39) 水平に近い上端面の厚い口縁部を持った大型の瓦器盤である。平底で低い足が付く。内面ヨコナデ、体部外面指圧痕が残る。

**整地層1**(図50-417~430、図52-446・447・453・459・464、図版39) 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などがある。417は土師器皿Ac。口径7.3cm。418~425は土師器皿N

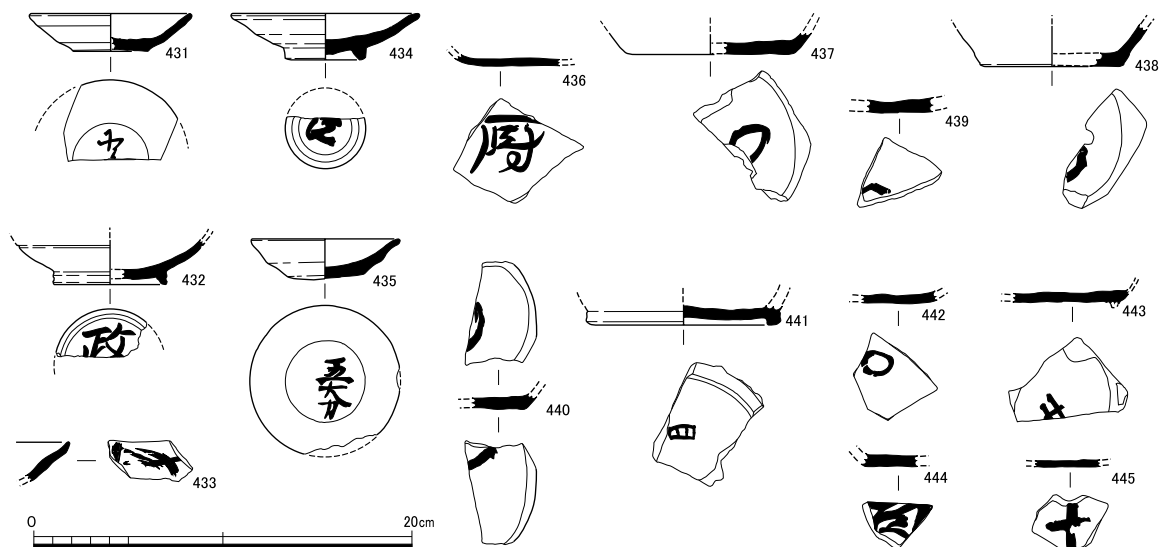


図51 1・2区 出土墨書土器実測図(1:4)

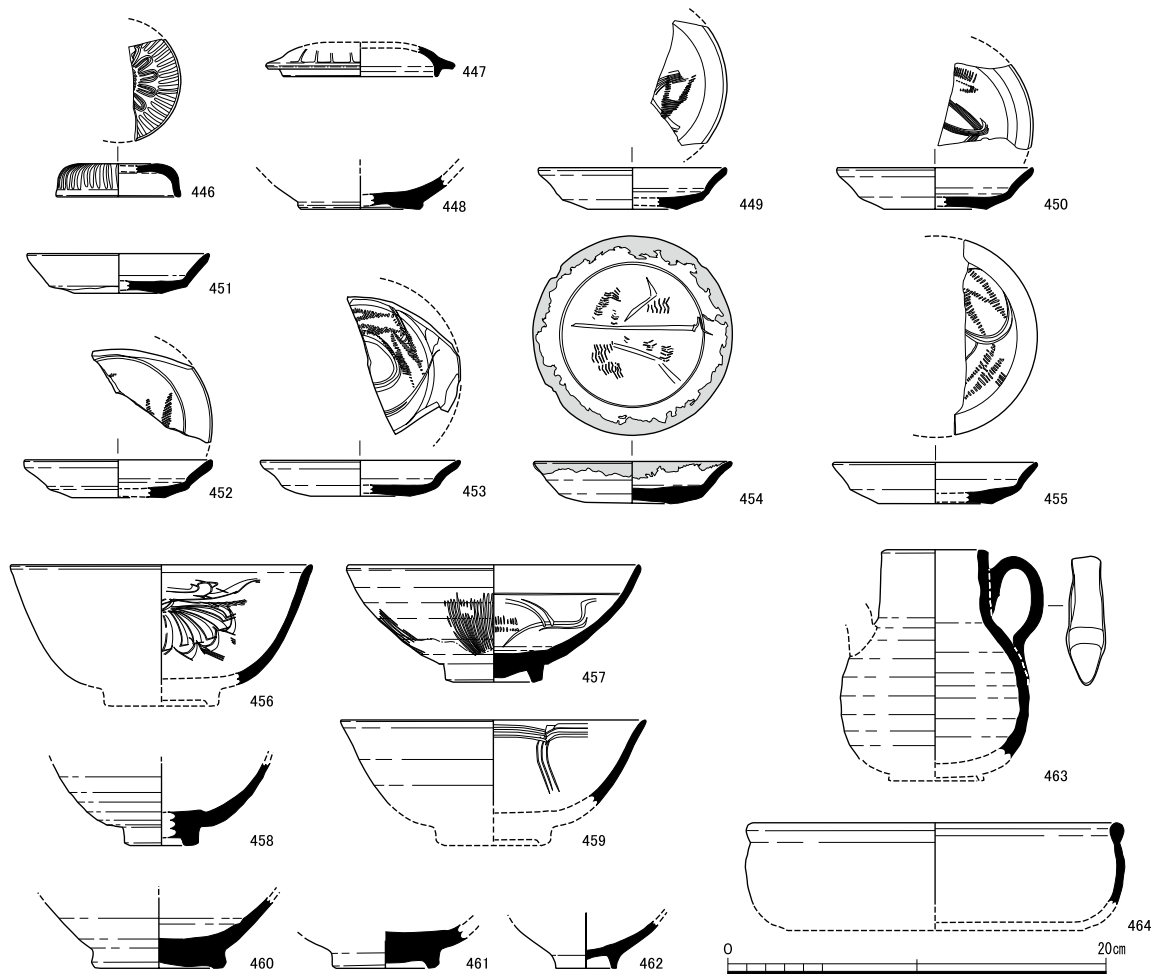


図52 1・2区 出土輸入陶磁器実測図（1：4）

小。口径7.0～8.0cm台で、器高は1.5cm前後である。420は口縁端部に煤が付着している。426～430は土師器皿N大。口径13.0～14.0cm台で、器高2.0～2.8cm。体部は外反し、三角形の口縁端部は丸味をおびる。輸入陶磁器には青白磁合子蓋（446・447）、青磁皿（453）・椀（459）、褐釉盤（464）がある。合子蓋はいずれも型押し成形されている。皿は平底無高台で、内面に櫛描文を施す。底部外面は露胎である。椀は内面に櫛描文を施す。出土遺物は京都VI期古段階から新段階に属する。

### 3. 瓦類（図53～55、図版40・41、観察表2）

瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがあり、丸瓦・平瓦が大半を占め、軒瓦は少ない。

ここでは、平城宮搬入瓦・平安時代前期・平安時代中期・平安時代後期に大別して、主要な軒瓦を報告する。

#### 軒丸瓦（図53、図版40）

瓦1 複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。中房は不明である。蓮弁は幅広く、輪郭線が巡り、二つに分かれる。子葉は盛り上がる。間弁はT字形である。外区は珠文が密に巡る。周縁は傾斜し線鋸歯文を配し、上面に溝がある。瓦当部成形は接合式で、裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合。瓦当部側面上位縦ケズリ、裏面はナデを施す。胎土は微砂を多く含み灰色である。やや硬質である。

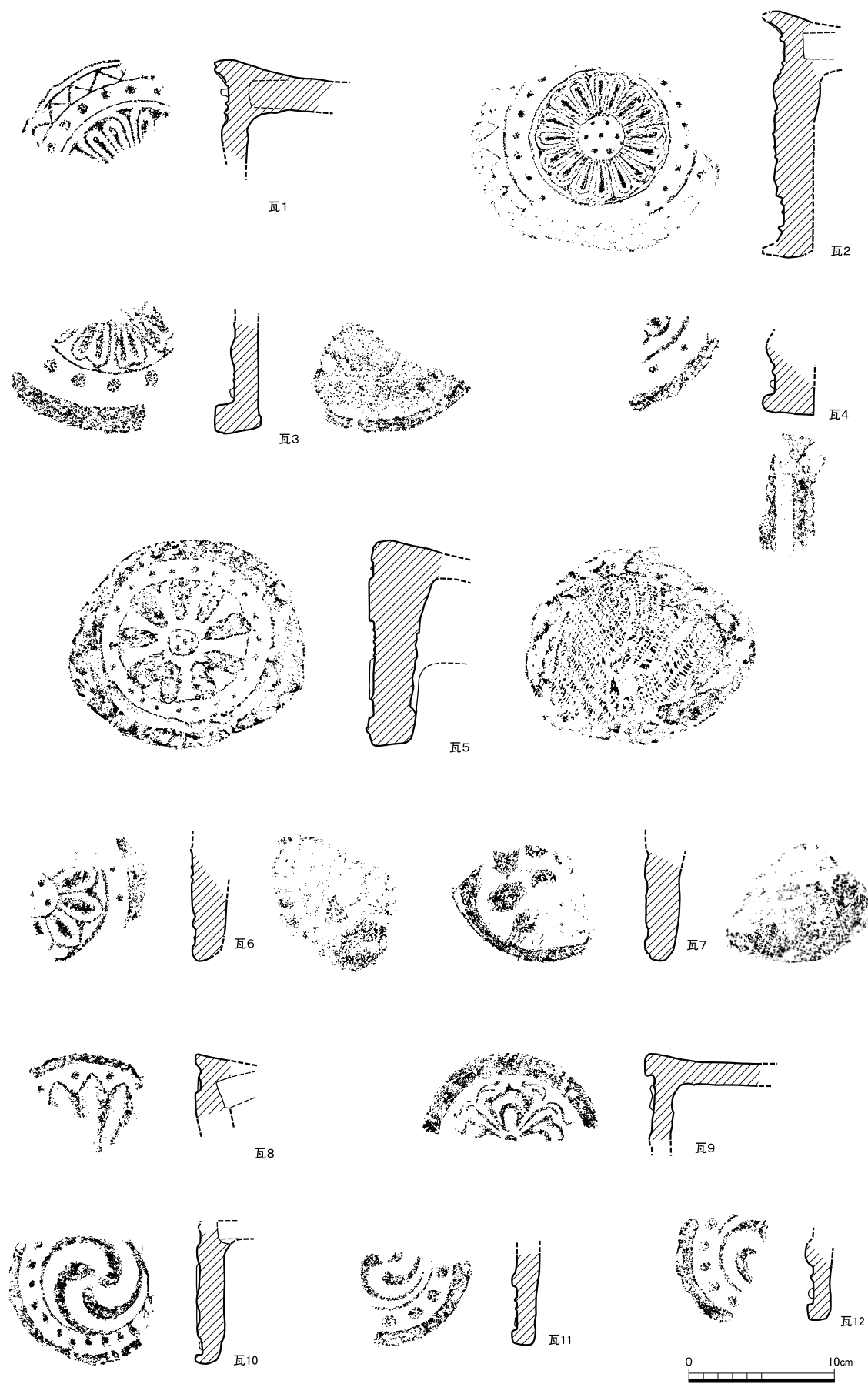


图53 軒丸瓦拓影及び実測図 (1 : 4)

奈良時代前期。平城宮6301-B型式<sup>2)</sup>(興福寺式)。平城宮・京からの搬入瓦である。2区池77出土。

瓦2 複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。中房は中央が盛り上がり圏線巡り、蓮子は1+6。蓮弁は細長く輪郭線が巡り、子葉は盛り上がる。間弁はY字形で連結する。蓮弁・間弁は中房に接する。外区は珠文が密に巡る。周縁は傾斜し線鋸歯文を配す。瓦当部成形は接合式で、裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合。瓦当部側面上位縦ケズリ、裏面はナデを施す。胎土は砂粒を含み灰白色、表面は黒灰色である。硬質である。奈良時代前期。平城宮6284-Ea型式。平城宮・京からの搬入瓦である。1区整地層1出土。

瓦3 複弁単弁混合蓮華文軒丸瓦である。凹中房である。蓮弁は輪郭線が巡り、輪郭線は接する。子葉は盛り上がる。外区は珠文が密に巡る。周縁は直立縁で素文である。裏面は平坦で、縁部が若干盛り上がる。接合不明。瓦当部側面下位横ナデ、裏面はナデを施す。胎土は砂粒を多く含み暗灰色、表面は黒灰色である。やや硬質である。平安時代前期。西賀茂角社窯NS157型式<sup>3)</sup>で、大山崎瓦窯<sup>4)</sup>5と同文である。2区池80最下層出土。

瓦4 蓮華文軒丸瓦である。中房は不明。蓮弁は輪郭線が巡り、子葉は盛り上がる。外区は珠文が巡る。周縁は直立縁で素文である。範はA型。接合不明。瓦当部側面下位横ナデで枷型の痕跡が残る。裏面はナデを施す。胎土は精良で灰白色、表面は黒灰色である。硬質である。平安時代前期。産地不明。2区池77出土。

瓦5 単弁9弁蓮華文軒丸瓦である。中房は圏線が巡り、蓮子は1+4である。蓮弁はアーモンド形で、形は不揃いである。蓮弁上面は平坦である。内区と外区の境は段となる。間弁は三角形で2箇所あり。外区は珠文が密に巡る。周縁は素文である。範傷多い。瓦当部形は楕円形である。範はC型。裏面は平坦で、下縁部に土手が巡る。瓦当部成形は一本造りで、丸瓦部を折り曲げて瓦当部を成形する。瓦当部側面上位縦ケズリ、下位横ケズリ、裏面は布目で、土手部は横ケズリを施す。胎土は砂粒をやや多く含み黄灰色、表面は黒灰色である。やや軟質である。平安時代中期。産地不明。1区流路1158出土。

瓦6 単弁10弁蓮華文軒丸瓦である。凹中房で圏線が巡り、蓮子は1+4である。蓮弁は輪郭線が巡り、互いに接し、先端は圏線に接する。子葉は若干盛り上がる。蓮弁は中房に接する。外区は珠文が巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は一本造りで、丸瓦部を折り曲げて瓦当部を成形する。瓦当部裏面は布目残る。胎土は砂粒を多く含み黄灰色である。軟質である。平安時代中期。池田瓦窯跡NM06型式<sup>5)</sup>である。2区整地層2出土。

瓦7 単弁蓮華文軒丸瓦である。凸中房で、蓮子なし。蓮弁は桜弁形で、上面は平坦である。蓮弁形は不揃いである。内外区境の圏線は太い。瓦当部形は楕円形である。範傷多い。瓦当部成形は一本造りで、丸瓦部を折り曲げて瓦当部を成形する。瓦当部側面下部は押さえナデ、裏面は布目である。胎土は砂粒を含み灰白色、表面は黒灰色である。硬質である。平安時代中期。池田瓦窯跡NM13型式である。2区池77出土。

瓦8 単弁蓮華文軒丸瓦である。中房は不明。蓮弁は凹弁で先端尖る。蓮弁は互いに接する。間弁は珠文である。周縁は直立縁で素文である。範はA型。瓦当部成形は接合式で、裏面上部に浅い

溝を付け、丸瓦を当て、粘土を付加して接合。瓦当部側面上位は縦ナデを施す。胎土は砂粒を少量含み黄灰色である。軟質である。平安時代後期。山城国産と推定できる。1区池1121出土。

瓦9 単弁4弁蓮華文軒丸瓦である。中房は珠文である。蓮弁は宝珠形で、盛り上がる。子葉は凹形でやや盛り上がる。間弁は唐草文で、両側に展開する。周縁は直立で素文である。瓦当部成形は接合式で、裏面上部に丸瓦を押当て、粘土を付加して接合。瓦当部側面上位横ナデ、裏面は押さえを施す。丸瓦凸面縦ナデ、凹面布目、側面縦ケズリ。胎土は砂粒少量含み黄白色である。やや硬質である。平安時代後期。山城国産と推定できる。1区井戸7出土。

瓦10 巴文軒丸瓦である。右巻き3巴文を配する。頭部は離れ、尾部は互いに接続する。文様上部は盛り上がる。外区は珠文が密に巡る。周縁は直立縁で素文である。瓦当部成形は接合式で、裏面上部に溝を付け、丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部側面下半は横ナデ、裏面押さえ・ナデを施す。胎土は精良で灰白色、表面は黒灰色である。硬質である。平安時代後期。山城国産と推定できる。1区整地層1出土。

瓦11 巴文軒丸瓦である。右巻き3巴文を配する。頭部に突起があり離れ、尾部も離れる。文様上部は盛り上がる。外区は珠文が密に巡る。周縁は直立縁で素文である。瓦当部成形は接合式で、裏面上端に丸瓦を当て、接合する。瓦当部側面下半は横ナデ、裏面ナデを施す。胎土は砂粒を含み褐灰色である。軟質である。平安時代後期。山城国産と推定できる。1区整地層1出土。

瓦12 巴文軒丸瓦である。右巻き3巴文を配する。頭部は離れ、尾部も離れる。文様上部は盛り上がる。外区は珠文が密に巡る。周縁は直立縁で素文である。瓦当部成形は接合式で、裏面上端に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部側面下半は横ナデ、裏面ナデを施す。胎土は細砂を含み黄灰色、表面は暗灰色である。軟質である。平安時代後期。山城国産と推定できる。2区整地層2出土。

#### 軒平瓦 (図54、図版41)

瓦13 外行唐草文軒平瓦である。中心飾りは上向きC字で中心文は団子鼻形である。唐草文は両側に3回反転する。唐草文は各单位が圏線に接し、主葉は巻き込む。外区に2重圏線が巡る。周縁は直立縁で素文である。段顎。瓦当部成形は不明。瓦当部上縁は横ケズリ、顎下面横ケズリ、裏面横ナデを施す。平瓦凹面斜方向ケズリ、凸面縦ナデ、側面縦ナデを施す。側面に部分的に布目が残存する。胎土は砂粒を多く含み、胎土は灰白色、表面は暗灰色である。堅質である。奈良時代前期。平城宮6663-H型式に類似するが異範。平城宮・京からの搬入瓦である。1区流路1158出土。

瓦14 外行唐草文軒平瓦である。唐草文は両側に反転する。唐草文は各单位が圏線に接し、主葉は巻き込む。外区に2重圏線が巡る。曲線顎。瓦当部成形は不明。瓦当部上縁は横ケズリ、顎下面横ケズリを施す。瓦凹面縦布目、凸面横ナデを施す。胎土は砂粒を多量に含み灰白色、表面は暗灰色である。やや軟質である。奈良時代前期。平城宮6663型式に類似する。平城宮・京からの搬入瓦である。1区井戸1062出土。

瓦15 外行唐草文軒平瓦である。唐草文は両側に反転する。唐草文は各单位が離れ、主葉は巻き込む。外区は珠文が密に巡る。周縁は直立縁で素文である。段顎。瓦当部成形は不明。瓦当部上縁



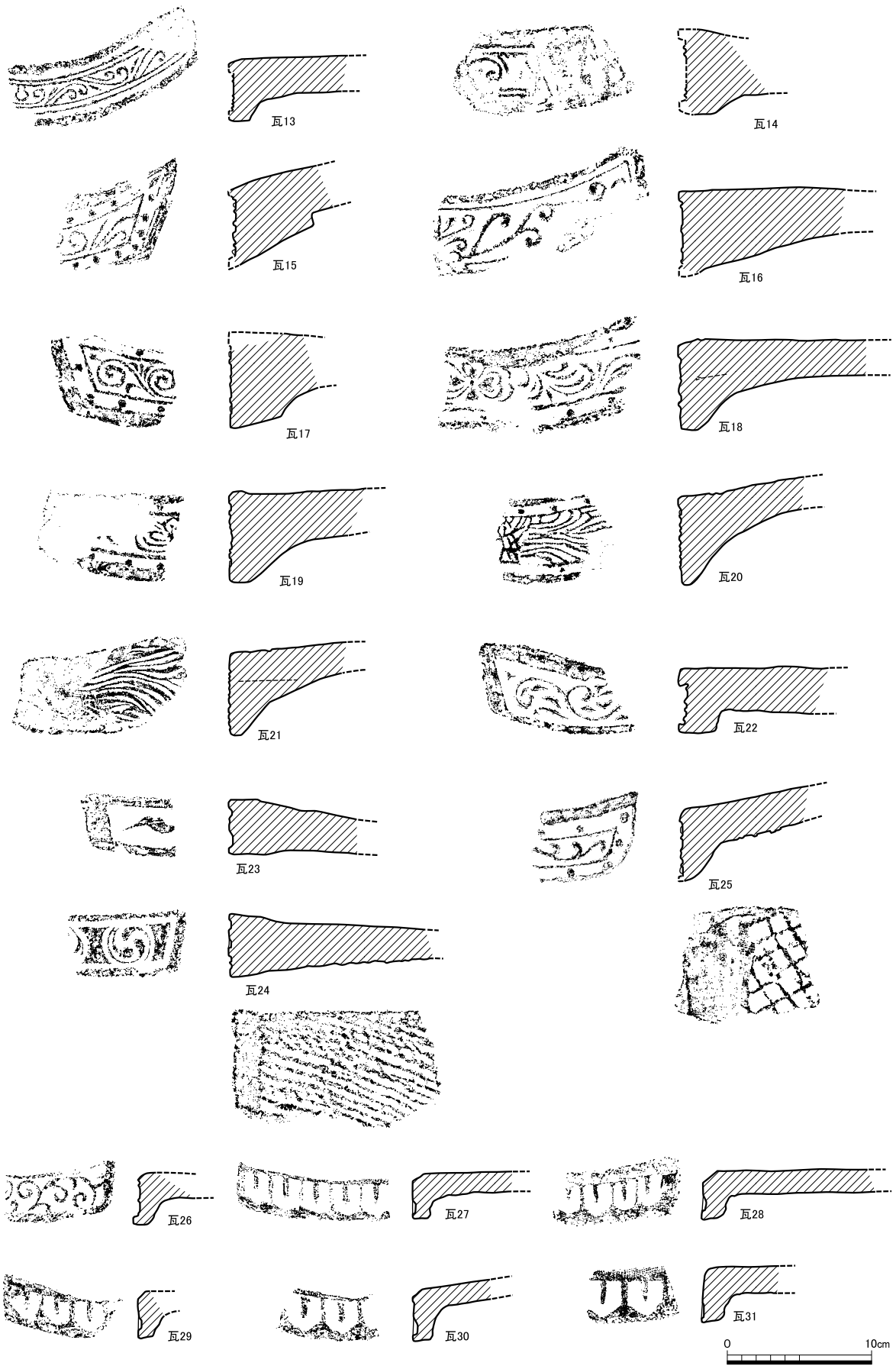


图54 軒平瓦拓影及び実測図 (1 : 4)

は横ケズリ、顎下面横ケズリ、裏面横ナデを施す。平瓦凹面縦ナデ、凸面横ナデ、側面縦ナデを施す。胎土は精良で灰白色、表面は暗灰色である。硬質である。奈良時代前期。平城宮 6664-O 型式である。平城宮・京からの搬入瓦である。1 区流路 1158 出土。

瓦 16 外行唐草文軒平瓦である。中心飾りは花形で、唐草を上下に配す。唐草文は両側に反転する。唐草文は各单位が連続し、主葉は巻き込む。周縁は素文である。曲線顎。瓦当部成形は不明。瓦当部上縁は横ケズリを施す。平瓦凹面布目、凸面縦ケズリ、側面縦ケズリを施す。胎土は砂粒を含み黄灰色、表面は黒灰色である。堅質である。奈良時代から平安時代前期と推定できる。産地不明。1 区集石 1161 出土。

瓦 17 外行唐草文軒平瓦である。唐草文は両側に反転する。唐草文は連続せず、主葉は大きく反転する。外区は珠文が密に巡る。周縁は素文である。段顎。瓦当部成形は不明。顎部下面は縦ケズリ、裏面は横ナデを施す。胎土は砂粒を含み灰白色、表面は黒灰色である。やや軟質である。平安時代前期。芝本窯産<sup>6)</sup>である。2 区池 77 出土。

瓦 18 外行唐草文軒平瓦である。中心飾りは 4 蓮弁唐草文で、蓮子 1 個、ハート形の蓮弁で輪郭線が巡る。唐草文は両側に 2 転する。唐草文主葉は連続しないで、大きく巻き込み、支葉は内外に配する。外区は珠文が粗く巡る。周縁は素文である。曲線顎。瓦当部成形は顎部貼り付けと推定できる。瓦当部上面は横ケズリを施す。顎部下面は横ケズリ後ヨコナデである。平瓦凹面は布目、凸面は顎部裏面から縦ナデを施す。胎土は砂粒を多く含み黄灰色で、表面は部分的に暗灰色である。やや軟質である。平安時代中期。池田瓦窯 NH08 型式である。1 区池 1121 出土。

瓦 19 外行唐草文軒平瓦で、瓦 18 と同文であるが異範である。中心飾りは 4 蓮弁唐草文で、蓮弁は線で表し、輪郭線が巡る。唐草文は両側に反転する。外区は珠文が巡る。周縁は素文である。曲線顎。瓦当部成形は不明。瓦当部上面・顎部下面はナデ。平瓦凹面は布目、凸面はナデを施す。胎土は砂粒をやや多く含み黄灰色である。やや軟質である。平安時代中期。池田瓦窯 NH10 型式に類似する。2 区泉 75 出土。

瓦 20 外行唐草文軒平瓦である。中心飾りは逆台形内に変形文字である。唐草文は両側に展開する。唐草文主葉は連続し、ゆるやかに反転する。外区は珠文が密に巡る。周縁は素文である。曲線顎。瓦当部成形は不明。瓦当部上縁は横ケズリを施す。顎部裏面縦ケズリである。平瓦凹面は布目、凸面縦ケズリを施す。胎土は砂粒多く含み灰色で、表面は暗灰色である。やや軟質である。平安時代中期。産地不明。1 区集石 1161 出土。

瓦 21 外行唐草文軒平瓦で瓦 20 と同文である。瓦当部成形は不明。瓦当部上縁は横ケズリを施す。顎部下面横ケズリ、裏面縦ケズリである。平瓦凹面は布目、凸面縦ナデ、側面縦ケズリを施す。胎土は砂粒少量含み黄灰色で、表面は暗灰色である。硬質である。平安時代中期。産地不明。2 区池 80 上層出土。

瓦 22 外行唐草文軒平瓦である。唐草文主葉は連続して大きく巻き込み、支葉は内側に配する。周縁は直立で素文である。段顎。瓦当部成形は不明。瓦当部上縁は横ケズリを施す。顎部下面・裏面横ナデである。平瓦凹面は布目、凸面はナデを施す。胎土は砂粒を少量含み黄灰色で、表面は部

分的に暗灰色である。やや軟質である。平安時代後期。備中国産である。2区柱穴180出土。

瓦23 外行唐草文軒平瓦である。周縁は直立の素文である。直線顎。瓦当部成形は不明。瓦当部上面横ケズリ、下面横ケズリを施す。平瓦凹面は布目、凸面は斜方向縄叩き、側面縦ケズリ。胎土は砂粒を少量含み灰色である。硬質である。平安時代後期。讃岐国ますえ畑窯<sup>7)</sup>産。1区池1121出土。

瓦24 連巴文軒平瓦である。左巻き3巴文を配する。頭部は離れ、尾部も離れる。文様上部はやや盛り上がる。内区・周縁は素文である。直線顎。瓦当部は平瓦凸面に粘土塊を貼り付け成形。瓦当部上面横ケズリ、下面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面斜方向縄叩き、側面縦ケズリ。胎土は細砂多く含み灰白色である。硬質である。平安時代後期。讃岐国産。1区池1121出土。

瓦25 外行唐草文軒平瓦である。中心飾りは不明。唐草文は両側に反転する。唐草文主葉は連続して巻き込む。外区は珠文が粗く巡る。周縁は素文である。曲線顎。瓦当部成形は不明。瓦当部上面は平瓦から連続する布目、顎部下面横ナデ、裏面縦ナデである。平瓦凹面は布目、凸面は格子叩き、側面縦ナデを施す。胎土は精良で灰白色、表面は黒灰色である。硬質である。平安時代後期。産地不明。1区井戸1064出土。

瓦26 唐草文軒平瓦である。唐草文は右に反転する。唐草文は連続し、主葉は巻き込む。文様は上・下・脇が切られる。周縁は素文である。段顎。瓦当部成形は折曲技法である。瓦当部上縁横ケズリ、顎部下面横ナデ、裏面曲じわ・布圧痕残る。平瓦凹面は布目、凸面押さえナデ、胎土は砂粒を多く含み灰白色、表面は暗灰色である。やや軟質である。平安時代後期。山城国産。2区池77出土。

瓦27 剣頭文軒平瓦である。陰刻剣頭文で、垂直に配置する。周縁は素文である。段顎。瓦当面に布目残存。瓦当部成形は折曲技法である。瓦当部上縁横ケズリ、顎部下面横ナデ、裏面押さえ。平瓦凹面は布目、凸面押さえ、側面縦ナデを施す。胎土は砂粒を含み灰色である。やや軟質である。平安時代後期。山城国産。1区柱穴554出土。

瓦28 剣頭文軒平瓦である。陰刻剣頭文で、垂直に配置する。周縁は素文である。段顎。瓦当面に布目残存。瓦当部成形は折曲技法である。瓦当部上縁横ケズリ、顎部下面横ナデ、裏面曲じわ・布圧痕残る。平瓦凹面は布目、凸面押さえナデ、側面縦ナデを施す。胎土は砂粒を含み灰白色である。やや軟質である。平安時代後期。山城国産。1区井戸27出土。

瓦29 剣頭文軒平瓦である。陰刻剣頭文で、垂直に配置する。周縁は素文である。瓦当面範傷多い。段顎。瓦当部成形は折曲技法である。瓦当部上縁横ケズリ、顎部下面横ケズリ、裏面横ナデを施す。平瓦凹面は布目、側面縦ナデを施す。胎土は砂粒を含み灰白色である。やや軟質である。平安時代後期。山城国産。1区井戸1064出土。

瓦30 剣頭文軒平瓦である。陰刻剣頭文で、垂直に配置する。周縁は素文である。段顎。瓦当部成形は折曲技法である。瓦当部上縁横ケズリ、顎部下面横ナデ、裏面押さえ。平瓦凹面は布目、凸面押さえ。胎土は砂粒を含み灰白色、表面は暗灰色である。硬質である。平安時代後期。山城国産。1区土坑576出土。



図55 埴拓影（1：4）

瓦31 剣頭文軒平瓦である。陰刻剣頭文で、放射状に配置する。周縁は素文である。段顎。瓦当面布目残存。瓦当部成形は折曲技法である。瓦当顎部下面横ナデ、裏面横ナデを施す。平瓦凹面は布目で瓦当面に連続する、凸面押さえを施す。胎土は砂粒を含み褐灰色である。やや軟質である。平安時代後期。山城国産。1区井戸555出土。

埴（図55）

瓦32 埴である。上下面縄タタキ、側面縄タタキ・横ケズリである。胎土は砂粒を含み灰色、表面は黒灰色である。やや軟質である。1区井戸450出土。

瓦32 埴である。上下面縄タタキ、側面縄タタキ・横ケズリである。胎土は砂粒を含み灰色、表面は黒灰色である。やや軟質である。1区井戸450出土。

#### 4. 木簡（図56、巻頭図版2、図版42、観察表3）

今回の調査では、木簡が19点出土した。出土遺構は9世紀初頭に属する2区池80(木1～16)と12世紀に属する2区の池77(木17～19)である。平安時代前期の木簡は16点あり、荷札木簡5点(木2～4・6・7)・文書木簡3点(木1・5・8)・板状6点(木9～13・15)・ヘラ状1点(木16)・棒状1点(木14)に分類できる。平安時代後期の木簡は3点(木17～19)とも板状である。材質はヒノキが2点(木6・14)で、他はすべてスギである。これらの出土木簡は、ポリエチレングリコール(PEG)水溶液による保存処理を行った。なお、木簡の解読及び解説は、京都大学の西山良平教授、京都産業大学の吉野秋二准教授にご教示いただいた。

木1 厚みのある板材の上部に穿穴がある。左右両端は欠損する。両面に墨書がある。表面は、「死亡貳人」の下に割注で「大男大伴□<sup>1</sup>□<sup>2</sup>年□七」「大女土師浄女年五十六」とあり、下に「左京人去月四日来」と判読できる。□<sup>1</sup>は成、□<sup>2</sup>は卅の可能性ある。裏面は、「客作児捌人」の下に割注で「[<sup>3</sup> ]送死亡四人仕薬院田作」とあり、左下に「弘仁六年三月十日□<sup>4</sup>小治田古」と判読できる。□<sup>3</sup>は先か四人、□<sup>4</sup>は預か領の可能性ある。施薬院の預が、収容者の死去について、弘仁六年三月十日付で報告した木簡である。表には、2名の死亡者の氏名・年齢を記した上で、その2名が左京人で2月4日に来着していたことを記す。裏は、解釈が難しいが、施薬院の田地の耕作に従事していた客作児(雇用労働者)4名の死亡を記している。なお、木簡上部には穿穴があり、同種の木簡が一定期間、集積・保管されていたことが窺える。

木2 厚みのある板材に墨書がある。「□□<sup>5</sup>黒米肆升」の下に割注で「弓削男宗」と判読できる。□<sup>5</sup>は出の可能性ある。のちに上部を丸く棒状に削られる。

木3 頭部に切り込みを入れた付札木簡である。「猪□<sup>6</sup>大二斗」と判読できる。□<sup>6</sup>は脂か腊の可能性ある。猪脂または猪腊二斗を納めた荷物に付された木簡である。猪脂は猪膏とも記され、『延喜式』典薬寮などに薬の原料として散見する。膏薬のほか、他の原料と調合され解熱剤にも使

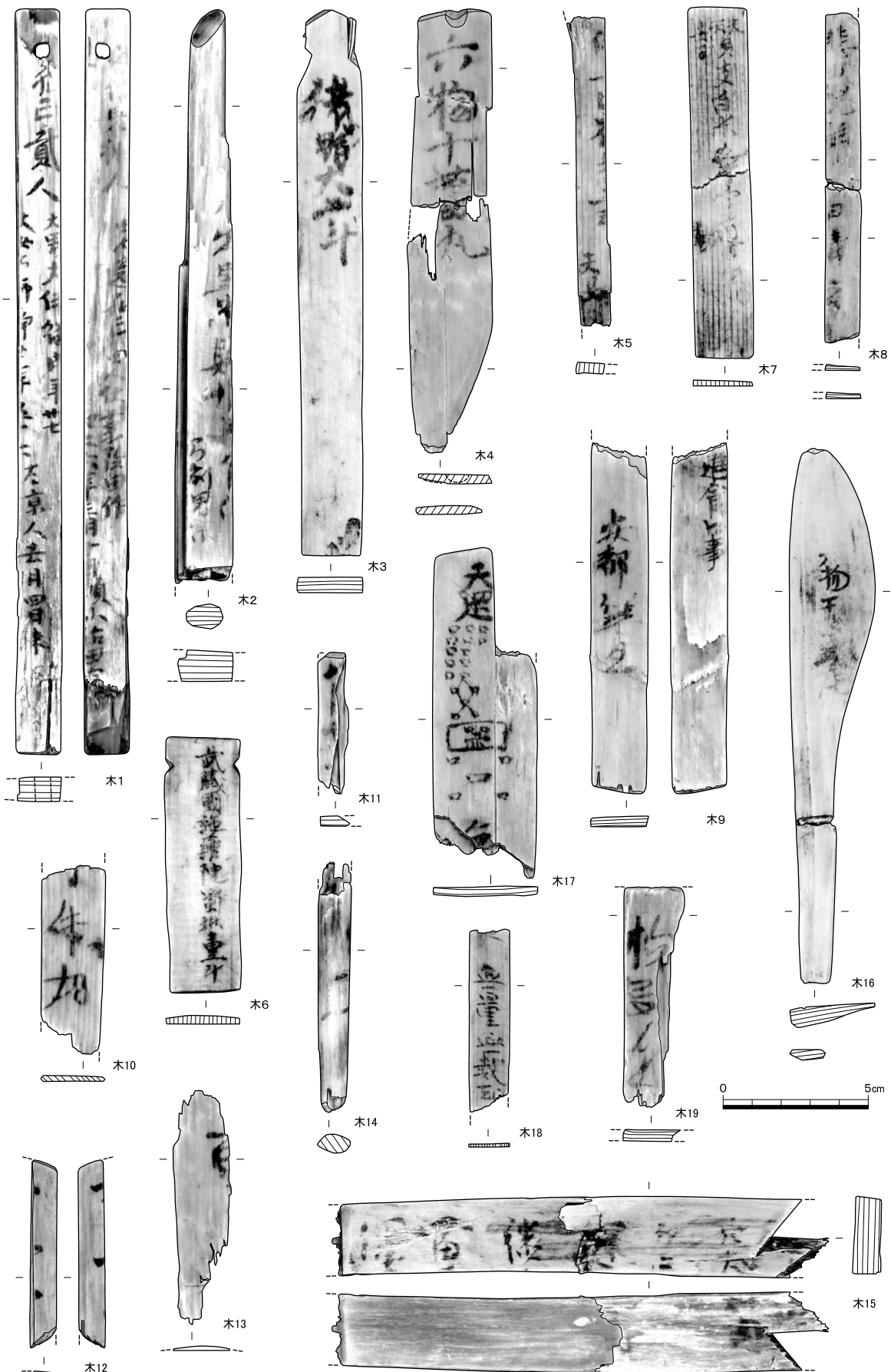


图56 木簡実測図 (1 : 2)

# 木簡釈文 1

## 木 1

・「○死亡貳人<sup>大男大伴</sup>口口年口七<sup>左京人</sup>去月四日来

・「○客作兒捌人<sup>送死亡四人</sup>仕葉院田作  
弘仁六年三月十日口口小治田口×」

257×(15)×8 011

## 木 2

×口口<sup>田</sup>黒米肆升<sup>削男宗</sup>」

198×(20)×11 019

## 木 3

「<猪<sup>大</sup>口大二斗」

188×22×5 032

## 木 4

「六物干薑丸」

153×28×3 051

## 木 5

「<sup>天</sup>口×<sup>天</sup>」

106×(12)×4 081

## 木 6

「<武蔵国施葉院蜀椒壹斗」

88×25×3 032

## 木 7

「讚支白米五斗宮道口口」

121×21×2 011

## 木 8

「悲田院解申請<sup>口口</sup>」

(113)×(13)×2 081

## 木 9

・×進食口事」

・安都<sup>口足</sup>」

(121)×20×4 019

木簡釈文2

木10

□<sup>(異)</sup>牛丸

(65)×22×2 081

木11

□<sup>(異)</sup> ]

(49)×(11)×4 019

木12

・ □<sup>(三)</sup> ]  
 ・ □<sup>(三)</sup> ]

(64)×(9)×3 019

木13

□<sup>(異)</sup>

(81)×(20)×1 091

木14

□<sup>(異)</sup>

(86)×11×6 065

木15 (横材木簡)

・ □ □<sup>(異)</sup> 継 □ ] □ □<sup>(大)</sup>  
 ・ □<sup>(字)</sup> ] □ ] (裏面天地逆か)

(94)×(28)×10 081

木16

□<sup>(天)</sup>物干□<sup>(丸)</sup>

185×30×7 065

木17

□ 天足(符録) □<sup>(異)</sup>

(106)×36×3 019

木18

□ 無量無数却

63×14×1 081

木19

□ 物忌 □ ]

(76)×(22)×4 081

用される。

木4 下部先端を尖らせた付札木簡である。「六物干薑丸」と判読できる。「六物干薑丸」は、6種の生薬を調合した丸薬の名称で、『延喜式』典薬寮にみえる。

木5 上端・下端と右半分を欠損する。両面に墨書がある。表の墨書は7文字以上あり「□□□□□ 天<sup>7</sup>□」と判読できる。□<sup>7</sup>は長の可能性があり、年紀の天長となる可能性がある。裏面は墨痕があるが、判読できない。

木6 頭部に切り込みを入れた荷札木簡である。「武蔵国施薬院蜀椒壹斗」と判読できる。武蔵国から施薬院に送られた蜀椒一斗に付けられた付札木簡である。蜀椒は朝倉山椒の異名である。『延喜式』典薬寮によれば、天皇・中宮の元旦御薬、臘月御薬などにも使用される。

木7 「讚支白米五斗宮道□□」と判読できる。讚岐国から送られた白米五斗に付けられた木簡である。

木8 左半分を欠損する。「悲田院解 申請□□<sup>8</sup>」と判読できる。□<sup>8</sup>は塩の可能性もある。某上級官司に対して、悲田院が何らかの上申を行った文書木簡である。文書の宛先(上申先)は、他の木簡の内容から、施薬院の可能性が高い。従来、平安時代の悲田院・施薬院の官司制上の位置付けは不明瞭だったが、本木簡から、平安時代初期には、施薬院の配下に悲田院があった可能性が高くなった。

木9 上端を欠損する。両面に墨書がある。表「進食口事」、裏「安都<sup>9</sup>□足」<sup>9</sup>と判読できる。□<sup>9</sup>は熊か笠の可能性もある。

木10 上下の端部を欠損する。「□牛丸<sup>10</sup>」と判読できる。□<sup>10</sup>は牽の可能性もある。丸薬の呼称を記した可能性がある。

木11 下端と右半分を欠損する。墨書は4文字あるが、判読できない。

木12 下端と半分を欠損する。両面に墨書があるが、判読できない。

木13 木簡の削屑で、厚さ1mmほどで非常に薄い。墨書は1文字あり、百の可能性もある。

木14 断面が楕円形の棒状で、下先端は削ってやや尖らせている。墨痕がない可能性もある。

木15 横材である。厚みのある板材で左右の端部を欠損する。表面の墨書は横書きで10文字以上ある。左から2行目の1文字目は富の可能性もある。裏面にも墨痕があるが、判読できない。裏面は天地逆の可能性もある。両端ともに刃物で切断されている。

木16 ヘラ状を呈する。「□物干<sup>11</sup>□丸<sup>12</sup>」と判読できる。□<sup>11</sup>は六、□<sup>12</sup>は薑の可能性もある。そうすると木4と同一内容の墨書となる。

木17 上部右半と下部を欠損する。「天足(符籙)□<sup>13</sup>」と判読できる。□<sup>13</sup>は急の可能性もある。呪符木簡である。

木18 上端・下端を欠損する。墨書は6文字ある「□ 無量無数却」<sup>13</sup>と判読できる。柿経の一部分片である。

木19 左右と下端を欠損する。墨書の冒頭の2文字は「物忌」で、物忌札である。3文字目は急の可能性もある。



## 5. 木製品（図57～65、図版43、観察表4）

1区では、池1121・流路1158・溝333のほか、建物に伴う柱穴から出土している。2区では、池80・池77・池76・井戸78および建物に伴う柱穴から出土している。出土木製品の種類については、工具・服飾具・容器・食事具・文房具・遊戯具・祭祀具・用途不明木製品・建築部材に分けることができ、種類ごとに解説する。

**工具**（図57、図版43） 工具には、工具柄・鞘がある。

木20 鞘である。ほぼ完形である。制作工程を示すと、表面全体をケズリ調整し、さらに各縁辺をケズリ込み、丸みを持たせる。側縁に2箇所切り欠きを施す。その後、2片に割り、内面を刀子の形状に割り込む。鞘としては2片を重ね、切り欠き箇所を糸紐などで結束する。内面の刀子差し込み箇所はやや強く焦げており、加工痕と考えられる。

木21・22 柄である。木21はほぼ完形である。全面比較的丁寧なケズリを行い、断面形は楕円形を呈する。木口を割り込み、身の柄を差し込む穴を開ける。木口付近に鉄錆が残る。柄の断面形状から刀子の柄であろう。木22は工具柄で、先端の一部を欠損する。やや腐食が進む。平面形は柄尻から柄基に向かって幅を減じる。表面全面はケズリ、柄尻は半円形にケズリ調整する。木口から割り込み、差し込み口を開ける。内面の一部が焦げており、熱した金属で割り込んだ可能性がある。木口からやや下がった位置に、身と柄を固定する貫を通す穿孔を施す。

**服飾具**（図58、図版43） 服飾具には、扇・留針・下駄・草履がある。

木23・24 扇である。木23は蝙蝠扇の親骨で、上半は欠損する。全体に比較的丁寧にケズリ調整を行い、下半に向かって膨らみを持たせ、形を整える。表面の周縁はややケズリ込み角に丸みをもたせる。下端上部に要用の穿孔を施す。木24は蝙蝠扇の骨で、上半は欠損する。全体にケズリ調整を行い、下半に向かって膨らみを持たせ、形を整え、下端ですぼまる。下部に要用の穿孔を施す。

木25・26 留針である。木25は留針状を呈する木製品で、完形である。全面丁寧にケズリ調整を行う。上端はやや丸みをもたせ、下端は平坦である。両面とも下方に向かってケズリ、やや薄くする。下半は一方の側にわずかに曲げる。木26はほぼ完形である。全面丁寧にケズリ調整を行う。上端は圭頭状を呈し、下端に向かって両側縁からケズリ込み下端は尖らす。下部で一方側に曲げる。

木27～33 下駄はいずれも台と歯を一木から作る連歯下駄である。木27はほぼ完形であるが、やや腐食が進み表面調整は不明である。歯の下辺幅が台幅より広がる型式である。指圧痕の状態から右足用と考えられる。木28は半分を欠損する。やや腐食が進む。歯の下辺幅が台幅より広がる型式である。全体に粗い作りである。木29は半分を欠損する。台周縁はケズリにより断面台形を呈する。前壺付近にさらに1箇所穿孔を行うが、貫通はし

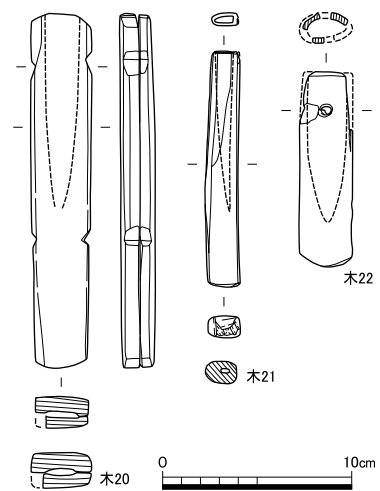


図57 木製品実測図1（1：4）

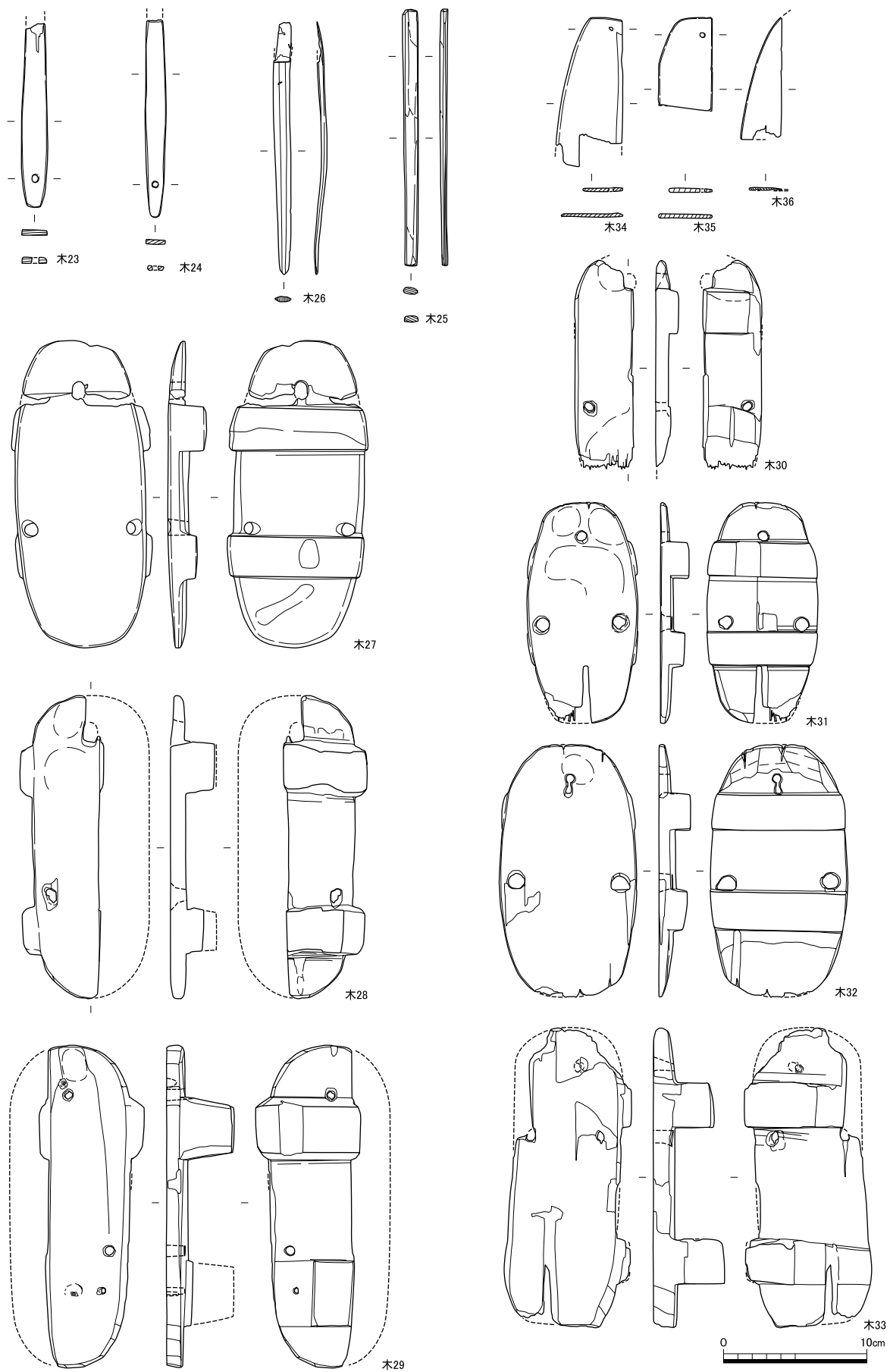


图58 木製品実測图2 (1:4)

ていない。また、後壺と台尻間にも2箇所の穿孔があり、貫通する。この位置は後歯の中央に当たり、後歯折損時の修理用釘穴である。1箇所の周囲には、平面六角形の圧痕があり、同形状頭の釘を使用したのであろう。木30は半分を欠損する。やや腐食が進む。後歯および台尻は磨り減る。台の左上が深く窪む指圧痕の状態から右足用であらう。木31は一部を欠損するが、ほぼ完形の小型品である。全体に丁寧なケズリを行う。台の周縁は、表裏ともケズリで角を落とす。向かって右上が窪み、左足用であらう。木32はほぼ完形であるが、やや腐食が進む。前壺の位置に2箇所の穿孔がある。台の指圧痕の状態から右足用であらう。木33は各部位を欠損し、やや腐食が進む。前壺位置は向かって右側に位置し、右側から左側へ斜め方向に穿孔する。前壺・後壺間は心々で5~6cmあり、全長に比べ短い。穿孔位置から左足用であらう。

木34~36 草履とみられる。履物の一種である金剛の心と考えられる薄板の破片である。3片あるが、同一個体かは不明。全体をケズリ、側縁は丁寧に切り取る。平面形は楕円を呈し、前後は平坦である。一方の側の中央に穿孔を施す。

**容器** (図59、図版43) 容器には、漆器蓋・漆器椀・漆器部材・木皿・柄杓・曲物・円盤状木製品・箸・板状製品がある。

木37 漆器蓋である。挽物蓋に黒漆を掛けた蓋で、口縁部付近の小破片である。蓋の形に挽き出し、器面を布で覆い厚みのある黒漆を掛ける。天井部はわずかに甲盛状を呈し、中心寄りに低い段を挽き出す。口縁部は天井部から垂下し、端部は平坦面を有する。

木38 漆器椀である。挽物の漆器椀で、半分欠損する。平坦な底部から体部が緩やかに開き、口縁部は斜め上方に立ち上がる。底部外面の周縁には溝が巡る。底部外面を除く全面に黒漆を掛け、体部外面には黒漆の上に赤漆で草花文を描く。

木39 漆器部材である。組み合わせ木製品の部材で、半分欠損する。器面は黒漆を掛ける。各角はケズリにより隅を落とす。一方の側面に断面方形のキリ込みを入れ、中央に穿孔を行う。キリ込み部には黒漆は達して折らず、組み合わせ後に黒漆を掛けたのであろう。

木40 挽物の木皿である。半分を欠損する。平坦な底部から口縁部が短く開く。底部内面は、口縁部との境が強く挽かれ、窪みが巡る。外面は不定方向のケズリ調整を行う。内面の一部に焦げ痕がある。内外面とも不定方向に刀子痕が残り、俎板に転用されたと考えられる。

木41 柄杓柄と考えられる棒状木製品で、柄の部材として完形である。全体に比較的丁寧にケズリ調整を行い、形を整える。先端は4面とも断面台形状にケズリ込む。基部付近は全長の約3分の1までさらにケズリを行い、断面は円形に近い。この箇所が把手とならう。

木42~46 曲物・円盤である。木42は円盤状製品で、小型に属する。半分欠損する。全面に比較的丁寧にケズリ調整を行う。下面は平坦、上面は甲盛状を呈する。下面周縁は周縁に沿ってキリ込み、わずかな段を巡らす。蓋板と考えられる。木43は円形曲物底板で、小型に属する。半分欠損する。全面ケズリ調整を行う。周縁に2箇所木釘痕がある。木44は曲物蓋で、3分の2を欠損する。全面丁寧にケズリ調整を行う。内面の周縁内側に段をケズリ出し巡らす。残存部で2箇所穿孔があり、樺皮などで側板を接合する綴じ穴である。木45は円盤状木製品で、小型に属する。半分欠

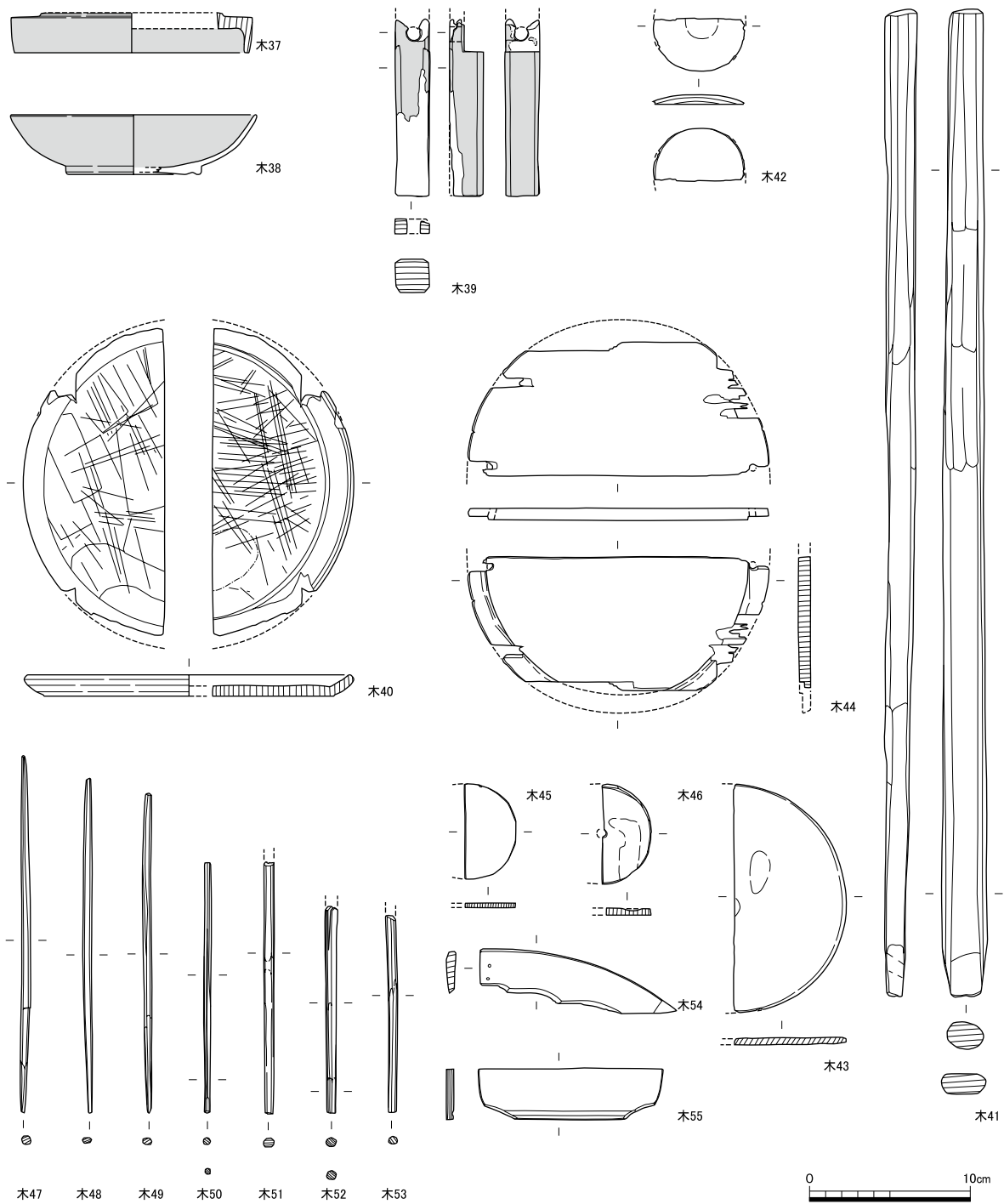


図59 木製品実測図3 (1:4)

損する。ケズリ調整を行うが、周縁のケズリ単位は直線的で角が残る。木46は円盤状木製品で、小型に属する。半分欠損する。両面はへぎ未調整、周縁はケズリを行う。中心に1箇所穿孔がある。蓋板の可能性はある。

木47～53 箸である。器面全体を粗くケズリ調整し、端部に向かってさらに細くケズリ込む。木47～49はともに完形である。木47は上・下端はキリ折り。器面全体を粗くケズリ調整し、両端に向かってケズリ込む。一端の先端は焦げる。木48は上・下端はキリ折り。器面全体を粗くケズリ調整し、両端に向かってケズリ込む。一端はさらにケズリを重ね、先端は尖る。先端は焦げる。木49

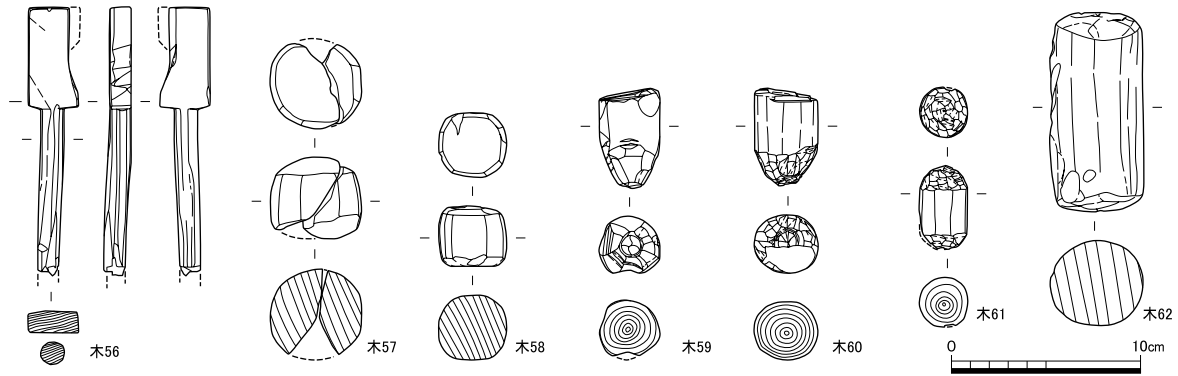


図60 木製品実測図4 (1:4)

は器面全体を粗くケズリ調整し、両端に向かってケズリ込む。一端はさらにケズリを重ね、先端は尖る。先端は焦げる。木50は小型の箸で、完形である。上・下端はキリ。木52は一端を欠損する。一端はキリ。木53は一端を欠損する。一端はキリ。

木54・55 板状製品である。木54は完形である。楕円形曲物底板の周縁の一部を転用する。上・下面は、未調整。周縁は丁寧なケズリ調整を行う。周縁に直交する側を切り落とし、周縁に対する側を雲形状にキリ込む。直交側付近に1箇所穿孔を行うが、曲物に伴う工程かは不明である。木55は完形である。側縁の形状から小型の円盤状木製品を転用したと考えられる。円盤を半截し、一方の周縁もワリで、ワリ面は未調整、他はケズリ。両側縁下半には、半円形のケズリ込みを行う。脚台など組み合わせ木製品の部材であろう。

文房具 (図60、図版43) 文房具には題箋がある。

木56 題箋である。軸部を丸く棒状に削った後に、滑らかに仕上げる。頭部を長方形に仕上げる。頭部には墨書の痕跡は残っていない。

遊戯具 (図60、図版43) 遊戯具には木球・独楽状木器がある。また、類するものについてもここで示す。

木57・58 木球である。木57は4分の1を欠損し、わずかに腐食が進む。器面は丁寧にケズリを行い、側縁は球体に、両木口は甲盛状に仕上げる。木58は完形である。器面は丁寧にケズリを行い、側縁は胴張り状に、木口は一面が甲盛状、一面は平坦に仕上げる。

木59・60 とともに心持枝材を加工した完形であるが、全形および調整痕などから未製品で、独楽の可能性があろう。木59の上端はキリオリ未調整、下部はケズリ込み、下端中心周縁は角度を変えさらにケズリ込む。木60の上端はキリおよび一部ケズリ、下端はキリオリ未調整。下部はケズリ込み、下端中心周縁は角度を変え乳頭状にケズリ込む。

木61・62 遊戯具類品である。木61は完形である。厚みのある材を加工し、円筒状にする。全面ケズリ調整を行い、上・下端は甲盛状にケズリ出す。木62は一部を欠損するがほぼ完形である。心持枝材の表皮を剥いだ状態で使用し、周縁は調整しない。上・下端はキリオリ後にケズリ込み断面半円形を呈する。

祭祀具 (図61、図版43) 祭祀具には齋串がある。

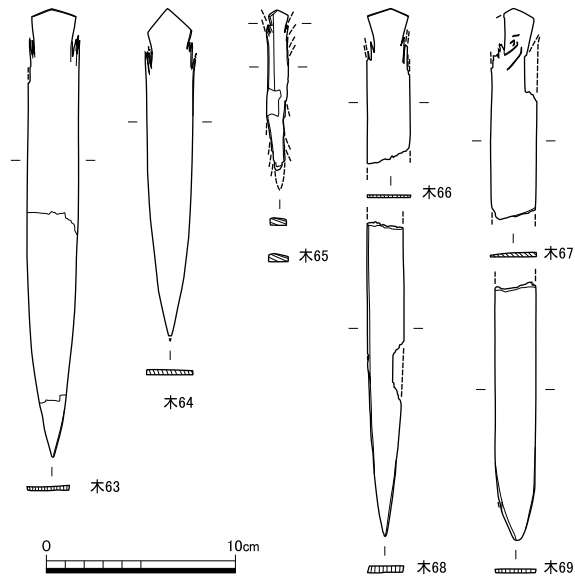


図61 木製品実測図5 (1 : 4)

木63～69 齋串である。木63・64は完形である。薄いへぎ材を使用し、側縁はケズリを行い、下端は尖らす。上端は圭頭状にキリ落とす。上端から側縁には斜め上方から切り込みを複数回入れる。木65は小型に属する。下端の一部を欠損する。やや厚みのある材を使用し、器面全体にケズリ調整を行う。上端は圭頭状に成形、側縁は下端に向かってケズリ込みすぼまる。上・下部側縁には斜め上・下方から切り込みを複数回入れる。木66・67は下半を欠損する。薄いへぎ材を使用し、側縁はケズリを行う。上端は圭頭状に成形。上部側縁には斜め上方から切り込みを複数回入れる。木68・69の上半は欠

損するため、齋串と断定はできない。木68はやや厚みのある薄板を使用し、全面にケズリを行い、下端は尖らす。下端付近はわずかに焦げる。

**用途不明木製品** (図62・63、図版43) 平面の形状から、付札状製品・人形状製品・棒状製品・板状製品などに分けられる。

木70～78(図62、図版43) 付札状製品である。いずれも上端付近の両側縁に上・下斜め方向からキリ欠きを入れる。木70は上端の一部を欠損する。やや腐食が進む。厚みのあるへぎ・ワリ材を使用し、上・下端はキリオリ。木70・71～74・76～78はともに完形である。木71は厚みのあるへぎ・ワリ材を使用し、上端はケズリ、丸みをもたせ、下端はキリオリ未調整。木72は厚みのある板

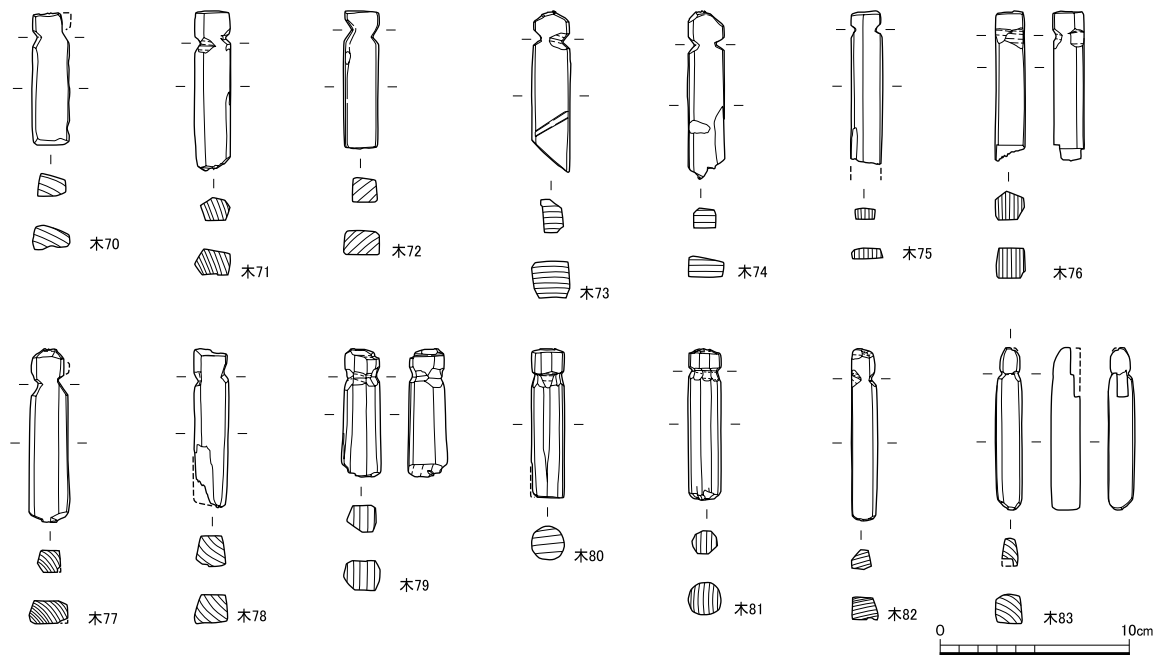


図62 木製品実測図6 (1 : 4)

の全体に粗くケズリを行い、上・下端はキリ。木73は厚みのあるへぎ・ワリ材を使用し、上端は切り折り、下端は斜め方向に切り落とす。木74は全面に粗いケズリを行う。上・下端はキリオリ未調整。木75の下半は欠損する。器面は裏面を除いてケズリを行い、断面形は甲盛状を呈する。上端はケズリを行う。上端からやや下がった箇所両側縁に、上・下斜め方向からキリ欠きを入れる。木76はへぎ材を使用し器面は一面を除いて未調整である。上・下端ともキリオリ未調整。上端からやや下がった角の3箇所に、上・下斜め方向からキリ欠きを入れる。木77は厚みのあるへぎ・ワリ材を使用し、上・下端はキリオリ。木78の器面は腐食が進む。厚みのある材を使用し、上端はケズリ、下端は斜め方向にキリオリか。

木79～83(図62、図版43) 人形状製品である。木79は完形である。棒状を呈し、上端はキリオリ、下端は斜め方向にケズリを行う。上端からやや下方の周縁に上・下斜め方向からキリ欠きを巡らす。木80は下半の一部を欠損する。上端はキリオリ未調整でやや甲盛状、下端はキリないしケズリを行い平坦。周縁は断面円形を呈する程度にケズリを行い、上端からやや下がった箇所の周縁に下斜め方向からキリ欠きを巡らす。木81は完形である。上端はキリオリのちケズリ、下端はケズリで両端面とも甲盛状にやや膨らむ。周縁は断面円形を呈する程度にケズリを行い、上端からやや下がった箇所の周縁に下斜め方向からのキリ欠きを巡らす。木82は完形である。厚みのあるへぎ・ワリ材を使用し、上端はキリ、下端はキリオリ未調整。上端付近下部の3方に上・下斜め方向からキリ欠きを入れる。木83は上端の一部を除きほぼ形であるが、腐食が進む。全面粗いケズリを行うが、1面はケズリを行い、平坦面を作ることで、断面かまぼこ形を呈する。上端はケズリ、下端はキリオリ。平坦面上端付近には上下に長い長方形の割り込みがあることから、組み合わせの部材の可能性ある。

木84～89(図63、図版43) 棒状製品である。木84は一部を欠損する。皮を剥いだままの中空の心持枝材を加工する。一端はキリオリ未調整、一端はケズリ込む。木85は一部を欠損する。皮を剥いだままの中空の心持枝材を加工する。一端はキリオリ未調整、一端はケズリ込む。完形である。全体にケズリ調整を行い、形を整える。側縁は丸みをもたせ、断面は楕円形を呈する。頭部は圭頭状にケズリ、下端に向かってさらにケズリ込み先端は尖らす。木86は下半を折損する。全面に粗いケズリを行い、断面形は円形を呈する。中位から下端に向かってさらにケズリ込み細くする。上端面はキリオリ。木87は下先端を欠損する以外は完形である。細枝

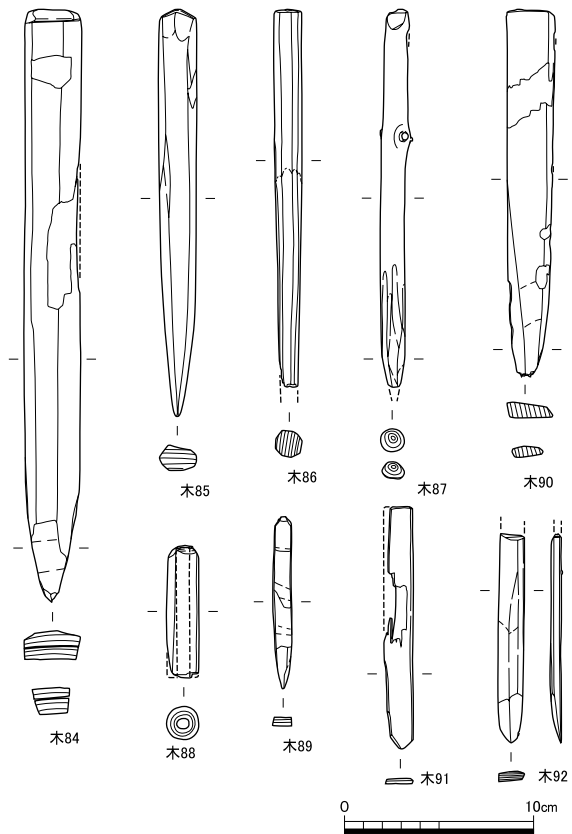


図63 木製品実測図7 (1:4)

を切り折った枝の表皮を剥いだままの材を使用し、大半は未調整である。上端はキリ折り。下端に向かってケズリ込み、尖らす。木88は完形である。太い心持ち材周縁を使用し、年輪に沿ったヘギ材である。器面は未調整である。木口はキリオリ、下端は側縁から斜めにケズリ込み、先端は尖る。中央から下端にかけて年輪に沿って2枚に分かれる。木89は完形である。全面に粗いケズリを行い、下端は尖らす。頭部は4方からケズリを行い、圭頭状を呈する。

木90～92(図63、図版43) 板状製品である。木90は完形で剣形を呈する。器面は全面ケズリを行う。端面はキリオリ。峰に相当する側縁は平坦に、刃に相当する側縁は、両側からケズリ込み刃状を呈する。木91は中位を欠損するがほぼ完形である。ヘギ材を使用し、表面および両側縁はケズリ。両側縁下端には、上斜め方向からキリ込み、先端は尖る。木92は完形である。全面ケズリ調整を行う。上端は切り折り未調整。上面はさらに両側縁からケズリ込み、下端は尖る。裏面は平坦で、断面形は甲盛状を呈する。

**建築部材**(図64・65) 建築部材では組物製品・柱根・礎板がある。

木93(図64) 組物製品である。柱の中心に乗る大斗状を呈するが、平面形は長方形である。やや腐食が進む。上・下面はキリ。上面をノミやチョウナなどの工具で削り込み、一辺の2隅および面対する一辺の中央に突起を残す。削り込み下面は、外側に向かって傾斜する。側面の4面とも下部はチョウナで斜め方向にケズリ込む。大斗であれば、中央の突起は不要、削り込み下面は平坦であろう。

木94～99(図64) 柱根である。木98以外は腐食が進む。木94は礎板として使用されたが、柱の形状をとどめているためここに示す。10面に面取りしており、柱材の転用と考えられるが、心持ち材ではない。木口的一端はキリ、一端は斧などによるキリオリ。木95の基は大半がキリオリ未調整で、一部キリで平坦面を作る。板材の周囲を8面体にキリ、器面を手斧で調整する。手斧痕長は4～6cm程度である。木96は心持ち材であるが、心は中心から外れる。基は斜め方向からの斧などによるキリオリ未調整。板材の周囲を8面体にキリ、器面を手斧で調整する。手斧痕の単位は4～5cm程度である。基から約30cmの箇所に直交してキリ込み、段を作る。段から6cmの箇所には釘穴がある。木97は心持ち材である。基は斧などによるキリオリ未調整。板材の周囲を8・9面体にキリ。基から約9～16cmの間の周囲をキリ込み、縄掛けを作る。木98の基は斧などによるキリオリ後、平坦に調整か。周囲を9面体にキリ出し、各面はチョウナにより器面を整え、各面の中心は窪む。チョウナの単位は1.5～5cm程度である。木99の基は斧などによるキリオリ未調整。板材の周囲を8・9面体にキリ出し、器面にはチョウナ痕がわずかに残る。

木100～112(図65) 礎板である。木100は太い心持ち材周縁を使用し、年輪に沿ったヘギ材である。木口はキリ、側縁はワリ後未調整。内面の一部に刻印を施す。木101は腐食が進み、器面調整は不明な箇所がある。木102の木口はキリ。裏面の木口から削り込み入れる形状から建築部材の転用である。木103・108・110・111は礎板の形状としては完形で、建築部材の転用である。木103は心持ちの柱材の転用で、柱材を複数ヘギ分割した破片である。1面を除き器面にヤリガンナ痕が明瞭に残る。木口はキリ。木104の器面はやや腐食が進む。木口はキリ、側面はケズリ。木105の



器面はやや腐食が進む。木口はキリ、側面はケズリ。裏面に長軸方向に直交する圧痕が残るが、幅は不明。木106の器面はやや腐食が進む。木口はキリ、側面はケズリ。表面に長軸方向に直交する圧痕が残るが、幅は不明。また、対向する位置に、釘穴が2箇所ある。この釘穴の打ち込み痕跡からは、表面は、比較的丁寧なケズリを行い、裏面は粗い。木104・105の木口と接合し、この木106を介し礎板の3個体が同一部材から切断され、転用材を現地で加工していた事例といえる。木107

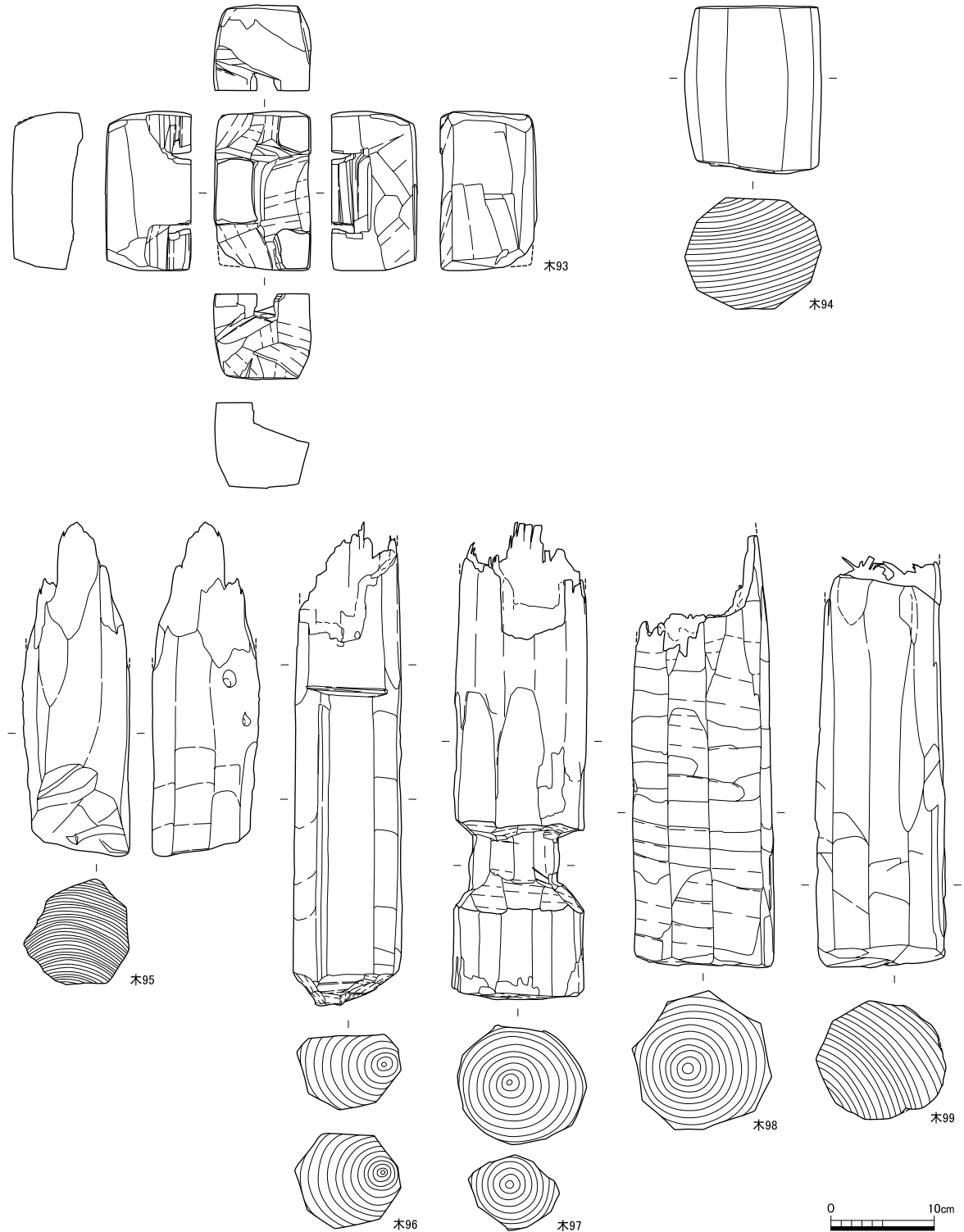


図64 木製品実測図8 (1:6)



図65 木製品実測図9 (1:6)

の木口はキリ、一端は一方からキリ込みが入ることから建築部材の転用である。木108は腐食が進む。1面を除き器面に凹凸がある。木口の一端はキリ、一端はオノなどによるオリか。心持ち材の心を外し、年輪方向に従わずに縦方向に材を切断していることから、大鋸で引いた可能性がある。木109は板材の転用である。木口はキリ、側縁の1面はワリ未調整、1面はケズリを行う。表面は丁寧なケズリ、裏面は大鋸による挽き痕および浅いチョウナ痕が残る。端部付近に表面から打ち込んだ鉄釘が残り、貫通する。木110の3面はケズリを行うが、1面はヘギ未調整。木口はキリ。一方の木口に長方形の削込みがあることから、組み合わせ部材である。心持ち材の心を外し、年輪方向に従わずに縦方向に材を切断していることおよび側面に斜め方向の連続した挽き痕があること

などから、オガで挽いた可能性がある。木111の3面はケズリを行うが、1面はヘギ未調整。木口はキリ。中央部にキリ込みや刳込みがあることから、組み合わせ部材の転用である。心持ち材の心を外し、縦方向に材を切断していることから、オガで引いた可能性がある。木112は太い心持ち材の周縁を使用し、年輪に沿ったヘギ材である。木口はキリ、側縁はケズリ。一方の木口は側縁に直交してキリを入れてワリ欠く。側縁から穿孔がキリ欠き面まで貫通する。組み合わせ部材の転用であろう。

## 6. 銭貨 (図66、観察表5)

銭貨は29点出土した。このうち種類が判明したのは26点であるが、状態の比較的良い23点を図示した。3点は錆や破片のため銭種は不明である。銭貨の内訳は、皇朝銭・五銖銭・唐銭・北宋銭・明銭に大別できる。北宋銭が9種類・20点あり、全体の77%と大半を占めている。皇朝銭では、延喜通寶・貞元大寶が各1枚出土した。

1区では、井戸27から至道元寶 (銭6)、溝229から嘉祐通寶 (銭11)、池1121からは嘉祐通寶 (銭12) が出土している。

2区では、整地層1から開元通寶 (銭4)・熙寧元寶 (銭15)・元豊通寶 (銭18)・大觀通寶 (銭21)・政和通寶 (銭22) の5点、池77からは延喜通寶 (銭1)・皇宗通寶 (銭9)・大觀通寶 (銭20) の3点が出土している。柱穴81から貞元大寶 (銭2)、溝36からは景祐元寶 (銭8)・皇宗通寶 (銭10) が出土している。土坑186からは、五銖銭 (銭3)・開元通寶 (銭5)・至道元寶 (銭7)・嘉祐通寶 (銭13)・熙寧元寶 (銭14)・元豊通寶 (銭16・17)・元符通寶 (銭19) の8点が出土した。

これらの8点は重なった状態で出土していることから埋納されたとみられる。また、溝1からは永樂通寶 (銭23) が出土している。

皇宗通寶 (銭9)・熙寧元寶 (銭14) は、裏面の方形孔の輪郭にズレが生じている。

五銖銭 (銭3) は、中国で前漢・武帝のB.C.118年から、隋朝のA.D.585年に至る約700年間にわたり大量に鑄造された貨幣である。日本国内では平安時代末以降、大量の宋銭などに混じって搬入され流通していたが、京都では出土例は少ない。平安京では左京八条三坊七町で室町時代後期の遺物包含層から出土している<sup>8)</sup>。

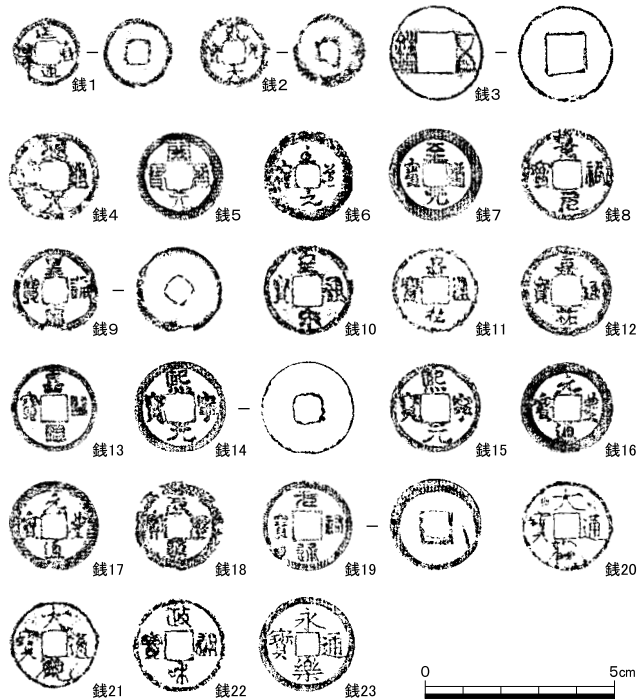


図66 銭貨拓影 (1:2)

## 7. 石製品（図67、図版44、観察表6）

石製品には羽釜・温石・紡錘車・石製帯飾り具・珠などがある。

石製帯飾り具 石1は鈍尾である。表面の研磨は丁寧である。面の角部分は面取りがなされる。裏面には断面U字状の潜り穴が放射状に穿たれる。淡緑灰色の地に緑灰色の脈が入る。2区池77から出土。

珠 石2は群青色をした小さな珠である。表面には研磨した痕跡が観察できる。直径8.0mm、重さ0.734g。直径0.9mmの穴が貫通する。比重は3.05である。石材はラピスラズリである。2区溝58から出土。

紡錘車 石3は滑石製の紡錘車である。底部側を削り抜いて輪状としている。直径3.8cm、高さ1.4cm。中央部には直径6mmの穴を穿つ。1区土坑662から出土。

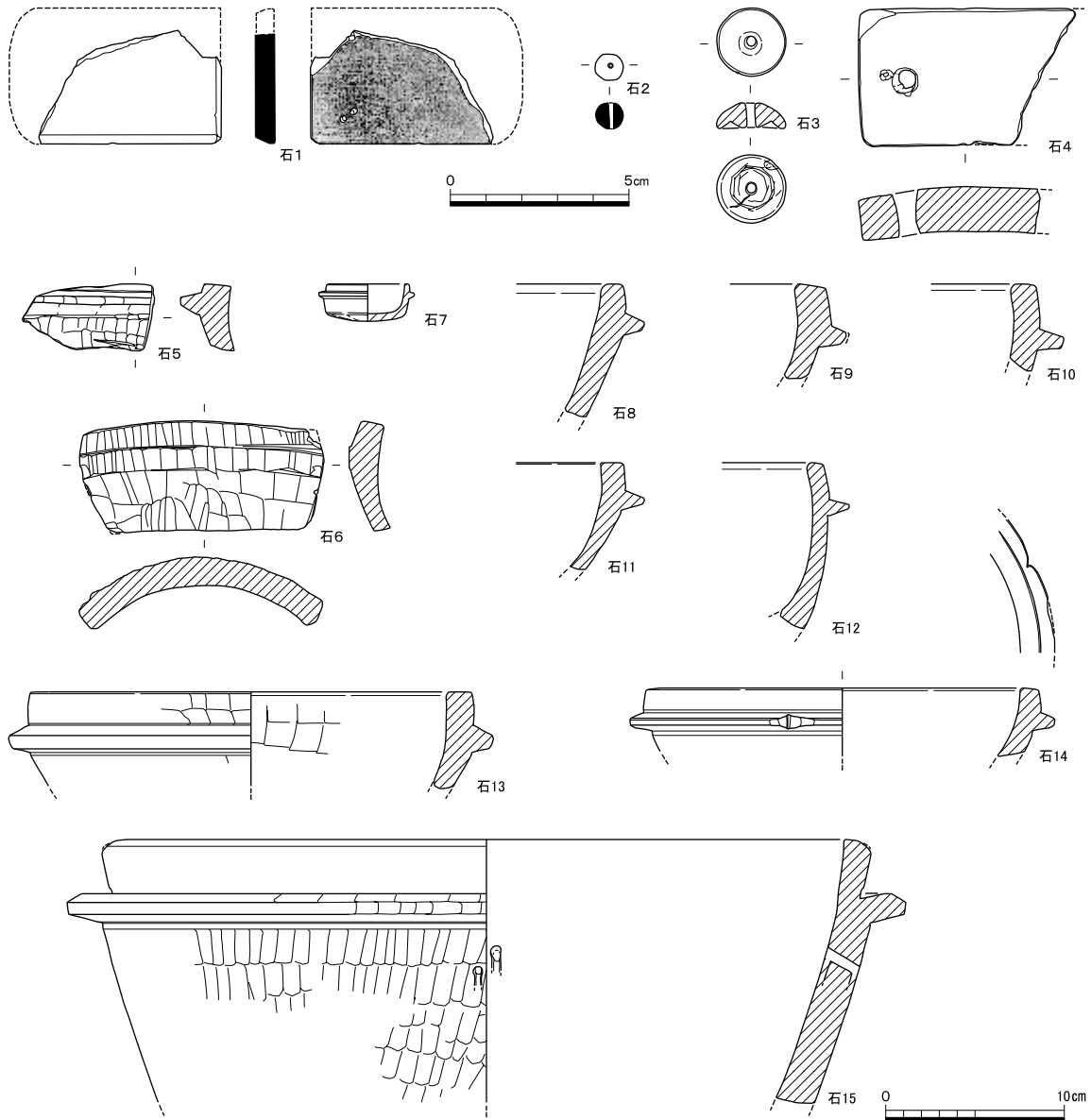


図67 石製品実測図（石1・2は1：2、石3～15は1：4）

温石 石4は、幅7.8cm、長さ12.2cm以上、厚さは2.5cmある。緩い曲面をもち、端部付近には穿孔がある。羽釜を再加工して作ったものとみられる。他にも未成品とみられる2点（石5・6）がある。石5は鏝の上下の部分进行削り、平坦に加工する。石6は鏝を削り取り、全体を粗く削って形成している。穿孔はない。すべて滑石製。石4・5は1区整地層1、石6は溝245から出土。

羽釜 羽釜は8点とミニチュアが1点ある。石15は径40.2cmと今回出土した中で最大で、高さは14.8cmが残存する。体部は直線的にのびる。口縁部は体部に比べて薄く仕上げる。石13・14は小型の製品である。石14の鏝端部には切り込みを入れて輪花状を呈する。石8～12は小片のために口径は不明である。石8は体部が直線的に立ち上がる。石9～12は体部が内弯しながら立ち上がる。石12は体部が比較的薄く仕上げられている。石7は径4.1cmのミニチュアであるが、精巧な作りである。石7は1区土坑184出土。石8は1区井戸555、石9は1区溝417、石10は1区土坑73、石11は1区土坑320、石12は2区整地層、石13は1区井戸27、石14は1区土坑764、石15は1区土坑576から出土。

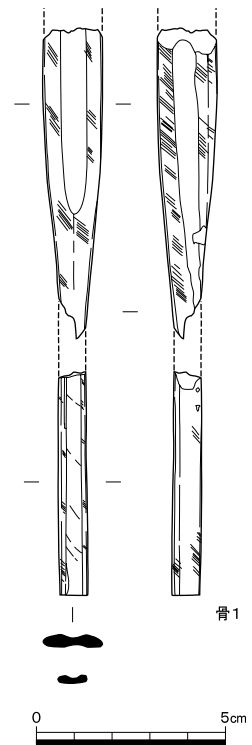


図68 骨製品実測図  
(1 : 2)

## 8. 骨製品（図68、図版44、観察表6）

骨製品は1点出土した。動物の骨はウシ・ウマ・ニホンジカなどが池や井戸などから出土している。2区井戸78からはニホンジカの左-中手骨・橈骨・脛骨・踵骨・距骨、右-脛骨・踵骨・距骨、尺骨など多くの部位が出土した。中には切断痕が観察されるものもある。

不明筥形製品 骨1は削り出して筥状としている。表側は表面を丁寧に削り、蒲鋒状として幅広部分には幅6.5mm、深さ1.5mmのくぼみを施す。裏側は中央部に骨中空部を残して、両側を平坦に削る。下端部は平坦に仕上げる。上端部の形状は不明。柄部との境目で折損している。幅0.6～1.8cm、長さ14.1cm以上、厚さ0.2～0.3cmある。ニホンジカ骨。2区井戸78から出土。

### 註

- 1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- 2) 奈良国立文化財研究所編『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996年
- 3) 『平安京跡研究調査報告 第4輯 西賀茂瓦窯跡』財団法人古代学協会 1978年
- 4) 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第31集 大山崎町教育委員会 2005年
- 5) 『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』大谷高等学校法住寺殿跡遺跡発掘調査会 1984年
- 6) 『木村捷三郎収集瓦図録』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年 瓦159
- 7) 『香川県陶邑窯跡調査報告』香川県教育委員会 1968年
- 8) 「平安京左京八条三坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年

## 第5章 まとめ

今回の調査で検出した遺構は、1区・2区合わせて1,355基あった。これらの遺構は出土した遺物や検出層序から判断して平安時代・鎌倉時代・室町時代以降に分けられる。

ここでは、これまでの平安京左京九条内での調査成果を含め、今回の調査地における遺構の変遷を時代ごとにまとめておく。さらに、井戸と池の水位、出土した平安時代前期の木簡、池堆積土の分析結果についても若干述べる。

### 1. 調査地の遺構の変遷

#### 1) 古墳時代以前

今回の調査では、古墳時代以前の遺構は検出できなかったが、後世の遺構や遺物包含層に混入して出土した弥生時代・古墳時代の遺物は、弥生時代から古墳時代までの集落跡である烏丸町遺跡に関わるものと考えられる。今回の調査地は、烏丸町遺跡の東西1.2km、東西0.7kmの推定範囲内のほぼ中央北寄りに位置している。

周辺での調査では、縄文時代中期から晩期の土器や石鏃（調査18・21・23）、弥生時代前期から中期の土器・石器（調査13・16・23）、そして古墳時代の土師器・須恵器（調査11・16・23）が出土している。これら縄文時代から古墳時代の遺物は、いずれも流路・落込み・遺物包含層や後世の遺構からの出土である。今回の調査で出土した遺物には、比較的大きな破片が含まれており、器表や断面に磨滅があまり認められないことから、近接した場所に住居跡など生活の場が存在するとみられる。

#### 2) 平安時代前期から中期（図69）

今回の調査で検出した最も古い遺構は、平安時代前期に属する池と自然流路である。9世紀初頭に当地には、湧水の豊富な自然流路1158を利用して、一体とみられる池80・1160が造られた。北側の1区では、池1160は東岸に拳大の礫を敷き詰めて洲浜を形成する。さらに南端部では大型のチャートを並べて護岸もしくは景石としている。池中央部には、泉とみられる掘り込み施設（泉1159）があり、池に水を供給している。南側の2区では、池80の東岸にやや大きめの礫を敷いて洲浜を形成する。この洲浜は2時期あり、新しい時期の洲浜の傾斜がより急である。1区と同様にこちらにも中央部に泉とみられる施設があり、池に水を供給している。北側では東西幅が狭いが、南側では西に広がりを見せながら南西方向に延びていくと見られる。西側の室町小路東築地が想定される個所では、小路に関連する溝や路面などの遺構は検出していないことから、室町小路は敷設されておらず、この園池を備えた宅地の規模は十町と七町の東西2町以上の広さを持っていたことが想定される。

2区の池80の堆積土下層からは平安時代前期の土器類（平安京I期中～新段階：780～840年）と共に、「施薬院」・「悲田院」・「弘仁六年」などと記された16点の木簡が出土している。これらの木簡の出土により当地には一時期、施薬院関連の施設があったと想定できるが、九条家文書にある

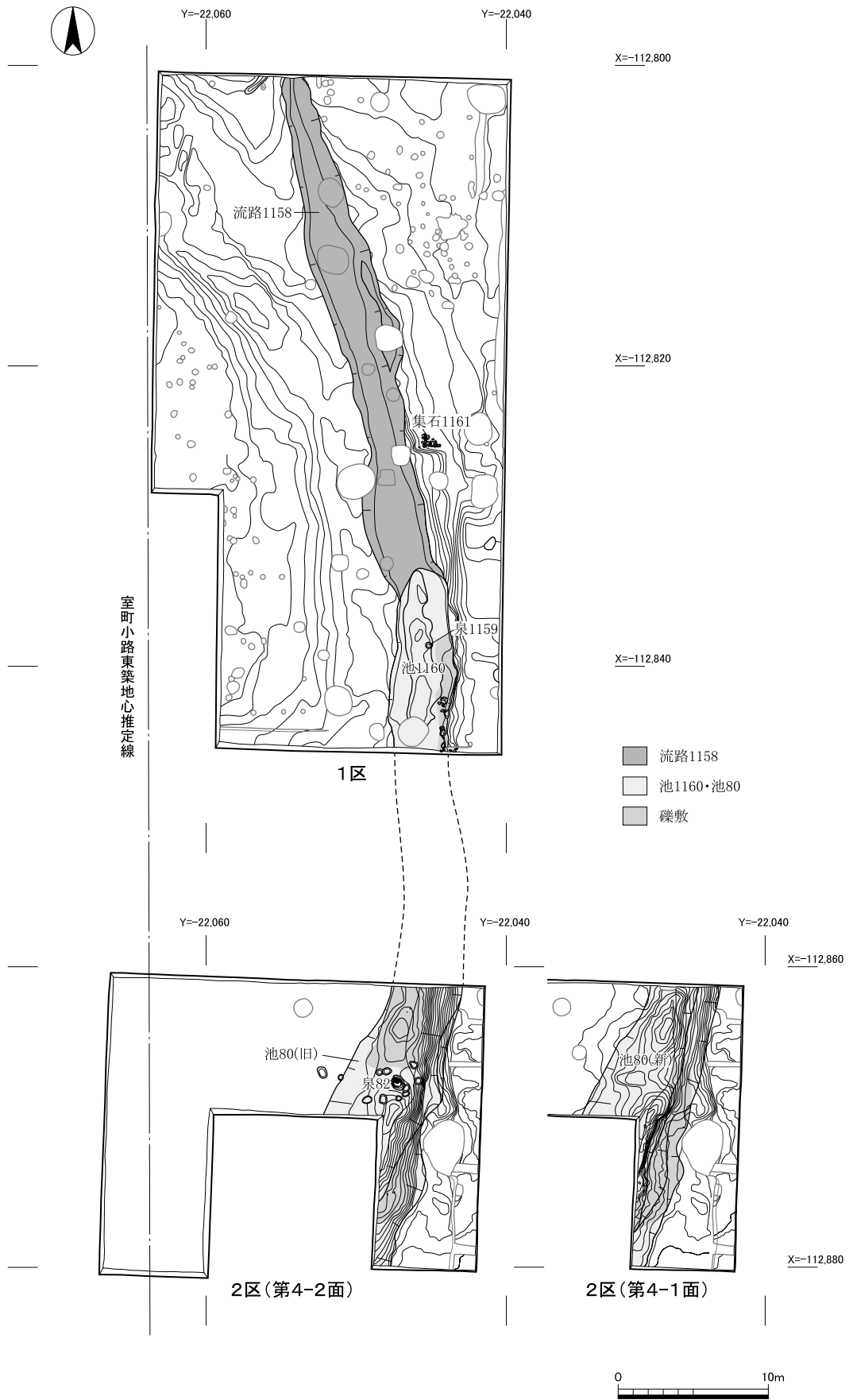


図69 平安時代前期から中期（第4面）の遺構概要図（1：400）

施薬院御倉の実態については今後の課題である。施薬院は三坊三町に所在したとされているが、当地からは南西方向に2町の距離がある。

周辺には、他にも平安時代前期の池を検出している例がある。同町である十町東部では東西長3.3m、南北長1.5m以上の半円に近い播鉢状の池が検出されている（調査14）。また調査地の西側に位置する左京九条二坊では2例が報告されており、十三町では自然石や礫を敷いた洲浜が検出されている（調査3）。十六町では石敷きの汀などが検出されており（調査10）、周辺には園池を備えた宅地が複数存在したことが明らかとなっている。

平安時代前期の『遍照發揮性靈集』<sup>1)</sup>には、「左九條に宅を有ちたり。地は貳町に餘れり・・。涌泉水鏡のごとくにして表裏なり。流水汎溢として左右なり。松竹風来れば琴箏のごとし。梅柳雨催し錦繡のごとし。春の鳥啼聲ありて、鴻鴈于飛す。熱渴臨めば即ち除こる。清涼憩ふときは即至る。」とある。当地を含む左京九条には、平安時代前期から豊富な地下水を利用して盛んに邸宅に伴う園池が造られたとみられる。

調査区内では池に伴う建物は検出できなかったが、比較的地盤の高い東側に建物が展開するとみられる。周辺では、十町東部で平安時代前期の南北棟建物が検出され、付近からは鞆の羽口が出土している（調査14）。十二町では円面硯（調査立30）、十三町では皇朝銭「隆平永寶」（調査16）、十六町では多くの輸入陶磁器と唐三彩陶枕が出土している（調査19）。出土した遺物には高級品が多い傾向があり、居住者の経済力を示すものとみられる。

### 3) 平安時代中期から後期（図70）

11世紀に入ると前代の池80・1160および流路1158を利用して大規模な池77・1121に造り直している。池77・1121は連続する遺構と考えられ、1区から2区全体に広がる南北80m以上、東西30m以上、深さ0.2～0.4mの大規模な池である。1区の南部では東岸に大型の板材による土留めと景石を据え、2区の北部では土留めなどの工法を用いて小石を敷き詰めた緩やかな傾斜の洲浜を造り、南部は平坦で小石を貼り付けた洲浜としている。場所によって池汀の景観を変えていることがわかった。

2区で明らかのように、検出した池77が室町小路東築地心推定線を越えて、西側に広がることから、前期と同様に室町小路は敷設されておらず、十町と七町の東西2町以上の規模の邸宅に伴う園池とみられる。また前期と同様に、調査区内では池に伴う建物は検出できなかったが、池の東側で1基であるが大型の柱穴1168を検出していることから建物は池東側に展開する可能性があるともみられる。

文献史料からは、平安時代中期に九条三坊内で園池を伴う宅地は、六町に右大臣藤原師輔邸、十三・十四町に太政大臣藤原信長邸などが記載されている。また、藤原基経や忠平も九条に邸宅を所有していることが記されている。

発掘調査では、九条三坊二町で平安時代後期の白砂を敷いた池洲浜を検出しており、1町規模の邸宅に伴う園池とみられる（調査12）。八条二坊十六町で平安時代後期の拳大の石を敷き詰めた泉状遺構を検出しているが、こちらは町屋に付属する施設との見解が示されている（調査10）。



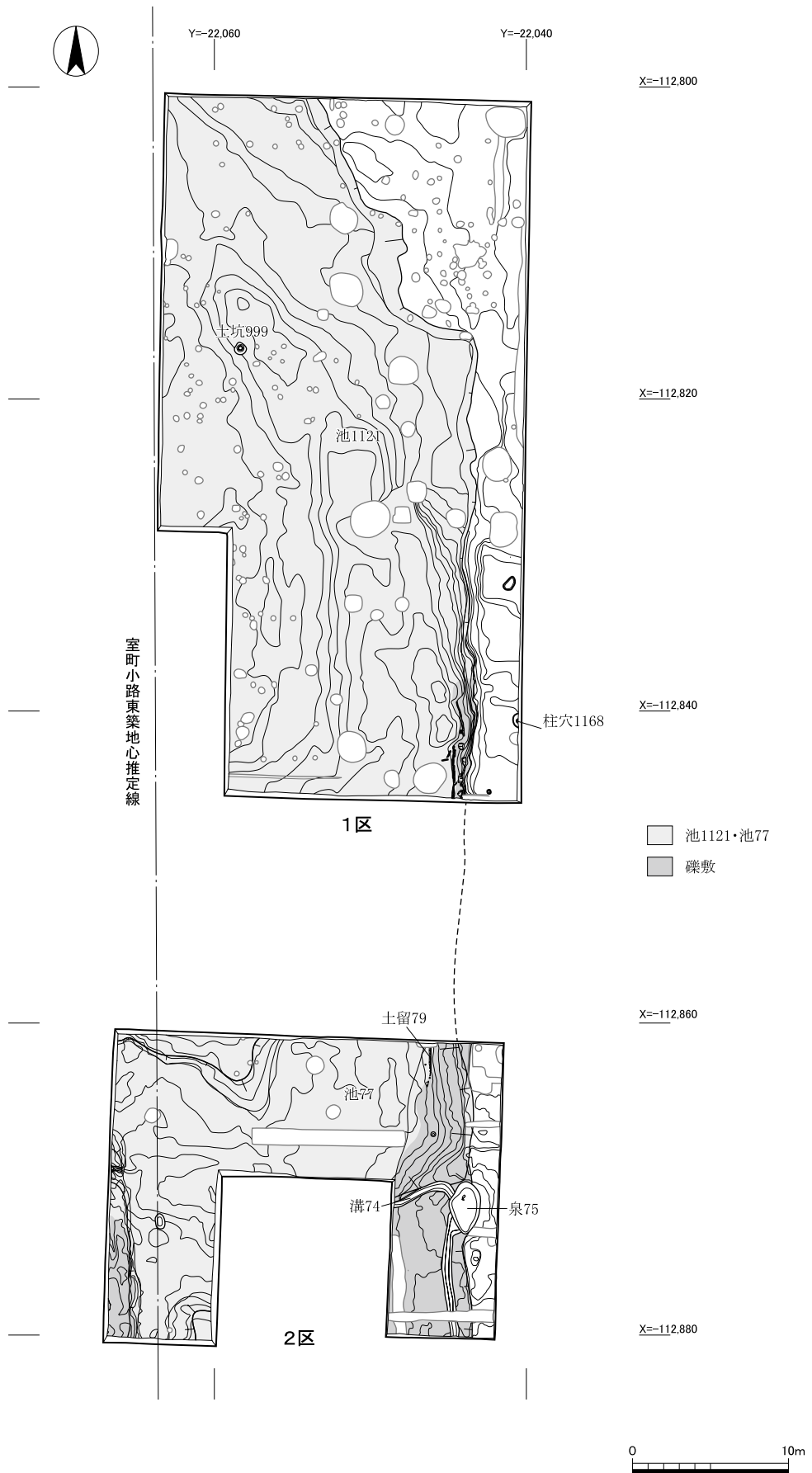


図70 平安時代中期から後期（第3面）の遺構概要図（1：400）

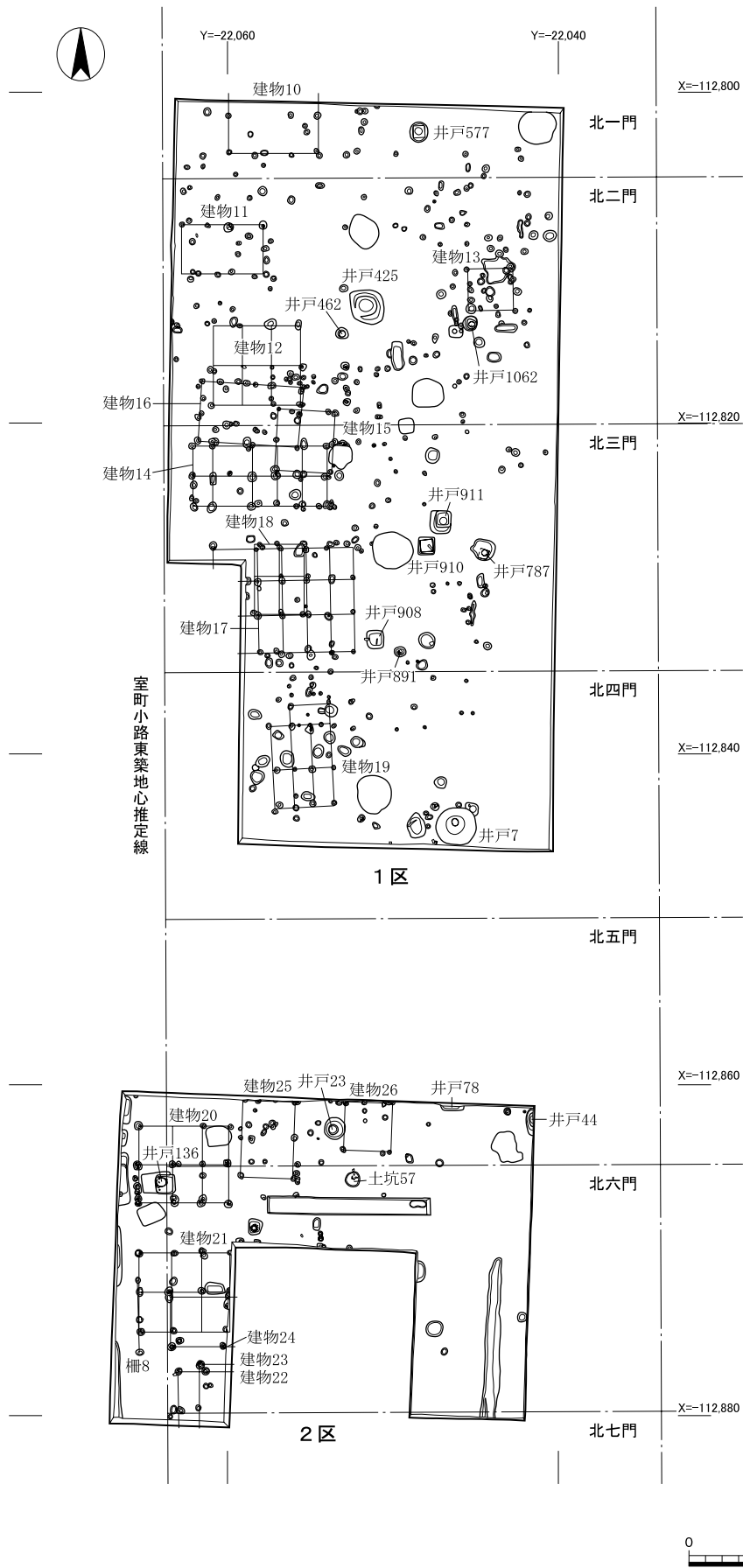


図71 平安時代末期から鎌倉時代初期（第2面）の遺構概要図（1：400）

#### 4) 平安時代末期から鎌倉時代初期 (図71)

1・2区ともに、池1121・77が廃絶した跡を埋め立て、総柱構造の建物を含む掘立柱建物群が建てられ、急激に居住域化していく。ここは埋め立て後も地盤が非常に軟弱であったため、柱穴の底部には根石や礎板などを用いた柱沈下防止の工夫が盛んに施されている。

検出した建物は17棟あり、東西棟建物が8棟、南北棟建物が3棟、ほぼ方形の建物が3棟、不明が3棟である。建物全体に占める東西棟建物の比率は5割弱あり、南北棟建物も2割弱ある。東西棟建物を主体として、南北棟建物が混在した状況が見て取れる。その中で、総柱の構造を持つ建物は7棟あり、建物の4割以上が総柱建物であることが注目される。なお、総柱建物7棟のうち、南北棟建物は2棟のみであった。

建物の東側には井戸が配置され、さらにその東側は遺構分布がまばらで密度が低い状況が見て取れることから、建物群は正面が西側と考えられる。建物と井戸の関係では、建物の背面に井戸が位置している。建物と井戸がセットになる例が建物10と井戸577、建物17と井戸908、建物19と井戸7などいくつか見られる。また、建物11・12と井戸425、建物14・18と井戸911など複数の建物で井戸を共有する例も見られる。

2区では、建物の位置が室町小路東築地芯想定線を越えて、室町小路の路面幅の東半部まで西側に張り出している。調査区の西端で断続的に検出している溝状遺構を室町小路東側溝と想定するならば、この時期の室町小路は西側に規模を縮小して敷設された可能性がある。以前実施された三坊十一町から十四町の調査(調査15・16)では、烏丸小路が同様に道路幅を半分に減じて敷設されていた例が報告されており、今回の室町小路も同様の可能性がある。前述のように平安時代前期には室町小路は敷設されていなかったとみられ、九条ではこの時期に室町小路が敷設されたと考えられる。

#### 5) 鎌倉時代前期 (図72)

北側の1区では、時間をあまりおかず、前代の整地層の上にさらに厚く整地して建物群が建てられ、さらに居住域化が進んでいく。

検出した建物は9棟あり、東西棟建物が7棟、南北棟建物が1棟、ほぼ方形の建物が1棟である。柵は東西方向のものを7条検出している。前代より南北棟建物の数が減り、ほとんどが東西棟建物となっていることが注目される。また、9棟の建物のうち総柱建物が3棟と3割に少なくなったことも大きな変化である。

総柱建物4・6は前代の総柱建物12・14と柱筋の方向がそれぞれ同一であり、また、総柱建物8は前代の総柱建物19と柱筋の方向が同一であることから、建物1～3・5・7・9にやや先行するものとみられる。その後、総柱建物は姿を消していく。

建物の東側に井戸が配置されており、建物の背面に井戸が位置していることは前代と同様である。建物と井戸がセットになる例は、建物1と井戸450、建物4と井戸1063、建物5と井戸1064などである。また、北側では調査区外となるために建物は確認できていないが、井戸555の位置からは、北側の針小路に面する宅地の区画が想定できる。前代と比較して井戸の数が減少しているが、

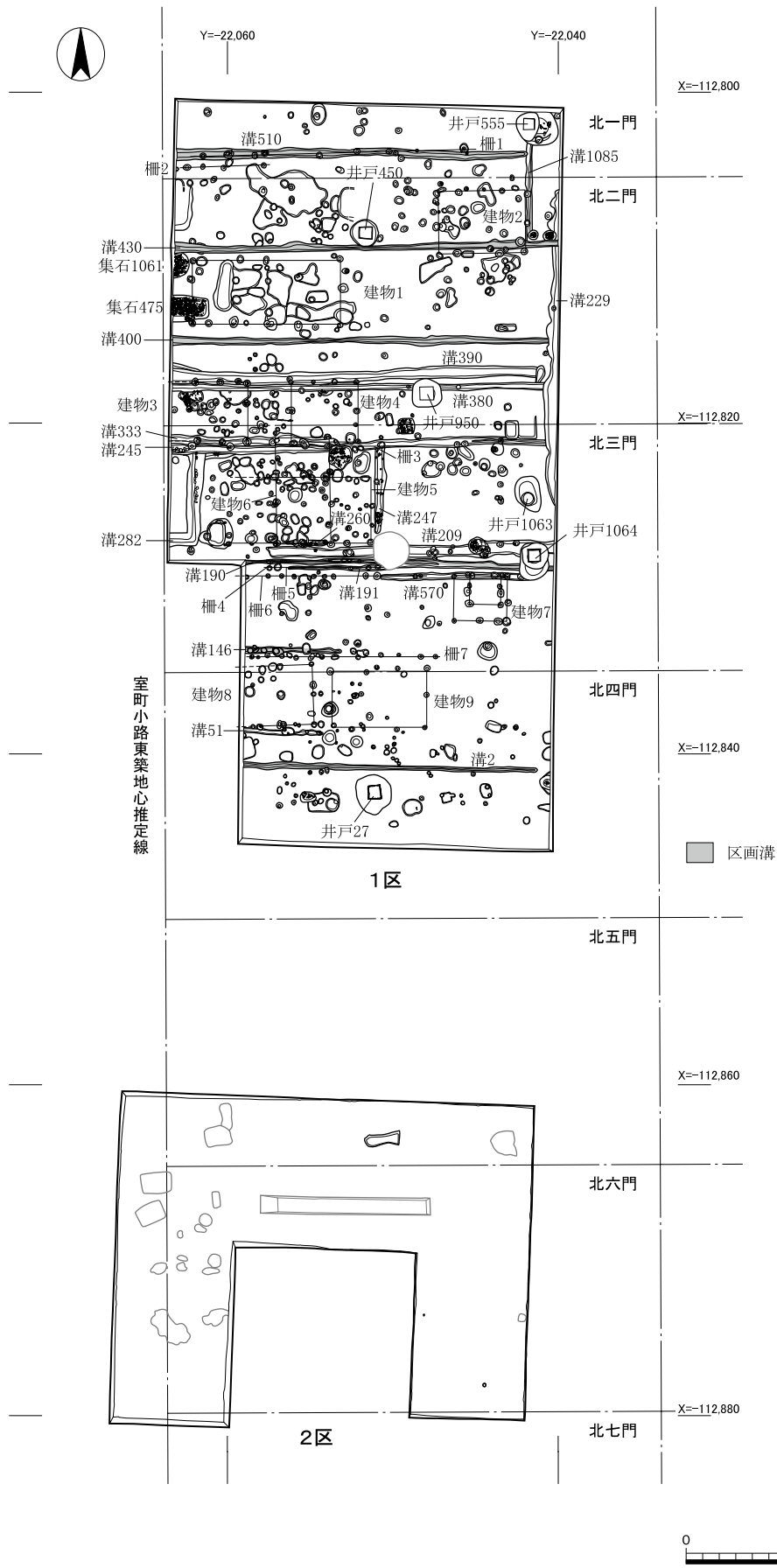


図72 鎌倉時代前期（第1 - 2面）の遺構概要図（1 : 400）

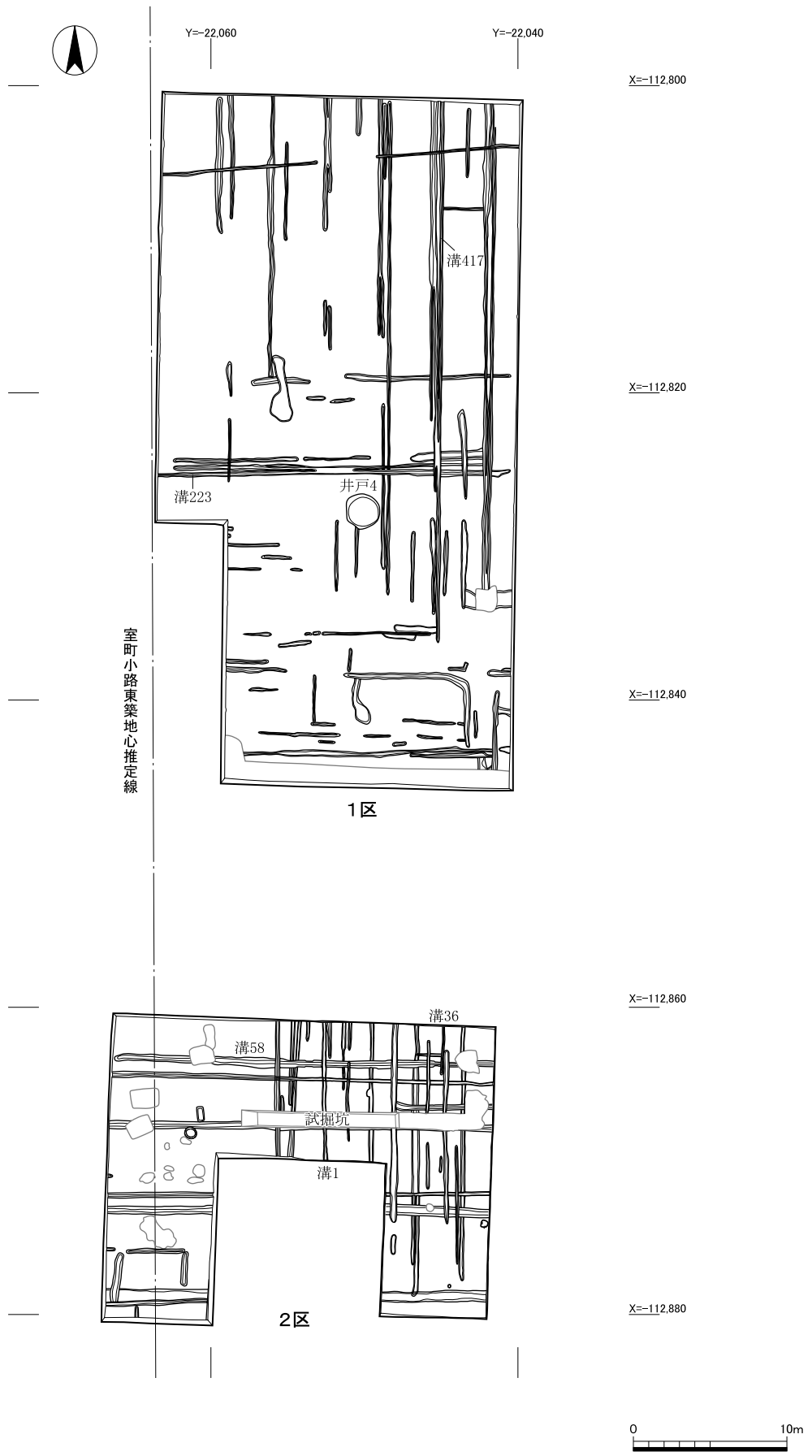


図73 室町時代以降（第1-1面）の遺構概要図（1：400）

縦板横棧組井筒構造の井戸の割合は増加し、規模も大型化している。井戸底部の深度には変化がみられない。

注目される建物には建物7がある。この建物は小規模ながら内外に重層的な平面形を持っていることから、社など特別な建物の可能性がある。建物西側の柵6・7によって東西方向の通路を想定すれば、西側の室町小路からの参道として見ることができる。なお、検出した宅地境は、東西方向の溝510・430・400などによっておよそ南北6m間隔に区画される。

一方、2区では同様に整地しているが建物などは建てられていない。こちらは下層の池堆積層上の整地が不十分で、軟弱な地盤であったため宅地としての継続した利用はできなかったとみられる。

1区では前代と同様に、建物群の西端の位置から考えると西側に規模を縮小した室町小路が設けられているとみられる。これらの遺構配置の特徴は、道路に面して小規模な東西に長い建物が連続して建ち並んでいることである。建物の長軸を道路と直交する町屋と考えられる構造の建物が出現していると見てよい。

十町東部でも同時期の建物群が検出されている（調査14）。西四行北三門・四門の全域にわたって建物群が存在しており、室町小路に面した当調査の1区と同様に、烏丸小路に面しても町屋が軒を連ねて建ち並んでいる状況が見て取れる。

## 6) 室町時代以降（図73）

鎌倉時代に建ち並んでいた町屋建物は廃絶して、当地は室町時代には急激に衰退する。このことは調査区全面に室町時代から江戸時代の東西・南北方向の小規模な耕作関連溝が展開することによってわかる。これらの溝は、おおむね東西方向の溝が古く、南北方向の溝群が新しいことがわかった。南北溝の底部には、割竹を敷き小礫を充填させる暗渠の構造をもつものも多くみられた。

また、調査区の壁断面の観察によれば、さらに上層に室町時代の耕作土層の上層に江戸時代から明治以降の南北方向の暗渠が多くみられ、近代に至るまでの間は耕作地として利用されていたことがわかった。中世以降は、耕作地としての利用が主となり、近世には当地域は東九条村と呼ばれ、蔬菜などの栽培が盛んとなり、『雍州府史』によれば特に藍玉の主要生産地として有名であった。

## 2. 井戸と池の水位について（図74）

今回の調査では20基の井戸を検出した。井戸の廃絶時期は、京都Ⅵ期中段階からⅦ期古段階に属し、平安時代末期から鎌倉時代前半の時期に集中している。

当地では、宅地としての利用は平安時代前期から続いているが、同後期まで園池が営まれていたために、調査区内ではこの時期の井戸は検出していない。

井戸底部の深さは当時の地下水位を示すものであるため、時代順に比較することで地下水位の変遷を知ることができる。平安京内に掘られた井戸は、おおむね時代が新しくなるほど深くなる傾向があるが、今回の調査では、平安時代末期から鎌倉時代初期の井戸底部の平均標高は23.46m、

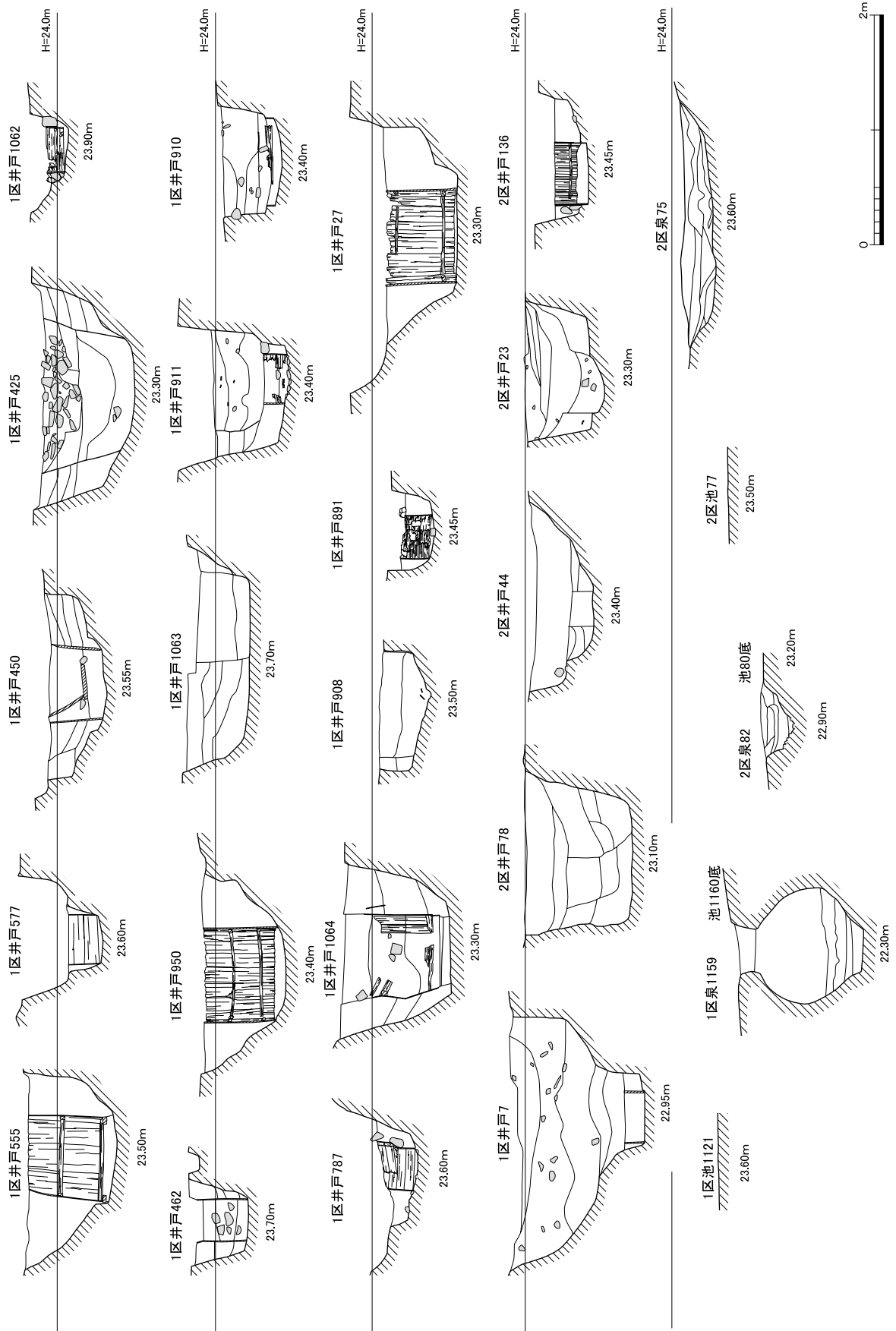


図74 井戸底と池底の標高模式図 (1 : 50)

鎌倉時代前期の井戸底部の平均標高は23.41 mであり、ほとんど深さに変わりがないことがわかった。ここでは、検出した井戸と平安時代前期と後期の泉や池底部との関係を見ていきたい。

図74は、検出した井戸断面を北から順に配列したものである。さらに、検出した泉断面も提示した。この図からは、井戸の検出面から底部までの深度は約0.4 mから約1.2 mで、平均深度は約0.7 mとなることがわかる。

一方、泉と池底部の標高は、泉1159は22.3 m、泉82は22.9 m、泉75が23.6 mであり、池80は23.1 m、池77は23.4 m、池1160は23.4 m、池1121は23.6 mである。泉82・1159、池77・80・1160は各底部が井戸底部の深度より低いことから、湧水があるとみられる。また、泉75・池1121は底部が井戸底部の深度より約0.2 m高くなっているが、この範囲内では確実に底部の深度は湧水層に達しているとみられる。

当地では、井戸の平均深度は約0.7 mと比較的浅く、水に恵まれていたことがうかがえる。左京九条周辺での調査（調査3・10・12・14）で、平安時代の池や泉が複数検出されていることや、空海の詩を編集した『遍照發揮性靈集』に記載された水辺の環境とも符合する結果となった。

### 3. 出土木簡について

9世紀初頭に属する2区池80から木簡（木1～16）が16点出土した。ここでは第4章で読み下した木簡の内容からわかったことについて述べる。

平安京跡の木簡の出土事例としては非常に点数が多く、施薬院関係木簡としてまとまった内容を持っている。弘仁六年三月十日の年紀を持つ木簡（木1）が含まれ、一連の木簡と出土遺構の帰属時期が明確となったことが重要である。

施薬院に収容された左京京戸や客作児が収容後に死亡した状況を報告した木簡（木1）が出土し、平安時代初期の平安京における施薬院の具体的な活動や、京の民衆との関係が明らかになった。また、木簡の上部には穿穴があり、ヒモなどで綴じて保管し、施薬院の収容者の氏名・年齢・身分・来着日などの情報を管理していたことが具体的に分かったことは大きな成果である。

さらに、貧困者や孤児の救護施設である悲田院と施薬院が一体的に経営されていたことが判明したことも重要である。木簡（木8）に記された「悲田院解 申請」の「解」は下位部署からの上申を意味していることから、平安時代初期には、悲田院は施薬院の被管官司であった可能性が高くなった。

また、具体的に施薬院には「武蔵国」・「讃岐国」など地方の国から物資が送られていたこと、送られた物資には「白米・黒米」・「蜀椒」・「猪脂」・「□牛丸」・「六物干薑丸」など、米や薬物原料などがあることなどが判明した。これらにより施薬院で使用された薬物の内容を追究する手がかりを得た。

また、木簡（木6）「武蔵国施薬院蜀椒壹斗」からは、武蔵国からの蜀椒の送り先が施薬院と明記され、宮中で使用される薬物等を管理する典薬寮とは明確に区別されていることも明らかとなった。



最後に、これら施薬院に関連する木簡がまとまって出土したことにより、当地の左京九条三坊十町には、平安時代初期に施薬院の関連施設が置かれていた可能性が高くなった。

#### 4. 池80出土の種子類について

池の堆積土を分析した結果は、付章2「自然科学分析」に詳しいが、ここでは薬草に関連した検出植物について述べる。

池80下層埋土からは、オオバコ・サジオモダカ・ミズアオイ・オオチドメ・スベリヒユなど現在の薬用植物<sup>2)</sup>として知られている種類も多種にわたって多量に検出されたことが明らかになった。さらに「藤原宮薬物木簡」<sup>3)</sup>に植物性生薬として記載されている胡麻が検出されており、当地で栽培されていた可能性もたれる。

文献には、施薬院には薬園があったとされることから、当地が施薬院関連施設であった可能性がさらに高くなった。

#### 註

- 1) 『遍照發揮性靈集』『綜芸種智院の式』空海の詩、碑銘、上表文などを弟子の真済が空海没後に編集したもの。
- 2) 『原色薬草図鑑』北隆館 1994年
- 3) 立木修「藤原宮出土の薬物木簡と古代医療の一側面」『古代文化』VOL.41 財団法人古代学協会 1989年

# 付章1 出土珠の材質調査

北野信彦（東京文化財研究所）

## 1. はじめに

平安京左京九条三坊十町の近世溝跡からは、穿孔された青色を呈する珠が1点出土している。今回、この資料の材質について、蛍光X線分析装置を用いた分析を実施したので、結果を報告する。

## 2. 調査方法

### ①資料表面の拡大観察

本資料の表面状態を目視観察した後、色相や混和物の混入状態の細部観察を東京文化財研究所・保存修復科学センター設置の（株）スカラ社製のDG-3型デジタル現場顕微鏡を使用して50倍から200倍の倍率で行った。さらに詳細な拡大観察は、（株）キーエンス社製VHX-1000型デジタルマイクロスコープを用いて500倍から2,000倍の倍率で行った。

### ②無機元素の定性分析

本資料の材質調査を行うために、東京文化財研究所・保存修復科学センター・伝統技術研究室設置の（株）堀場製作所MESA-500型蛍光X線分析装置を用いた無機元素の定性分析を行った。設定条件は、分析設定時間は600秒、試料室内は真空状態、X線管ターゲットはRh、X線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240 $\mu$ Aおよび20 $\mu$ A、検出強度は200,0～250,0cpsである。

## 3. 調査結果

本資料は、青色を呈する珠であるが、穿孔が貫通しているため、数珠玉など何らかの装飾品であると考えられる。本調査ではこの資料の材質調査を行うために、まず本資料の表面状態の拡大観察を実施した。その結果、本資料は全体が単色で群青色を呈する人工的なガラス珠ではなく、群青色を呈する鉱物にやや透明感のある白色を呈する夾雑鉱物が筋状に貫入した全体的にはややメタリックな鉱物珠であることが確認された（図75・76）。次に本資料を構成する無機元素を特定する

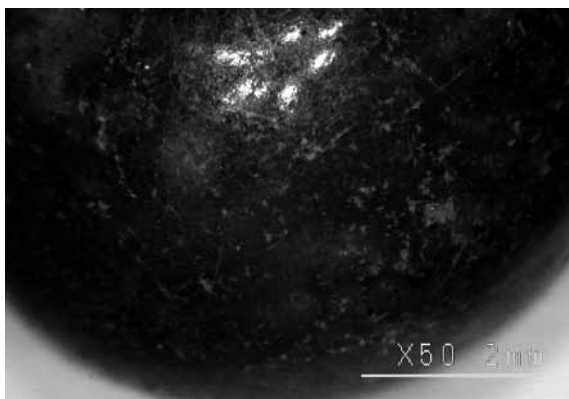


図75 本資料の表面状態の拡大1

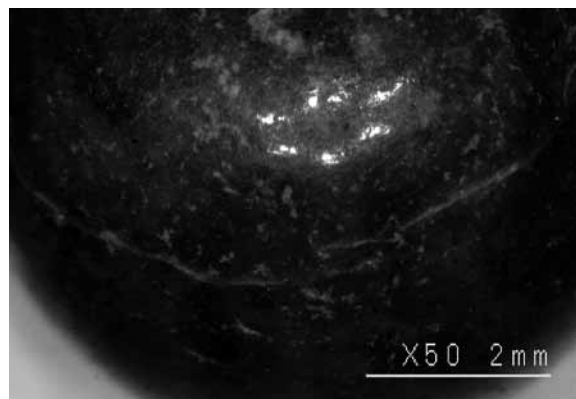


図76 本資料の表面状態の拡大2

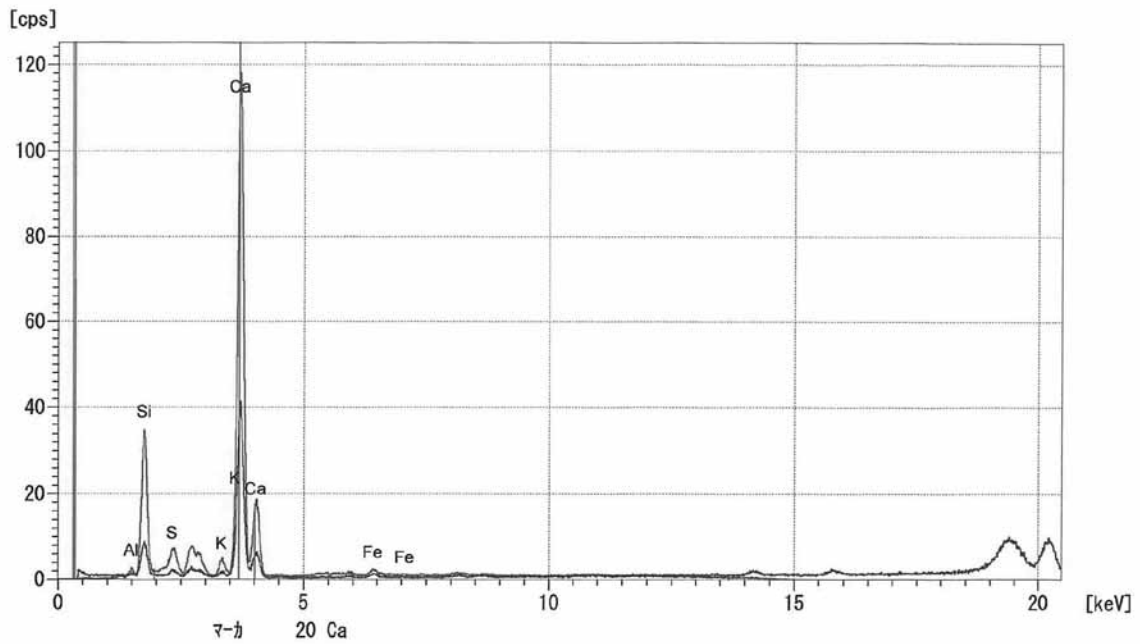


図77 本資料の蛍光X線分析結果1（穿孔周辺部分）

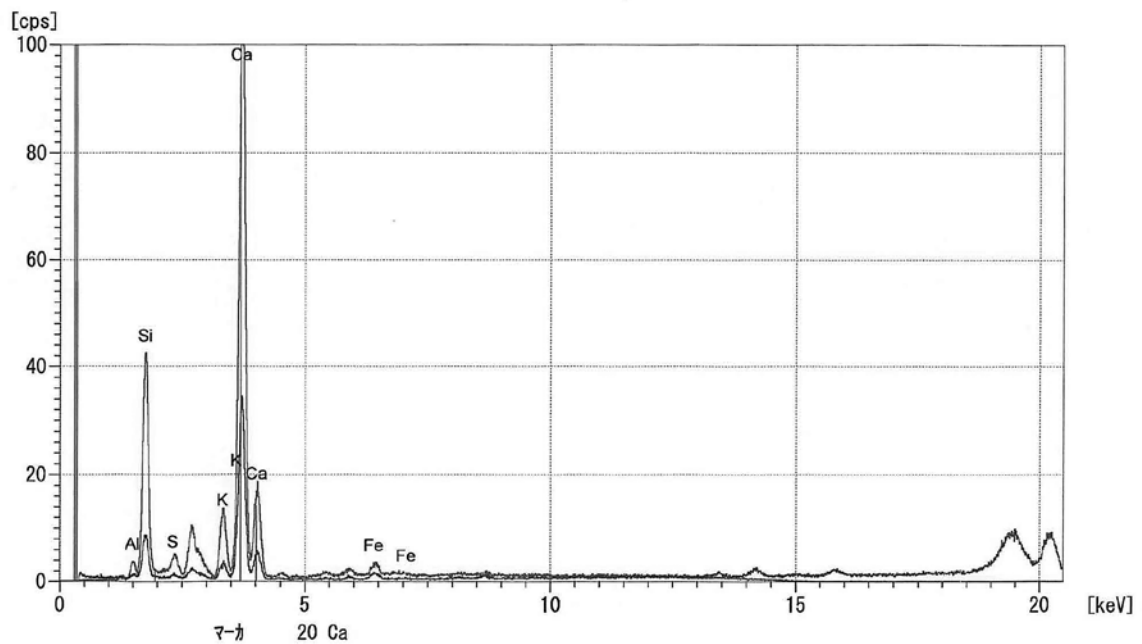


図78 本資料の蛍光X線分析結果2（側面部分）

ために、蛍光X線分析を実施した。調査の結果、本資料からは主成分としてシリカ（Si）とともにカルシウム（Ca）の強いピークとともに微量の硫黄（S）や鉄（Fe）の元素は検出されたが、銅（Cu）やリン（P）のピークは検出されなかった（図77・78）。

以上の点から、本資料は、ガラス珠ではなく、基本的には群青色を呈する原石鉱物を研磨した珠であり、この鉱物材料としては、通常、日本国内で産出する群青色を呈する天然鉱物には群青（ア

ズライト) や天藍石などがある。しかし本資料には岩群青 (azurite:  $\text{Cu}_3(\text{CO}_3)(\text{OH})_2$ ) の主要構成元素である銅 (Cu) や天藍石 (lazulite:  $\text{MgAl}_2(\text{PO}_4)_2\text{OH}_2$ ) のリン (P) は検出されず、シリカ (Si) とカルシウム (Ca) が主要元素であった。そのため本資料は青金石 (Iazurite:  $\text{Na}_{8-10}\text{Al}_6\text{O}_{24}\text{S}_2$ ) や方ソーダ石 (sodalite:  $\text{Na}_8\text{Al}_6\text{Si}_6\text{O}_{24}\text{Cl}_2$ )、藍方石 (hauyne:  $(\text{Na},\text{Ca})_{6-8}\text{Al}_6\text{Si}_6\text{O}_{24}(\text{SO}_4)_{1-2}$ ) などの複数のソーダ石グループの鉱物 (主要構成元素はシリカ:Si) を主成分とする類質同像の固溶体の半貴石であるラピスラズリであると同定した。このラピスラズリは熱変成を受けた石灰岩中に算出するため、貫入鉱物として方解石 (Calcite:  $\text{CaCO}_3$ ) や黄鉄鉱 (Pyrite:  $\text{FeS}_2$ ) などを副成分として含む場合も多い。そのため、本資料の表面状態の拡大観察で確認されたやや透明感のある白色を呈する夾雑鉱物は方解石 (主要構成元素はカルシウム:Ca)、表面のメタリック光沢は微量の黄鉄鉱 (主要構成元素は硫黄:Sと鉄:Fe) に由来すると理解した。

さて、本資料の原石鉱物であるラピスラズリは、古くはエジプト、シュメール、バビロニアなど古くから宝石として珍重されてきた。日本国内では産出せず、古くはアフガニスタンのバダフシャーン州が原産地として一元的に供給してきたとされる。和名では瑠璃(るり)と呼称され、正倉院御物や中尊寺金色堂の飾金具など、舶来の希少宝石として扱われてきた。いずれにしても、本遺跡からラピスラズリの珠が出土したことは、歴史的にも意味が大きいと考える。

## 付章 2 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 1. はじめに

平安京左京九条三坊十町跡は、「九条家文書」によると、鎌倉時代には九条家の領地となるが、それ以前は「施薬院御倉」であったとされる。今回の発掘調査では、9世紀および11～12世紀の池跡が確認されており、9世紀の池跡からは施薬院の仕事内容を示した木簡が出土している。今回の分析調査では、池を埋積する堆積物形成期の調査区およびその近辺の植生や有用商物に関する情報を得ることを目的として花粉分析・種実同定を行う。

### 2. 試料

分析調査は、2区の池77（11～12世紀）および池80（9世紀）について実施する（図79）。調査地点では、調査担当者により不攪乱柱状試料が採取されている。採取試料の層相を以下に示す。

池77（11～12世紀）：池の基盤堆積物は、灰色を呈する、砂質泥～泥質砂とその偽礫からなる。池埋積物は周囲より流れ込んだとみられる中粒砂混じり極細粒～細粒砂（偽礫の可能性もある）を挟在する、細礫・中礫、木材片、砂質泥の偽礫が混じる有機質砂質泥からなる。根成孔隙や棲管が確認され、初生の構造は著しく擾乱され乱れている。下部は池の基盤をなす堆積物に由来する灰色砂質泥～泥質砂の偽礫が多く混じる。また、最下部には5 cm以下の中礫が散在し、基盤堆積物に押し込まれているように見える。池埋積物の上位には中礫および灰色砂質泥～泥質砂の偽礫からなる堆積物が累重する。以上のような層相から、池77は、人為的営力により形成された基盤堆積物を掘削し、構築されており、池周囲から土砂が流れ込むような状況で埋積が進行したとみられ、廃絶後には人為的に埋め戻されている状況がうかがえる。なお、池77埋積物試料は塑性変形している。荷重（ロード）構造が確認されるが、この変形の原因は埋積物を覆う人為的堆積物形成期の圧密、あるいは地震動による変形の可能性が考えられる。この点については、本変形構造の拡がりなどを含め評価する必要がある。

池80（9世紀）：池の基盤堆積物は砂礫からなる河川堆積物である。その上位に累重する池埋積物は中礫、木材片、炭片が混じる、有機質砂質泥～泥質砂からなる。著しい擾乱により、初生の構造は不明瞭となっているが、泥がちな層準と砂がちな層準が積層している状況が確認される。また、最下部は基盤堆積物由来の砂・礫が混じる。上部は、有機質に富み、孔隙密度が大きくなる。以上の層相から、池80は基盤をなす河川堆積物を掘削して構築されており、下部層準形成期は周囲からの土砂流入がある滞水域であったが、上部層準形成期には放棄され、植生に覆われるような場所へと変化したことが示唆される。

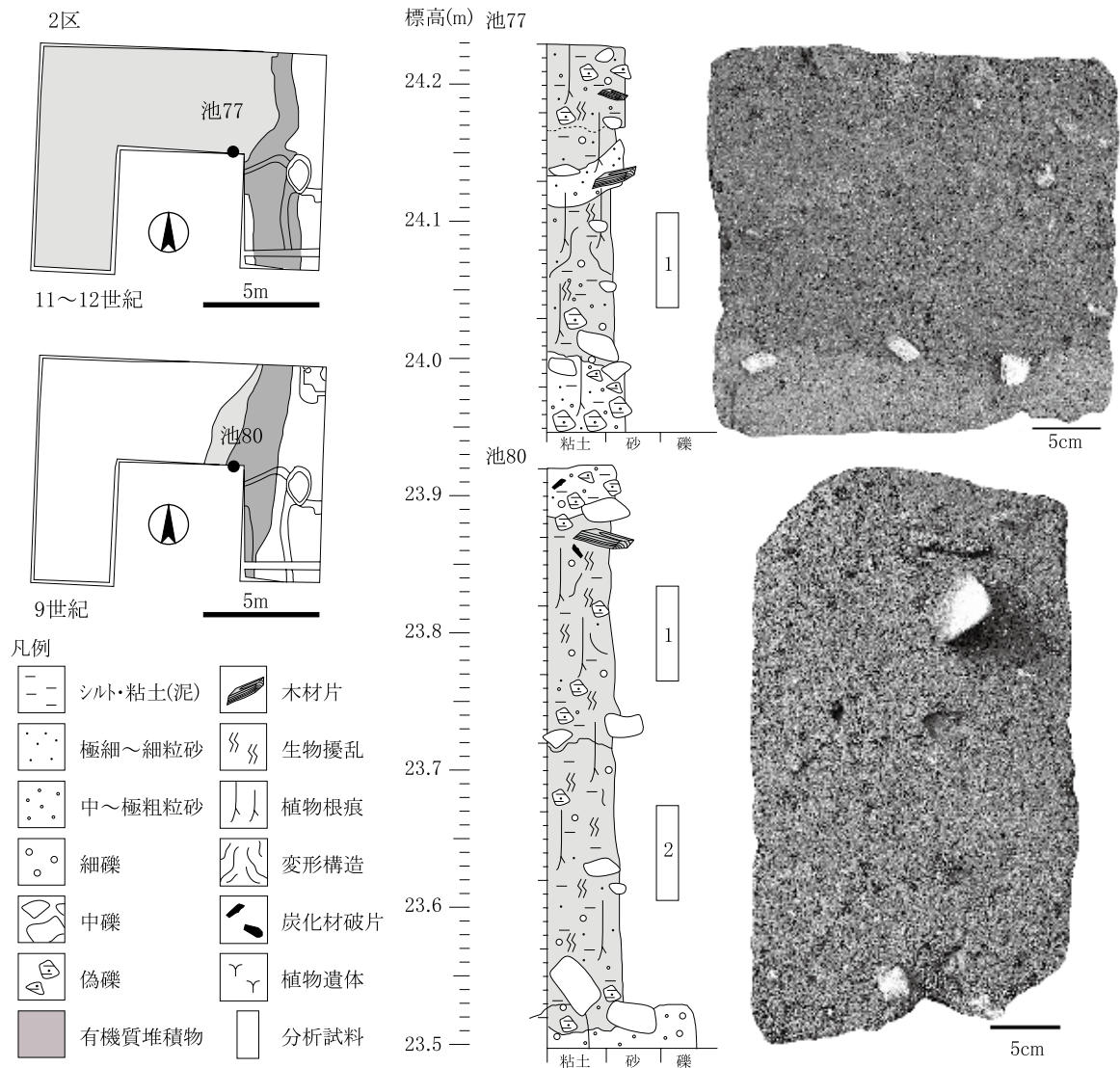


図79 調査地点および試料採取位置

### 3. 分析方法

#### (1) 花粉分析

試料約10gについて、フッ化水素酸による泥化、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman (1952, 1957)、Faegri and Iversen (1989) などの花粉形態に関する文献や、島倉 (1973)、中村 (1980)、藤木・小澤 (2007) 等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。また、残渣量や花粉化石の保存状態等の情報も記録する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数

から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

## (2) 種実分析

土壌試料から種実遺体を分離・抽出するために、試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後の篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本および藤下（1984）、石川（1994）、中山ほか（2000）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施し、部位・状態別に個数を数えて、結果を一覧表と図、図版で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフオンで結んで表示する。分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸保存し、返却する。

## 4. 結果

### (1) 花粉分析

結果を表5、図80、産出した花粉化石を図81に示す。池80・池77埋積物試料は、分析後、いずれも20～30 $\mu$ l程度の残渣が得られた。花粉化石の産出数は多く、保存状態は堆積物の時代性を考えると、比較的良い。

木本花粉の組成は3点ともに類似する。花粉・孢子化石全体に対する木本花粉の割合は30%程度と低い。検出される種類は、マツ属が約30%、スギ属とアカガシ亜属が約20%検出される。その他、モミ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属を含む。際だって多い種類がみられないのが特徴である。

草本花粉は、池80と池77で組成が変化する。池80では、花粉・孢子化石全体に対する草本花粉の割合は半数以上を占める。イネ科とミズアオイ属が多産し、栽培植物のカキノキ属、イネ属、ソバ属、ベニバナ属、水生植物のガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、アカウキクサ属などが産出する。また微量ではあるが、鞭虫卵を含む。

池77も草本花粉の割合が比較的高いが、ミズア

表5 花粉分析結果

種 類	地点・試料番号		
	2区池77	2区池80	
	1	1	2
木本花粉			
マキ属	-	1	1
モミ属	7	4	18
ツガ属	7	12	9
マツ属複維管束亜属	39	29	16
マツ属(不明)	19	43	29
コウヤマキ属	-	-	1
スギ属	42	47	47
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	5	7	11
ヤナギ属	2	-	1
ヤマモモ属	-	-	1
サワグルミ属－クルミ属	-	-	2
クマシデ属－アサダ属	12	2	4
カバノキ属	5	3	2
ハンノキ属	10	1	-
ブナ属	4	5	1
コナラ属コナラ亜属	5	8	6
コナラ属アカガシ亜属	28	36	43
クリ属	4	-	3
シイ属	2	1	2
ニレ属－ケヤキ属	5	1	6
エノキ属－ムクノキ属	3	-	3
モチノキ属	-	1	-
カエデ属	1	-	-
トチノキ属	-	1	-
ツタ属	1	-	-
ウコギ科	2	1	3
カキノキ属	-	4	-
草本花粉			
ガマ属	-	-	1
サジオモダカ属	-	1	-
オモダカ属	-	-	2
イネ属	44	12	13
他のイネ科	229	111	196
カヤツリグサ科	8	7	15
イボクサ属	-	1	-
ミズアオイ属	2	194	210
クワ科	-	2	-
ギシギシ属	-	2	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	2	1	5
ソバ属	-	1	-
アカザ科	1	2	11
ナデシコ科	3	1	2
キンボウゲ科	4	2	2
バラ科	2	-	-
アリノトウグサ属	1	-	-
セリ科	1	3	3
オオバコ属	-	3	1
ゴキツル属	1	-	-
ヨモギ属	8	15	14
ベニバナ属	-	1	2
キク亜科	-	1	2
タンポポ亜科	1	1	1
不明花粉			
不明花粉	3	1	2
シダ類孢子			
デンジウ属	1	-	-
アカウキクサ属	-	2	7
他のシダ類孢子	228	176	106
合 計			
木本花粉	203	207	209
草本花粉	307	361	480
不明花粉	3	1	2
シダ類孢子	229	178	113
合計(不明を除く)	739	746	802
その他			
回虫卵	1	-	-
鞭虫卵	-	-	2

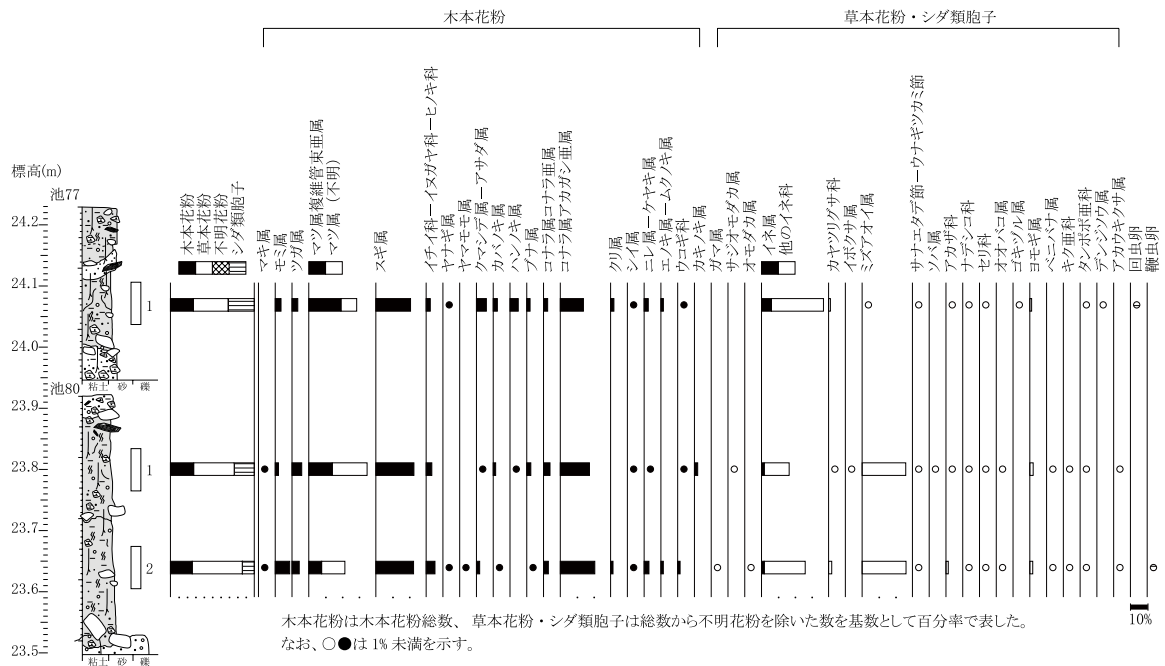


図80 各地点の花粉化石群集層位分布

オイ属は少なく、イネ科のみが多産する。栽培植物（もしくは栽培植物を含む分類群）は、イネ属のみが、水生植物は、ミズアオイ属、デンジソウ属が産出する。また微量ではあるが、回虫卵を含む。

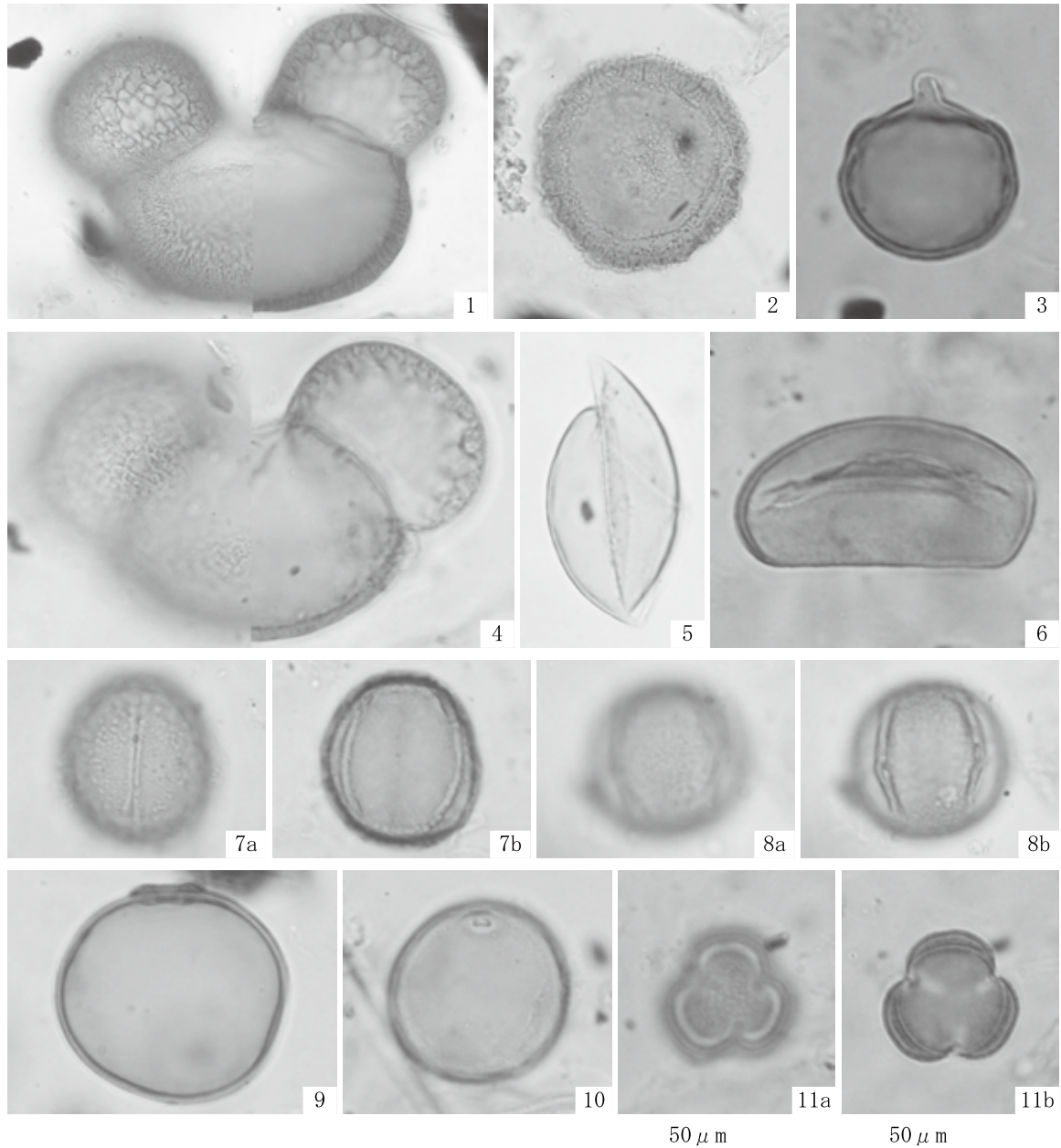
## (2) 種実同定

結果を表6、堆積物100ccあたりの種実遺体群集組成の層位分布を図82、各分類群の写真を図83～85に示す。

池80・池77埋積物試料を通じて、被子植物67分類群（木本のムクノキ、キイチゴ属、サンショウ属、センダン、ノブドウ、ブドウ科、草本のサジオモダカ属、オモダカ科、ツユクサ、イボクサ、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、ヒエ近似種、スズメノヒエ属、エノコログサ属、イネ、イネ科(A,B,C)、ミクリ属、アゼスゲ類、スゲ属、テンツキ近似種、フトイーサンカクイ、ホタルイ属、カヤツリグサ属(A,B,C)、カヤツリグサ科、ギシギシ属、ミゾソバ、イヌタデ近似種、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、サナエタデ近似種、タデ属（網目型、3面平滑型）、スベリヒユ、ナデシコ科、アカザ属、ヒユ属(A,B)、タガラシ、マツモ、ゴハリマツモ、アブラナ科、キジムシロ類（粗面型、隆条斜上型、隆条点在型）、カタバミ属、エノキグサ、スマレ属、モモルディカメロン型、マクワ・シロウリ型、メロン類、ミズユキノシタ、チドメグサ属、セリ科、オカトラノオ属、シソ属、イヌコウジュ属、シロネ属、トウバナ属、ナス、ナス属、ゴマ、タカサブロウ)1207個の種実遺体が同定された。28個は同定ができなかったが、同じ分類群、部位と考えられる17個をA、2個をBとしている。分析残渣は、葉片、木材、炭化材、植物片、昆虫類（甲虫類、ミミズ類の卵胞、蛹など）、砂礫、高師小僧（褐鉄鉱）などが確認されたため、表2の下部に「+」で示している。

種実遺体の産出個数は、池80の試料1（試料50cc）が636個と最も多く、試料2（試料100cc）が375個と次いで多く、池77の試料1（試料100cc）が196個であった。





- 1. モミ属 (池80;1)
- 3. スギ属 (池80;1)
- 5. イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科 (池80;1)
- 7. コナラ亜属 (池80;1)
- 9. イネ属 (池77;1)
- 11. ヨモギ属 (池80;1)

- 2. ツガ属 (池80;1)
- 4. マツ属 (池80;1)
- 6. ミズアオイ属 (池80;1)
- 8. アカガシ亜属 (池80;1)
- 10. 他のイネ科 (池80;1)

図81 花粉化石

表6-1 種実同定結果(1)

分類群	部位	状態	地点・試料番号						備考
			2区池77		2区池80				
			1		1		2		
*1	*2	*1	*2	*1	*2				
木本									
ムクノキ	核	破片	-	-	1	-	-	-	
キイチゴ属	核	完形	-	-	1	-	-	-	
サンショウ属	種子	破片	-	-	-	-	1	-	
センダン	核	完形	1	-	-	-	-	-	
		破片	-	1	-	-	-	-	
ノブドウ	種子	完形	-	-	1	-	-	-	
		破片	-	4	-	-	-	-	背面2,腹面2
ブドウ科	種子	破片	1	-	-	-	1	-	腹面
草本									
サジオモダカ属	果実	完形	-	-	5	-	-	-	
オモダカ科	種子	完形	4	-	2	-	-	-	
ツユクサ	種子	完形	-	-	1	-	-	-	
イボクサ	種子	完形	28	-	29	-	9	-	
ミズアオイ近似種	種子	完形	4	-	100	-	41	-	長さ1.2~1.5mm
ミズアオイ-コナギ	種子	完形	-	-	153	-	61	-	ミズアオイの可能性
コナギ近似種	種子	完形	4	-	4	-	-	-	長さ0.8~1.0mm
ヒユ近似種	穎・胚乳	完形	炭化	-	-	-	-	1	
スズメノヒユ属	果実	完形	-	-	1	-	-	-	
エノコログサ属	果実	完形	-	-	4	-	-	-	
		破片	-	-	3	-	-	-	
イネ	穎(基部)	破片	炭化	1	-	-	-	-	栽培種
	穎(基部)	破片	5	1	3	1	4	-	
	穎	破片	39	-	19	-	33	-	
イネ科A	果実	完形	-	-	36	-	1	-	長槽円体2花柱
イネ科B	果実	完形	-	-	18	-	4	-	半狭卵体
		破片	-	-	3	-	2	-	
イネ科C	果実	完形	-	-	15	-	1	-	半卵体
		破片	-	-	15	-	1	-	
イネ科	果実	完形	1	-	-	-	-	-	
		破片	2	-	-	-	-	-	
ミクリ属	果実	完形	-	-	-	-	-	1	
アゼスグ属	果実	完形	-	-	2	-	-	-	
スグ属(3面型)	果実	完形	-	-	-	-	-	1	
テンツキ近似種	果実	完形	炭化?	-	-	-	1	-	
		破片	-	-	1	-	1	-	
		破片	1	-	2	-	-	-	
フトイ-サンカクイ	果実	完形	-	-	1	-	-	-	
ホタルイ属	果実	完形	1	-	1	-	1	-	
		破片	-	-	1	-	2	-	
カヤツリグサ属A	果実	完形	-	-	4	-	-	-	
カヤツリグサ属B	果実	完形	1	-	2	-	-	-	
カヤツリグサ属C	果実	完形	-	-	2	-	1	-	
カヤツリグサ科(2面体)	果実	完形	1	-	29	-	19	-	
		破片	-	-	-	-	3	-	
ギンギン属	果実	完形	-	-	1	1	-	-	
	花被	破片	-	-	-	1	-	-	
ミノソバ	果実	完形	-	-	-	-	5	-	
	果実(基部)	破片	3	-	-	-	8	-	
	果実	破片	3	-	4	-	19	-	
イヌタデ近似種	果実	完形	1	-	1	-	-	-	
		破片	-	-	-	-	3	-	
ヤナギタデ近似種	果実	完形	-	-	3	-	12	-	
		破片	-	-	-	-	6	-	
タデ属(網目型)	果実	破片	-	-	-	-	5	-	ヤナギタデ,ポントクタデの類
ポントクタデ近似種	果実	完形	1	-	2	-	1	-	
		破片	-	-	3	-	8	-	
サナエタデ近似種	果実	完形	-	-	-	1	2	-	
タデ属(3面平滑型)	果実	破片	-	-	5	-	-	-	
スベリヒユ	種子	完形	-	-	11	-	1	-	
ナデシコ科	種子	完形	14	-	13	-	16	-	
		破片	2	-	-	-	1	-	
アカザ属	種子	完形	-	-	1	-	-	-	
ヒユ属A	種子	完形	-	-	9	-	18	-	
		破片	-	-	2	-	3	-	
ヒユ属B	種子	完形	-	-	-	-	1	-	
タガラシ	果実	完形	30	-	21	-	3	-	
		破片	26	-	19	-	-	-	
マツモ	果実	完形	-	-	-	1	-	-	
		破片	-	-	2	-	-	-	
ゴハリマツモ	果実	完形	-	-	-	-	-	1	
アブラナ科	種子	完形	6	-	12	-	14	-	
キジムシロ類(粗面型)	核	完形	1	-	-	-	1	-	
		破片	-	-	3	-	-	-	
キジムシロ類(隆条斜上型)	核	完形	-	-	-	-	2	-	
キジムシロ類(隆条点在型)	核	完形	-	-	1	-	1	-	
カタバミ属	種子	完形	-	-	2	-	5	-	
		破片	-	-	-	-	4	-	
エノキグサ	種子	完形	-	-	1	-	-	-	

表6-2 種実同定結果(2)

分類群	部位	状態	地点・試料番号						備考	
			2区池77		2区池80					
			*1	*2	1		2			
スミレ属	種子	完形	-	1	-	-	-	-	-	
		破片	2	-	-	-	-	-	-	
モモルディカメロン型	種子	完形	-	-	-	-	-	1	-	長さ8.51mm,幅3.78mm,厚さ1.02mm
モモルディカメロン型-マクワ・シロウリ型	種子	破片	-	2	-	-	-	-	-	
マクワ・シロウリ型	種子	完形	-	1	-	-	-	-	-	長さ7.43mm,幅3.57mm,厚さ1.42mm
		破片	-	-	-	1	-	-	-	長さ7.4mm,幅3.3mm
メロン類	種子	破片	-	-	-	-	-	-	2	
ミズユキノシタ	種子	完形	-	-	-	1	-	-	-	
チドメグサ属	果実	完形	-	-	13	-	-	21	-	
		破片	3	-	16	-	-	22	-	
セリ科	果実	完形	2	-	8	-	-	-	-	
オカトラノオ属	種子	完形	-	1	1	-	-	-	-	
シソ属	果実	完形	-	-	1	-	-	-	-	長さ1.5mm,栽培種の可能性
シソ属-イヌコウジュ属	果実	完形	-	-	-	-	-	3	-	長さ1.4mm
		破片	-	-	-	-	-	2	-	
イヌコウジュ属	果実	完形	1	-	7	-	-	-	-	
		破片	1	-	5	-	-	-	-	
シロネ属	果実	完形	-	1	-	-	-	-	-	
トウバナ属	果実	完形	-	-	-	-	-	1	-	
ナス	種子	完形	1	-	3	3	-	-	-	栽培種
ナス属	種子	完形	2	-	-	-	-	-	-	
ゴマ	種子	完形	-	-	1	-	-	-	-	栽培種
		破片	-	-	1	-	-	-	-	
タカサブロウ	果実	完形	1	-	4	-	-	-	-	
		破片	2	-	1	-	-	-	-	
不明										
A	果実?	完形	6	-	5	-	-	6	-	キンボウゲ属?
B		完形	-	-	2	-	-	-	-	タヌキモ類?
他一括		完形	1	-	1	-	-	7	-	
合計										
木本種実			2	+	3	-	-	2	-	計7個
草本種実			194	+	633	+	-	373	+	計1200個
不明			7	+	8	+	-	13	+	計28個
種実合計(不明を除く)			196	+	636	+	-	375	+	計1207個
分析残渣(抽出対象外)										
葉片			-	+	-	-	-	-	-	
木材			-	+	-	-	-	-	+	
炭化材			+	-	+	-	-	+	-	
植物片			+	-	+	-	-	+	-	
昆虫類(甲虫類,ミズミズ類の卵胞,蛹など)			+	-	+	-	-	+	-	
砂礫			+	-	+	-	-	+	-	
高師小僧(褐鉄鉱)			-	-	+	-	-	-	-	
分析量			100	500	50	350	100	250		容積(cc)
			188	876.2	103	590.8	200	404.4		湿重(g)

注※1:試料に確認される種実全てを抽出、※2:木本、栽培種、新たに確認される分類群や状態が良好な種実を抽出。

種実遺体群の組成は、3試料とも圧倒的な草本主体を示す。木本は全て落葉広葉樹で、高木のムクノキ、センダン、低木のキイチゴ属、サンショウ属、籐本のノブドウ、ブドウ科が、計7個確認されるのみであった。そこで、分析目的である庭園の植栽樹を検討するために、試料をさらに計1100cc(各250~500cc)追加して分析し、木本種実の回収を試みたが、センダンとノブドウが計5個確認されるのみであった。

栽培種は、イネの類、メロン類(モモルディカメロン型、マクワ・シロウリ型)の種子、ナスの種子、ゴマ種子と、栽培種の可能性を含むヒエ近似種の類・胚乳、シソ属の果実が確認され、イネの一部とヒエ近似種は炭化している。

栽培種を除いた草本類は、沈水性の浮遊植物(根が水底に固定せずに浮遊する植物)のマツモ、ゴハリマツモ、沈水植物(根が水底に固着し、植物体全体が水中に沈む植物)または両生植物のミズユキノシタ、抽水植物(根が水に固着し、植物体の一部が水面を突き抜けて空気中に出る植物)のサジオモダカ属、オモダカ科、イボクサ、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、ミクリ属、フトイ-サンカクイ、ホタルイ属や、湿生植物のアゼスゲ類、テンツキ近似種、ミゾソバ、ヤナギタデ近

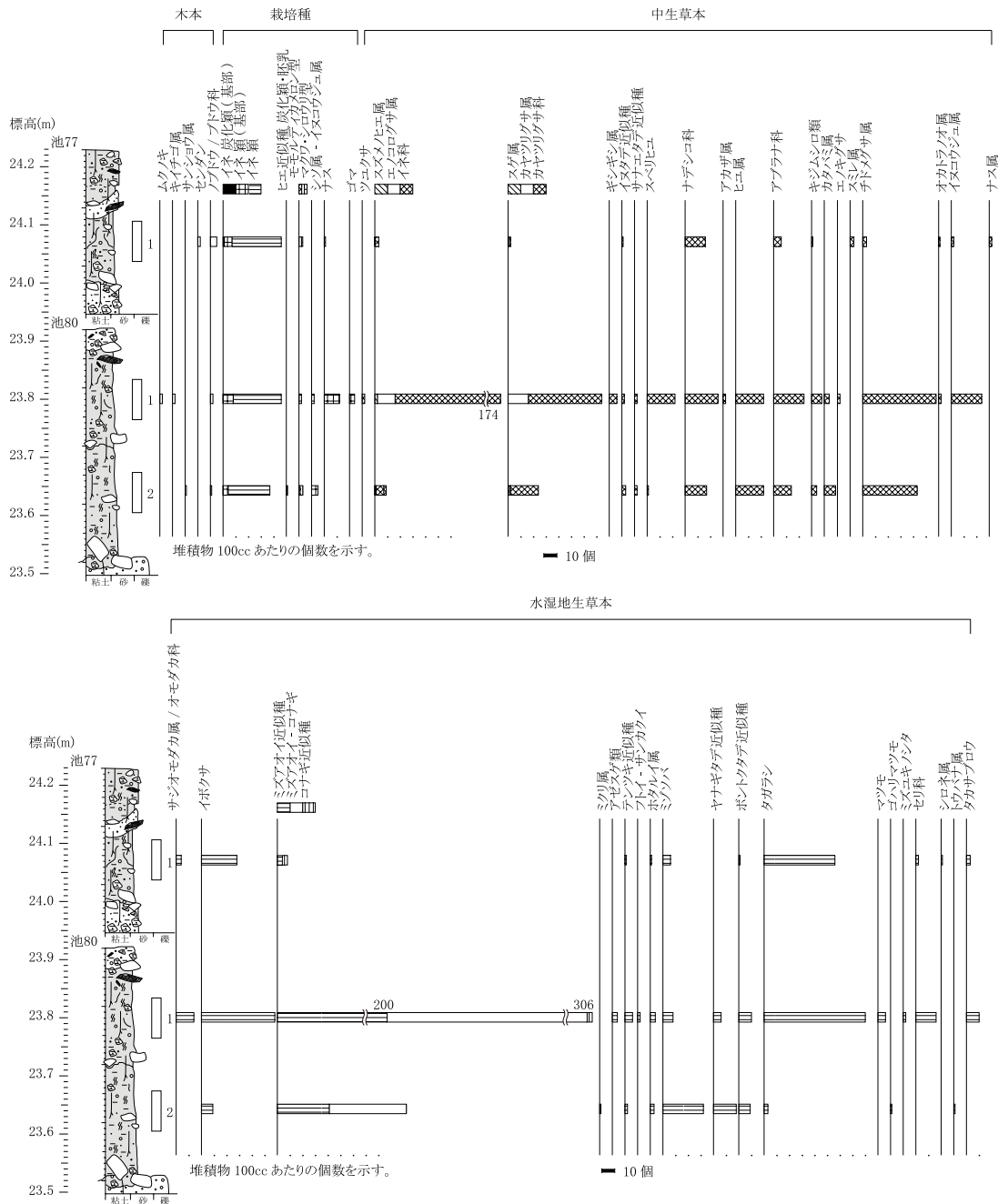


図82 各地点の植物遺体群集層位分布

似種、ポントクタデ近似種、タガラシ、セリ科、シロネ属、トウバナ属、タカサブロウなどの、多くの水湿地生植物が確認された。特に80池では、ミズアオイ属（ミズアオイまたはコナギ）が多く、種子の長さから、コナギ（長さ1.0mm程度）よりもミズアオイ（長さ1.2～1.5mm）主体と判断される。

やや乾いた場所にも生育する草本類は、ツユクサ、スズメノヒエ属、エノコログサ属、イネ科複数種、スゲ属、カヤツリグサ属複数種、カヤツリグサ科、ギシギシ属、イヌタデ近似種、サナエタデ近似種、スベリヒユ、ナデシコ科、アカザ属、ヒユ属、アブラナ科、キジムシロ類複数種、カタバミ属、エノキグサ、スマレ属、チドメグサ属、オカトラノオ属、イヌコウジュ属、ナス属などが確認された。

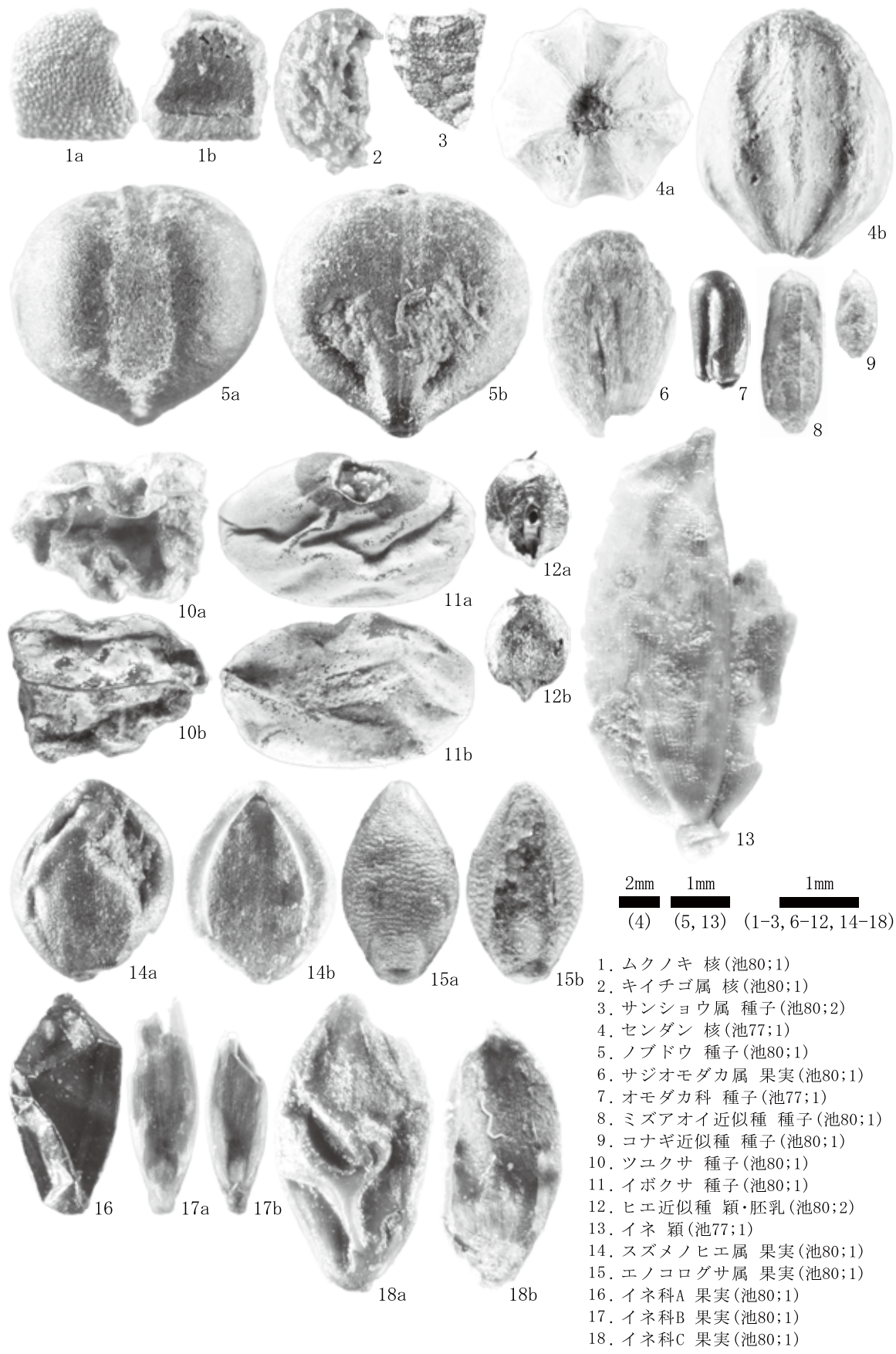
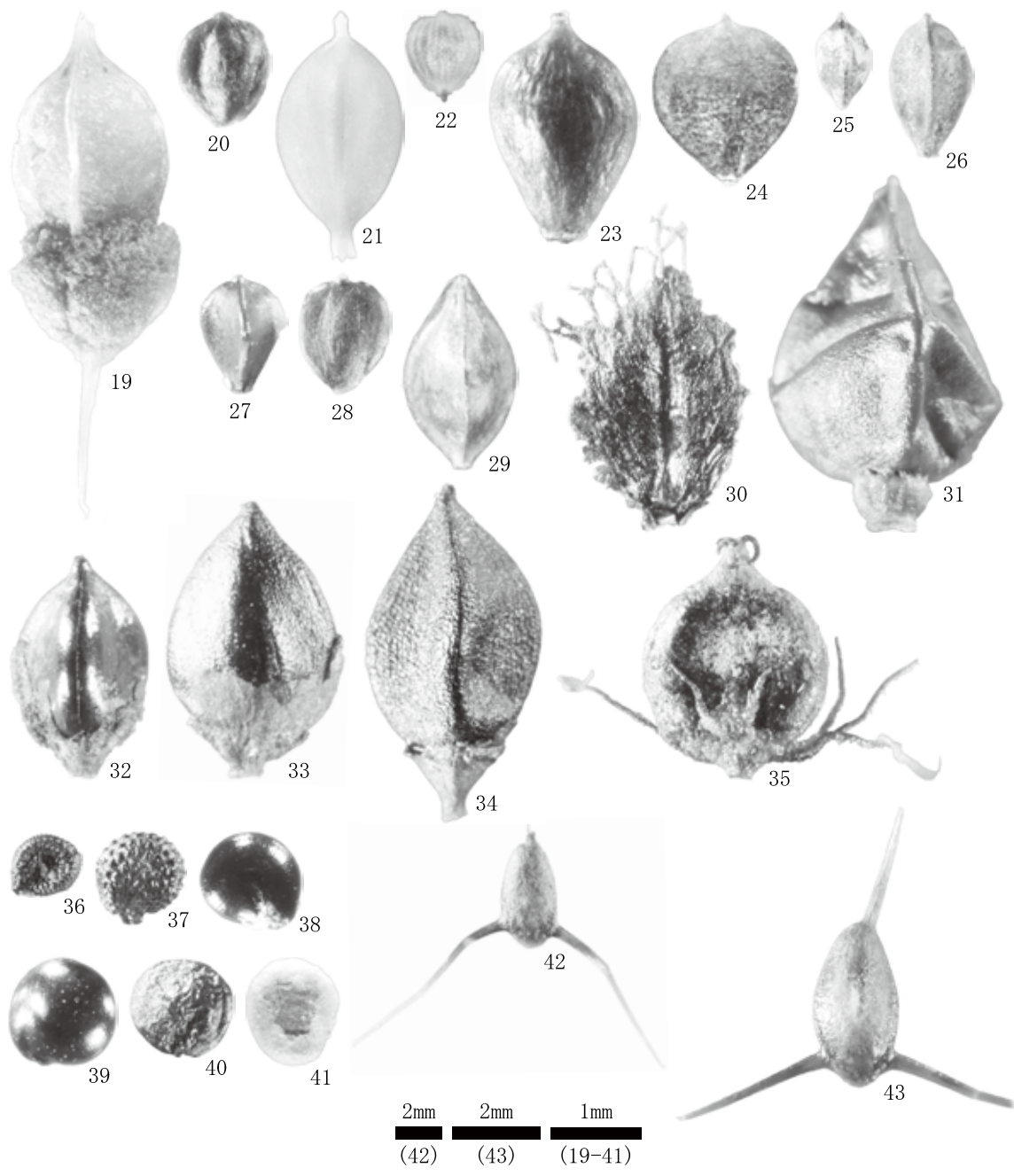


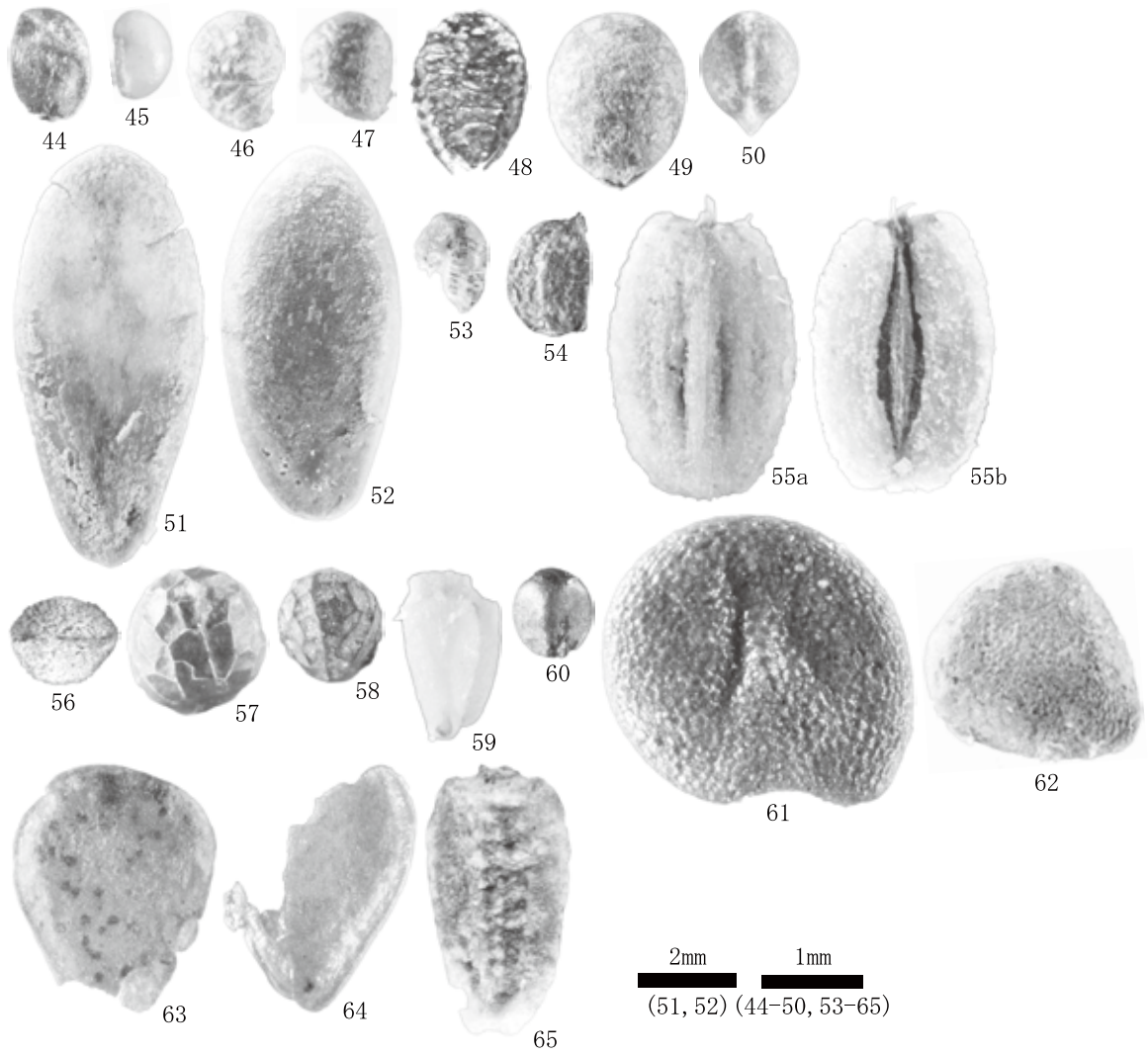
図83 種実遺体 (1)





- |                           |                            |
|---------------------------|----------------------------|
| 19. ミクリ属 果実(池80;2)        | 20. アゼスゲ類 果実(池80;1)        |
| 21. スゲ属(3面型) 果実(池80;2)    | 22. テンツキ近似種 果実(池80;2)      |
| 23. フトイ - サンカクイ 果実(池80;1) | 24. ホタルイ属 果実(池80;2)        |
| 25. カヤツリグサ属A 果実(池80;1)    | 26. カヤツリグサ属B 果実(池80;1)     |
| 27. カヤツリグサ属C 果実(池80;1)    | 28. カヤツリグサ科(2面体) 果実(池80;2) |
| 29. ギシギシ属 果実(池80;1)       | 30. ギシギシ属 花被(池80;1)        |
| 31. ミゾソバ 果実(池80;2)        | 32. イヌタデ近似種 果実(池77;1)      |
| 33. ヤナギタデ近似種 果実(池80;2)    | 34. ポントクタデ近似種 果実(池80;1)    |
| 35. サナエタデ近似種 果実(池80;2)    | 36. スベリヒユ 種子(池80;1)        |
| 37. ナデシコ科 種子(池80;2)       | 38. アカザ属 種子(池80;1)         |
| 39. ヒユ属A 種子(池80;2)        | 40. ヒユ属B 種子(池80;2)         |
| 41. タガラシ 果実(池77;1)        | 42. マツモ 果実(池80;1)          |
| 43. ゴハリマツモ 果実(池80;2)      |                            |

図84 種実遺体 (2)



- |                            |                            |
|----------------------------|----------------------------|
| 44. アブラナ科 種子(池80;2)        | 45. キジムシロ類(粗面型) 核(池80;2)   |
| 46. キジムシロ類(隆条斜上型) 核(池80;2) | 47. キジムシロ類(隆条点在型) 核(池80;2) |
| 48. カタバミ属 種子(池80;2)        | 49. エノキグサ 種子(池80;1)        |
| 50. スミレ属 種子(池77;1)         | 51. モモルディカメロン型 種子(池80;2)   |
| 52. マクワ・シロウリ型 種子(池77;1)    | 53. ミズユキノシタ 種子(池80;1)      |
| 54. チドメグサ属 果実(池80;2)       | 55. セリ科 果実(池80;1)          |
| 56. オカトラノオ属 種子(池77;1)      | 57. シソ属 果実(池80;1)          |
| 58. イヌコウジュ属 果実(池80;1)      | 59. シロネ属 果実(池77;1)         |
| 60. トウバナ属 果実(池80;2)        | 61. ナス 種子(池80;1)           |
| 62. ナス属 種子(池77;1)          | 63. ゴマ 種子(池80;1)           |
| 64. ゴマ 種子(池80;1)           | 65. タカサブロウ 果実(池80;1)       |

図85 種実遺体 (3)

## 5. 考察

### (1) 池およびその周辺の植生

9世紀の池80から産出した植物化石群集をみると、花粉化石群集では、木本花粉の割合が30%程度と低く、種実遺体群集では木本類の種実はほとんど検出されない。古文書から推定される土地利用状況からみても、周辺は草本類が多く、樹木は少なかったと思われる。

草本類には栽培種、湿地を好む植物の種類には栽培植物（もしくは栽培植物を含む分類群）として、花粉ではカキノキ属、イネ属、ソバ属、ペニバナ属、種実では、イネ、ヒエ?メロン類、シソ属、ナス、ゴマが確認される。このように花粉と種実遺体では同様の産状を示さないが、これは両者の堆積物中への取り込まれ方や残存しやすさ（タフノミー）が異なることに起因する。これらの栽培種は、平安京域の既往の分析結果でも頻繁に検出されており、広く栽培、利用されていたことが示唆される。なお、花の構造上、稲粃の中には花粉が残存することから、イネ属花粉は稲粃に由来する可能性もある。

池内を主体に分布していたとみられる湿地を好む植物は、花粉では、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、アカウキクサ属である。種実では、サジオモダカ属、イボクサ、ミズアオイ・コナギ、ミクリ属、スゲ類・ホタルイ属などのカヤツリグサ科、ミゾソバなどのタデ類、タガラシ、マツモ、ゴハリマツモ、ミズユキノシタ、シロネ属、トウバナ属、タカサブロウである。種類数が多く、花粉化石と種実遺体で重複する種類も多いのが特徴であり、当時の池内に生育していたとみられる。検出された種類の組み合わせからみて、当時の池内は水深が浅く、富栄養化していたことが示唆される。また、これら水生植物のうち、ミズアオイ属が種実・花粉共に多産する。ミズアオイ属は虫媒花で花粉生産量が少ないことなどから、局地性が高いと考えられ、多量に生育していた可能性がある。ミズアオイは古くは葉菜として食用とした記録もあり、当時も栽培されていた可能性がある。

他の草本類をみると、花粉ではイネ科をはじめ、アカザ科、ナデシコ科、ヨモギ属等、種実ではイネ科、カヤツリグサ科、タデ類、スベリヒユ、ナデシコ科、ヒユ属、アブラナ科、チドメグサ属、イヌコウジュ属が検出される。いずれも人里近くの開けた場所に生育する種類が多い。当時の土地利用状況から考えて、敷地内にいわゆる「雑草」として生育していたと考えられる。

なお、微量ではあるが、鞭虫卵を含む。遺構から寄生虫卵が見つかることはしばしばあるが、今回の場合は極微量で、金原・金原（1994）では汚染の範囲内とされる領域である。このことから、池や泉に糞尿が流れ込むことによって、富栄養化の原因の一つになった可能性もある。

一方、11～12世紀の池77では、9世紀の池80に比較して、花粉・種実遺体ともに水生植物や中生植物の種類が減少する。栽培種は、花粉化石でイネ属、種実遺体でイネ、メロン類・ナスが確認されるのみである。水生植物は、花粉ではミズアオイ属・デンジソウ属がわずかに産出するのみで、種実遺体では多産していたミズアオイ属の仲間を初め多くの種類が減少ないし、産出しなくなる。また種実遺体における中生植物の産状も同様の傾向を示している。また、9世紀の池80では確



認められなかった、植栽樹として利用されている可能性があるセンダンが確認されている。このような変化は、調査地点近辺の植生や土地利用状況が変化したことを示しており、9世紀に比較して、より開けた場所に変化したことが推定される。

ところで、今回調査した池80からは、先述したように施薬院の仕事内容を示した木簡が出土しており、古文書に示されているように調査地は薬園として土地利用されていた可能性がある。今回産出した植物をみると、胡麻（ゴマの種子を乾燥したもの）が正倉院の「薬草木簡」に記載されている生薬に含まれており、当時の薬園で栽培されていた可能性がある。現在の薬用植物として知られているものは、車前子・車前草（オオバコの種子・全草を乾燥させたもの）、沢瀉（サジオモダカの塊茎を乾燥したもの）、雨久花（ミズオアイの全草）、鴨跖草（ツユクサ）、柿蒂（カキノキ）、天胡葵（チドメグサ属のオオチドメ）、馬齒莧（スベリヒユ）など多数認められる。これらが当ても薬草として利用されていたかは現時点で特定できないが、今後の資料の蓄積を持って評価していきたい課題である。

## （2）周辺森林植生

先述したように、池周辺には樹木は少なかったと思われる。木本花粉化石はマツ属、スギ属、アカガシ亜属が検出されるものの、際だって多い種類は認められない。多産する種類がはっきりしない組成は、花粉化石群集が広範囲の植生を反映するときに現れることが多い。広い集水域を持つ河川が形成する沖積地等でよくみられる傾向であり、碎屑物とともに集水域から運搬されたり、風により遠方から飛ばされたりして堆積したことが要因と考えられる。なお、多産する花粉化石は、風媒花で花粉生産量が多い種類である。このことから、これらの種類は周辺に生育していたことは確かであろうが、実際の周辺植生の割合よりも高率である可能性が高いといえる。

マツ属は痩せ地に育ち、成長も早いことから、尾根筋、谷頭部、斜面地など崩壊しやすい場所や伐採地に生育することが多い。マツ属以外では、モミ属やツガ属も同様な場所に生育する。マツ属は、特に有史以降、植生破壊の結果増加することが多い。これまで京都盆地で行われた花粉分析からみて、今回検出されたマツ属は、植生破壊の結果増加したと考えられる。スギ属は扇状地や谷筋など河川の影響を受けやすい場所に生育することが多い。この他河川沿いに生育しやすい種類として、クマシデ属－アサダ属やハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属が検出されており、これらは河川の影響を受けやすい場所に生育していたと考えられる。

アカガシ亜属やシイ属は、安定した森林を構成する種類であり、盆地の中は開発が進んでいたことを考慮すると周辺の山地を中心に生育していたと考えられる。

佐々木ほか（2011）は、深泥池の分析結果と、平安京域、長岡京域、京都盆地北部の考古遺跡の花粉分析結果に基づいて、京都盆地周辺の「里山」林の成立過程について検討している。それによると、京都盆地の遺跡では、古墳時代頃から平安時代頃までは、マツ属花粉が増加するものの、優占することはなく、中世以降に多くの地点でマツ属花粉が優占し、アカマツを主とする林分に変化したことが確認されている。また、平安時代と中世の2時期に、数百年にわたり大きな植生の変化がみとめられない、植生が「安定的」に継続する時期が存在することを確認し、人間が一方向的に植

生を破壊し続けることをしなかった、あるいはできなかったと考えられると指摘している。今回の結果でも、9世紀と11～12世紀を通じて、明瞭な変化が確認されなかった点は、既往の調査成果とも同調的といえる。

#### 引用文献

Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I) .Almqvist&Wiksell,539p.

Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II) ,147p.

Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.

藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.

藤下典之,1984,出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法.古文化財の自然科学的研究,古文化財編集委員会編,同朋舎,638 - 654.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

金原正明・金原正子,1994,堆積物中の情報の可視化.可視化情報,14,9 - 14.

中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.

中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.

佐々木尚子・高原 光・湯本貴和,2011,堆積物中の花粉組成からみた京都盆地周辺における「里山」林の成立過程.地球環境,16,115 - 127.

島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.

鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種-.誠文堂新光社,272p.

観察表1 出土土器類一覧表

※( )は残存値、残存率は口径・底径による

番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
1	須恵器	蓋	2区	池80下層		(1.8)			N6/0	全体に磨滅
2	須恵器	蓋	1区	池1121		(3.2)			N6/0	
3	須恵器	杯身	2区	池80埋土		(1.8)			N6/0	全体に磨滅
4	須恵器	壺	2区	東壁断割	14.6	(2.0)			5Y6/1	外部側面7条波状文
5	土師器	高杯脚部	1区	池1121		(2.8)	9.0	41	2.5Y7/8~6/8	
6	緑釉陶器	段皿	1区	流路1158		(2.0)	7.2		N7/0	全面施釉
7	灰釉陶器	耳皿	1区	流路1158		(2.2)			N7/0	
8	灰釉陶器	皿	1区	池1121	15.0	3.1	8.0	50	N7/0	内面全面施釉
9	須恵器	皿	1区	池1121	18.0	2.1		11	N6/0	
10	須恵器	円面硯	1区	池1121		(2.4)			N7/0	
11	土師器	皿N大	1区	池1121	11.4	1.4		21	10Y7/2	
12	土師器	皿N大	1区	池1121	14.6	2.4		18	10Y7/2	
13	土師器	皿N大	1区	池1121	14.8	(2.4)		11	10Y7/2	
14	土師器	皿N大	1区	池1121	15.0	2.1		14	10Y7/2	
15	土師器	皿N小	1区	池1121	8.6	1.3		39	10YR8/3	
16	土師器	皿N小	1区	池1121上面	8.6	1.5		26	5YR7/4	
17	土師器	皿N大	1区	池1121	12.4	2.1		14	10YR7/3	
18	土師器	皿N大	1区	池1121上面	12.6	(2.3)		19	10YR7/1	
19	土師器	皿N大	1区	池1121	11.4	3.0		24	10YR7/3	
20	黒色土器	蓋	1区	池1121	6.2	2.1		15	N3/0	
21	瓦器	椀	1区	池1121	14.4	4.7	4.5	19	N4/0	口縁端部内面1条の凹線
22	瓦器	椀	1区	池1121	15.0	(3.9)		22	N4/0	
23	瓦器	椀	1区	池1121	15.8	(3.5)		22	N4/0	
24	須恵器	甕	1区	土坑999	27.6	(35.8)		90	10Y7/1	
25	土師器	皿N小	1区	建物11柱穴1052	8.8	1.6		100	10YR7/3	
26	土師器	皿N大	1区	建物11柱穴1052	12.6	1.8		23	10YR7/3	
27	土師器	皿S大	1区	建物11柱穴1052	11.2	7.8		69	10YR8/2	
28	土師器	皿N小	1区	柱穴287	9.2	1.6		37	10YR7/2	
29	土師器	皿N大	1区	柱穴287	12.8	1.8		32	10YR8/2	
30	土師器	皿N大	1区	柱穴287	14.2	2.1		17	7.5YR7/4	
31	土師器	皿N小	1区	建物19柱穴811	8.6	1.5		89	10YR7/2	
32	土師器	皿N大	1区	建物19柱穴811	11.0	2.6		29	10YR7/2	
33	土師器	皿N大	1区	建物19柱穴811	12.8	2.5		55	10YR7/3	
34	土師器	皿N大	1区	建物19柱穴811	13.8	2.2		77	10YR7/3	
35	土師器	皿N小	1区	土坑892	7.2	1.4		20	7.5YR7/3	
36	瓦器	椀	1区	土坑892	11.4	(3.5)		17	N4/0	
37	土師器	皿	1区	井戸425下層	8.0	1.5		22	10YR7/2	
38	土師器	皿	1区	井戸425下層	9.0	1.0		16	7.5YR7/3	
39	土師器	皿	1区	井戸425掘形	13.0	(2.5)		39	10YR7/2	
40	土師器	皿S大	1区	井戸425	11.4	2.8		16	7.5YR8/1	
41	須恵器	鉢	1区	井戸425	27.0	10.9		59	5Y5/1	内面煤厚く付着
42	瓦器	羽釜	1区	井戸425	26.2	(11.5)		33	N3/0	
43	土師器	皿N小	1区	井戸7	8.9	1.9		56	10YR8/2	
44	土師器	皿N小	1区	井戸7	9.0	1.4		48	7.5YR7/2	
45	土師器	皿N小	1区	井戸7	9.2	1.7		98	10YR7/3	口縁内外面煤付着
46	土師器	皿N小	1区	井戸7	9.6	1.5		49	10YR8/2	
47	土師器	皿N大	1区	井戸7	13.0	2.2		25	2.5Y7/1	

※( )は残存値、残存率は口径・底径による

番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
48	土師器	皿N大	1区	井戸7	13.0	2.5		19	7.5YR8/2	
49	土師器	皿N大	1区	井戸7	13.4	2.1		20	10YR8/1	
50	土師器	皿N大	1区	井戸7	14.2	2.7		14	7.5YR8/2	
51	白色土器	高杯	1区	井戸7		(17.6)			10YR8/1	
52	土師器	皿Ac	1区	整地層1	7.6	1.2		32	10YR7/2	
53	土師器	皿Ac	1区	整地層1	8.0	1.2		24	10YR7/3	内外面磨減
54	土師器	皿N小	1区	整地層1	8.4	1.4		100	10YR7/3	
55	土師器	皿N小	1区	整地層1	8.4	1.5		27	10YR7/3	
56	土師器	皿N小	1区	整地層1	8.4	1.2		44	10YR7/2	
57	土師器	皿N小	1区	整地層1	8.6	1.7		81	7.5YR7/3	
58	土師器	皿N小	1区	整地層1	8.7	1.5		100	10YR7/3	
59	土師器	皿N小	1区	整地層1	9.0	1.5		39	10YR7/2	
60	土師器	皿N小	1区	整地層1	9.0	1.8		30	10YR7/2	
61	土師器	皿N小	1区	整地層1	9.2	1.4		31	10YR7/2	
62	土師器	皿N小	1区	整地層1	9.2	1.5		23	10YR7/3	
63	土師器	皿N小	1区	整地層1	9.4	1.5		41	10YR7/2	
64	土師器	皿N小	1区	整地層1	9.8	1.5		40	10YR7/3	
65	土師器	皿N大	1区	整地層1	11.8	2.3		20	10YR7/2	
66	土師器	皿N大	1区	整地層1	11.8	2.4		17	5YR7/4	内面磨減著しい
67	土師器	皿N大	1区	整地層1	12.6	2.2		26	10YR7/2	口縁部歪む
68	土師器	皿N大	1区	整地層1	13.2	2.6		18	10YR7/3	内面磨減著しい
69	土師器	蓋	1区	整地層1	5.6	1.9		71	7.5YR6/1~6/6	
70	土師器	高台付皿	1区	整地層1		(1.1)	7.6	23	10YR8/3	内外面磨減著しい
71	瓦器	小椀	1区	整地層1	7.6	2.7	3.7	67	N3/0	
72	瓦器	皿	1区	整地層1	8.8	1.5		40	N3/0	底部内面暗文
73	瓦器	皿	1区	整地層1	8.6	1.8		21	N3/0	底部内面暗文
74	瓦器	ミニチュア羽釜	1区	整地層1		(5.0)			N3/0	
75	須恵器	鉢	1区	整地層1	25.0	10.8		19	N6/0	
76	土師器	皿N小	1区	建物1柱穴468	8.0	1.2		26	10YR7/2	
77	土師器	皿N小	1区	建物1柱穴476	8.0	1.3		24	7.5YR7/4	
78	土師器	皿N小	1区	建物1柱穴474	8.4	1.3		19	10YR7/3	
79	土師器	皿N大	1区	建物1柱穴474	12.0	2.1		10	10YR7/2	
80	土師器	皿N大	1区	建物1柱穴474	12.2	(2.2)		10	10YR7/2	
81	土師器	皿N大	1区	建物1柱穴474	12.4	2.1		21	10YR7/3	
82	土師器	皿N大	1区	建物1柱穴474	12.4	2.1		11	10YR7/2	
83	土師器	皿N小	1区	建物5柱穴265	9.0	1.4		21	10YR8/2	
84	土師器	皿N小	1区	建物5柱穴265	9.0	1.5		21	10YR8/1	
85	土師器	皿N小	1区	建物5柱穴265	9.2	1.3		14	10YR7/3	
86	土師器	皿N小	1区	建物5柱穴254	9.2	1.4		13	10YR7/2	
87	土師器	皿N大	1区	建物5柱穴254	11.6	2.6		17	10YR7/2	
88	土師器	皿N大	1区	建物5柱穴254	13.6	(2.1)		19	7.5YR7/4	
89	土師器	皿N小	1区	建物2柱穴431	8.8	1.6		37	10YR7/3	
90	土師器	皿N小	1区	建物2柱穴431	9.0	1.3		18	10YR7/3	
91	土師器	皿Ac	1区	建物2柱穴602	8.0	1.2		51	7.5YR7/3	
92	土師器	皿N小	1区	建物2柱穴602	8.4	1.7		100	10YR7/3	
93	土師器	皿N小	1区	建物2柱穴602	8.4	1.3		35	10YR7/2	
94	土師器	皿N小	1区	建物2柱穴602	8.6	1.3		67	10YR7/2	

※( )は残存値、残存率は口径・底径による

番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
95	土師器	皿N小	1区	建物2柱穴602	8.8	1.8		100	10YR7/2	
96	土師器	皿N小	1区	建物2柱穴602	8.8	1.7		100	10YR7/3	
97	土師器	皿S小	1区	建物2柱穴602	8.7	2.3		100	10YR7/2	
98	土師器	皿S小	1区	建物2柱穴602	9.2	2.3		100	10YR7/3	
99	土師器	皿S大	1区	建物2柱穴602	11.8	3.3		51	10YR8/2	
100	土師器	皿N小	1区	建物3柱穴673	8.4	1.5		33	10YR8/2	
101	土師器	皿N大	1区	建物3柱穴671	11.2	2.2		20	10YR2/2	
102	土師器	皿N小	1区	建物8柱穴155	8.4	1.3		27	7.5YR7/4	
103	須恵器	鉢	1区	建物8柱穴61	25.0	9.8	12.8	40	5Y7/1	
104	土師器	皿N小	1区	柵6柱穴176	7.8	1.0		15	10YR6/3	2次被熱受ける
105	土師器	皿N大	1区	柵6柱穴189	11.0	2.5		39	7.5YR7/3	
106	土師器	皿N大	1区	柵6柱穴176	12.0	(2.3)		22	7.5YR7/3	
107	土師器	皿N小	1区	柵7柱穴154	9.0	1.2		18	7.5YR7/4	
108	土師器	皿N小	1区	柵7柱穴145	9.0	1.5		20	10YR7/2	
109	土師器	皿S大	1区	柵7柱穴131	12.8	2.9		22	7.5YR7/3	
110	瓦器	皿	1区	柵7柱穴159	8.0	1.5		20	N3/0	底部内面暗文
111	土師器	皿N大	1区	建物9柱穴124	12.6	(1.7)		14	7.5YR7/4	
112	土師器	皿N大	1区	建物9柱穴132	11.6	2.3		46	10YR7/2	
113	土師器	皿N大	1区	建物9柱穴132	12.8	2.2		71	5YR7/6	
114	土師器	皿N小	1区	柱穴575	8.4	1.6		27	7.5YR7/3	
115	土師器	皿S中	1区	柱穴575	10.8	2.7		18	10YR8/2	
116	瓦器	椀	1区	柱穴575	10.0	(3.3)		40	N3/0	五輪花
117	土師器	皿N大	1区	柱穴575	12.0	2.4		31	7.5YR7/3	
118	土師器	皿N大	1区	柱穴575	13.0	2.6		40	7.5YR7/4	
119	土師器	皿N大	1区	柱穴575	13.2	2.9		33	10YR7/3	
120	土師器	皿N小	1区	柱穴708	7.2	1.1		16	7.5YR7/4	内外面磨減
121	土師器	皿N小	1区	柱穴708	8.0	1.5		18	10YR7/2	
122	土師器	皿S大	1区	柱穴737	11.2	3.2		100	10YR8/2	
123	土師器	皿S大	1区	柱穴737	11.6	3.2		43	10YR8/2	
124	土師器	皿N小	1区	井戸1063枠内	7.8	1.4		30	10YR7/2	
125	土師器	皿N小	1区	井戸1063枠内	8.0	1.6		24	7.5YR8/3	
126	土師器	皿N小	1区	井戸1063	8.4	1.4		100	10YR7/2	
127	土師器	皿N小	1区	井戸1063枠内	9.2	1.4		46	10YR8/2	
128	土師器	皿N大	1区	井戸1063枠内	12.2	2.0		100	10YR8/2	
129	土師器	皿N小	1区	井戸450掘形	7.8	1.0		35	10YR7/2	
130	土師器	皿N小	1区	井戸450枠内	8.4	1.4		92	10YR7/3	
131	土師器	皿N小	1区	井戸450内部	8.6	1.1		52	10YR7/2	
132	土師器	皿N大	1区	井戸450掘形	11.4	2.2		23	7.5YR7/4	
133	土師器	高杯	1区	井戸450内部		(4.8)			7.5YR8/2	脚部12面
134	瓦器	椀	1区	井戸450掘形	13.6	4.2	6.0	31	N3/0	
135	瓦器	鍋	1区	井戸1064	24.2	(7.1)		24	2.5Y4/1	
136	瓦器	小壺	1区	井戸27最下層	2.4	4.0	2.0	100	7.5Y4/1	
137	土師器	皿Ac	1区	井戸950上層	6.5	1.2		100	10YR8/1	
138	土師器	皿N小	1区	井戸950上層	7.8	1.6		28	10YR7/2	
139	土師器	皿N小	1区	井戸950下層	9.4	1.5		28	10YR7/2	
140	土師器	皿N小	1区	井戸950下層	9.4	1.1		12	7.5YR7/3	
141	土師器	皿N小	1区	井戸555	7.3	1.2		50	10YR7/3	

※( )は残存値、残存率は口径・底径による

番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
142	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	8.0	1.7		70	7.5YR7/6	
143	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	7.6	1.3		33	7.5YR7/3	
144	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	7.9	1.4		50	10YR6/3	
145	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	8.0	1.5		29	10YR7/3	
146	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	8.4	1.5		48	7.5YR8/4	
147	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	8.4	1.6		38	7.5YR7/3	
148	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	8.5	1.8		100	10YR8/3	
149	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	8.6	1.6		38	7.5YR7/4	
150	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	8.6	1.3		28	10YR7/2	
151	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	8.8	1.6		49	10YR7/2	
152	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	8.8	1.4		54	7.5YR7/3	
153	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	8.8	1.4		33	10YR7/2	
154	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	7.4	1.4		33	7.5YR7/4	
155	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	7.9	1.5		100	7.5YR7/4	
156	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	7.9	1.7		100	7.5YR7/6	
157	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	8.1	1.7		90	7.5YR7/4	
158	土師器	ⅢN小	1区	井戸555	8.6	1.5		29	10YR7/2	
159	土師器	ⅢAc	1区	井戸555掘形	4.1	0.8		100	N8/0	
160	土師器	ⅢN大	1区	井戸555	10.6	2.0		38	7.5YR7/3	
161	土師器	ⅢN大	1区	井戸555	10.9	2.0		65	10YR8/2~7/3	
162	土師器	ⅢN大	1区	井戸555	11.2	2.2		30	7.5YR8/4	
163	土師器	ⅢS大	1区	井戸555	11.4	(2.5)		39	7.5YR7/4	
164	土師器	ⅢN大	1区	井戸555	10.8	2.0		62	7.5YR7/3	
165	土師器	ⅢN大	1区	井戸555	11.4	1.8		26	7.5YR7/3~5YR7/6	
166	土師器	ⅢN大	1区	井戸555	11.5	1.9		71	5YR8/6	
167	土師器	ⅢN大	1区	井戸555	11.6	2.0		32	7.5YR7/4	
168	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	6.6	2.0		100	10YR8/2	
169	土師器	ⅢS小	1区	井戸555	6.8	1.8		100	10YR8/2	
170	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	7.8	1.7		81	7.5YR8/3	
171	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	6.7	1.9		93	10YR8/2	
172	土師器	ⅢS小	1区	井戸555	6.6	1.7		100	10YR8/2	
173	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	6.6	1.8		100	10YR8/2	
174	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	6.5	1.8		90	10YR8/2~7.5YR8/2	
175	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	6.6	1.9		64	10YR8/2	
176	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	7.0	1.7		77	10YR8/2	
177	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	6.8	1.7		64	10YR8/2	
178	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	6.9	1.7		100	10YR8/2	
179	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	6.9	1.9		91	10YR8/2	
180	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	6.9	1.8		100	10YR8/2	
181	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	7.3	1.8		100	10YR8/2	
182	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	7.3	1.8		70	10YR8/2	
183	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	7.1	2.0		84	10YR8/2	
184	土師器	ⅢSh	1区	井戸555	11.0	3.1		28	10YR8/2	
185	土師器	ⅢS大	1区	井戸555	11.4	3.1		25	10YR8/2	
186	土師器	ⅢS大	1区	井戸555	11.6	3.0		81	10YR8/2	
187	土師器	ⅢS大	1区	井戸555	11.6	2.8		31	10YR8/2	
188	土師器	ⅢS大	1区	井戸555	11.6	2.9		22	10YR8/2	

※( )は残存値、残存率は口径・底径による

番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
189	土師器	皿S大	1区	井戸555	11.8	2.7		34	10YR8/2	
190	土師器	皿S大	1区	井戸555	12.0	2.7		20	10YR8/2	
191	土師器	皿S大	1区	井戸555	12.2	2.7		57	10YR8/2	
192	土師器	皿S大	1区	井戸555	12.2	2.9		100	10YR8/2	
193	土師器	皿S大	1区	井戸555	12.4	(2.8)		58	10YR8/2	
194	土師器	皿S大	1区	土坑576	6.7	1.5		100	10YR7/2	
195	土師器	皿Ac	1区	土坑576	7.0	1.0		100	2.5Y8/2	
196	土師器	皿Ac	1区	土坑576	8.3	1.6		100	7.5YR8/3	
197	土師器	皿N小	1区	土坑576	8.4	1.5		100	7.5YR8/4	
198	土師器	皿N小	1区	土坑576	8.4	1.7		100	10YR7/2	
199	土師器	皿N小	1区	土坑576	8.8	1.6		100	7.5Y7/3~10YR7/2	
200	土師器	皿N小	1区	土坑576	8.8	1.6		100	7.5YR8/3	
201	土師器	皿N小	1区	土坑576	8.4~8.8	1.4		100	7.5YR7/3	
202	土師器	皿N小	1区	土坑576	8.4~8.8	1.5		100	7.5YR8/3	
203	土師器	皿N小	1区	土坑576	8.4	1.7		90	7.5YR8/4	
204	土師器	皿N小	1区	土坑576	8.8	1.6		100	10YR7/3	
205	土師器	皿N小	1区	土坑576	9.1	1.6		100	10YR8/2	
206	土師器	皿N大	1区	土坑576	12.0	2.3		79	10YR7/3	底部外面板痕
207	土師器	皿N大	1区	土坑576	12.6	2.4		66	7.5YR7/4	
208	土師器	皿N大	1区	土坑576	12.7	2.6		100	10YR8/2	
209	土師器	皿N大	1区	土坑576	12.8	2.5		100	10YR8/2	
210	土師器	皿N大	1区	土坑576	12.8	2.7		100	10YR8/2	
211	土師器	皿N大	1区	土坑576	12.8	2.5		100	10YR8/2	底部外面板痕
212	土師器	皿N大	1区	土坑576	13.8	2.3		100	10YR7/3	
213	土師器	皿N大	1区	土坑576	12.9	2.3		100	2.5Y8/4	
214	土師器	皿N大	1区	土坑576	13.2	2.3		100	10YR8/2	
215	土師器	皿N大	1区	土坑576	13.2	2.3		100	10YR8/3	
216	土師器	皿N大	1区	土坑576	13.6	2.2		98	10YR7/2	
217	土師器	皿S大	1区	土坑576	12.4	3.2		65	10YR8/2	
218	土師器	皿S大	1区	土坑576	12.3	3.5		100	10YR8/2	
219	土師器	羽釜	1区	土坑576	28.6	28.6		99	10YR7/2	鏝以下煤付着
220	瓦器	椀	1区	土坑576	13.4	4.6	4.6	100	N3/0	
221	瓦器	三足鉢	1区	土坑576	14.2	5.0		100	N3/0	
222	瓦器	鍋	1区	土坑576	30.0	(15.0)		46	5Y5/1	外面煤厚く付着
223	瓦器	三足羽釜	1区	土坑576	12.2	17.7		98	N3/0	
224	瓦器	盤	1区	土坑576	49.0	11.7		42	N3/0~5Y5/1	
225	土師器	皿N小	1区	土坑460	8.4	1.3		37	10YR7/3	内面剥離著しい
226	土師器	皿N小	1区	土坑460	8.4	1.5		38	10YR7/2	器面剥離著しい
227	土師器	皿N小	1区	土坑460	8.6	1.5		77	10YR7/2	
228	白色土器	耳皿	1区	土坑460		2.8	3.2	40	2.5Y7/2	
229	白色土器	皿	1区	土坑460	8.4	1.7	3.1	81	2.5Y7/2	底部外面糸切未調整
230	土師器	皿S小	1区	土坑460	9.0	2.2		48	10YR7/2	
231	土師器	皿S大	1区	土坑460	12.2	(3.1)		24	10YR8/1~7/1	
232	土師器	皿S大	1区	土坑460	13.4	(3.1)		25	10YR8/1~7/1	
233	土師器	皿N小	1区	土坑62	7.8	1.5		27	7.5YR7/3	
234	土師器	皿N小	1区	土坑62	8.4	1.7		85	10YR8/1	
235	土師器	皿N小	1区	土坑62	8.5	1.5		63	10YR7/1	

※( )は残存値、残存率は口径・底径による

番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
236	土師器	皿Ac	1区	土坑62	10.0	1.4		20	7.5YR7/2	
237	土師器	皿N大	1区	土坑62	11.8	2.1		18	2.5YR7/2	
238	土師器	皿N大	1区	土坑62	13.4	2.4		18	10YR7/2	
239	瓦器	小椀	1区	土坑62	7.8	(2.3)		22		
240	瓦器	椀	1区	土坑62	14.8	(4.1)		22		
241	土師器	皿N小	1区	土坑652	8.6	1.4		61	10YR7/2	
242	土師器	皿N小	1区	土坑652	8.6	1.4		46	10YR7/2	
243	土師器	皿N大	1区	土坑652	12.4	2.4		23	10YR7/3	
244	土師器	皿N大	1区	土坑652	12.6	7.2		65	10YR7/3	
245	土師器	皿N大	1区	土坑652	12.6	2.8		44	7.5YR7/3	
246	土師器	皿N大	1区	土坑652	13.3	2.5		100	10YR7/3	
247	土師器	皿Ac	1区	土坑515	6.6	1.7		22	10YR7/3	
248	土師器	皿N小	1区	土坑515	8.4	1.4		56	10YR7/3	
249	土師器	皿N小	1区	土坑515	8.4	1.5		41	10YR7/2	
250	土師器	皿N小	1区	土坑515	8.8	1.5		100	10YR7/3	
251	土師器	皿N小	1区	土坑515	8.7	1.3		42	10YR7/2	
252	土師器	皿S小	1区	土坑515	9.0	2.4		57	10YR7/3	
253	土師器	皿S小	1区	土坑515	8.8	2.2		43	10YR7/3	
254	土師器	皿N大	1区	土坑515	12.4	2.1		21	7.5YR7/3	
255	土師器	皿N大	1区	土坑515	12.6	(2.4)		33	10YR7/2	
256	土師器	皿N大	1区	土坑515	13.8	2.3		24	10YR7/3	
257	須恵器	壺	1区	土坑515		(12.1)	9.6	47	N6/0	
258	土師器	皿N小	1区	土坑33	7.7	1.4		83	2.5YR6/6	
259	土師器	皿N小	1区	土坑33	8.4	1.3		90	7.5YR7/2	
260	土師器	皿N小	1区	土坑33	8.4	1.5		75	10YR7/2	
261	土師器	皿N小	1区	土坑33	8.4	1.6		43	10YR7/2	
262	土師器	皿N小	1区	土坑33	8.6	1.5		50	10YR7/2	
263	土師器	皿N大	1区	土坑33	13.2	2.4		17	10YR7/2	
264	土師器	皿N大	1区	土坑33	12.2	(2.2)		17	10YR7/2	
265	土師器	皿N大	1区	土坑33	13.2	2.5		50	2.5YR7/4	
266	土師器	皿N小	1区	土坑470	7.8	1.6		46	10YR7/2	
267	土師器	皿N小	1区	土坑470	8.2	1.4		66	10YR7/2	口縁端部煤
268	土師器	皿N小	1区	土坑470	8.8	1.7		42	10YR7/2	内外面器面剥離
269	土師器	皿N小	1区	土坑470	8.8	2.1		37	10YR7/2	
270	土師器	皿N小	1区	土坑470	9.6	1.5		36	10YR7/2	
271	土師器	皿N大	1区	土坑470	13.4	2.5		49	7.5YR8/4	
272	土師器	皿N小	1区	土坑665	8.2	1.7		31	10YR7/2	
273	土師器	皿N小	1区	土坑665	8.8	1.8		43	10YR7/1	口縁煤付着
274	土師器	皿N小	1区	土坑665	8.8	1.2		50	10YR8/2	
275	土師器	皿N小	1区	土坑665	8.8	1.5		67	10YR7/2	口縁内外面煤付着
276	土師器	皿N大	1区	土坑665	10.8	2.7		51	10YR7/2	
277	土師器	皿N大	1区	土坑665	11.8	2.2		21	10YR7/2	
278	土師器	皿N小	1区	土坑229	7.6	1.3		38	7.5YR7/2	
279	土師器	皿N小	1区	土坑229	7.8	1.3		45	10YR7/3	
280	土師器	皿N小	1区	土坑229	7.8	1.4		40	10YR8/3	
281	土師器	皿N小	1区	土坑229	8.0	1.2		32	5YR7/6	
282	土師器	皿N小	1区	土坑229	8.0	1.5		92	10YR7/2	



※( )は残存値、残存率は口径・底径による

番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
283	土師器	皿N小	1区	土坑229	8.0	1.3		90	7.5YR7/4~5YR7/4	
284	土師器	皿N大	1区	土坑229	11.0	2.0		26	7.5YR7/3	
285	土師器	皿N大	1区	土坑229	11.4	2.0		100	7.5YR8/3	底部外面板痕
286	土師器	皿N大	1区	土坑229	12.2	2.4		53	7.5YR7/4	
287	土師器	皿N大	1区	土坑229	12.0	2.3		35	7.5YR7/3	
288	土師器	皿N大	1区	土坑229	10.8	2.6		76	7.5YR7/4	底部外面板痕
289	土師器	皿N大	1区	土坑229	11.4	2.6		44	10YR8/3	底部外面板痕
290	土師器	皿N大	1区	土坑229	11.8	2.4		45	7.5YR8/3	
291	土師器	皿S大	1区	土坑229	11.2	(2.9)		100	10YR8/2	
292	土師器	皿S大	1区	土坑229	11.6	2.9		86	10YR8/2	
293	土師器	皿S大	1区	土坑229	11.6	(3.0)		23	10YR8/2	
294	土師器	皿S大	1区	土坑229	12.4	2.9		30	10YR8/2	
295	土師器	皿S大	1区	土坑229	12.6	(2.4)		74	10YR8/2	
296	土師器	皿N小	1区	溝247	8.4	1.4		77	7.5YR7/3	
297	土師器	皿N小	1区	溝247	8.6	1.4		78	7.5YR7/4	
298	土師器	皿N小	1区	溝247	8.8	1.4		93	10YR7/2	2次被熱受ける
299	土師器	皿N小	1区	溝247	8.8	1.7		100	10YR7/2	
300	土師器	皿N小	1区	溝247	9.0	1.5		75	2.5Y7/2	
301	土師器	皿N小	1区	溝247	8.8	1.4		27	7.5YR7/4	
302	土師器	皿N大	1区	溝247	11.8	2.3		19	7.5YR7/3	
303	土師器	皿N大	1区	溝247	12.8	2.2		16	2.5Y7/2	
304	土師器	皿N大	1区	溝247	13.0	2.4		38	10YR7/2	
305	土師器	皿N大	1区	溝247	13.0	2.2		29	10YR8/2	
306	瓦器	椀	1区	溝247	13.2	(3.6)		18	N3/0	
307	須恵器	鉢	1区	溝247	32.0	(6.4)		12	N5/0	
308	土師器	皿N小	1区	溝260	8.4 ~8.9	1.6		100	7.5YR7/3	
309	土師器	皿N小	1区	溝260	8.8	1.4		43	7.5YR7/3	
310	土師器	皿N大	1区	溝260	12.0	2.8		20	7.5YR7/2	
311	土師器	皿N大	1区	溝260	12.0	2.0		17	10YR7/3	
312	土師器	皿N大	1区	溝260	13.0	(2.4)		23	10YR7/3	
313	土師器	皿N小	1区	溝333	7.8	1.3		25	10YR7/2	
314	土師器	皿N小	1区	溝333	9.0	1.6		19	10YR7/2	
315	土師器	皿N大	1区	溝333	11.4	2.2		50	7.5YR7/4	
316	土師器	皿N大	1区	溝333	11.2	1.9		20	10YR7/2	
317	土師器	皿N大	1区	溝333	11.8	2.1		88	10YR7/2	
318	土師器	皿N大	1区	溝333	12.4	2.1		26	10YR7/2	
319	土師器	皿N大	1区	溝333	12.4	2.5		62	10YR7/2	
320	土師器	皿N大	1区	溝333	13.0	2.6		44	7.5YR8/3~5YR7/4	
321	土師器	皿N大	1区	溝333	13.6	2.4		24	10YR7/2	
322	土師器	椀	1区	池80	12.2	3.6		53	5YR7/4~7.5YR4/2	
323	土師器	椀	1区	池80	12.8	3.4		76	2.5Y7/1	
324	土師器	皿	1区	池80	17.8	2.0		16	7.5YR8/1	
325	土師器	杯	1区	池80	17.6	3.4		18	10YR7/2	
326	土師器	皿	1区	池80	17.0	2.4		27	5YR8/4~7.5YR9/2	底部外面墨書「六」
327	土師器	椀	1区	池80	12.2	3.1		11	2.5Y6/2	
328	土師器	皿	1区	池80	16.6	2.2		15	10YR7/2	
329	土師器	皿	1区	池80	14.8	2.1		26	10YR6/3	

※( )は残存値、残存率は口径・底径による

番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
330	土師器	杯	1区	池80	16.0	3.0		13	10YR7/1	
331	土師器	皿	1区	池80	18.6	2.4		29	5YR6/6	
332	須恵器	杯A	1区	池80	12.0	3.6	8.2	17	2.5Y7/2	底部内面墨書
333	須恵器	蓋	1区	池80	13.6	2.3		75	5Y6/1	
334	須恵器	杯B	1区	池80	12.0	4.4	8.0	58	N6/0	
335	須恵器	瓶	1区	池80	8.4	(6.6)		60	10Y4/1	
336	須恵器	皿	1区	池80	15.4	1.4	13.4	23	N7/0	
337	緑釉陶器	皿	1区	池80	14.8	(2.3)		27	5Y8/1	
338	緑釉陶器	椀	1区	池80		(1.7)	6.8		釉:緑黄色 胎:5Y8/1	
339	土師器	皿	2区	池77最下層	18.0	2.0		16	5YR4/6	
340	土師器	杯B	2区	池77最下層	17.6	(2.6)		11	10YR8/3	
341	土師器	皿A	2区	池77最下層	10.6	0.9		20	2.5YR8/2	
342	土師器	皿A	2区	池77最下層	12.6	(1.2)		16	10YR7/2	
343	黒色土器	椀	2区	池77最下層	16.9	(4.1)		13	7.5YR5/3	A類
344	黒色土器	椀	2区	池77最下層	15.8	(3.8)		12	N3/0	B類
345	白色土器	椀	2区	池77最下層		(1.8)	7.4		2.5Y8/1	
346	緑釉陶器	椀	2区	池77最下層		(2.0)	7.4		釉:淡緑色 胎:N6/0	須恵質の素地
347	灰釉陶器	椀	2区	池77最下層		(2.1)	7.4		5Y7/1	
348	灰釉陶器	椀	2区	池77最下層		(3.0)	7.8	38	2.5Y7/1	
349	灰釉陶器	椀	2区	池77最下層	17.2	6.0	8.6		5Y7/1	底部完存
350	灰釉陶器	椀	2区	池77最下層		(4.1)	7.2	19	2.5Y7/1	
351	須恵器	甕	2区	池77最下層	20.2	(6.8)			7.5Y5/1	
352	土師器	椀A	2区	池77	13.6	3.1		48	2.5Y6/2	
353	土師器	杯A	2区	池77	14.6	(2.8)		14	2.5Y8/1	
354	土師器	皿A	2区	池77	15.2	1.4		13	10YR7/2	
355	土師器	杯L	2区	池77	16.6	(2.7)		17	2.5Y6/3	
356	土師器	杯L	2区	池77	17.0	(2.5)			10YR7/2	
357	土師器	杯L	2区	池77	17.8	(2.5)		10	7.5Y8/3	
358	土師器	皿A	2区	池77	14.8	(1.4)		15	10YR7/3	
359	灰釉陶器	皿	2区	池77	14.8	2.6	6.8	33	2.5Y7/1	内面施釉
360	須恵器	壺	2区	池77	12.4	(8.4)		25	2.5Y8/1	
361	須恵器	瓶子	2区	池77		(7.3)	4.0		N6/0	底部糸切り未調整
362	須恵器	瓶子	2区	池77	4.4	(9.5)	3.8	46	N6/0	底部糸切り未調整
363	土師器	皿A	2区	池77	10.4	1.2		19	10YR7/2	
364	土師器	皿A	2区	池77	11.8	1.3		9	10YR7/2	
365	土師器	皿A	2区	池77	10.8	1.2		38	5YR6/4	
366	土師器	皿A	2区	池77	12.0	1.4		16	10YR7/4	
367	土師器	皿Ac	2区	池77	12.4	0.9		37	2.5Y7/2	
368	土師器	皿Ac	2区	池77	10.0	1.2		95	10YR7/2	
369	土師器	皿N	2区	池77	17.2	(2.9)		10	10YR8/2	
370	土師器	皿A	2区	池77	10.6	(2.0)		27	2.5Y8/1	
371	土師器	皿	2区	池77	16.8	3.5		15	10YR7/2~7/3	
372	土師器	杯	2区	池77	15.0	(3.7)		41	10YR7/3	
373	土師器	椀	2区	池77	13.0	2.5		15	2.5Y7.2	
374	土師器	杯	2区	池77	14.6	(2.5)		9	10YR6/2	
375	土師器	皿	2区	池77	14.8	2.2		27	10YR6/1	
376	土師器	皿	2区	池77	15.6	2.5		26	10YR7/2	

※( )は残存値、残存率は口径・底径による

番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
377	土師器	皿A	2区	泉75	8.8	1.3		25	7.5YR7/3	
378	土師器	皿A	2区	泉75	11.0	1.4		46	10YR7/3	
379	土師器	皿N	2区	泉75	9.4	1.5		28	5YR7/2	
380	土師器	皿Ac	2区	整地層2	8.0	1.1		47	10YR7/3	
381	土師器	皿N小	2区	整地層2	8.4	1.3		69	2.5YR8/3~8/2	
382	土師器	皿N小	2区	整地層2	8.4	1.9		53	10YR7/2~7/3	
383	土師器	皿N小	2区	整地層2	8.5	1.7		89	10YR7/3	
384	土師器	皿N小	2区	整地層2	9.0	1.7		54	10YR7/2	
385	土師器	皿N小	2区	整地層2	9.2	1.5		48	7.5YR8/2	
386	土師器	皿N大	2区	整地層2	12.8	2.4		20	7.5YR7/3	
387	土師器	皿N大	2区	整地層2	13.4	2.5		17	10YR7/2~7/3	
388	土師器	皿N大	2区	整地層2	13.8	2.5		57	2.5YR7/3	
389	土師器	皿N大	2区	整地層2	14.0	2.4		51	2.5Y7/2	
390	土師器	皿N大	2区	整地層2	14.0	2.4		31	7.5YR7/4	
391	土師器	皿	2区	整地層2	14.4	2.5		20	2.5Y7/2	
392	土師器	皿N大	2区	整地層2	14.6	2.3		15	10YR7/3	
393	土師器	皿N大	2区	整地層2	17.8	2.5		25	7.5YR7/3	
394	土師器	皿	2区	建物21柱穴153	8.4	(1.2)		19	10YR7/2	
395	土師器	皿	2区	建物21柱穴161	8.8	1.6		25	7.5YR7/3	
396	土師器	皿	2区	建物21柱穴163	9.4	1.6		28	10YR8/1	
397	土師器	皿	2区	建物21柱穴154	11.6	2.1		24	2.5Y7/2	
398	土師器	皿	2区	建物21柱穴154	12.6	3.1		19	10YR8/2	
399	土師器	皿	2区	建物20柱穴144	9.8	1.7		60	2.5Y7/1	
400	土師器	皿	2区	建物20柱穴122	10.0	(1.5)		19	2.5Y7/1	
401	土師器	皿	2区	建物20柱穴188	12.8	(2.1)		16	10YR7/2	
402	土師器	皿	2区	建物20柱穴122	14.0	(2.2)		16	2.5Y7/1	
403	瓦器	椀	2区	建物20柱穴133	12.6	(3.1)		15	N3/0	
404	土師器	皿	2区	井戸44	12.6	2.5		30	7.5YR8/3	
405	瓦器	羽釜	2区	井戸44	14.4	(2.3)		15	2.5Y8/1	外面煤付着
406	土師器	皿	2区	井戸136	7.6	1.8		25	10YR8/2	曲物内出土
407	土師器	皿	2区	井戸136	8.0	1.4		25	10YR7/2	
408	土師器	皿	2区	井戸136	8.4	1.2		23	10YR7/3	
409	土師器	皿	2区	井戸78	8.2	1.3			10YR7/2	
410	土師器	皿	2区	井戸78	8.3	1.7			10YR7/2	
411	土師器	皿	2区	井戸78	11.8	(2.2)		17	10YR7/2	
412	土師器	皿	2区	井戸78	12.0	2.0		43	10YR7/3	
413	土師器	皿	2区	井戸78	12.4	2.0		20	10YR7/2	
414	土師器	皿	2区	井戸78	10.8	(2.8)		22	2.5Y8/1	
415	瓦器	椀	2区	井戸78	14.2	(4.2)		40	N3/0	
416	瓦器	盤	2区	土坑134	36.6	10.3		97	N4/0	
417	土師器	皿Ac	2区	整地層1	7.2	1.3		37	10YR6/2	
418	土師器	皿N小	2区	整地層1	7.8	1.5		28	10YR7/2	
419	土師器	皿N小	2区	整地層1	7.9	1.1		56	7.5Y7/3	
420	土師器	皿N小	2区	整地層1	8.2	1.2		86	10YR7/2	
421	土師器	皿N小	2区	整地層1	8.2	1.3		26	10YR7/3	
422	土師器	皿N小	2区	整地層1	8.4	1.5		46	10YR7/2	
423	土師器	皿N小	2区	整地層1	8.5	1.5		58	10YR7/3	

※( )は残存値、残存率は口径・底径による

番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
424	土師器	皿N小	2区	整地層1	8.6	1.5		59	10YR7/3	
425	土師器	皿N小	2区	整地層1	8.8	1.6		43	10YR7/3	
426	土師器	皿N大	2区	整地層1	13.4	2.3		20	10YR6/2	
427	土師器	皿N大	2区	整地層1	13.6	2.3		17	2.5YR7/2	
428	土師器	皿N大	2区	整地層1	14.0	2.0		14	10YR7/2	
429	土師器	皿N大	2区	整地層1	14.2	2.3		21	10YR7/2	
430	土師器	皿N大	2区	整地層1	14.4	2.8		17	10YR7/2	
431	山茶碗	皿	1区	整地層1	8.4	2.0	4.0	33	2.5Y7/1	底部外面墨書
432	緑釉陶器	碗	1区	整地層1		(2.4)	5.9	底部 33	釉:7.5Y6/2 胎:10YR7/3	底部外面墨書「政口」
433	土師器	皿	1区	整地層1		(2.0)			10YR7/2	口縁部外面墨書
434	青磁	皿	1区	土坑665	9.8	2.5	4.3	66	釉:5Y7/1 胎:10YR8/2	底部外面墨書
435	山茶碗	皿	1区	溝333	7.7	2.2		95	2.5Y7/1	底部外面墨書「五大力」
436	土師器	不明	2区	池80埋土					10YR5/3	底部外面墨書「厨」
437	須恵器	杯A	2区	池80			9.0	底部 33	5Y7/1	底部外面墨書
438	須恵器	杯A	2区	池80最下層		(2.2)	7.4	底部 25	2.5Y7/2	底部外面墨書
439	須恵器	不明	2区	池80最下層					2.5Y7/1	底部外面墨書
440	須恵器	杯A	2区	池77				底部 20	7.5Y7/1	底部内外面墨書
441	須恵器	杯(B)	2区	池77			10.1	底部 13	2.5Y7/1	底部外面墨書
442	須恵器	皿	2区	池77					2.5Y7/1	底部外面墨書
443	須恵器	杯B	2区	池77池底腐食土				底部 17	N6/0	底部外面墨書
444	山茶碗	不明	2区	池77池底砂礫層					2.5Y7/1	底部外面墨書
445	土師器	不明	2区	池77下層					10YR7/3	底部外面墨書
446	青白磁	合子蓋	2区	整地層1	6.4	1.8		25	釉:7.5GY8/1 胎:N8/0	
447	青白磁	合子蓋	2区	整地層1	8.0	(1.6)		12	釉:2.5GY8/1 胎:2.5Y7/1	
448	青磁	碗	1区	土坑405			6.3	17	釉:5Y6/2 胎:2.5Y7/2	
449	青磁	皿	1区	井戸1063井筒内	9.8	2.2	4.8	25	釉:7.5Y6/2 胎:5Y7/1	
450	青磁	皿	1区	池1121	10.3	2.2	5.4	17	釉:7.5Y6/2 胎:N7/0	
451	青磁	皿	1区	井戸1064	9.6	2.1	4.6	22	釉:7.5Y7/1 胎:2.5Y8/1	底部露胎
452	青磁	皿	1区	池1121	9.8	2.0	5.0	16	釉:5GY7/1 胎:2.5Y8/1	
453	青磁	皿	2区	整地層1	10.4	1.9	5.2	25	釉:2.5GY6/1 胎:N7/0	
454	青磁	皿	1区	土坑576	10.4	2.2	4.8	100	釉:5GY7/1 胎:2.5Y8/1	口縁内外面全面に煤付着
455	青磁	皿	1区	土坑33	10.6	2.2	5.6	45	釉:7.5Y7/1 胎:N7/0	
456	青磁	碗	2区	整地層2	16.0	(6.3)		10	釉:5Y5/3 胎:5Y7/1	
457	青磁	碗	1区	土坑405	15.4	6.2	4.3	33	釉:10Y7/2 胎:N7/0	
458	青磁	碗	1区	井戸1064		(4.3)	3.4		釉:7.5Y7/2 胎:7.5Y7/1	高台露胎
459	青磁	碗	2区	整地層1	16.1	(4.4)		12	釉:7.5Y4/2 胎:N6/0	
460	輸入磁器	碗	1区	整地層1		(3.4)	6.8		釉:5Y7/2 胎:5Y8/1	外面露胎
461	青磁	碗	1区	整地層1		(2.1)	4.6		釉:5Y6/2 胎:5Y7/1	
462	青磁	碗	1区	池1121		(2.3)	3.2		釉:2.5GY6/1 胎:N8/0	高台端部露胎
463	青磁	壺	1区	溝223	5.0	(11.1)		33	釉:7.5Y7/1 胎:5Y7/1	
464	褐釉陶器	盤	2区	整地層1	19.2	(4.3)		12	釉:5Y6/4 胎:2.5Y7/2	

觀察表2 出土瓦類一覽表

番号	種類	文様	地区	遺構名	色調	備考
瓦1	軒丸瓦	蓮華文	2区	池77	N7/0	平城宮6301-B型式
瓦2	軒丸瓦	蓮華文	1区	整地層1	表面:N4/0 中:N7/0	平城宮6284-Ea型式
瓦3	軒丸瓦	蓮華文	2区	池80最下層	表面:N3/0 中:N5/0	西賀茂角社窯NS157型式
瓦4	軒丸瓦	蓮華文	2区	池77	表面:N4/0 中:N7/0	
瓦5	軒丸瓦	蓮華文	1区	流路1158	表面:10YR4/1 中:10YR8/1	
瓦6	軒丸瓦	蓮華文	2区	整地層2	2.5YR8/1	池田瓦窯跡NM06型式
瓦7	軒丸瓦	蓮華文	2区	池77	表面:N3/0 中:5Y8/1	池田瓦窯跡NM13型式
瓦8	軒丸瓦	蓮華文	1区	池1121	2.5Y8/1	
瓦9	軒丸瓦	蓮華文	1区	井戸7	5Y8/2	
瓦10	軒丸瓦	巴文	1区	整地層1	表面:N4/0 中:N8/0	
瓦11	軒丸瓦	巴文	1区	整地層1	7.5YR8/3	
瓦12	軒丸瓦	巴文	2区	整地層2	表面:10YR4/1 中:10YR8/2	
瓦13	軒平瓦	唐草文	1区	流路1158	表面:N5/0 中:N7/0	平城宮6663-H型式
瓦14	軒平瓦	唐草文	1区	井戸1062	N8/0	平城宮6663型式
瓦15	軒平瓦	唐草文	1区	流路1158	表面:N3/0 中:N8/0	平城宮6664-O型式
瓦16	軒平瓦	唐草文	1区	集石1161	表面:10YR5/1 中:10YR8/2	
瓦17	軒平瓦	唐草文	2区	池77下層	表面:N4/0 中:N8/0	
瓦18	軒平瓦	唐草文	1区	池1121	中:2.5Y8/1	池田瓦窯NH08型式
瓦19	軒平瓦	唐草文	2区	泉75	2.5Y8/1	池田瓦窯NH10型式
瓦20	軒平瓦	唐草文	1区	集石1161	表面:N4/0 中:N6/0	
瓦21	軒平瓦	唐草文	2区	池80上層	表面:2.5Y3/1 中:2.5Y7/1	
瓦22	軒平瓦	唐草文	2区	柱穴180	中:2.5Y7/2	
瓦23	軒平瓦	唐草文	1区	池1121	N7/0	
瓦24	軒平瓦	蓮巴文	1区	池1121	2.5Y7/1	
瓦25	軒平瓦	唐草文	1区	井戸1064	表面:N4/0 中:N8/0	
瓦26	軒平瓦	唐草文	2区	池77	表面:2.5Y5/1 中:2.5Y8/1	
瓦27	軒平瓦	劍頭文	1区	柱穴554	N6/0	
瓦28	軒平瓦	劍頭文	1区	井戸27	7.5Y8/1	
瓦29	軒平瓦	劍頭文	1区	井戸1064	2.5Y8/1	
瓦30	軒平瓦	劍頭文	1区	土坑576	10YR8/2	
瓦31	軒平瓦	劍頭文	1区	井戸555	7.5YR8/3	
瓦32	塼	—	1区	井戸450	表面:N3/0 中:N7/0	

観察表3 出土木簡一覧表

※( )は残存値

番号	種類	地区	遺構名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	内 容	樹種	備 考
木1	木簡(文書)	2区	池80	25.7	(1.5)	0.8	表：死亡武人 大男大伴□□年□七 大女土師浄女年五十六 左京人去月四日来 裏：客作児捌人 [ ]送死亡四人仕薬院田作 弘仁六年三月十日□小治田古□	スギ	
木2	木簡(荷札)	2区	池80	19.8	(2.0)	1.1	□□黒米肆升 弓削男宗	スギ	
木3	木簡(荷札)	2区	池80	18.8	2.2	0.5	猪□大二斗	スギ	
木4	木簡(荷札)	2区	池80	15.3	2.8	0.3	六物干薑丸	スギ	
木5	木簡(文書)	2区	池80	10.6	(1.2)	0.4	[ ]天□	スギ	
木6	木簡(荷札)	2区	池80	8.8	2.5	0.3	武藏国施薬院蜀椒壹斗	ヒノキ	
木7	木簡(荷札)	2区	池80	12.1	2.1	0.2	讃支白米五斗宮道□□	スギ	
木8	木簡(文書)	2区	池80	(11.3)	(1.2)	0.2	悲田院解 申請□□	スギ	
木9	木簡(板状)	2区	池80	(12.1)	2.0	0.4	進食口事 安都□足	スギ	
木10	木簡(板状)	2区	池80	(6.5)	2.2	0.2	□牛丸	スギ	
木11	木簡(板状)	2区	池80	(4.9)	(1.1)	0.4	[ ]	スギ	
木12	木簡(板状)	2区	池80	(6.4)	(0.9)	0.3	表：[ ] 裏：[ ]	スギ	墨痕
木13	木簡(板状)	2区	池80	(8.1)	(2.0)	(0.1)	□	スギ	削屑
木14	木簡(棒状)	2区	池80	(8.6)	1.1	0.6	□	ヒノキ	棒、墨痕
木15	木簡(板状)	2区	池80	(9.4)	(2.8)	1.0	□□：裏 □□継□□穴：表 □□□□三太	スギ	横材
木16	木簡(へら状)	2区	池80	18.5	3.0	0.7	□物干□丸	スギ	へら状
木17	木簡(板状)	2区	池77	(10.6)	3.6	0.3	「天疋(符録) □	スギ	呪符
木18	木簡(板状)	2区	池77	6.3	1.4	0.1	□無量無數却	スギ	柿経
木19	木簡(板状)	2区	池77	(7.6)	(2.2)	0.4	物忌□□	スギ	

観察表4 出土木製品一覧表

※( )は残存値

番号	種類	地区	遺構名	長さ (cm)	幅・径 (cm)	高さ・厚さ (cm)	残存 (%)	樹 種	備 考
木20	刀子鞘	1区	池1121	18.8	3.3	3.7	90	ヒノキ	
木21	工具柄	2区	池77下層	12.5	1.9	1.2	100	ムクノキ	
木22	工具柄	2区	池77	10.4	2.9	1.8		ムクノキ	
木23	蝙蝠扇	1区	池1121	(12.8)	1.9	0.4		スギ	
木24	蝙蝠扇	2区	池77	(13.8)	1.5	0.4		ヒノキ	
木25	留針	2区	池80	17.9	1.1	0.4		スギ	
木26	留針	2区	池77	17.6	1.2	0.4		イヌガヤ	
木27	下駄	1区	溝333	21.4	9.8	2.7	95	ケヤキ	
木28	下駄	2区	池77	21.2	(5.9)	(3.6)	50	ヒノキ	
木29	下駄	2区	池80	22.5	(7.3)	4.8	60	ヒノキ	
木30	下駄	2区	池80	(14.6)	(4.1)	1.8	45	スギ	
木31	下駄	2区	池77	15.4	7.7	2.0	90	ヒノキ	
木32	下駄	2区	池77	17.6	9.6	2.2	95	ヒノキ	
木33	下駄	2区	池80	20.9	8.9	5.0		ヒノキ	
木34	履物(金剛)	2区	井戸78	(10.4)	(4.6)	0.3		ヒノキ	

※( )は残存値

番号	種類	地区	遺構名	長さ (cm)	幅・径 (cm)	高さ・厚さ (cm)	残存 (%)	樹種	備考
木35	履物(金剛)	2区	井戸78	6.5	(3.7)	0.3		ヒノキ	
木36	履物(金剛)	2区	井戸78	8.5	(2.9)	0.2		ヒノキ	
木37	蓋(黒漆)	2区	池80	14.6		2.5	25	ケヤキ	
木38	漆器椀	1区	土坑821	口径 15.2	底径 8.4	3.7	25	トチノキ	
木39	組み合わせ製品	2区	池77	(11.1)	2.2	2.1		ヒノキ	
木40	木皿	2区	池80	口径 20.2	底径 18.0	1.3	25	ヒノキ	
木41	柄	1区	池1121	61.4	2.9	1.6		スギ	
木42	円盤状製品	1区	池1121	(3.3)	5.7	0.6	50	ヒノキ	
木43	円形曲物	2区	池80下層	14.2	(7.0)	0.5	50	ヒノキ	
木44	曲物	2区	池80	(18.8)	(8.4)	0.8	40	ヒノキ	
木45	円盤状製品	2区	池80上層	6.0	(3.2)	0.3	50	スギ	
木46	円盤状製品	2区	池77	6.2	(3.1)	0.5	50	ヒノキ	
木47	箸	2区	井戸78	22.2	0.5	0.5	100	ヒノキ	
木48	箸	2区	井戸78	20.8	0.6	0.3	100	ヒノキ	
木49	箸	2区	井戸78	19.9	0.6	0.4	100	ヒノキ	
木50	箸	2区	池80最下層	15.6	0.4	0.4	100	スギ	
木51	箸	2区	池80	(15.7)	0.7	0.6	80	スギ	
木52	箸	2区	池80最下層	(12.8)	0.6	0.5		スギ	
木53	箸	2区	池80	(12.3)	0.7	0.4		スギ	
木54	板状製品	2区	池77	11.5	3.3	0.5		スギ	
木55	板状製品	1区	流路1158	12.2	4.0	0.6		ヒノキ	
木56	題箋	2区	池80	(14.2)	2.6	1.2		スギ	
木57	木球	2区	池77	(4.5)	4.9	4.3	75	ケヤキ	
木58	木球	2区	池77	3.4	3.6	3.2	100	ヒノキ	
木59	棒状製品	2区	池80上層	5.3	3.2	2.9		ヒサカキ	
木60	棒状製品	2区	池80上層	(5.2)	3.4	3.1		ヒサカキ	
木61	短軸棒状製品	2区	池77	4.5	2.6	2.7	70	イヌガヤ	
木62	棒状製品	2区	池80	10.5	5.0	4.5	95	アカガシ亜属	
木63	齋串	2区	池80	23.7	2.4	0.3	90	ヒノキ	
木64	齋串	2区	池80	(17.3)	2.6	0.3	99	ヒノキ	
木65	齋串	2区	池80	(8.5)	1.2	0.4		ヒノキ	
木66	齋串	2区	池80	8.2	2.2	0.2		ヒノキ	
木67	齋串	2区	池80	(11.1)	(2.4)	0.2		ヒノキ	
木68	齋串	2区	池80	(16.7)	2.0	0.4		モミ属	
木69	齋串	2区	池80	(13.7)	2.2	0.2		ヒノキ	
木70	付札状製品	1区	流路1158	7.0	2.0	1.3	90	ヒノキ	
木71	付札状製品	2区	池77	8.5	1.9	1.4	95	ヒノキ	
木72	付札状製品	2区	池80最下層	7.3	1.9	1.3	100	ヒノキ	
木73	付札状製品	2区	池77上層	8.5	2.1	2.0	100	スギ	

※( )は残存値

番号	種類	地区	遺構名	長さ (cm)	幅・径 (cm)	高さ・厚さ (cm)	残存 (%)	樹種	備考
木74	付札状製品	2区	池77	8.9	2.0	1.1	90	スギ	
木75	付札状製品	2区	池77	(8.1)	1.7	0.6		スギ	
木76	付札状製品	2区	池77	(8.0)	1.6	1.6		ヒノキ	
木77	付札状製品	1区	溝333	9.2	2.2	1.3	95	ヒノキ	
木78	付札状製品	2区	池80	8.4	1.9	1.6		ヒノキ	
木79	人型状製品	1区	溝333	6.8	2.1	1.7	95	モミ属	
木80	人型状製品	2区	池77	7.9	1.8	1.8	100	ヒノキ	
木81	人型状製品	2区	池77	8.0	1.8	1.7	100	ヒノキ	
木82	人型状製品	2区	池77	9.2	1.4	1.2	95	ヒノキ	
木83	人型状製品	2区	池77	8.6	1.5	1.6	90	スギ	
木84	棒状製品	2区	池77	(7.0)	1.7	1.8		ウツギ	
木85	棒状製品	1区	池1121	21.5	2.0	1.3	95	モミ属	
木86	棒状製品	2区	池80	(20.0)	1.6	1.4		スギ	
木87	棒状製品	2区	池80下層	(20.0)	17.0	1.2		二葉マツ	
木88	棒状製品	2区	池77	31.4	3.1	1.5		スギ	
木89	棒状製品	2区	池80	9.1	1.0	0.5	100	ヒノキ	
木90	剣形製品	2区	池77	(19.5)	2.6	0.8		ヒノキ	
木91	板状製品	2区	池77	12.9	1.6	0.3		ヒノキ	
木92	板状製品	2区	池80最下層	11.0	1.4	0.5		スギ	
木93	建築部材	2区	攪乱	15.4	9.4	8.3		ヒノキ	
木94	柱材	2区	建物21柱穴152	16.3	13.3	10.8		ヒノキ	
木95	柱根	1区	柱穴784	(32.4)	10.4	10.2		ヒノキ	
木96	柱根	1区	建物4柱穴683	(46.8)	10.5	9.2		モミ属	
木97	柱根	1区	建物4柱穴682	(46.2)	13.1	11.7		モミ属	
木98	柱根	1区	建物4柱穴677	(41.8)	13.8	13.4		コウヤマキ	
木99	柱根	1区	建物1柱穴735	(39.8)	12.7	11.5		ヒノキ	
木100	礎板	1区	池1121	11.8	14.1	3.1		スギ	刻印あり
木101	礎板	2区	柱穴129	11.2	10.7	4.1		コウヤマキ	
木102	礎板	2区	柱穴115	15.1	8.2	3.8		ヒノキ	
木103	礎板	1区	建物9柱穴71	16.6	12.1	(4.3)		コウヤマキ	
木104	礎板	1区	池1121	18.1	11.4	4.4		ヒノキ	木105・106と接合
木105	礎板	1区	池1121	18.7	11.5	4.2		ヒノキ	木104・106と接合
木106	礎板	区	池1121	18.0	11.5	4.1		ヒノキ	木104・105と接合
木107	礎板	2区	柱穴116	14.5	12.9	5.6		スギ	
木108	礎板	1区	柱穴819	25.0	10.6	5.1		サカキ	
木109	礎板	2区	柱穴147	21.6	(21.1)	2.1		ヒノキ	
木110	礎板	1区	柱穴819	24.2	10.0	7.3		モミ属	
木111	礎板	1区	柱穴819	29.3	9.8	(6.4)		モミ属	
木112	礎板	2区	柱穴61	31.2	10.2	4.5		スギ	



觀察表5 出土錢貨一覽表

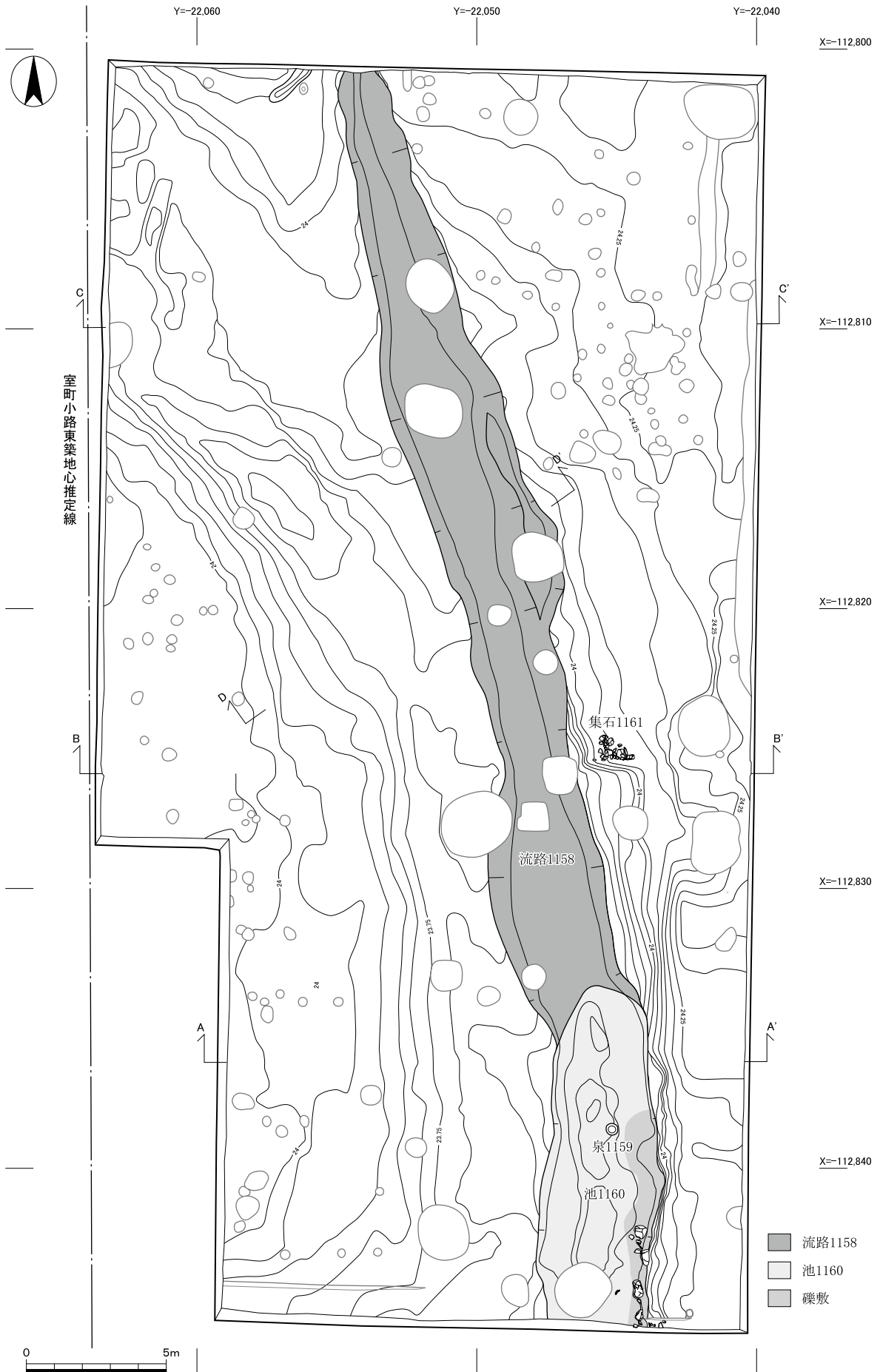
番号	種類	初鑄年	地区	遺構名	外径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
錢1	延喜通寶	907	2区	池77	18.95	5.00	1.50	2.268	
錢2	貞元大寶	958	2区	柱穴81	19.65	5.05	1.60	2.210	
錢3	五銖錢	—	2区	土坑186	25.50	9.70	1.20	2.784	後漢
錢4	開元通寶	621	2区	整地層1	24.15	6.85	1.15	1.627	
錢5	開元通寶	621	2区	土坑186	24.15	7.45	1.40	3.316	
錢6	至道元寶	995	1区	井戸27	24.55	5.40	1.95	3.373	草書体
錢7	至道元寶	995	2区	土坑186	25.20	5.90	1.30	3.725	
錢8	景祐元寶	1034	2区	溝36	24.95	6.65	1.70	3.909	篆書体
錢9	皇宋通寶	1039	2区	池77	22.90	6.60	1.35	2.041	篆書体
錢10	皇宋通寶	1039	2区	溝36	24.05	6.90	1.35	2.849	
錢11	嘉祐通寶	1056	1区	溝229	23.70	6.45	1.45	2.526	
錢12	嘉祐通寶	1056	1区	池1121	24.65	7.15	1.30	2.706	
錢13	嘉祐通寶	1056	2区	土坑186	23.65	6.20	1.60	4.217	篆書体
錢14	熙寧元寶	1068	2区	土坑186	24.90	7.75	1.20	3.415	
錢15	熙寧元寶	1068	2区	整地層1	24.25	6.65	1.80	3.344	
錢16	元豐通寶	1078	2区	土坑186	25.20	5.95	1.45	4.434	
錢17	元豐通寶	1078	2区	土坑186	24.25	5.55	2.00	5.270	
錢18	元豐通寶	1078	2区	整地層1	24.05	5.95	1.65	3.003	篆書体
錢19	元符通寶	1098	2区	土坑186	24.65	6.70	1.35	3.725	篆書体
錢20	大觀通寶	1107	2区	池77	24.70	6.30	1.65	3.160	
錢21	大觀通寶	1107	2区	整地層1	23.55	5.60	1.40	1.826	
錢22	政和通寶	1111	2区	整地層1	24.70	6.25	1.55	1.873	篆書体
錢23	永樂通寶	1408	2区	溝1	25.60	5.45	1.60	3.810	

観察表6 出土石製品・骨製品一覧表

番号	種類	地区	遺構名	長さ (cm)	幅・径 (cm)	高さ・厚さ (cm)	材質	備考
石1	石帯	2区	池77	(5.2)	(3.2)	0.6	—	蛇尾、色調:淡緑灰色+緑灰色脈
石2	珠	2区	溝58		0.8	0.7	ラピスラズリ	片側穿孔
石3	紡錘車	1区	土坑662		3.8	1.4	滑石	
石4	温石	1区	整地層1	(12.2)	7.8	2.5	滑石	羽釜を再加工
石5	温石	1区	整地層1	(7.5)	(3.8)	3.0	滑石	羽釜を再加工
石6	温石	1区	溝245	17.3	6.3	1.6	滑石	
石7	ミニチュア羽釜	1区	土坑184		4.1	2.1	滑石	
石8	羽釜	1区	井戸555			(7.5)	滑石	
石9	羽釜	1区	溝417			(5.3)	滑石	
石10	羽釜	1区	土坑73			(4.9)	滑石	
石11	羽釜	1区	土坑320			(6.0)	滑石	
石12	羽釜	2区	整地層1			(9.3)	滑石	
石13	羽釜	1区	井戸27		24.6	(5.3)	滑石	
石14	羽釜	1区	土坑764		20.2	(3.8)	滑石	
石15	羽釜	1区	土坑576		40.2	(14.8)	滑石	
骨1	不明筒形製品	1区	井戸78	(14.1)	1.6	0.3	ニホンジカ骨	柄部との境目で折損、本体部両面に舟形の窪み、全体に擦痕

# 圖 版



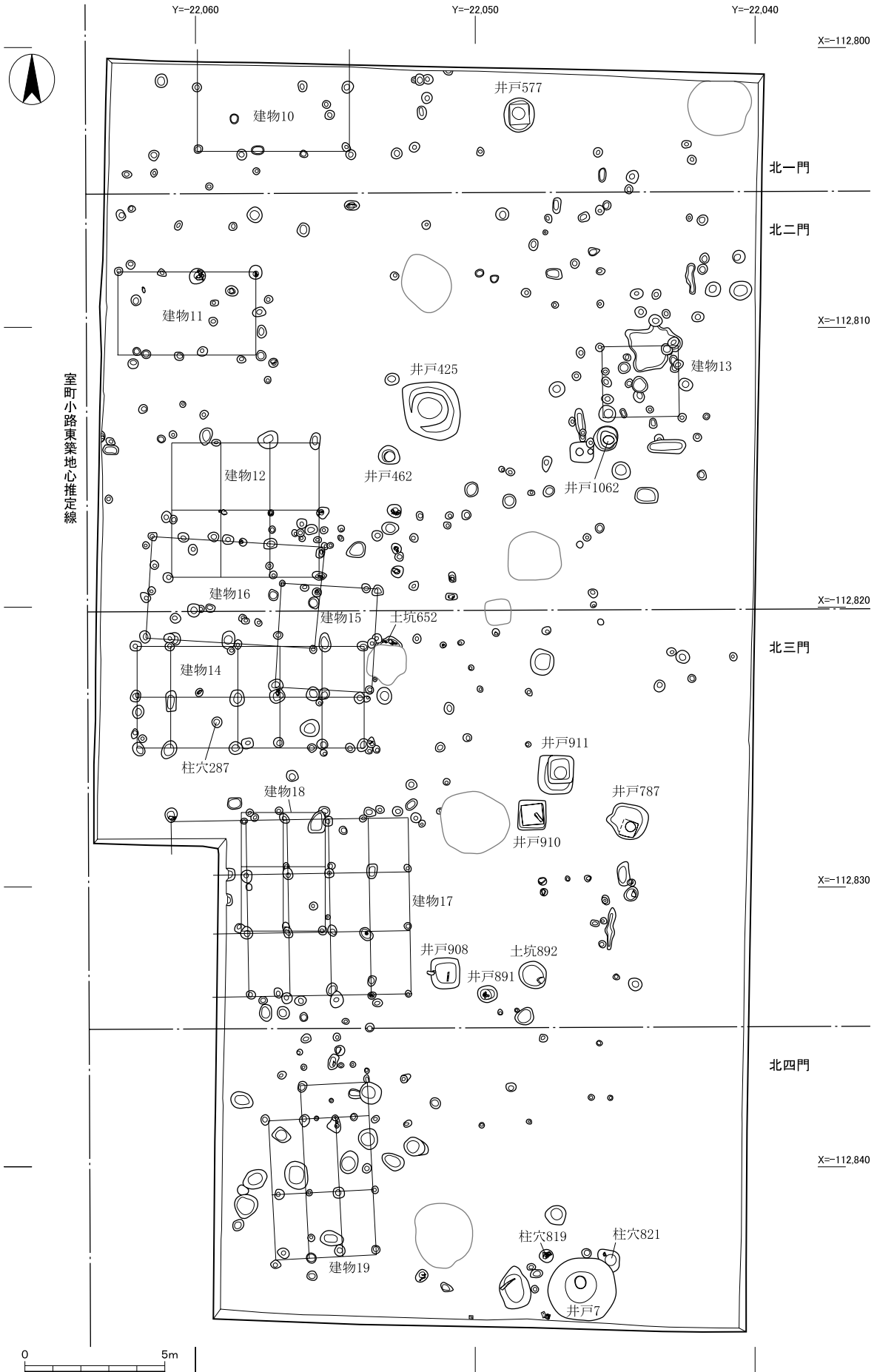


1区 第4面遺構平面図 (1 : 200)

図版2 遺構

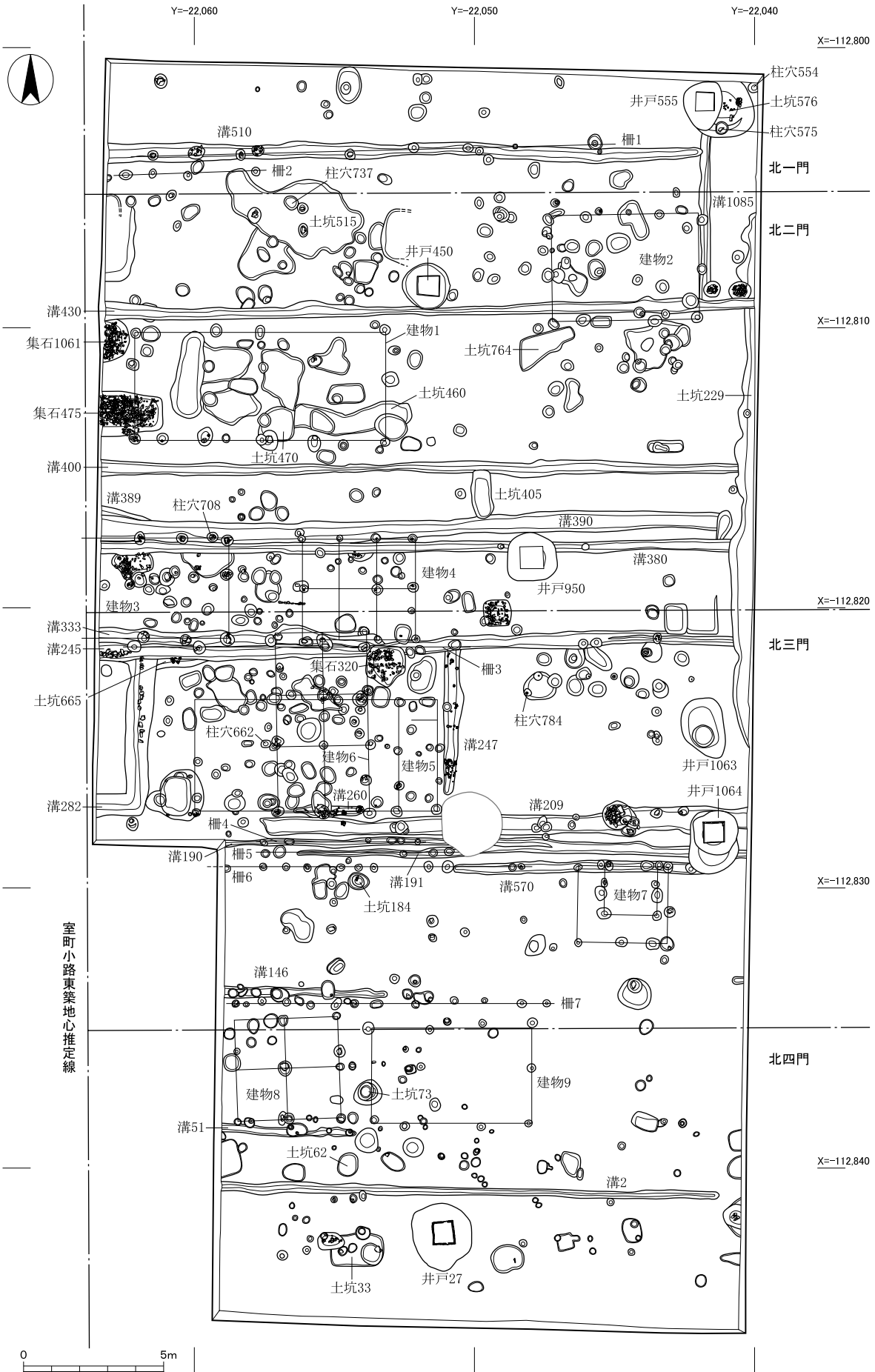


1区 第3面遺構平面図 (1:200)



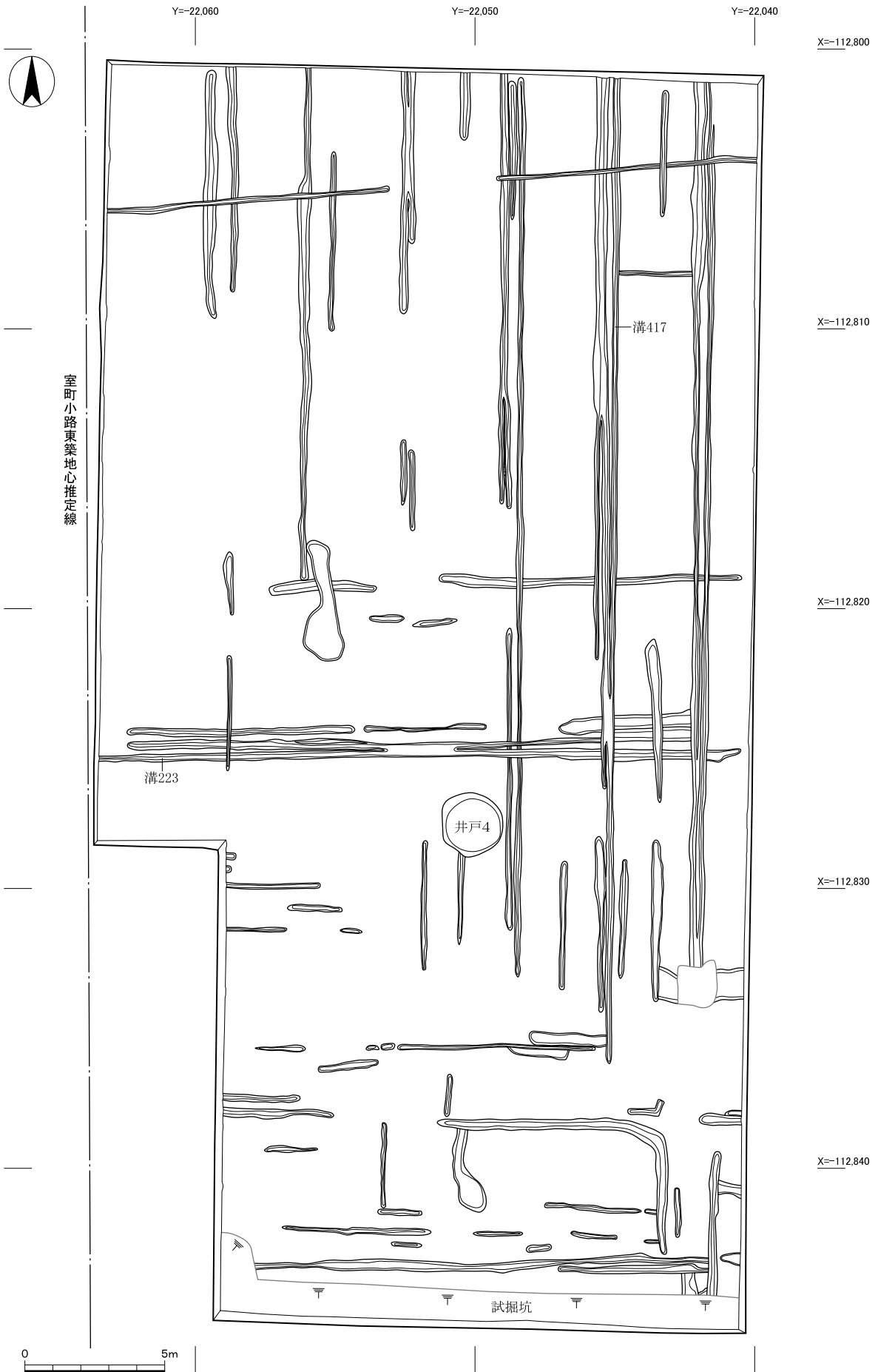
1区 第2面遺構平面図 (1 : 200)

図版 4  
遺構



1区 第1 - 2面遺構平面図 (1 : 200)

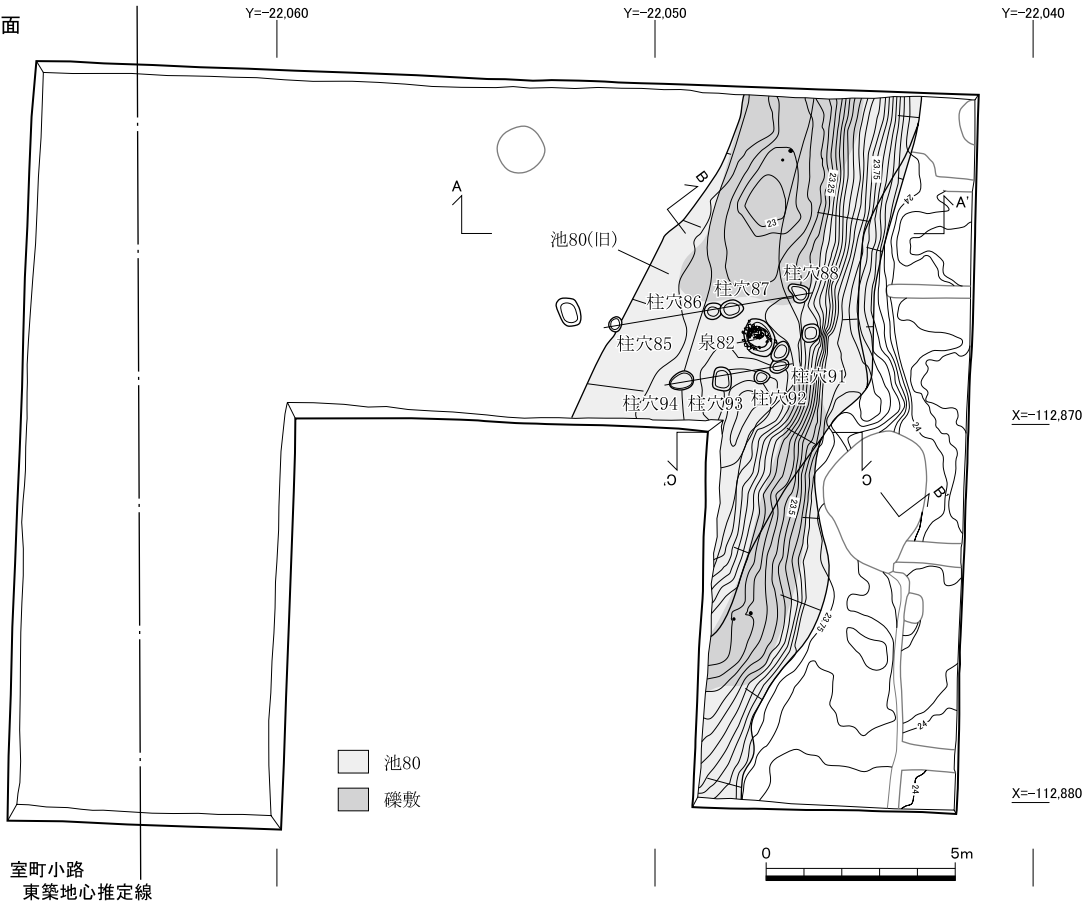




1区 第1-1面遺構平面図 (1:200)

図版6  
遺構

第4-2面

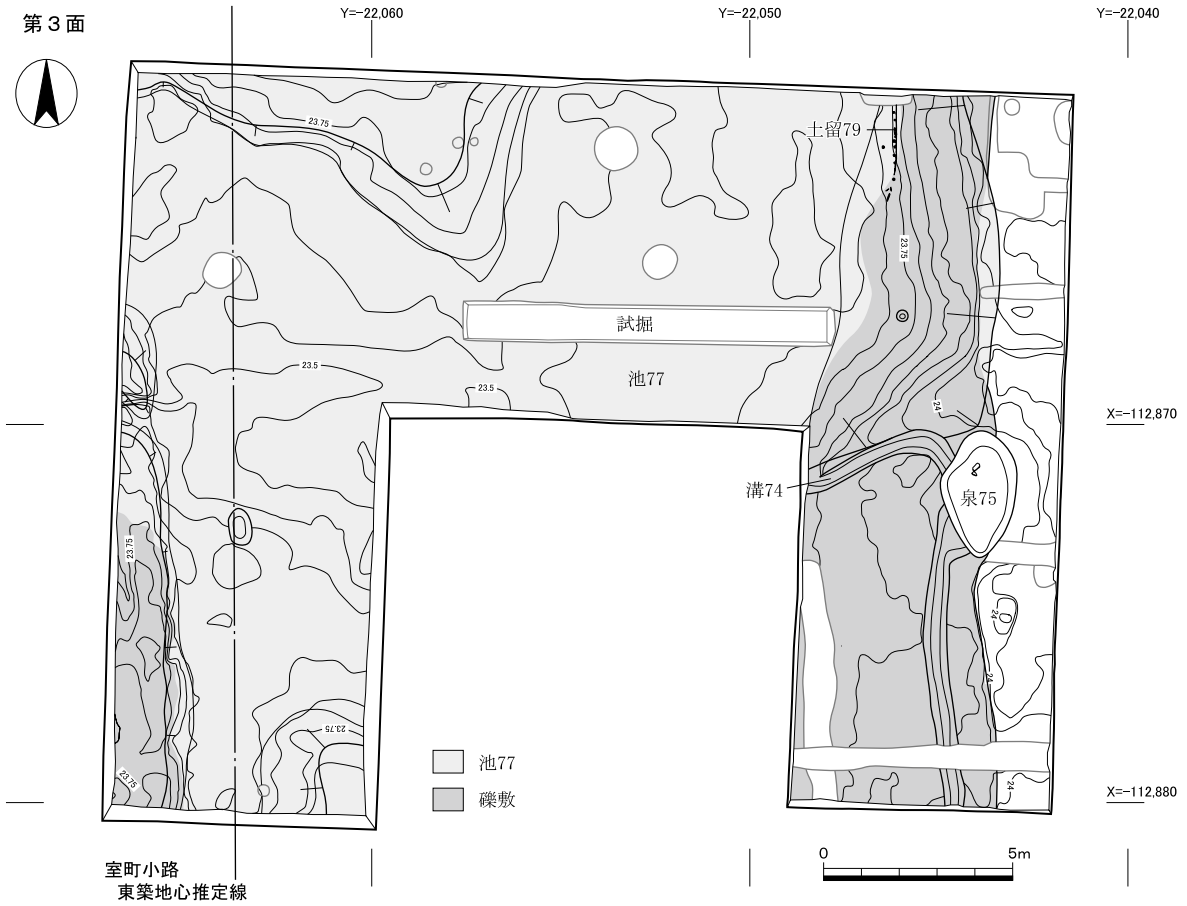


第4-1面

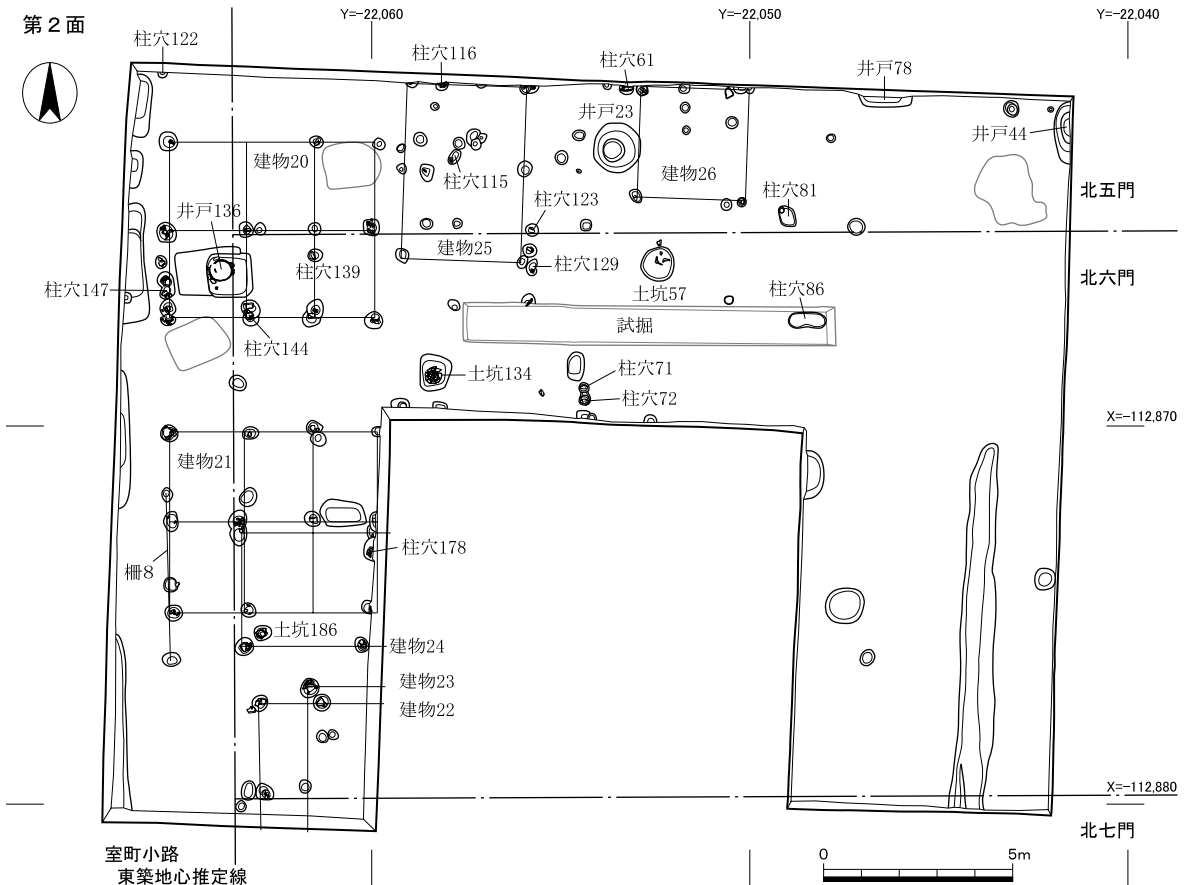


2区 第4-2・4-1面遺構平面図 (1:200)

第3面

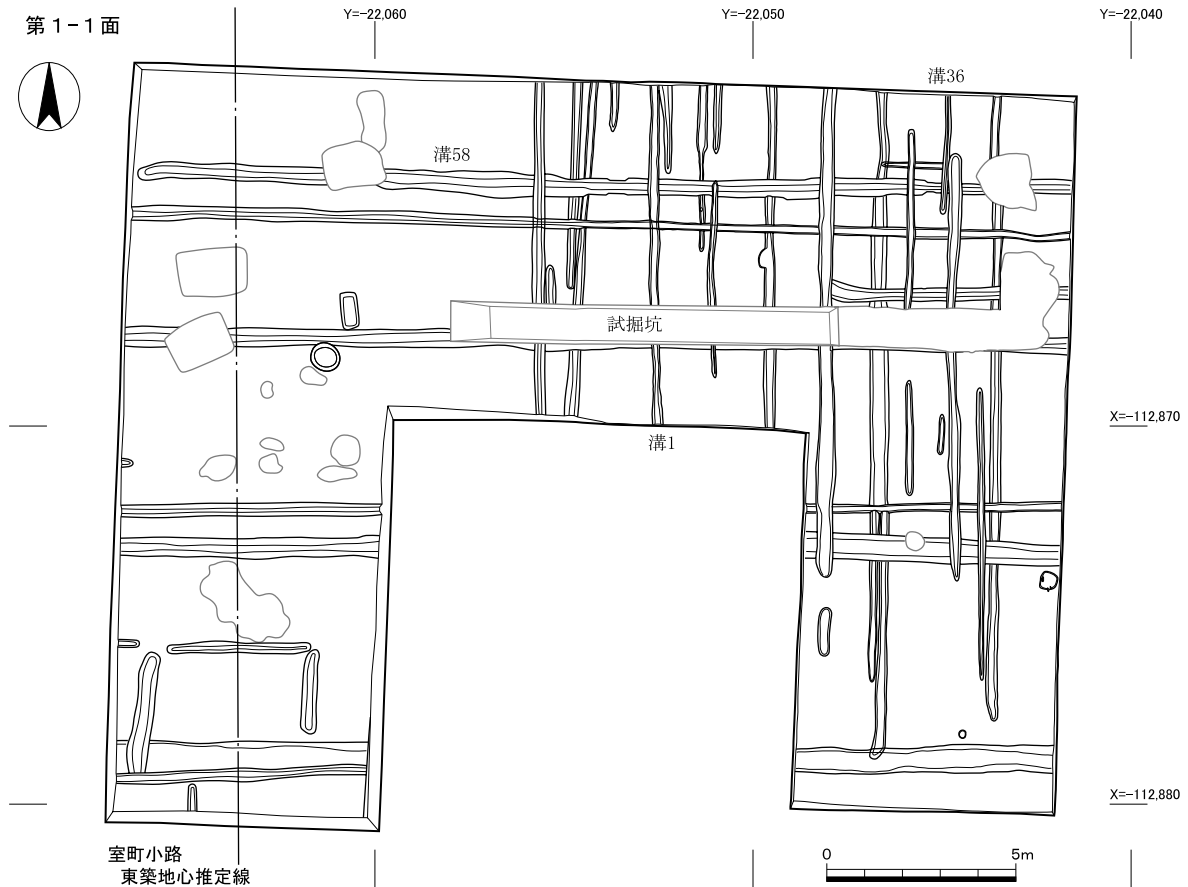
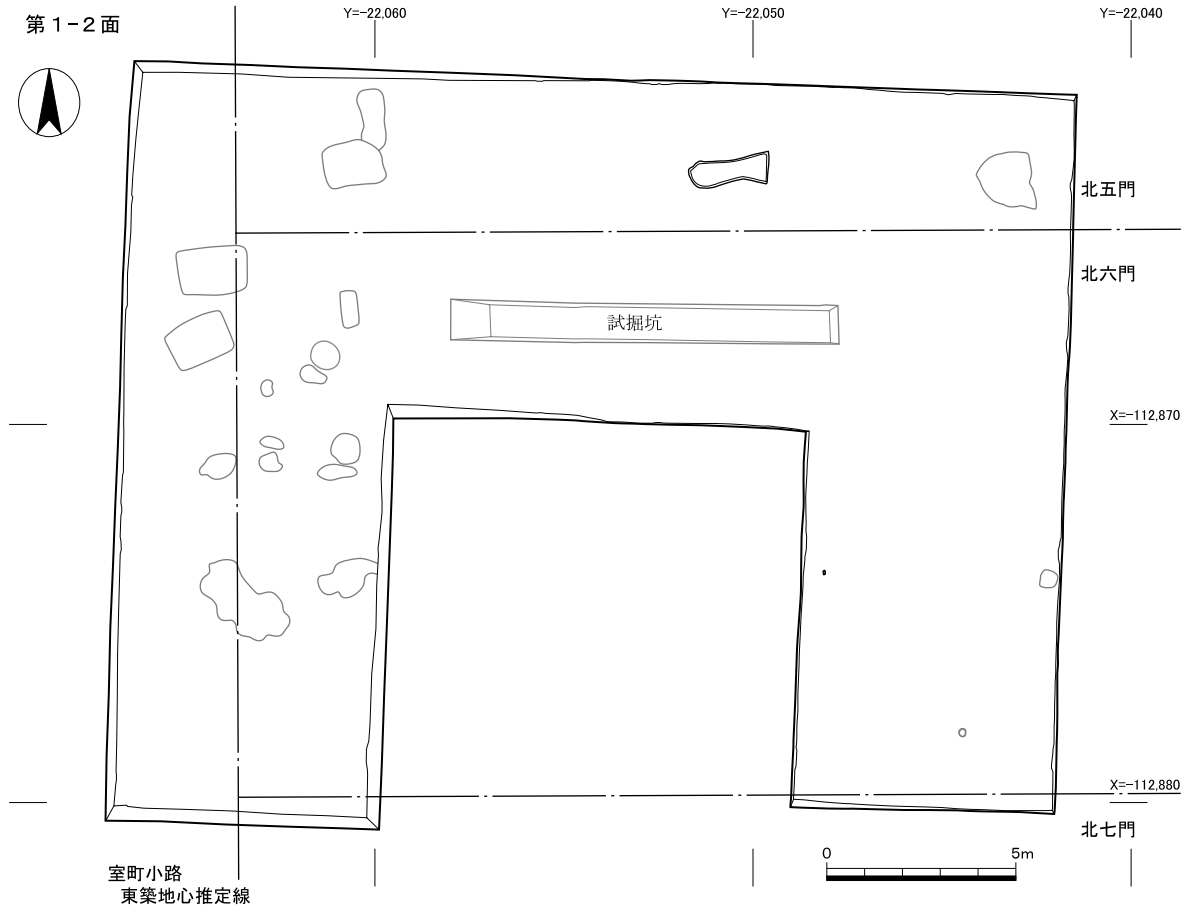


第2面



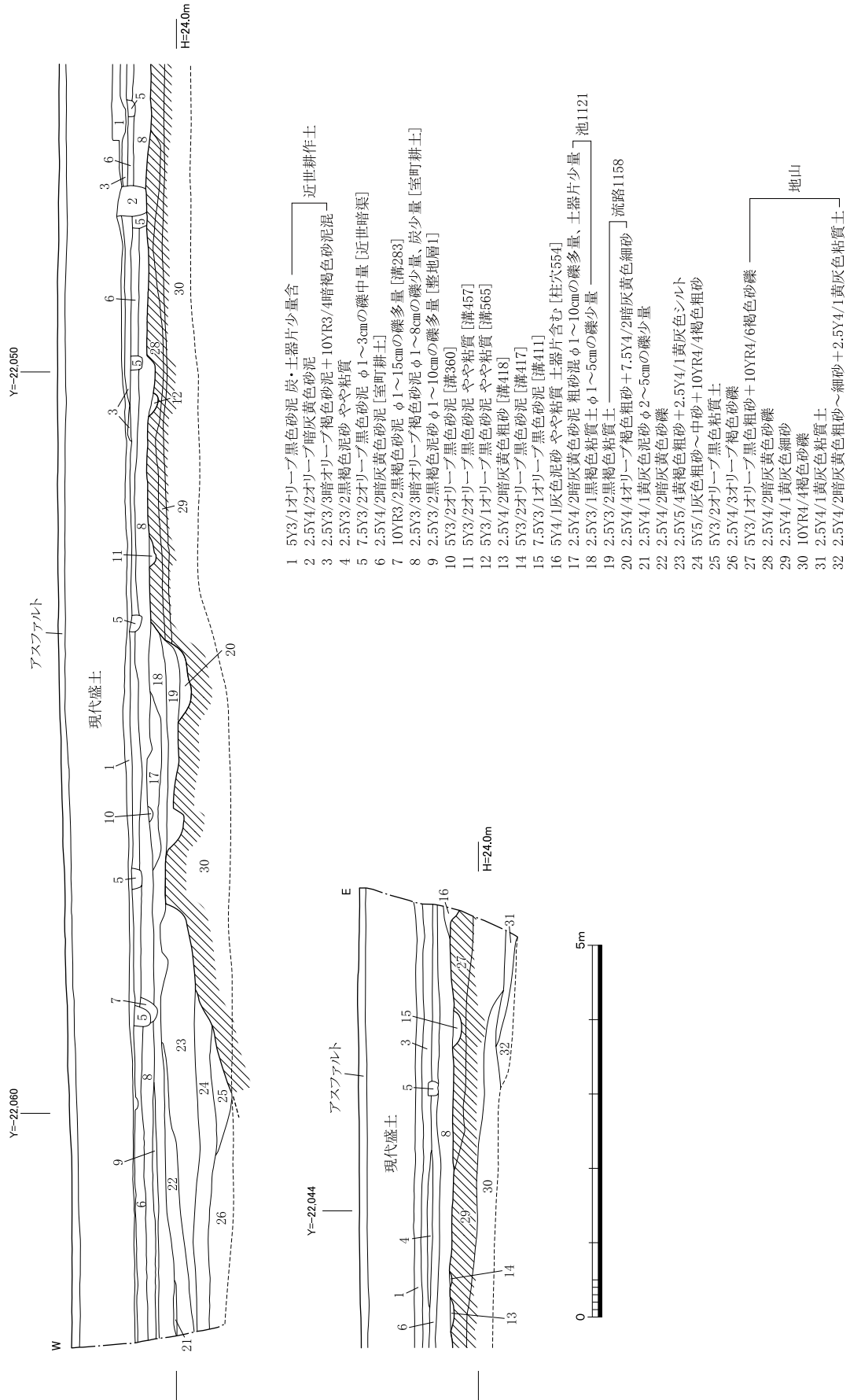
2区 第3・2面遺構平面図 (1:200)

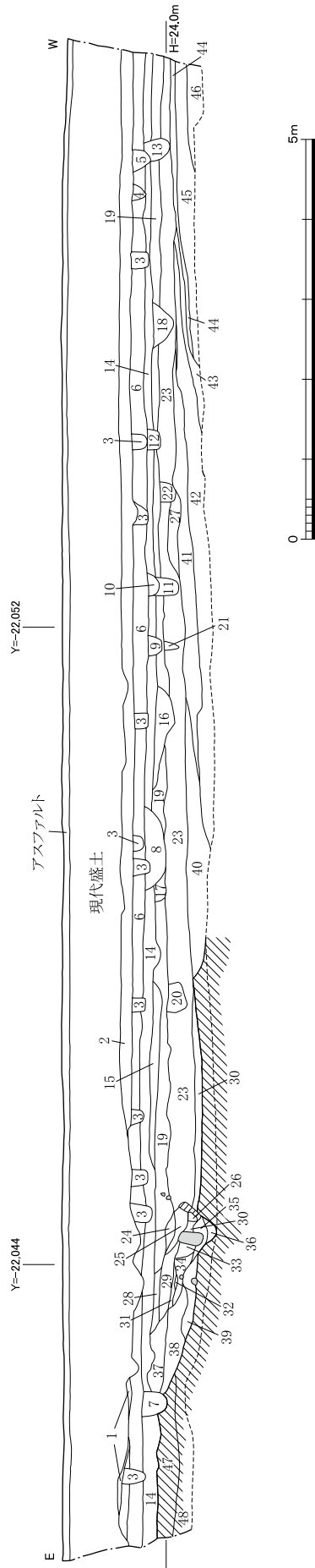
図版 8  
遺構



2区 第 1-2・1-1 面遺構平面図 (1:200)

1区北壁断面図(1:80)



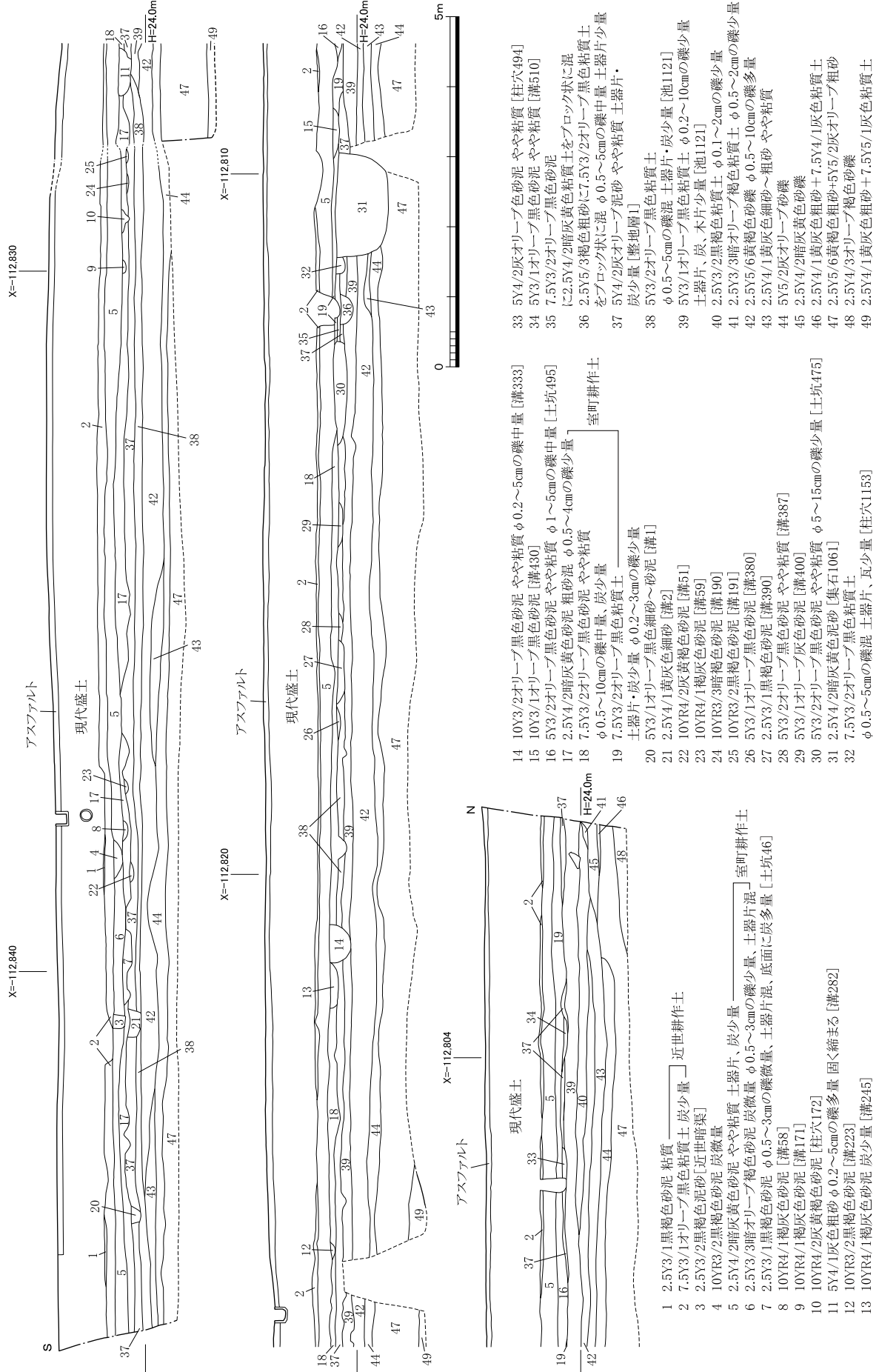


- 1 2.5Y3/1黒褐色砂泥 粘質 近世耕作土
- 2 2.5Y3/2黒褐色砂泥 やや粘質
- 3 2.5Y3/2黒褐色砂泥 φ1~8cm礫少量 [江世暗渠]
- 4 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ2~5cmの礫混
- 5 10YR3/2黒褐色砂泥 φ1~2cmの礫混
- 6 2.5Y4/1黄褐色砂泥 [室町耕作土]
- 7 2.5Y3/2黒褐色粘質土 粗砂混
- 8 2.5Y3/2黒褐色砂泥 φ1~4cmの礫混 炭少量
- 9 5Y4/1灰色砂泥 φ~3cmの礫混
- 10 5Y3/2オリーブ黒色細砂 φ~8cmの礫混
- 11 5Y3/1オリーブ黒色細砂 φ~8cmの礫混
- 12 2.5Y4/1黄褐色砂泥 炭混
- 13 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 粗砂混
- 14 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 粗砂混 φ0.5~4cmの礫少量 [室町耕作土]
- 15 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 φ2~12cmの礫少量
- 16 2.5Y4/1黄褐色砂泥 炭少量 酸化鉄少量
- 17 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 粗砂混

- 18 2.5Y3/2黒褐色砂泥 炭少量
- 19 5Y4/1灰色砂泥~細砂 [整地層]
- 20 5Y4/1灰色砂泥 粘質+2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 21 2.5Y3/1黒褐色砂泥 炭微量
- 22 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
- 23 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 24 7.5YR3/2黒褐色砂泥 粘質
- 25 2.5Y3/2黒褐色粘質土
- 26 2.5Y3/1黒褐色粘質土 砂混
- 27 2.5Y3/2黒褐色砂泥+2.5Y5/3黄褐色砂
- 28 2.5Y3/2黒褐色砂泥 炭微量
- 29 2.5Y4/1黄褐色砂泥 粘質 粗砂混
- 30 7.5Y4/1灰色粘質土 [池1160]
- 31 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土
- 32 5Y4/1灰色砂泥
- 33 2.5Y3/1黒褐色粘質土 粗砂混

- 34 5Y3/1オリーブ黒色粘質土
- 35 2.5Y4/1黄褐色砂泥 やや粘質
- 36 5Y3/1オリーブ黒色粘質土
- 37 2.5Y3/1黒褐色砂泥
- 38 7.5Y4/1灰色粘質土
- 39 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂+10Y4/1灰色粘質土 砂混
- 40 2.5Y4/1黄褐色粗砂+2.5Y3/1黒褐色粘質土 砂混
- 41 2.5Y6/2灰黄色微砂
- 42 2.5Y5/2暗灰黄色砂礫
- 43 5Y5/2灰オリーブ色微砂
- 44 5Y5/1灰色砂礫
- 45 2.5Y5/1黄褐色微砂
- 46 5Y5/1灰色砂礫
- 47 2.5Y5/1黄褐色粗砂
- 48 2.5Y4/1黄褐色粗砂+2.5Y3/1黒褐色粘質土 砂混

1区 南壁断面図 (1:80)



1区 西壁断面図 (1 : 80)

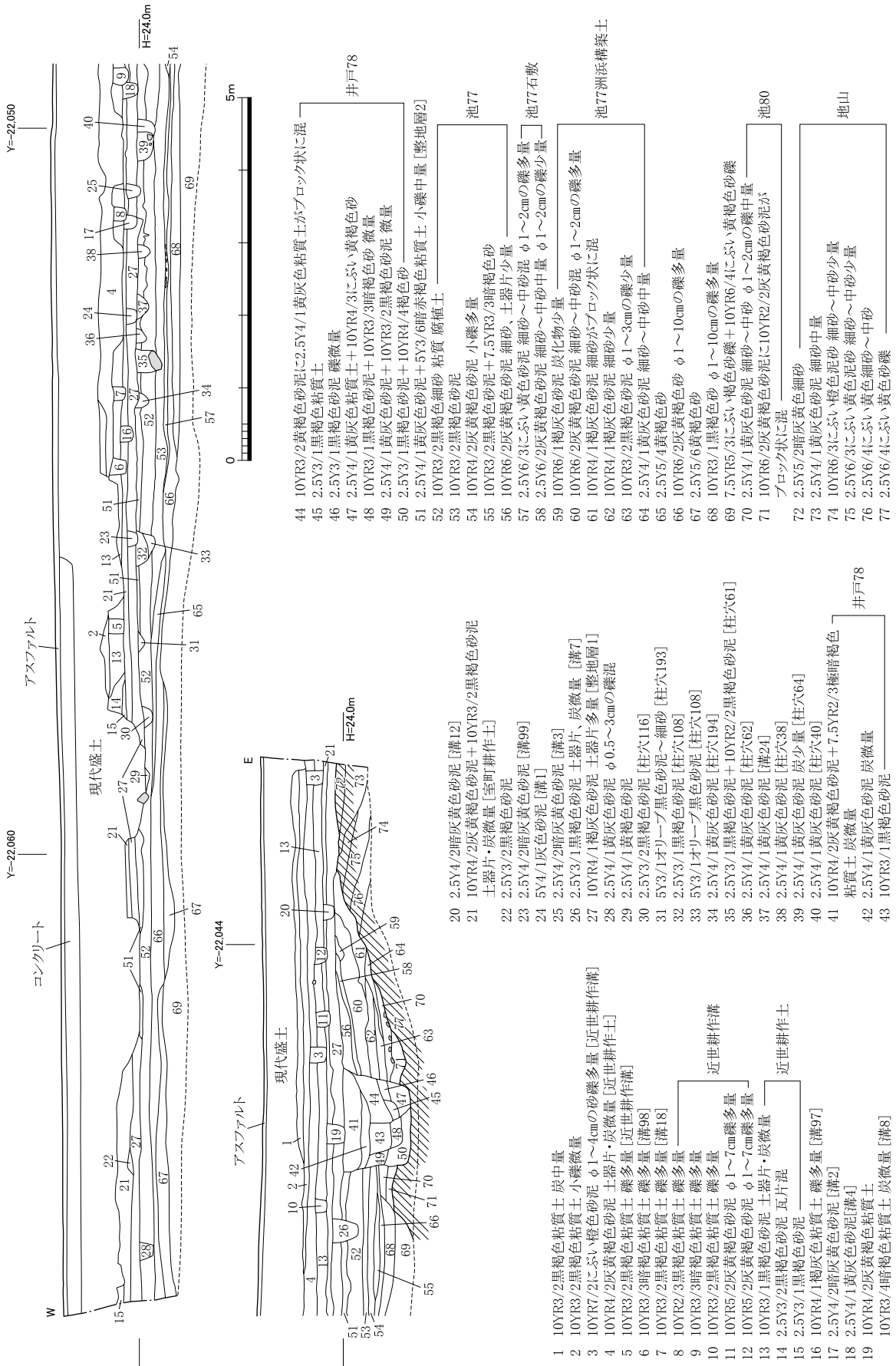
- 1 2.5Y3/1黒褐色砂泥 粘質
- 2 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土 炭少量
- 3 2.5Y3/2黒褐色砂泥 [近世暗渠]
- 4 10YR3/2黒褐色砂泥 炭微量
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 やや粘質 土器片、炭少量
- 6 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 炭微量 φ0.5~3cmの礫少量、土器片混
- 7 2.5Y3/1黒褐色砂泥 φ0.5~3cmの礫微量、土器片混、底面に炭多量
- 8 10YR4/1褐灰色砂泥 [溝58]
- 9 10YR4/1褐灰色砂泥 [溝171]
- 10 10YR4/2灰黄褐色砂泥 [柱穴1172]
- 11 5Y4/1灰色粗砂 φ0.2~5cmの礫多量 固く締まる [溝282]
- 12 10YR3/2黒褐色砂泥 [溝223]
- 13 10YR4/1褐灰色砂泥 炭少量 [溝245]

- 14 10Y3/2オリーブ黒色砂泥 やや粘質 φ0.2~5cmの礫中量 [溝333]
- 15 10Y3/1オリーブ黒色砂泥 [溝430]
- 16 5Y3/2オリーブ黒色砂泥 やや粘質 φ1~5cmの礫中量 [土坑495]
- 17 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 粗砂混 φ0.5~4cmの礫少量
- 18 7.5Y3/2オリーブ黒色砂泥 やや粘質 φ0.5~10cmの礫中量、炭少量
- 19 7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土 土器片、炭少量 [隆地層1]
- 20 5Y3/1オリーブ黒色細砂~砂泥 [溝]
- 21 2.5Y4/1黄灰色細砂 [溝2]
- 22 10YR4/2灰黄褐色砂泥 [溝51]
- 23 10YR4/1褐灰色砂泥 [溝59]
- 24 10YR3/3暗褐色砂泥 [溝190]
- 25 10YR3/2黒褐色砂泥 [溝191]
- 26 5Y3/1オリーブ黒色砂泥 [溝380]
- 27 2.5Y3/1黒褐色砂泥 [溝390]
- 28 5Y3/2オリーブ黒色砂泥 やや粘質 [溝387]
- 29 5Y3/1オリーブ灰色砂泥 [溝400]
- 30 5Y3/2オリーブ黒色砂泥 やや粘質 φ5~15cmの礫少量 [土坑475]
- 31 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 [集石1061]
- 32 7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土 φ0.5~5cmの礫混 土器片、瓦少量 [柱穴1153]

- 33 5Y4/2灰オリーブ色砂泥 やや粘質 [柱穴494]
- 34 5Y3/1オリーブ黒色砂泥 やや粘質 [溝510]
- 35 7.5Y3/2オリーブ黒色砂泥 に2.5Y4/2暗灰黄色粘質土をブロック状に混
- 36 2.5Y5/3褐色粗砂に7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土をブロック状に混 φ0.5~5cmの礫中量、土器片少量
- 37 5Y4/2灰オリーブ泥砂 やや粘質 土器片、炭少量 [隆地層1]
- 38 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 φ0.5~5cmの礫混 土器片、炭少量 [池1121]
- 39 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 φ0.2~10cmの礫少量 土器片、炭、木片少量 [池1121]
- 40 2.5Y3/2黒褐色粘質土 φ0.1~2cmの礫少量
- 41 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 φ0.5~2cmの礫少量
- 42 2.5Y5/6黄褐色砂泥 φ0.5~10cmの礫多量
- 43 2.5Y4/1黄灰色細砂~粗砂 やや粘質
- 44 5Y3/2オリーブ砂泥
- 45 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
- 46 2.5Y4/1黄灰色粗砂+7.5Y4/1灰色粘質土
- 47 2.5Y5/6黄褐色粗砂+5Y5/2灰オリーブ粗砂
- 48 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 49 2.5Y4/1黄灰色粗砂+7.5Y5/1灰色粘質土

アスファルト X=112,804

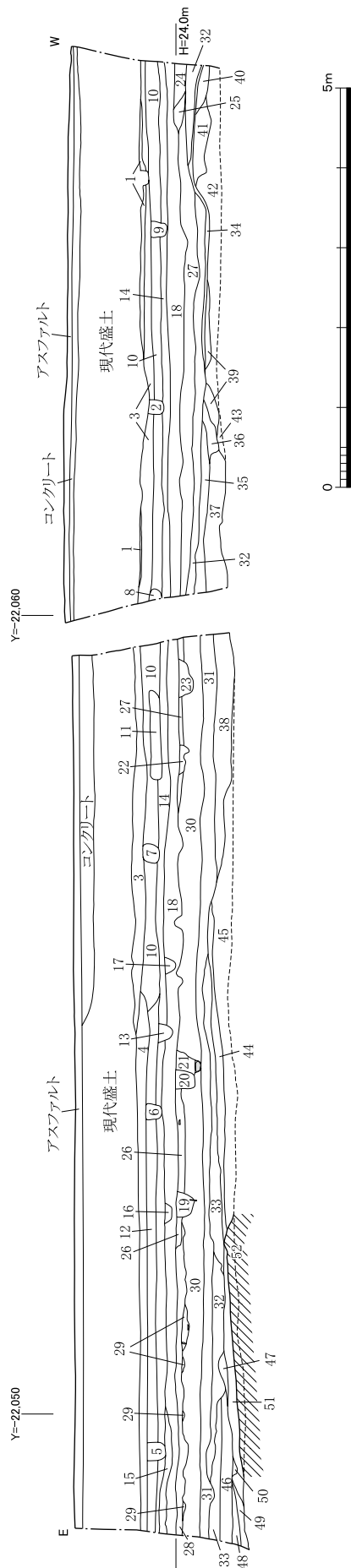
0 5m



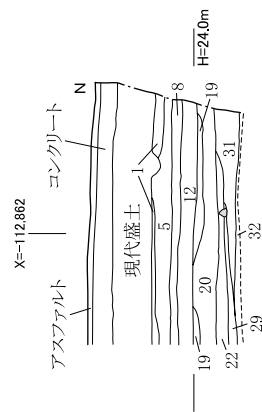
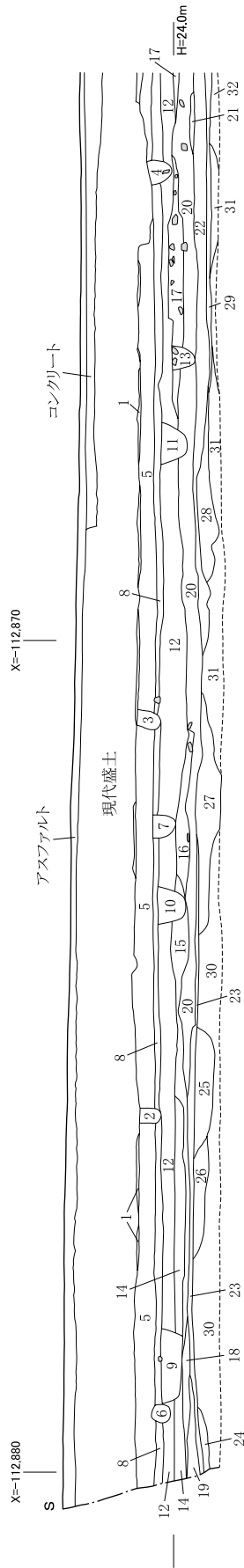
2区北壁断面図 (1:80)



2区南壁断面図 (1:80)

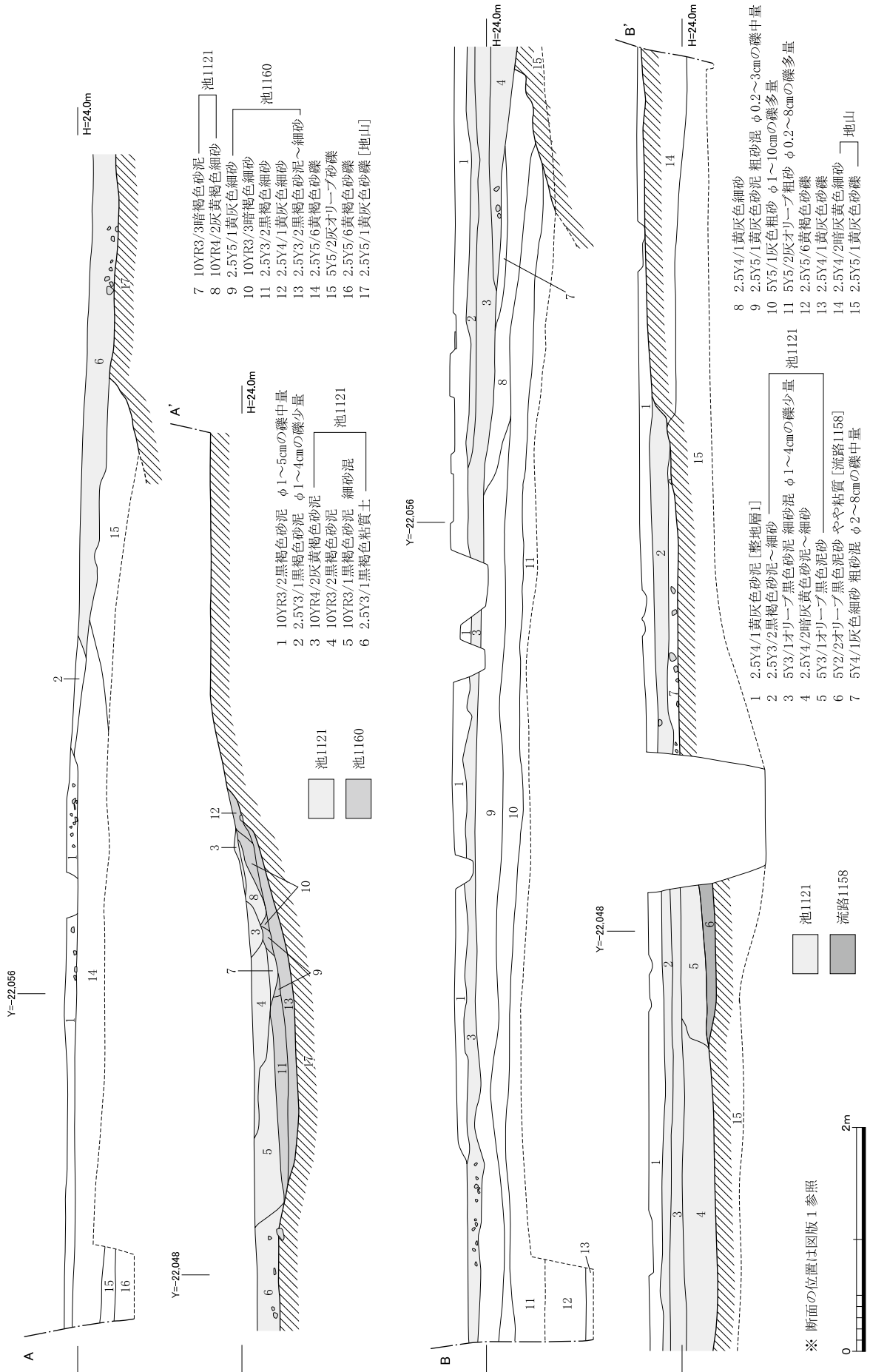


- |   |  |   |
|---|--|---|
| <p>1 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土 炭少量</p> <p>2 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土 φ1~5cmの礫中量</p> <p>3 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 土器片・炭少量</p> <p>4 10Y2/1黒色粘質土</p> <p>5 2.5Y4/1黄灰色砂泥 φ1~5cmの礫多量</p> <p>6 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 φ1~5cmの礫多量</p> <p>7 7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土 φ1~8cmの礫多量</p> <p>8 7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土 φ1~5cmの礫中量・土器片少量</p> <p>9 10Y3/2オリーブ黒色粘質土 φ1~10cmの礫中量・土器片少量</p> <p>10 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 土器片・炭少量</p> <p>11 2.5Y3/2黒褐色粘質土 φ1~10cmの礫多量 土器片少量</p> <p>12 7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土 φ1~5cmの礫多量 土器片・炭少量</p> <p>13 2.5Y4/1黄灰色砂泥 [近世耕作溝]</p> <p>14 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 やや粘質 土器片少量</p> <p>15 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥</p> <p>16 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 中砂少量</p> <p>17 2.5Y3/2黒褐色砂泥</p> | <p>18 2.5Y3/1黒褐色砂泥 粘質 [整地層1]</p> <p>19 2.5Y3/1黒褐色砂泥 細砂少量</p> <p>20 2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘質土</p> <p>21 5GY3/1暗オリーブ灰色粘質土</p> <p>22 7.5Y4/1灰色粘質土 土器片中量、炭少量</p> <p>23 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 φ0.5~1cmの礫少量、土器片少量</p> <p>24 2.5Y3/2黒褐色砂泥</p> <p>25 2.5Y4/2オリーブ褐色粗砂 + 7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土</p> <p>26 2.5Y3/2黒褐色砂泥 細砂~中砂少量</p> <p>27 2.5Y3/2黒褐色砂泥 粗砂~中砂少量</p> <p>28 2.5Y3/2黒褐色砂泥 細砂~中砂少量</p> <p>29 2.5Y3/2黒褐色砂泥 有機物多量 [平安後期溝]</p> <p>30 2.5Y3/2黒褐色砂泥 細砂~中砂少量</p> <p>31 2.5Y4/1黄灰色砂泥 細砂中量</p> <p>32 5Y4/1灰色砂泥 φ~3cmの礫混</p> <p>33 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥</p> <p>34 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ1~15cmの礫多量</p> <p>35 5Y4/1灰色粘質土 砂混</p> | <p>36 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 + 2.5Y4/1黄灰色粘質土</p> <p>37 10YR3/2黒褐色粘質土 砂混 + 5Y4/1灰色細砂を少量</p> <p>38 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 中砂~1cmの礫多量</p> <p>39 10YR4/4褐色砂礫</p> <p>40 2.5Y3/3黄褐色砂礫 φ1~10cmの礫中量</p> <p>41 2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫 + 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 φ~10cmの礫中量</p> <p>42 10YR5/6黄褐色砂礫</p> <p>43 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 中砂~φ1cmの礫を多量</p> <p>44 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 中砂~φ1cmの礫を多量</p> <p>45 2.5Y4/1黄灰色砂礫</p> <p>46 2.5Y3/2黒褐色砂泥</p> <p>47 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 細砂中量</p> <p>48 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 細砂中量</p> <p>49 2.5Y4/1黄灰色砂泥 細砂多量</p> <p>50 2.5Y3/1黒褐色砂泥</p> <p>51 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 細砂~中砂にφ4~10cmの礫混</p> <p>52 2.5Y4/1黄灰色砂礫 [地山]</p> |
|---|--|---|

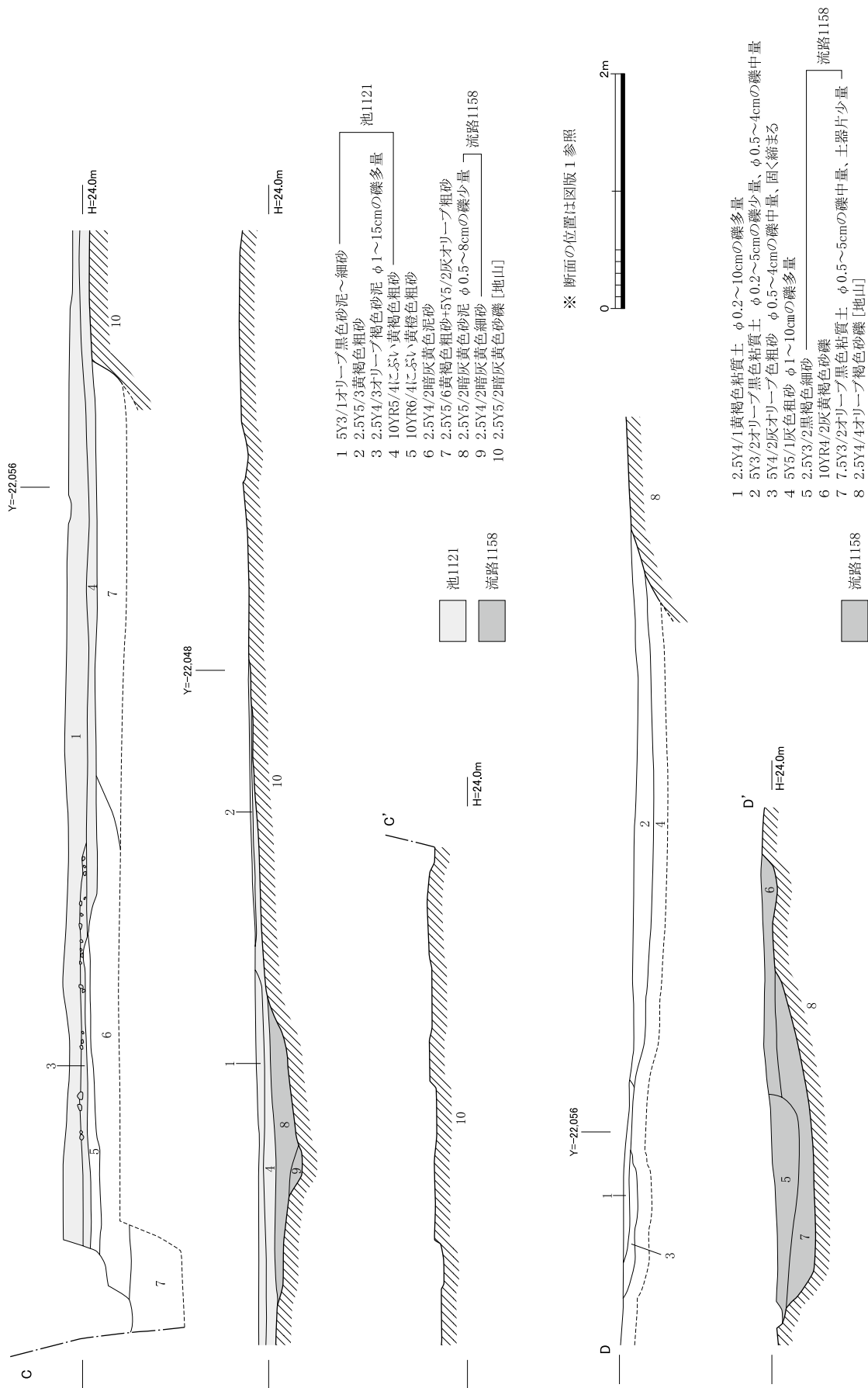


- |   |   |
|---|---|
| <p>1 10YR3/1黒褐色粘砂 やや粘質 [近世耕作土]<br/>         2 2.5Y3/2黒褐色粘質土 φ2~10cmの礫多量<br/>         3 2.5Y3/1黒褐色粘質土 φ2~5cmの礫中量<br/>         4 2.5Y3/2黒褐色粘質土 φ2~10cmの礫多量<br/>         5 2.5Y3/2黒褐色粘質土 φ2~5cmの礫多量<br/>         6 2.5Y4/1黄灰色粘質土 φ3~5cmの礫多量<br/>         7 10YR2/3黒褐色粘質土 φ2~10cmの礫多量<br/>         8 5Y3/1オリーブ黒色砂泥 [室町耕作土]<br/>         9 2.5Y3/1黒褐色砂泥 [溝96]<br/>         10 2.5Y3/1黒褐色砂泥 φ1~10cmの礫中量、土器片少量<br/>         11 2.5Y3/2黒褐色砂泥 [溝60]<br/>         12 10YR4/1褐灰色砂泥 土器片多量 [整地層1]<br/>         13 10YR2/1黒色粘質土 φ2~10cmの礫中量<br/>         14 2.5Y3/1黒褐色砂泥 φ1~5cmの礫少量、土器片・炭少量<br/>         15 10YR3/1黒褐色粘質土 細砂混 φ1~10cmの礫少量、土器片・木片少量<br/>         16 2.5Y4/1黄灰色粗砂 φ1~10cmの礫多量<br/>         17 10YR4/1褐灰色粘質土 φ2~10cmの礫多量</p> | <p>18 2.5Y3/2黒褐色粘質土 φ2~10cmの礫少量、土器片・炭少量<br/>         19 2.5Y3/1黒褐色砂泥 やや粘質 φ2~10cmの礫少量<br/>         20 10YR3/2黒褐色細砂 粘質 腐植土<br/>         21 2.5Y3/1黒褐色砂泥 φ2~10cmの礫少量<br/>         22 2.5Y2/1黒色砂泥 やや粘質 φ2~10cmの礫少量<br/>         23 2.5Y2/1黒色砂泥 やや粘質 φ2~10cmの礫少量<br/>         24 2.5Y5/3黄褐色砂泥 φ2~10cmの礫中量<br/>         25 10YR3/6黄褐色砂泥 + 2.5Y4/1黄褐色粗砂<br/>         26 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥<br/>         27 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 粗砂混<br/>         28 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂 φ2~15cmの礫少量<br/>         29 2.5Y4/1黄灰色粗砂<br/>         30 10YR5/6黄褐色砂泥<br/>         31 10YR6/2灰黄褐色砂泥<br/>         32 7.5YR5/3こぶい 褐色砂泥 + 10YR6/4こぶい 黄褐色砂泥</p> |
|---|---|

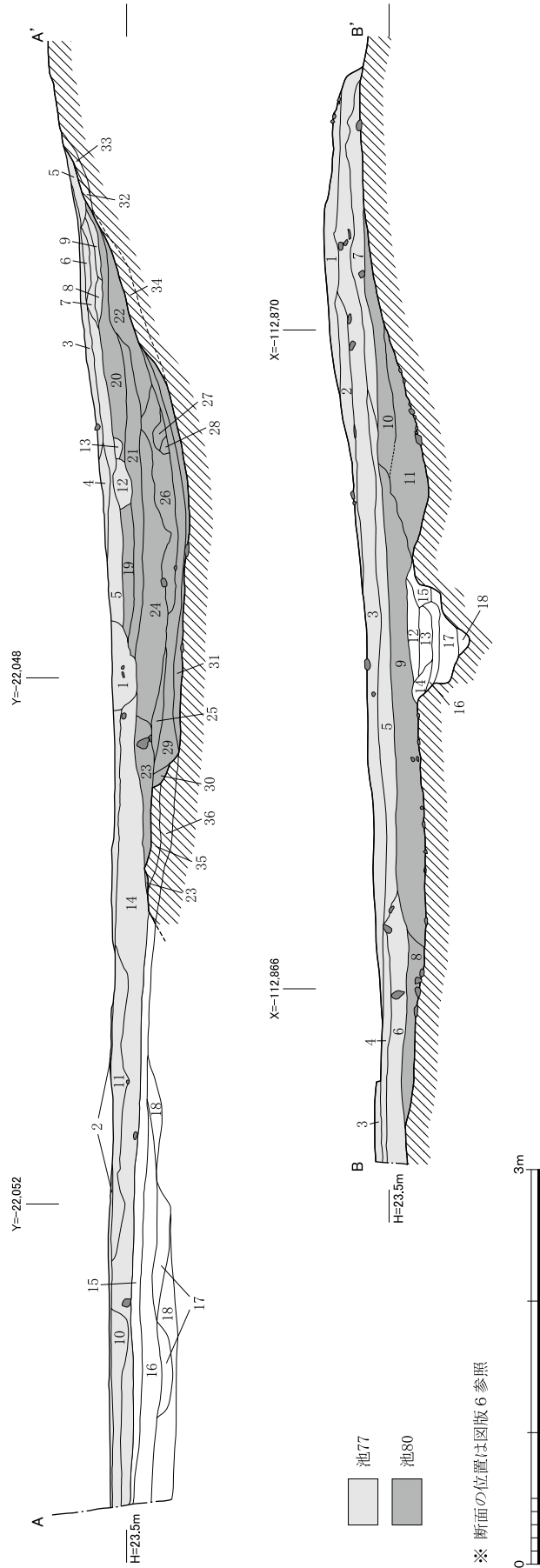
2区 西壁断面図 (1 : 80)



1区 流路1158、池1121・1160断面図 (1:50)



1区 流路1158、池1121断面図 (1 : 50)



2区 池77・80断面図 (1:50)

A-A'

- 1 2.5Y4/1黄灰色砂泥 φ1~4cmの礫少量
- 2 2.5Y3/2黒褐色砂泥 φ1~4cmの礫少量
- 3 10Y4/2灰黄褐色砂泥 細砂 φ1~10cmの礫少量
- 4 2.5Y5/1黄灰色砂泥 φ1~4cmの礫中量
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 細砂少量
- 6 2.5Y5/3黄褐色砂泥 細砂中量
- 7 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 細砂 φ1~10cmの礫混
- 8 2.5Y6/4にぶい黄褐色砂泥 中砂 φ0.2~1cmの礫混
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ1~4cmの礫少量
- 10 2.5Y5/3黄褐色砂泥 砂礫少量 [池77池底の礫敷き]
- 11 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 細砂少量
- 12 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 細砂 φ1~3cmの礫少量
- 13 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 細砂 φ1~10cmの礫少量
- 14 2.5Y5/3黄褐色砂泥 細砂 φ1~5cmの礫少量
- 15 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 中砂 φ1~3cmの礫中量
- 16 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 中砂 φ1~5cmの礫中量
- 17 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 シルト質
- 18 10Y5/3にぶい黄褐色砂泥 細砂 φ1~5cmの礫少量

池77

B-B'

- 1 2.5Y3/2黒褐色砂泥 φ1~4cmの礫少量
- 2 10Y4/2灰黄褐色砂泥 細砂 φ1~10cmの礫少量
- 3 2.5Y5/1黄灰色砂泥 φ1~4cmの礫中量
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 細砂少量
- 5 2.5Y3/2黒褐色砂泥 φ1~3cmの礫少量、土器片・木片少量
- 6 2.5Y5/3黄褐色砂泥 細砂 φ1~10cmの礫混 [底構築土]
- 7 2.5Y3/3黄褐色砂泥 細砂 φ1~10cmの礫混
- 8 5Y7/1灰色粘質土 φ2~10cmの礫少量
- 9 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 φ0.5~10cmの礫少量
- 10 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ0.5~8cmの礫中量
- 11 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土 φ1~10cmの礫中量
- 12 5Y4/1灰色粘質土 φ0.2~3cmの礫少量
- 13 10GY4/1暗緑灰色粘質土 細砂 φ1~10cmの礫少量
- 14 2.5Y5/1黄灰色砂泥 φ0.5~6cmの礫少量
- 15 2.5Y5/3黄褐色砂泥 φ0.5~8cmの礫少量
- 16 N5/0灰色シルト
- 17 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 φ0.5~10cmの礫中量
- 18 2.5Y6/2暗灰黄色粗砂

池80

地山

※ 断面の位置は図版6 参照



1 1区 第4面全景（南東から）



2 1区 池1160（北西から）





1 1区 南壁 (池1121・1160、北西から)



2 1区 第3面全景 (北西から)



1 1区 池1121南端（北西から）



2 1区 池1121石組（北西から）





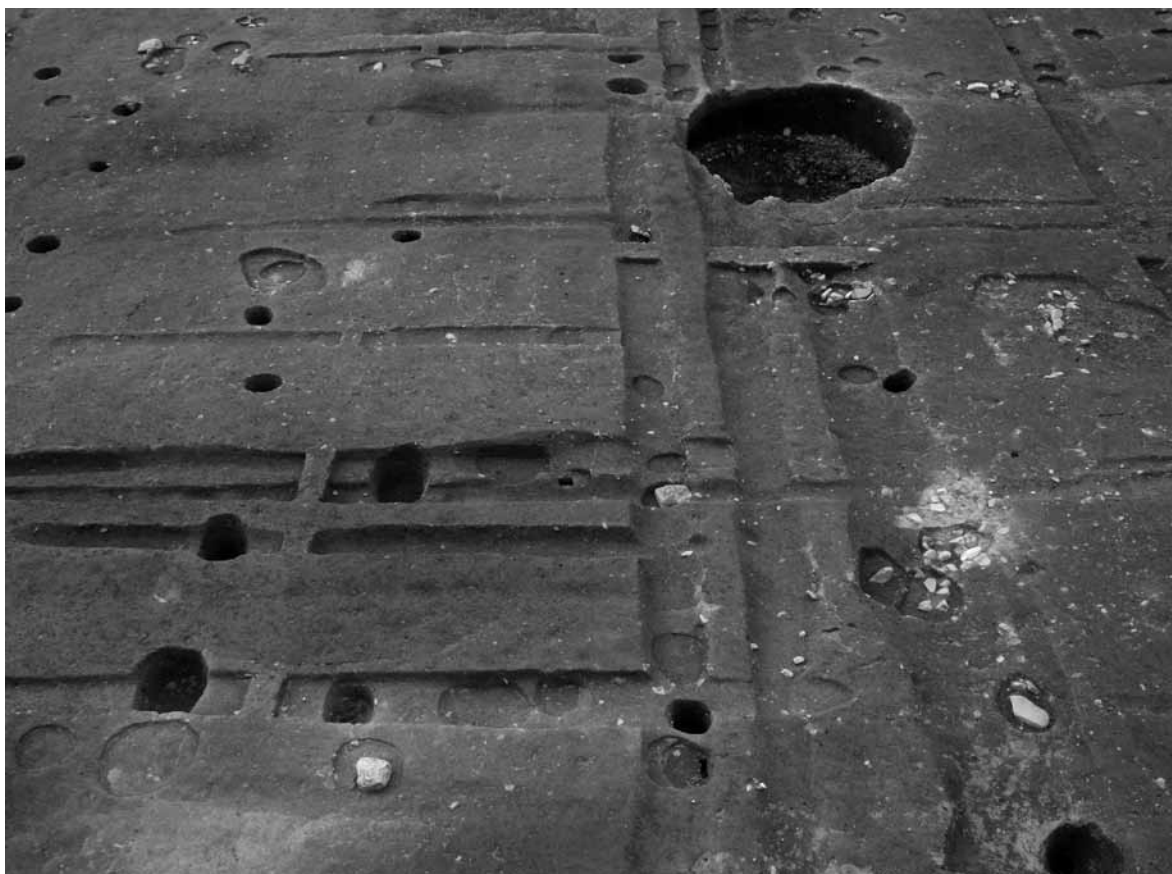
1 1区 建物14～16 (西から)



2 1区 建物17・18 (西から)



1 1区 第1面全景（北から）



2 1区 建物5・6（西から）



1 1区 建物7 (東から)



2 1区 建物8、柵6・7 (西から)





1 1区 土坑999遺物出土状況（南から）



2 1区 柱穴819礎板検出状況（北から）



3 1区 建物8 柱穴56根石検出状況（南から）



4 1区 建物8 柱穴64根石検出状況（南から）



5 1区 建物9 柱穴71礎板検出状況（南から）



6 1区 柵7 柱穴137礎板検出状況（南から）



7 1区 土坑132遺物出土状況（北から）



8 1区 土坑184遺物出土状況（西から）



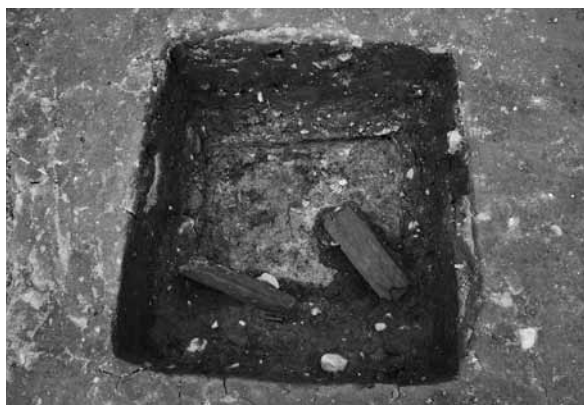
1 1区 井戸7 (南から)



2 1区 井戸891 (北から)



3 1区 井戸462 (南から)



4 1区 井戸910 (南から)



5 1区 井戸950 (南から)



6 1区 井戸555 (東から)



7 1区 井戸1064 (南から)



8 1区 井戸27 (東から)



1 2区 第4面全景東半（北から）



2 2区 池80須恵器出土状況（北西から）



3 2区 池80木簡出土状況（東から）



4 2区 池80木簡出土状況（東から）



5 2区 池80木製品出土状況（東から）





1 2区 第3面全景東半（北から）



2 2区 第3面全景西半（北から）

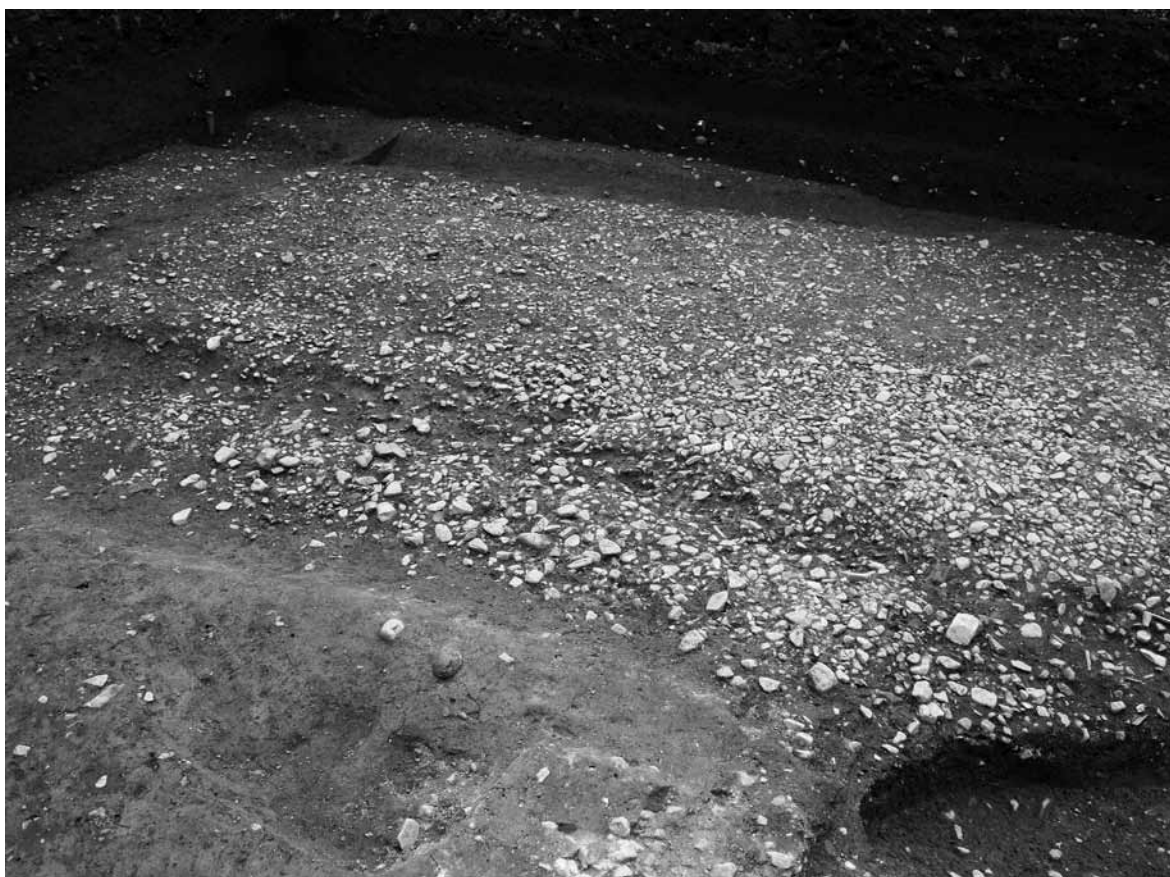


1 2区 池77洲浜東半 (北から)



2 2区 池77洲浜西半 (北東から)





1 2区 池77洲浜南東部（北東から）



2 2区 土留79（南西から）



3 2区 土留79（西から）



4 2区 泉75（北西から）



5 2区 泉75・溝74（北から）



1 2区 第2面全景西半（北から）



2 2区 建物20（東から）



1 2区 建物21 (西から)



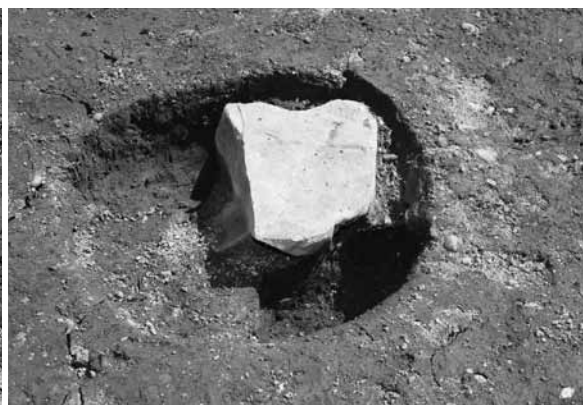
2 2区 建物20柱穴126根石・礎板検出状況 (東から)



3 2区 建物20柱穴189礎板検出状況 (北から)



4 2区 建物21柱穴152柱材検出状況 (北から)

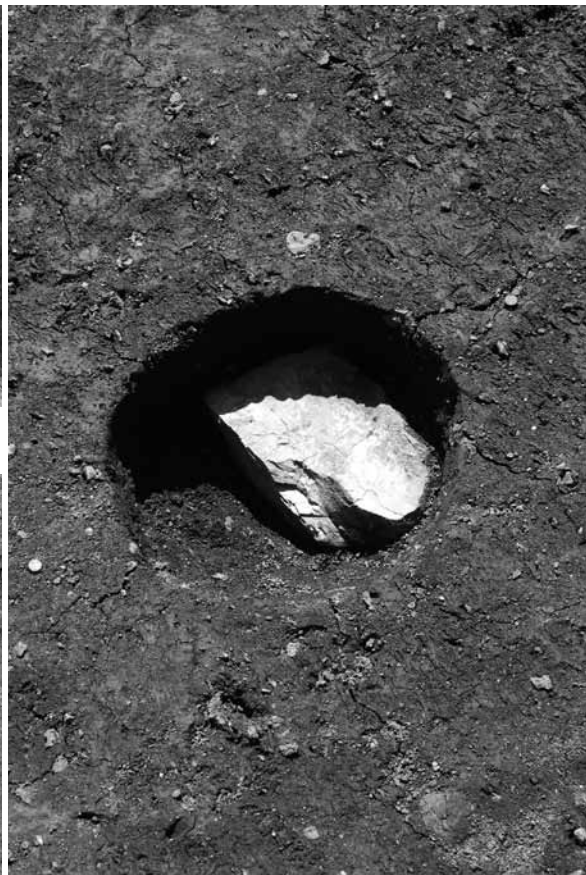


5 2区 建物21柱穴158根石検出状況 (東から)

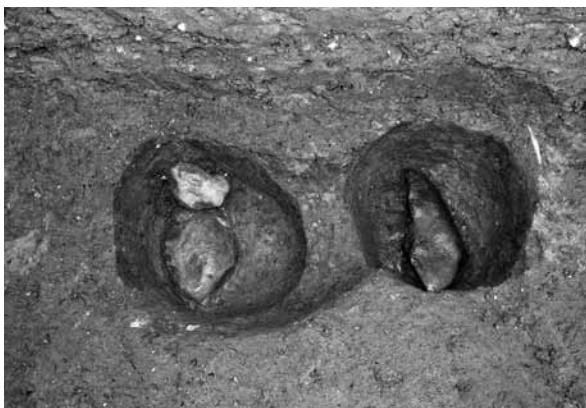




1 2区 建物22柱穴171 礎板検出状況（北から）



3 2区 柱穴139 根石検出状況（北から）



2 2区 柱穴71・72 根石検出状況（南から）



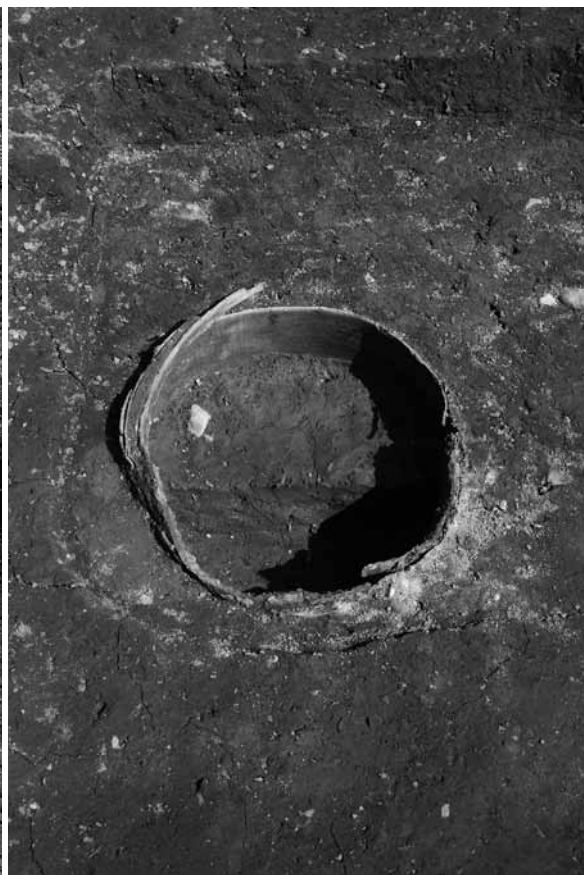
4 2区 柱穴115 礎板検出状況（北東から）



5 2区 柱穴116 礎板検出状況（南西から）



1 2区 柱穴178礎板検出状況（北西から）



2 2区 井戸136（東から）



3 2区 井戸23（東から）



4 2区 土坑186銭貨出土状況（南から）



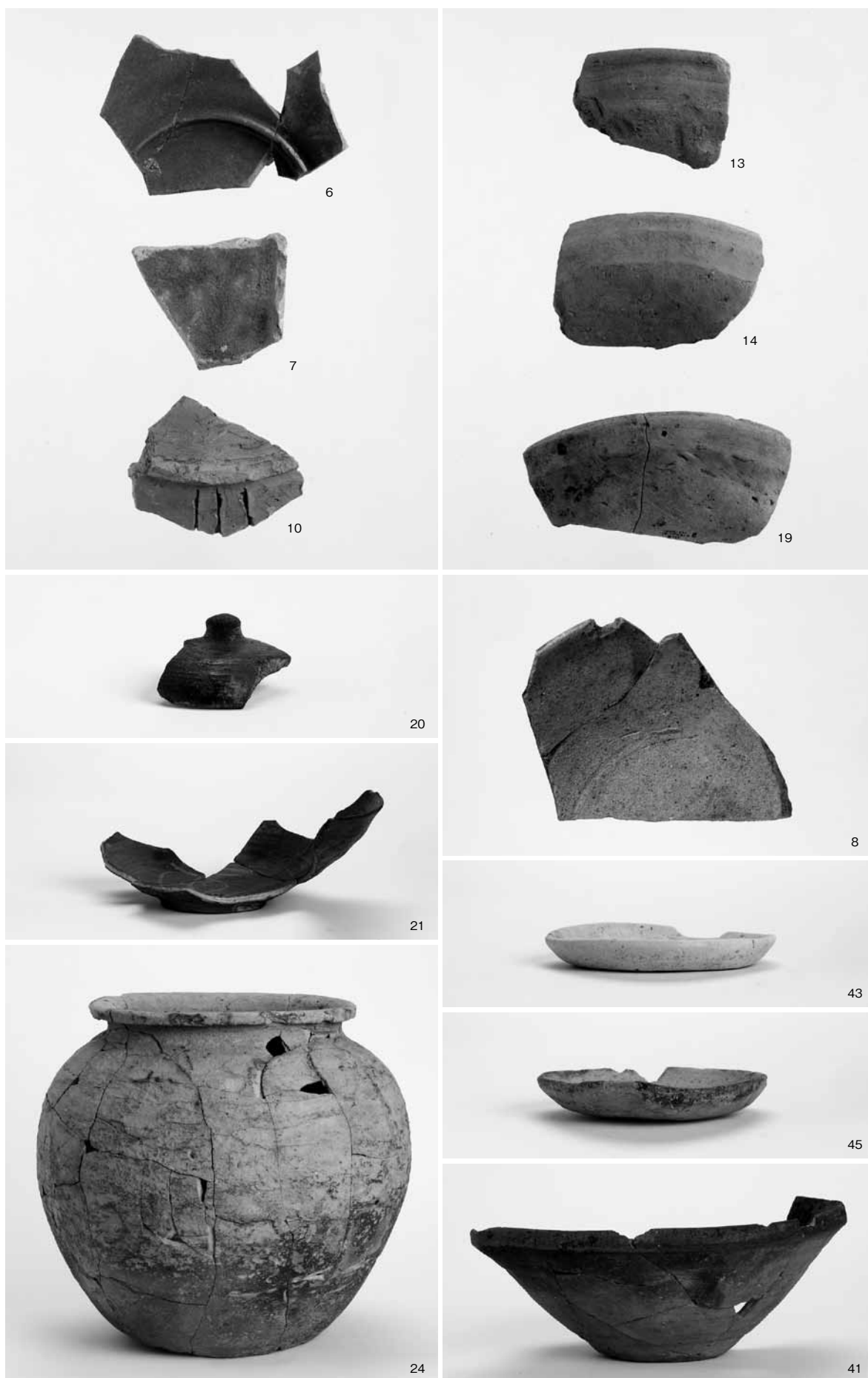
5 2区 土坑134遺物出土状況（北から）



1 2区 第1面全景東半（北東から）



2 2区 第1面全景西半（北東から）



1区流路1158、池1121、土坑999、井戸7・425出土土器類





1区整地層1、建物2・8、井戸27・555・950出土土器類





1区土坑576出土土器類



227



228



229



246



252



435



320



323



325



326



333



334



336

1区土坑460・515・652、溝333、2区池80出土土器類



2区池77、泉75、井戸78、土坑134、整地層1・2出土土器類



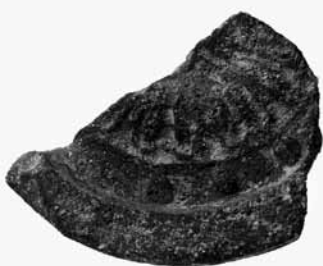
瓦1



瓦2



瓦4



瓦3



瓦6



瓦5



瓦8



瓦7



瓦11



瓦9



瓦10



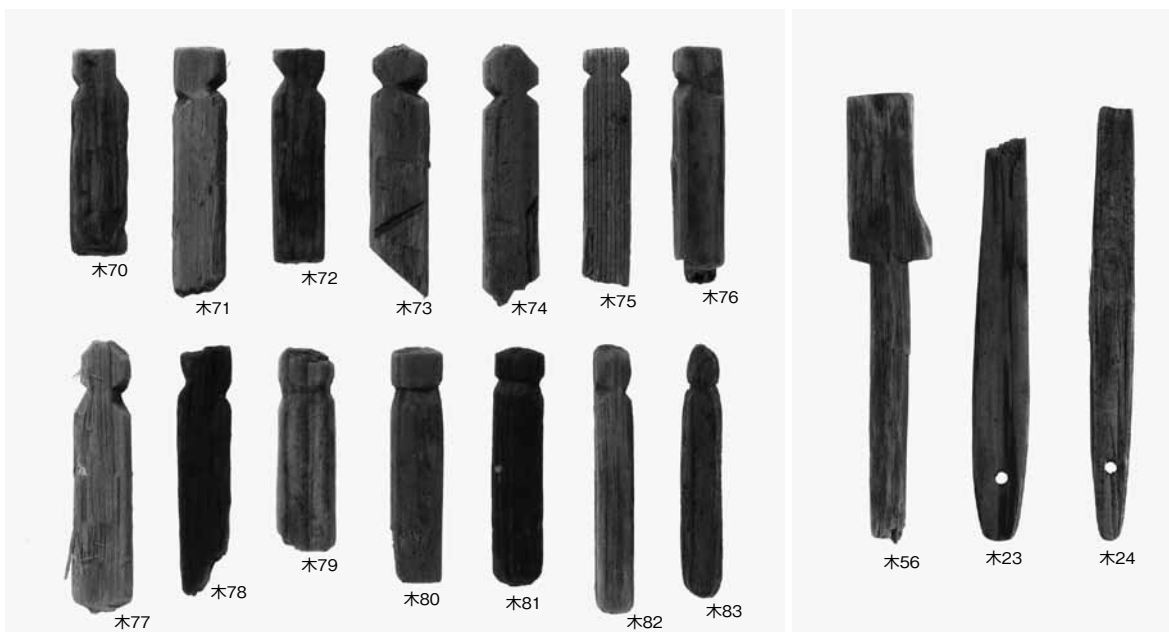
瓦12



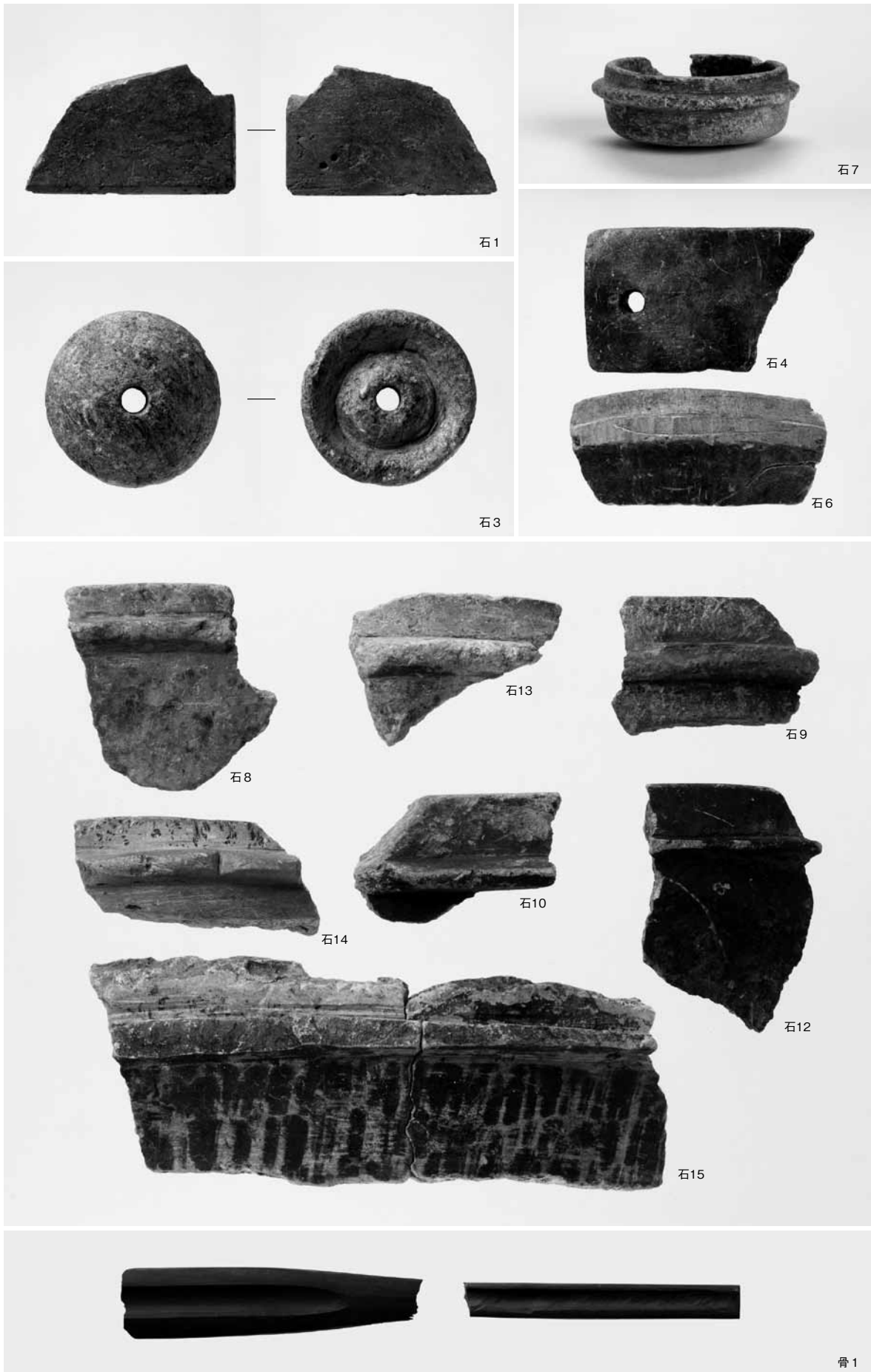
軒平瓦



木簡



木製品



石製品・骨製品



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうくじょうさんぼうじゅっちょうあと・からすまちょういせき							
書名	平安京左京九条三坊十町跡・烏丸町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2013-15							
編著者名	小檜山一良、辻 裕司、伊藤 潔、上村和直、近藤奈央							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2015年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 からすまちょういせき 烏丸町遺跡	きょうとしみなみくひがし 京都市南区東 くじょうかみとのだちょう 九条上殿田町  17番地ほか	26100	1  759	34度 98分 26秒	135度 75分 84秒	2014年1月 10日～2014 年3月31日	1,359m <sup>2</sup>	建物新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡  烏丸町遺跡	都城跡  集落跡	古墳時代  奈良時代  平安時代  鎌倉時代  室町時代 ～江戸時代	   池跡、建物跡、柵 跡、溝、柱穴、井 戸、土坑  建物跡、柵跡、溝	土師器、須恵器  搬入瓦  土師器、須恵器、灰釉 陶器、緑釉陶器、白色 土器、黒色土器、輸入 陶磁器、瓦、金属製品、 銭貨、木製品  土師器、須恵器、白色 土器、瓦器、輸入陶磁 器、焼締陶器、施釉陶 器、瓦、銭貨、石製品、 木製品、骨製品  土師器、施釉陶器		平安時代前期と後 期の池を検出し、 前期の池からは木 簡が出土した。 平安時代末期から 鎌倉時代の建物群 を検出した。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-15

## 平安京左京九条三坊十町跡・烏丸町遺跡

発行日 2015年3月20日

編集  
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961